
魔法少女リリカルなのはViVid～もう1人の聖王と想いに比例する魔法

我暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid〜もう1人の聖王と想いに比例する魔法

【Nコード】

N4553L

【作者名】

我暇人

【あらすじ】

JS事件から6年……

【運命の輪廻】

【隠された歴史の遺物】

【嘘と罪に染まる過去】

【禁の王の再誕】

巻き起こる事象に

世界は変革を起こすのか？破滅へと進むか？

背負いし【業】に少年は何を【想い】その【罰】を受ける？

タイトルとあらすじを変えました。

第1話・日常

7月 22日 水曜日

ミン、ミン、ミン

セミが騒がしく鳴っている昼下がりに

サンサンと降り注ぐ太陽の光の中、少年は坂を自転車を押しながら歩いていた。

少年は中学校の期末テストの英語で学年最下位という最悪な称号を手に入れ、夏休みにも関わらずに学校で追試が行われ、その帰りであった。

「あつちい……………」

少年の名は雨井アマイ 蒼仁ソウジン

蒼仁は坂を登り切ると、近くにあったベンチに腰をかけた。

「あゝ……………なんで、こんな暑い中学校に行かなきゃいけないんだよ……………」

蒼仁が手を扇ぎながら愚痴を言っていると、携帯に付いている灰色の珠が光った。

《それは、あなたの学力が足りないからです》

喋った灰色の珠の名は、レディアント。
長ったらしいから、アントと呼んでいる。

「うるさいぞ……アント……壊すぞ」

そう言っつて、蒼仁はバツクの中から金鎚やノコギリを取り出した。

《最近、何か言っつ度に、二言目に壊すと言っつていませんか？》

「いや、この暑さの中、そんな事言われるとさあー。
誰でも壊したくなるでしょ」

《なりません！！》

コイツとの出会いはちょうど、1ヶ月前

梅雨のジメジメした日が続いたある日、驚くほど晴天だったので、
町の中を軽くジョギングしていたら、川に流されている猫を見かけ、
川に飛び降り助けた。川から上がった後、靴に何かが入ってると思
い逆さまにしたら、レディアントが出てきたのである。

しかも、なぜか俺のことマスターと呼んでくる。まあ、そんな事は
どうでもいい

何で壊してやるーかなー

く
く

金鎚を構えようとしたら携帯が鳴った。

「はい、こちら」

雨井蒼仁の携帯ですが、どうぞ？」

「……………あんだ、何言ってるの？」

「なんだ、唯華か……………」

携帯から聞こえてきた少女の声は、踏崎フミザキ 唯華ユイカ。
幼なじみの1人である。

「何よ！！私だからって、何かあるの！！！」

「怒るなよ。」

シワ増えるぞ（笑）」

「増えるかあああああああつ！！！」

蒼仁は携帯から耳を離れたが、唯華の叫び声は周りに響いてしまい、通りすがった人がクスクスと笑っていった。

「うるせえ！！大きな声出すな！！さっさと用件をいいやがれ！！！」

「……………なんだっけ？」

蒼仁はその場に滑りこけた。

「お前は天然ボケなのかツンデレなのか、どっちかにしろ！！！」

「私はツンデレよ！！！」

つて！何、言わすのよ！！」

「俺は聞いたただけだろ！！」

「あゝ、もう！！」

とりあえず、私の家まで来る！！

それまでには思い出すから！！」

唯華はそう言って、電話を切った。

《相変わらず、パワフルな方ですね》

「昔っからだよ、あのお嬢様は。」

さて、行くとしますか」蒼仁は自転車に跨り、唯華の家に向かって、下り坂を下っていった。

唯華の父、踏崎フミザキ 玄也ゲンヤは建築業者の社長さんで、業界では「建築の踏崎」と言われるほどの凄腕らしい。

坂から10分、町の南にある山の麓に建てられた馬鹿でかい屋敷、唯華の家に着いた。

「おじやましまーす」

蒼仁は庭の手入れをしているメイドに話しかけた。

「ああ、蒼仁様でしたか。」

自転車はいつもの場所に置きますので、屋敷にお入りください」

「それじゃあ、お願いします」

蒼仁はメイドに自転車を渡し、唯華の家のドアを開けると、厳格のある気品を醸し出すおじいさん唯華の執事である五十嵐^{イガラシ} 淳^{ジュン}さんがいた。

「おお、蒼仁殿。

お久しぶりでございますな」

「五十嵐さんこそ、久しぶり。

体調とかは大丈夫？」

「まだまだ、心配されるほどの歳ではありません。

それに、若いものに伝えるべき事が山ほどありますからの。

ここで、くたばるわけにはいかないのです」

五十嵐さんはそう言うと、ほほっと胸を軽くを叩いて笑った。

「そっか。

それでも、体には気をつけてくれよ」

「承知しております。

それで、本日は何の用で？」

「ああ、唯華に呼ばれてきたんだけど……」

「お嬢様は3階の自室に居られます。

後で、お茶などをお持ちしましょうか？」

「いいよ。話すだけだから、すぐ終わるよ」

蒼仁はそう言うと、階段を上って唯華のある3階に向かった。

《それにしても、広いですね》

3階の長い廊下を歩いているとアントが話しかけてきた。

「最初に来た時、トイレがどこにあるかわからなくて漏らしそうになったからな」

《マスターの家とは大違いですね。

はあ………なんでこんな人が私のマスターなのでしょうか……》

「っるせえな。

だったら、お前はどんなマスターがご希望だったんだよ？」

《人のため世のために働き、清純で、マスターのように、傍若無人、馬耳東風、優柔不断なところがいいですね》

なんで、こんな珠にここまで言われなといけないんだ？

蒼仁は少し鬱気味になった。

《まあ、人生は長いのですし、少しずつ自分の理想に近づければいいですよ》

「慰めのつもりか？つと

ここだ、ここ」

蒼仁は唯華の部屋の前に立つと、ドアをノックした。

「来てやったぞ〜」

「入っていいわよ」

蒼仁はドアを開けて部屋に入ると、唯華がベッドの上にタイムウォッチを持って寝そべっていた。

「10分53秒23。」

「まあまあ速さね」

「そりゃ、どうも。」

「んで、今日は何の用かな？」

蒼仁が言っていると唯華はベッドから起き上がり、枕を抱えた。

「今度の日曜日、父さんの知り合いの家でパーティーがあつて、行く事になったんだけれど。」

父さんが友達を連れてきていいって言ったから、鷺祐と叶恵、ついでにあんたを誘うと思ってるのよ」

「俺はついでなのかよ……………」

それで？ドレス着て、鷺祐にいつもと違う自分を見てもらい、最高のシチュエーションで告るつもりか？」

唯華は驚いたような顔をした後、一気に林檎のように赤くなった。

「な、なんで！あ、あんたが、鷺祐が好きって知ってるのよ！！！ま、まさか叶恵が話したとか！？」

唯華がそう言つと、蒼仁はため息をついた。

「気付かないでも思ってたか？」

まあ、当の本人は気付いてないけどな」

ちょうど2年前、中学校に入りたての鷺祐はその性格とルックスで様々な女を惚れさせ、毎日追いかけられるはめになっていたが、鷺祐は、「みんな、鬼ごっこが好きなんです」と見事な鈍感ぶりを発揮し、男子の大半を敵に回した。

あの後、何とかして事態を丸めたが、未だにファンクラブなどが実在している。

「あの鈍感男に色仕掛けは効かねえよ。

素直になって好きですって言えばいいじゃん」

「そ、そんな事、自分でもわかってるんだけど……………」

唯華はそう言っとうなだれた。

「はあ……………」

俺も最低限協力するから、さっさと告れよ」

「……………」

「んじゃ、話が無いなら、俺は帰るぜ」

「うん、ありがとうね。予定とか、後で連絡するから」

蒼仁は部屋を出てドアを閉めるその瞬間、ニヤリと笑い、こう言い放った。

「じゃあな、ツンデレお嬢様」

ドアを完全に閉めきると、部屋から唯華の怒鳴る声が聞こえたが一切気にせずに蒼仁は歩いてゆく。

《………まったく、あなたは………》

「　　」

蒼仁は鼻歌を歌いながら、唯華の家を後にした。

7月25日 土曜日

唯華からの連絡で、パーティー前日の25日に会場に向かうので、2泊分の着替えを準備し、家で待機しろと連絡がきたので、蒼仁は旅行用の大きなバックに服や洗面具などを詰め込んでいた。

支度を終わると蒼仁は家の仏壇の前に座って目を閉じた。

仏壇の上には、お供え物に線香、ろうそく、それと写真が飾られていた。

目を開けた蒼仁は写真を見ると、どこか悲しげに笑った。

「父さん、母さん、それに、蓮斗。」

遊びに行ってくるから、ちょっとの間、家を留守にするよ。」

写真には4人の幸せそうな家族が写っており、真ん中でピースしている子供が

当時、8歳の蒼仁であった。

蒼仁の家族は7年前、4歳の病弱な弟が入院していた病院が火事となった。

原因は不明のまま

たまたま会いに行っていた母親と消防隊員であった父親が弟の病室で焼け死んでいるのが発見された。

蒼仁は運良く、生き延びたが左腕に火傷を負った。

そして、蒼仁と同じく病院で家族を失った少女がいた。

名は……………。

ピンポン

昔の事を思い出していると、不意に家のインターホンが鳴った。

誰だろうか？

蒼仁は玄関に向かい、鍵を外しドアを開けると、そこには大きなむ……………カバンを持った少女がいた。

「蒼仁。」

今、失礼な事を考えていなかったか？」

「イイエ、ナニモ」

……すみません、考えてました。

少女の名は妃山^{ヒヤマ} 叶恵^{カナエ}

唯華と鷺祐同様、幼なじみの1人である。

「お邪魔するぞ」

叶恵は家に入ると、真っ直ぐに居間へと進んでいった。

「おーい、何しに来たのかぐらい言ってくれよ」

蒼仁は追いかけるように居間に入ると、叶恵が勝手に座布団を敷き座っていた。

「何、唯華と私の家は蒼仁と鷺祐に比べかなり距離があるからの。時間短縮のため、一番近くのお前の家に来ただけだ」

「んじゃ、これはいらないうってわけか」

蒼仁が手に持つツボをわざとらしく見せつけると、叶恵が瞬時に手を伸ばした。

蒼仁はそれを見て、意地悪く笑いツボを高く上げ、皿だけを叶恵の前に置いた。

ツボに入っているのは、蒼仁が作った特性のぬか漬
叶恵はこのぬか漬を食べる目的で家に来る事がしばしばあった。

「食べたけりゃあ

蒼仁様、一生のお願いです！この私にぬか漬けをお授けください！何でも言うことを聞きますから……って言ったら………」

ヒュッ、ブスッ！！

叶恵の突き出された2本指は蒼仁の眼球にクリティカルヒットした。

「があゝあゝあゝあゝ！！！」

蒼仁は痛さのあまりに転がっている隙に、叶恵はツボからぬか漬けを取り出して口に放り込んだ。

「モグモグ、モグモグ。ふむ、相変わらずの絶妙な味だな」

「テメエ、やりやがったな！」

蒼仁は叶恵に向かって手を伸ばしたが、かわされてしまい、勢いのあまり体勢を崩してしまった。

「っお！？」

「っきゃ！？」

蒼仁は叶恵を倒し込む形になってしまった。

蒼仁はすぐさま立ち上がり距離をとった。

「っわり！」

蒼仁が謝ると、叶恵はゆっくりと起き上がりこちらを睨んだ。

ケダモノ!!強?魔!!

そんな言葉が頭を過ぎる中、叶恵は……

「こつこつ事はしつかり手順を踏んでからにしろ!」

「……………そこですか!」

蒼仁はツツコミと、外から車のクラクションが聞こえた。

「お、来たか」

「蒼仁よ、ぬか漬けはどうすればいい!」

「……………どうぞ、ご自由に……………」

蒼仁がそう言うと、叶恵は目を輝かせながらぬか漬けの入ったツボをバツクに入れた。

玄関を出ると、黒く光るリムジンと腕を組み立ち尽くす唯華がいた。

「準備はいい?」

「私は大丈夫だ」

「右と同じく」

「そう、じゃあ乗って」

蒼仁はリムジンのドアを開け、中に入ると見慣れた少年がこちらを見て微笑んでいた。

「こんにちは、蒼仁。」

英語の追試はどうにか受かったらしいですね」

少年の名は富山トミヤマ 驚祐シユウスケ

蒼仁の幼なじみ、その4

「ってか、何で俺の追試の結果知ってんだよ」

「いやー先日、禿山先生にお会いしまして、その時に聞いただけです」

禿山め……………。

「全員乗ったかしら。」

それじゃあ、お願いします」

唯華がそう言うと、リムジンが動き出した。

「そう言えば、唯華。」

パーティー会場って何処にあるんだ？」

「確か……………海鳴市って所ね」

「海鳴市ですか……………」

確か、あそこにある

翠屋と言うケーキ屋がうまいと聞いたことがあります」

鷺祐は顎に手をやりながら言った。

「だったら、海鳴市とやらに着いたら行って見ないか？」

「そうね、行ってみようかな」

叶恵の案に唯華が便乗した。

「そうですね。」

蒼仁はどうですか？」

「俺はどうでもいいよ」鷺祐が聞いてきたので、適当に答えた。

その後も

他愛の無い話やトランプで盛り上がったりしていた。

呪縛のような運命が迫っているとも知らずに……………。

第2話：海鳴市で

機動六課本部

誰にも使われていないはずの部隊長室に2人の女性と小さな少女が1人いた。

「久しぶりやな、フェイトちゃん」

「久しぶりです」

「うん、2人とも久しぶり。

それより、どうしたの？

こんな懐かしい所に呼び出して」

金色の長髪の女性

フェイト・T・ハラオウンはコーヒーを淹れている親友に聞いた。

「ん〜、実はな……………」

茶色で肩まで伸ばした髪を持つ女性

八神はやては、コーヒーの入ったカップを両手に持ち、後ろを振り向き頬赤く染めながらフェイトを見た。

「私、フェイトちゃんの事、好きやねん！結婚しよ！」

……………。

沈黙の中、フェイトは、冷たい視線をはやてに送り続けた。

「冗談やって！

やから、その目やめてくれへん？」

「まあ、わかってたけれどね。

ありがとう」

フェイトは、はやてからコーヒーを受け取り、一口飲んだ。

「それで、本当の理由は？」

フェイトはカップをテーブルに置くと、仕事の顔になった。

はやては自分がかつて使っていたデスクに座り、パーソナルを操作すると、モニターに1枚の写真が映し出された。

「最近、管理世界でテロと思われる襲撃が多くなってるのは、知ってるやる？」「うん、耳にした事はあるよ。

警備していた局員や、周辺の住民にも死傷がでているんだよね」

「まったく！ひどい事をする人がいるわけですよ！」

はやての肩付近で浮遊している銀髪の少女、リインフォース・ツヴアイは腕を組みながら怒っている。

「そして。

このテロが行われている地域で必ずロストロギア反応があるんよ」

「ロストロギア……か」

フェイトは眉をひそめると同時に、何か気がついたような顔し、はやてはニヤと笑った。

「まさか、機動六課を………？」

「お察しの通りや。

恐らく犯人の目的はロストロギア、しかもその為なら手段を選ばないような犯行。これを重く見た本局は機動六課の再建を決定したんや」

はやてがそう言うのと、フェイトは少しだけ笑った。

「また、みんなと一緒に仕事できるなんて思ってもいなかったよ」

「リインもです」。

また、一緒にお仕事できて嬉しいです」

リインは嬉しそうにはやての周りをグルグル回り始めた。

「そやな、私も嬉しいで。

でも、最初に聞いたときはびっくりしたで〜。
いきなり

また、機動六課の部隊長をやってもらえないかって言われてな」

「それじゃあメンバーは」

フェイトは不意にそんな事をはやてに聞くと、親指を立ててきた。

「そこは大丈夫や！
メンバーは誰1人として変わってあらへん。ただ、少し人が増えて
るかもしれへんけどな」

「そっか……………」

みんなには連絡はいれたの？」

「バックスタッフは全員連絡をいれたで。

あとは、隊長陣とFWメンバーってところや。
結構、大変やったんやで」

はやてがそう言うとフェイトは苦笑いした。

「それにしても」

はやてはデスクに体を倒し唸り始めた。

「私、なんで休み少ないんやろな」。

なのはちゃんは休暇で、ヴィヴィオと一緒に海鳴市でに帰ってアリ
サちゃん家のパーティーに参加するって聞いたしな。ええなあ
私もパーティー行きたいな」

「リインもです」

その後、小一時間ははやてとリインの愚痴はおさまらなかった。

「へえー、デカいな」

「かなりの規模ですね」

「こんな所でかくれんぼしたら、さぞやおもしろいだろうな」

「叶恵、本当にやらないでよ、そんな事」

蒼仁達は海鳴市に到着し、宿泊先のホテルに荷物を置いた後、パーティー会場の下見に来ていた。

「唯華、来てたのか」

「あ、父さん！」

後ろを振り返ると唯華の父、踏崎 玄也と金髪のショート的女性がいた。

「鷺祐君、久し振りだね。閨は元気になっているかな？」

「はい、父さんは相変わらずですよ」

鷺祐の父と玄也は幼なじみらしく、それで唯華と知り合ったらしい。

「えっと、この子達は……………」

女性は蒼仁達を1人ずつ見てきた。
綺麗な人だな……………。そんな事を考えていると、頭に拳が落とされた。

ガンッ

「つてえ!!!何すんだよ、叶恵!!!」

「いや、なんかイラッとした」

蒼仁は頭を抱えながら叶恵を睨んだ。

「ははっ、蒼仁君と叶恵ちゃんも相変わらずみたいだね。
この子達が私の娘とその友達だよ」

「踏崎 玄也の娘の踏崎 唯華です」

「友達の富山 鷺祐です」

「右と同じく、友達の妃山 叶恵だ」

「友達その4、雨井 蒼仁」

「私はこのパーティーの責任者、アリサ・バニングス。
明日は楽しんでいてね」

「では、唯華。

また、あとで」

玄也さんはそう言うと、アリサさんと一緒に奥へと仕事の話をしな
がら歩いていった。

「では、翠屋に行くとするか!」

パーティー会場を出てすぐに叶恵が我先にと走り出した。

「叶恵、そっちはホテルがある方です!

翠屋はこっちです！」

「それを先に言わんか！」

鷲祐が呼び止められ、叶恵はトボトボ歩いて戻ってきた。

「んじゃ、行くとしたま………」

『《マスター、近くに魔力反応があります》』

『……………マジかよ』

蒼仁はアントの念話に顔をしかめる。

『反応はどこからだ？』

『《ここから、数キロ離れた位置からです》』

『つたく、こんな所に来るなんて……………』

『まったくです』

「どうしたのだ？蒼仁
ポーっとして」

念話に集中しすぎたせいか、叶恵が自分の顔をのぞき込んでいる事に気がつかなかった。

「まさか、私に見惚れていたのか？」

叶恵はそう言うと、意地悪そうに笑った。

何、言っただか……………ここは1ついじってやるぞ。

「そうさ、叶恵。」

俺はお前の美貌につい瞳を奪われたのさ！」

我ながらバカみたいな事を言っているなと思うが叶恵には十分な効果が発揮される。

「な、な！何を言っている蒼仁！！」

そ、そんな冗談はよしてくれ！！」

叶恵は顔を伏せて耳まで真っ赤にさせた。

「冗談だよ、冗談。」

本気でそんな事お前に言うと思ったか！

ワハハハハハッ！！」

蒼仁は体をわざと仰け反らせながら笑った。

その時、一瞬にして蒼仁の腹はえぐられるようなアッパーを喰らって、地に頭を垂らした。

「覚悟ハデキテルナ？」

5分後

蒼仁は天に召された。

「叶恵！バカ気にしないで行くわよ！」

「わかった！今、行く！」

叶恵は唯華の元にわざと倒れている蒼仁を踏んでいった。

「……………行ったか？」

蒼仁は叶恵達が行ったのを確認すると立ち上がり、叶恵達とは逆方向に走り出した。

《いいのですか？行かなくても》

「まずは、“アイツ”を相手にしないとな。
急ぐとしますか！」

蒼仁はそう言うと、さらに速く走った。

「あれ？蒼仁がついてきませんね」

鷺祐は後ろを振り向くと蒼仁がいない事に気がついた。

「ふん、あんな奴。

ついてこなくともいい！」

叶恵はズンズンと鷺祐と唯華の前を進んで歩いていった。

「何を起こってるのですか？叶恵は」

「……………あんな事を冗談って言われたんだから、誰だって怒るわよ」

唯華の言葉に驚祐は？と首を傾げたので、叶恵は深いため息をついて「この鈍感男」と聞こえないように呟いた。

「唯華！驚祐！イチャついてないで、早く来い！見えてきたぞ」

「イ、イチャついてないわよ！！」

唯華は顔を赤くしながら叫び、叶恵の元まで走っていった。

「あ、見つけました」

驚祐が指差す先には翠屋と書かれた看板があった。

チャリーン

ドアについた鈴の音と共に叶恵達が店に入ると、茶色のポニーテールのウエイトレスが店の奥からやって来た。

「いらっしやませ！

何名様ですか？」

「4人です。1人は後で来ますので」

「わかりました。

では、こちらの席へ」

ウエイトレスに言われた席に座ると叶恵はすぐさまにメニューを見始めた。

チャリーン

また、店の入り口が開いた音がした。

叶恵は横目で見ると、入り口には紫色の髪の女性と先ほどアリサ・バニングスの姿があった。

「あら、あなた達。

ここに来てたのね」

アリサは叶恵達に気付くと席に近づいてきた。

「アリサちゃん、知り合いなの？」

ウエイトレスがアリサに聞いた。

「うん、今、計画しているプランの発案者の娘さんとその友達。明日のパーティーにでてくれるのよ」

「そうなんだ。

私は月村すずか、アリサちゃんの友達です」

紫色の髪の女性は丁寧に頭を下げてきたので、つられて叶恵達も頭を下げた。

「私もすずかちゃんと同じく、アリサちゃんの友達で。

高町なのは一等くう………じゃなかった！」

なのは両足をビシッと揃え敬礼しかけたが、途中で気がつき苦笑いで頭を下げた。

それを見た、アリサとすずかは笑い、つられて叶恵達も笑い出した。その頃、蒼仁がどんな事になっているかも知らずに

第3話：大剣を持つ修道士

叶恵達が翠屋に着いた頃

蒼仁は森の中を歩き回っていた。

「ここ辺りからか？」

《はい、この森から反応が見られました》

「よし！結界、張とけよ」

《わかりました》

蒼仁はレディアントを携帯から取り外し、結界を張ると、森の奥へと進んでいった。

森は奥に進むほど、草木が生い茂って蒼仁の行く手を阻んだ。

「……………邪魔だな」

蒼仁は自分の腰あたりまで生えている草を踏み潰し前に出ると、右手前の木から1つの影が動いた。

「誰だ!!」

「……………」

蒼仁の声は木霊したが、隠れた人物の返事は無かった。

その代わりに十数発の魔力弾が突如現れ、蒼仁に向かって飛んできた。

「……………っつー！アントー！」

《はい、マスター！

stand by ready!!》

蒼仁はレディアントを掲げると白銀の光が蒼仁を包み込み、光の中から朱色の魔力弾が向かってくる魔力弾を相殺した。

光が止むと、そこには中世の騎士を思わせるようなバリアジャケットと銀一色で彩られた杖型デバイスを持った蒼仁が木から現れた男を睨むように見ていた。

男は修道士のような服装に顔を覆い隠すフードを被っており、手には杖型デバイスを持っていた。

「まったく、こんな所まで来やがって！

おまえ等の目的は何だよ！！」

「……………我らは聖王シユリアの身元に仕えるもの……………。

その大いなる力は世界を安らぎを与えん……………。

我は聖お……………」

「もういい！！聞き飽きた！！」

蒼仁は飛び出し、男の顔面をレディアントで殴りつけた。

男は先ほどまで隠れていた木まで吹き飛んだが、デバイスを蒼仁に向けて魔力弾を放った。

「アント！！」

《わかってますよ！》

蒼仁は左手を突き出し防御魔法を展開させ、飛んできた魔力弾を防ぎきると、フラフラと立ち上がっている男の所まで駆け、レディアントで腹部を殴りつけると、左手で胸倉を掴むとそのまま地面に叩きつけた。

男は痛みを感じているのかいないのか分からないが、無表情のまま地面に大の字にぐったりとなった。

「……………やっぱりか……………」

蒼仁がそう言うと、男が足から灰になってゆく。

「本当に、おまえ何も知らないんだな？

コイツの事も、自分の事も……………」

《はい、マスターと出会うまでのメモリーがロストしていて、まったくわかりません》

「そうか……………」

レディアントを拾った3日たった夜の事。

先ほど同じような事があり、それから立て続けに修道士姿の男が現れ、その度に倒してきた。なぜ襲ってくるかを聞いても何も答えずに、聖王シユリアがどうのこうのしか言わない。蒼仁はその場に座り込もうとした瞬間、轟音と共に何かがちらに近付いてきた。

「っ！！」

蒼仁は右に大きく飛ぶと、さっきまでいた場所に衝撃波のようなものが大地を削りながら進んでいった。

「ほお、避けたか」

修道士姿に釣り合わない大剣を持った男が衝撃波によって削られた地面の上を歩き、蒼仁に近付いてきた。

「どちら様？まさかのボスとかだったりする？」

蒼仁は大剣の男にレディアントを向ける。

「俺の名前……いや、コードネームは「ブレイド」。

お前とレディアントの回収に来ただけ、さー！」

ブレイドと名乗る男が大剣を振り下ろすと、刀身から衝撃波が地面を伝って、蒼仁に向かって走ってゆく。

「っっ！！」

プロミネンス・シュート！！」

蒼仁は左に飛んで衝撃波を避け、レディアントをブレイドに向けて朱い魔力弾を放ったが、ブレイドの一振りによって全て打ち消された。

「ちっ!!」

蒼仁は振り下ろしたがき全速力で近づき、レディアントを振り下ろしたが、片手で止められてしまった。

「甘いいっ!!」

ブレイドはレディアントごと蒼仁を近くの大木にむかって投げつけた。

「ふっ!!」

蒼仁は宙で体勢を立て直し、大木の枝を掴んで上に乗った。

「バケモンかよ!!」

《一旦、距離を置きましょう!!》

蒼仁はレディアントの言う通り、木の枝から降り、ブレイドと逆方向に走り出した。「ふ、逃げるか……」。

だが、それもいい……さあ、狩りの始まりだ!!クハハハハハハハ!!

「ハア…………ハア…………ここまで来ればいいだろ…………」

蒼仁は先ほどブレイドと闘った場所から離れた木の影に隠れていた。

《今までの相手より格段に違いますね》

「さて、どうするかね……………」

《ブレイドの大剣から放たれる衝撃波はSランク級の威力です。

まともに食らえば終わりです》

「Sランクって…………上から3番目の強さだっけ？

ヤバ…………」

近くで木が倒れるような音がした。

蒼仁は立ち上がって、レディアントを構えながら木の影から少し身を乗り出し、来た道を見た。

奥の木と木との間に大剣を振りかざすブレイドの姿があった。

「って、やば！！」

気づいた頃には、ブレイドは大剣を振り下ろし、衝撃波が大地を削りながら迫っていた。

蒼仁は木から全速力で離れ、プロミネンス・シュートをブレイドの足元に向かって放った。

朱い魔力弾は地面にぶつかり、辺りに砂煙を立ち込ませた。

「まだ……逃げるか。
いいねえ……いいじゃねえかあ!!」

蒼仁はブレイドを目視できる程度に離れた木に隠れていた。

「アント！ダミーシステム！」

《わかりました》

レディアントの珠が光り、魔力で構成された瓜二つの自分を作った。ダミーシステムとは魔力の塊を色、形、を与え、自由自在に動かせるものである。

しかし動かすと魔力が風船の詮を少し開けたように徐々に四散し、不透明になりやがて消えてなくなってしまう。

蒼仁はダミーを作ると、別の木に登り葉と葉の間に隠れ、レディアントを構えながらブレイドの様子を見た。

ブレイドは蒼仁が走ってきた道を一步一步、まるで楽しんでいるかのようにゆっくりと歩いている。

「さあぁあって。

楽しい、楽しい、兎狩りの時間だあ！」

蒼仁はブレイドがダミーを置いた木に近づいたのを見ると、ダミーを少しだけ動かした。

「……そこかあー!!」

ブレイドはダミーの隠れた木を横に一閃。

木はズズズツと音を立てながら倒れていった。

「これで終わり……ではないようだな」

ダミーの残骸を見たブレイドは口角を釣り上げて嬉しそうに言った。

今だー!!

そう思った蒼仁は、レディアントの矛先に朱い魔力を収縮し始めた。

魔力に気付いたのか、ブレイドが蒼仁が隠れている木に振り向いた

「本物はそこかあー!!」

「気付くのが遅いんだよ!!プロミネンス……バスター!!」

レディアントから放たれた朱い砲撃は一直線にブレイドに向かった。

「衝波旋空砲おー!!」

ブレイドの大剣から放たれた衝撃波は竜巻のように渦巻き、プロミネンス・バスターと激突した。

「っつらああああー!!」

「はあああああつー!!」

2つの力のぶつかり合いは周りの草木をなぎ倒し、地面を抉った。

「ぐううううう!!」

《マスター!! いけます!!》

徐々に蒼仁のプロミネンス・バスターがブレイドの衝波旋空砲を押し、そして……

「だつらああああ!!」

衝撃波は霧のように散り、朱い砲撃がブレイドを巻き込んで突き進んでいった。

「ハア……ハア……どうだ!!」

蒼仁はガッツポーズをとると、木から滑り落ち、そのまま寝っ転がった。

「し、しばらく休も……」

そう言って蒼仁が目を閉じようとした瞬間

「ククク……クハハハハハハ!!」

森全体に響くような大きな笑い声に蒼仁は起きあがると、ブレイドがニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。

「おいおい……マジかよ。」

……まったく人間の域、越えてるぜ」

蒼仁は笑いながら悪態つくと、再びレディアントを握り直し、ブレイドに向けて構えた。

「おい、ガキ！名前は何て言う」

予想外の質問に蒼仁は肩を落とした。

「蒼仁………雨井蒼仁」

蒼仁はブレイドを睨みながら答えた。

「蒼仁か………。」

次、また会う時には、‘本気’でやるから………気をつけるよ」

蒼仁はブレイドの本気と言う言葉に顔をしかめる。

あれで、本気じゃないのかよ………。

突如、ブレイドの背後に黒いモヤモヤが現れ、ブレイドはそれに足を踏み入れた。

「それじゃ、死にたくなければせいぜい強くなる事だな」

「おい！待てよ！！お前にはまだ聞きたいことが………。」

立ち上がった蒼仁の声虚しく、ブレイドの姿はモヤモヤと共に消え

てしまった

「まったく、何なんだよ……………」

蒼仁はそう言うと、力なく地面に倒れ込んだ。

「ククク、アイツは成長するなあ……………」

ブレイドは暗闇の世界の中1人笑いながら歩いていた。

「ブレイドよ」

ブレイドは隻眼の男に呼び止められると、足を止め男を見た。

「何のようだ……………ヴァント」

「レディアントの使い手には、まだ手を出すなど言っていたはずだが」

ヴァントは鋭い眼光でブレイドを睨む。

「なぐに。」

ちよつとした刺激を与えてやっただけだ。

ちよつとした、なあ…。クハハハハハハハハハハハ！」

ブレイドはそう言うと、ヴァントを押しつけ、闇の中を歩いていった。

少年の物語は壊れ始める少しづつ……確実に

第4話・出会いと友との一時(前書き)

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

キャラ&mp;デバイス&mp;技募集をしたいと思います

詳しいことはあとがきで

第4話・出会いと友との一時

ピチャリ

水が地面に落ちたような音に蒼仁をつつすらと目を開いた。

「う……………ん」

目をこすりながら、ダルそうに起き上がった蒼仁は辺りを見回した。

ブレイドとの戦闘の傷はなく、静かに草木は佇んでいた。

「つくづく魔法って、すごいな」

《お目覚めですか？マスター》

蒼仁は頭を右手に向けると、手のひらで光るレディアントを見つけた。

「アント……………どれだけ寝てた？」

《私もスリープモードになっていましたから……………》。

《だいたい1時間は寝ていましたね》

「そうか」

蒼仁はアントの返事を聞くと、その場に飛び跳ねて立ち上がり森の入り口へと歩いてゆく。

「早く行かねーと、叶恵達がうるせえな……」

森を抜けて、蒼仁はそう言つと街に向かって走り出した。

場所は変わり翠屋

「へえ……それじゃあ、みんな幼なじみなんだ」

「まあ、そうなりますね」

2つのテーブルをくつつけて、左に鷺祐、叶恵、唯華、右にアリサ、
すずか、なのは、と座っていた。

叶恵が時計を見たり、見なかったりしていると、それに気づいた
なのはが話しかけてきた。

「どうしたの？」

時間、気にしてるようだけど

「う、うむ……ちょっとな」

叶恵の様子にアリサがニターと笑い出した。

「あ、そう言えば、蒼仁って子が来てないわよね？」

叶恵ちゃん、気になるの？」「……別の意味で気になるのでな……」

…」

叶恵はため息混じりにそう言うと、鷺祐と唯華は「あー、うんうん」と頷き、なのは達は首を傾げた。

「……………」

蒼仁は方向音痴であった。

どれだけ方向音痴かと言うと
幼少期、新しいスーパーに買い物を頼まれた蒼仁は行き先を簡単に書かれた地図を持って、スーパーとは逆方向にある街で迷子になっているところを発見された。

小学校の修学旅行では、自由行動ではぐれたかと思うと、バスで隣の県まで行ってしまった事もあり。

中学校の修学旅行では海を渡って外国に行ってしまうのではと、24時間体制で監視されていた。

それほど方向音痴が、たった1人で見知らぬ街を歩いているのだ。翠屋に着くのは何年後になるのだろう。

「地図でも貰っとくべきだったな……………」

蒼仁は近くにあったベンチに座るとうなだれ始めた。

ドサッ

何かが落ちたような音がしたと思うと耳障りなほど大きな男の怒声が聞こえた。

「っごらあ！！！！どこ見て歩いてんのやあ！！！！」

「す、すみません！」

蒼仁はベンチに座りながら後ろを振り返ると、こちら辺の中学生か、学生服をきた、いかにもヤンキーの男が、レジ袋を持った金髪ツインタールの少女を睨みつけていた。

よく見ると、ヤンキーの学生服にはソフトクリームが付いており、少女の右手にはクリームがわずかについたコーンが握られていた。

買い物帰りに少女が美味しそうにソフトクリームを食べていたところ、ヤンキーとぶつかった、と言ったところだろうか……。

すると、端でこそこそと話している主婦の声が聞こえた。

「あんな子にキレてるけど、原因はあっちの方じゃないの」

「そうよ、そうよ。」

飛んでいた蜂にビックリしてあの子にぶつかったのに……」

「なんだ、テメエ等！！！！」

ジロジロこつちを見やがって!!!」

ヤンキーが主婦2人に怒声をかますと、主婦はさっさと逃げていつてしまった。

「テメエもだよ!!!」

ヤンキーはそう言うと、蒼仁に近付いてきた。

「……………1つ聞きたいんだけど…」

「あー!?!」

ヤンキーが睨みつけるのを気にせずに、蒼仁は話し続けた。

「翠屋ってどこ？」

教えてくれれば何もしないから」

「何、言ってるん……………ぶう!!!」

ヤンキーは拳を振り上げるが、振り下ろすよりも蒼仁が顔面に蹴りを入れる方が早かった。

「痛え……………ゴフウ!!!」

顔を押さえるヤンキーに、蒼仁は間髪入れず足を蹴り払った。

倒れたヤンキーは立ち上がろうとしたが、蒼仁が学生服の袖を踏みつけたので動けなかった。

ツインテールの少女はその様子を唾然として見ていた。

「さっさとあの子に誤れ。
いいな？」

「は、はいっ！……！」

蒼仁が足を離すと、ヤンキーはツインテールの少女の前で土下座して、逃げるように走り去っていった。

「あ、翠屋の行き方聞くの忘れてたな……！」

蒼仁が頭を掻きながらそう言っていると、ツインテールの少女が近付いてきて頭を下げてきた。

「あ、あの……！ありがとうございます……！」

「別にいいよ……って、ケガしてんじゃん」

蒼仁は少女の膝から流れる血を見つけた。

「へ？あ〜。

これぐらい大丈夫ですよ」

「ダメだダメ！」

こうゆう場所からばい菌とか入るんだよ。

よし、ここに座れ」

蒼仁はそう言うと、少女をベンチに座らせて、ポケットから黄緑色の袋を取り出した。

黄緑色の袋を開けると中から軟膏を取り出し、しゃがんで少女の膝の擦り傷にぬった。

「あとは……………」

最後にクマのアプリが描かれた絆創膏を貼った。

「はい、終わり。」

何かおかしいところないか？」

「あ、はい！大丈夫です！」

「だったら、さ。」

翠屋って、どこにあるか知ってる？」

そう言うと、少女は蒼仁が歩いてきた道を指差した。

「あっちに真っ直ぐ行って……………」

……………逆方向に来てたのね……………俺は……………

蒼仁は自分の運のなさ& amp; 方向音痴に肩を落とした。

「私も帰る途中だったので、一緒に行きませんか？」

「ああ、頼む……………って、帰る？」

「はい。」

私のママの実家なんです」

「そう言う事が……………」

くくく

携帯を見ると叶恵からの電話だった。

「ちょっと悪いな……………」。

はい、こちら雨井蒼仁の携帯電話ですか？」

「叶恵だ。」

あと、10分で翠屋に来なければ、ケーキ代、全額お前に請求するからな」

プチッ……………ツーツー

「おい、少女Aー!!」

「へ?あ、はい!!」

蒼仁は携帯をポケットにしまい込むと、少女の肩を掴む。

「ここから翠屋まで、何分かかる?」

「え、えつと……………歩いて25分ぐらいで……………走れば10分間に合うかどうか……………つきゃ!?」蒼仁はいきなり少女をおんぶして、走り出した。

「頼む！！道案内してくれ！！俺の死活問題なんだ！！」

「わ、わかりました。

次の角、左です」

少女は戸惑いながらも、左に指差した。

「「「……………」」」

なのは、アリサ、すずかの3人は呆然と叶恵を見ていた。

なぜなら、叶恵が携帯を取り出し、理不尽な事を一方的に話して電話を切ってしまったのだから。

そして電話してから9分が経過した。

9分10秒……………20秒……………30秒……………40秒……………50秒……………9……………8……………7……………6……………5……………よ……………

ガッチャーン

店の入り口の扉が思いっきり開けた音に振り向くと、蒼仁が少女をおぶって立っていた。

「え？ヴィヴィオ!？」

「なのはママ、ただいま」

ヴィヴィオは蒼仁からおりと、なのはのもとに駆け寄り、レジ袋を突き出して笑った。

「卵とサラシラップだよね？」

「う、うん……………」。

ありがとうね、ヴィヴィオ……………」

なのはがそう言つと、ヴィヴィオは嬉しそうに「うん!!」と言つた。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

「また、迷つてたんですか？」

蒼仁は席に座ると、鷺祐が声をかけてきた。

「ま……………まあ……………な……………」

ゴンツ！！と鈍い音ともに蒼仁はイスから滑り落ち、床に倒れ込んだ。

「蒼仁!?!どうしたのだ!?!」

叶恵は席から立ち上がり蒼仁に駆け寄った。

「ど、どうしたの!?!」

なのは達も慌てて蒼仁に駆け寄った、が

「……………スウ……………」

「「「「へ？」「」「」

「どうやら、寝ているようですね」

驚祐がそう言うと、なのは達はホッと胸をなで下ろしたが、叶恵はまだ何かを心配しているような顔をしている。

「驚祐よ。」

本当に寝ているだけなのだろうか？

どこもおかしくなっていないだろうか？

「大丈夫ですよ、叶恵。」

外見から見てケガ見当たらないですし……」

「本当か……………？」

「本当ですよ」

驚祐がそう言いきると、叶恵は蒼仁の頭を自分の膝の上に置いた。

「ねえ……………驚祐」

「……………なんですか？」

唯華は叶恵に聞こえない程度に驚祐に話しかけた。

「本当のところはどうなの……？」

「……倒れる前の顔色から、疲労がピークに達した、と言えますね」

「疲労？ 蒼仁、何に疲れたの？」

「……わかりません。」

ただ、かなりの無茶をしているような気がします」

驚祐はそう言っ、死んでいるように寝ている蒼仁を見た。

闇は着実に動いている

運命は確実に始まりだしている

少年は残り少ない友との一時を過ごした……

第4話・出会いと友との一時（後書き）

感想、お待ちしております

第5話・前夜（前書き）

やっとできた……（泣）

第5話：前夜

とある管理世界

世界の果てまでも広がっているような砂漠

その上で管理局員と思われるバリアジャケットを纏った人間と蒼仁を襲った修道士の男、十数人との戦闘を繰り返していた。

「応援はまだか!？」

「あともう少しだ!!」

修道士の男に次々に魔力弾を撃ち込む局員の後ろには、仲間だと思われる男性が3人ほど傷が深く危険な状態にある。

「クソ!!多すぎるだろうが!!」

局員は苛立ちに怒鳴り散らす。倒しても倒しても一向に減る気配がない修道士

むしる増えているような気もした。

「はあ……………はあ……………」

局員の1人が倒れる

体力、魔力ともに底が切れたのだ。

「ちくしょうがあーっ!!」

自棄になった局員ががむしゃらに魔力弾を撃ちまくるが、100を
超える脆い修道士には決定打とならなかった。

「クソ！クソ！クソオーツ！」

ついに魔力も切れた局員は杖型デバイスで一番近くにいた修道士を
殴り飛ばす。
無駄な抵抗

それぐらい局員にはわかっていて。しかし、だからと言って諦める
わけにもいかない。

家には家族が愛する者が待っている。

後ろには長年、共に戦ってきた友がいる。

ここで諦めれば絶対に後悔するのだ。ならば最後まで希望を持って
戦う。

だが、局員の覚悟に体は応えてくれなかった。

力が入らなくなる膝

手も震え、デバイスをまともにも持っていない。頭に修道士の一
撃が入り、灼熱の太陽に熱された砂に顎をつける。

「ここ……までか……」

朦朧とする意識の中、自身の前で剣を振り上げる修道士を見てゆっ
くりと目を閉じる。

遺書ぐらい書いておけばよかったな……

局員がそう考えると同時に強烈な風と爆発音が聞こえた。
何事かとあまり動かない体に鞭をうって上半身を起き上がらせる。

「……大丈夫か？」

差し出された手

そこにいたのは白と灰色のバリアジャケットを身にまとった局員の
部隊の部隊長

口癖が「絶対に死ぬな」

類をみないお人好し

「空蔵隊長……」

その男の名は空蔵十梧

「救護班！！コイツも連れてってくれ」

「了解です。空蔵隊長は？」

「俺はこのクソ共を肅清してからいく」

救護班のそう伝えると十梧は右手に持つ銃型デバイス、ジャッジイ
ーグルにカートリッジの入ったマガジンを装填する。

「さあ、てめえら……俺の部隊の奴に手を出したんだ……覚悟はで
きてんだろっな？」

激怒する十梧

それにおびえる様子も見せずに修道士達は一斉に走り出した。

「ジャツジイーグル

ジャベリン・バレット!!」

《loadcartridge!

javelin・barrett!》

ジャツジイーグルから2発の薬莢が放たれ、十梧の右隣に長い二矛を持つ魔力の槍が2本現れた。

「穿ちやがれっ!!」真っ直ぐ飛んでゆく2つの槍は1人の修道士に突き刺さると、その後ろの修道士に突き刺しを繰り返しながら進み、大群に2つの道を作る。

ジャベリンバレットから逃れた先頭の3人の修道士が剣を振りかぶり、十梧へと振り下ろす。

バンツバンツバンツ

銃音が3回響く

3人の体を魔力弾が貫き、灰になって消える。

気付くと十梧の周りを修道士がズラリと取り囲んでいた。

「今日は大漁だな……」

周りをぐるりと見渡し、修道士の人数を確認した十梧はベルトに付いている赤色のカートリッジをジャツジイーグルのマガジンに装填、^{チャンパー}スライドを引いて薬室へと移すと引き金に指をかける。

「ファイア・バレット」

《load cartridge!
fire・barrett!》

赤いカートリッジが排出されるのを確認し、ジャッジーグルの銃口を上へと向けて引き金を引いた。

それを合図にか

100を超える修道士が一斉に飛びかかる。

十悟はそれを避ける気配を見せない

と、1人の修道士が空から落ちてきた何かに灰と化す。
そして降り始める天からの紅き炎の雨

「フレイム・レイン」

技の名を呟く十悟の周りを降る数千の業火の雨粒は修道士を1人残らず殲滅した。

《Judgment complete!
turn 十悟

「捜査班はこの辺りに何らかの形跡がないか調査をして」

『了解です、空蔵隊長』

捜査班の班長の指令を出し、必要なくなったモニターを消してブリッジから見える一面の砂漠を眺める。所々にクレーターなどの戦闘の後が見られる。

「こんな辺境な場所に何の用があるんだ？」

この管理世界の都市には時空管理局の支部

しかも、最近ロストロギアが発掘されたと聞く。もし奴らがあの“タヌキ”の言うとおり、ロストロギア狙いのテロ集団だったらまずそこを襲うはずだ。

なのに何故こんな砂漠しかないような場所に……

『空蔵隊長』

「ん、どうした？」

ジャツジイーグルに先ほどの捜査班から通信がはいる。

『戦闘地域から南東に10キロ先の地面に2メートル程の穴を見つけてきました。探索を行いますか？』

「穴？………わかった。探索してくれ、しかしヤバくなったら……」

『“死ぬ前に逃げる”ですね。了解しました！』

見事に言い当てられてしまい、苦笑いしながら「頑張れな」と一言伝えて通信を切る。それと同時に後ろから1人の隊員が走ってきた。

「空蔵隊長。ミッドチルダから連絡が入っています」

「ミッドチルダからか？」

本局からではない事はわかるが、誰からだろうか？

「わかった。部屋に回線わ繋いでてくれ」

「了解！」

隊員が走り去った後

俺の部屋、部隊長室へと向かって歩き出した。

部隊長室

部屋に戻り、コンソールを操作すると早速、モニターに連絡を入れた人物が映し出される。

「久しいな十梧」

「シグナムじゃないか」

モニターに映ったのは、ピンク色のポニーテールをしたベルカの騎士、シグナムであった。

2人は仕事の関係で何回か会っている意外に奇妙な関わりを持っている。

「それで、用件はなんだ？」

「ミッドチルダに戻り次第、主はやてに会ってもらいたいのだが…
…どうした？」

モニターに映るシグナムは両手を頭にやり、顔を伏せる十梧に首を傾げる。

タヌキの野郎が、かあ……………

「はあ……………」

十梧はため息をつく。

彼女からの話はいつも厄介ごとでしかない。

だが、それを黙ってただ従う。いや従うしかないのだ。

十梧は八神はやてにとある秘密を握られているのだ。

その秘密を見つけられて以降、たびたび彼女からそれをダシに頼みごとがくるのだ。

書き終わらないレポートを半分以上を書かされたのがまだ記憶に新しい。

「はああ〜」

思い出し、再度、ため息をつく十梧。

「それで、大丈夫か？」

「ああ、わかったよ。このタヌキがって、言ってくれ」

「わかった。それはさておき、そろそろ主をタヌキ呼びわりするの……」
ブチッ

阿修羅を思わせるようなオーラを放ちながらレヴァンティンを取り出したシグナムが恐ろしいので通信を切った。

「はあ……………」

今日3回目のため息をしながらイスに深く腰をかける。

ふと目に入ったのはデスクの上に飾っている2枚の写真。

1枚は親友の家族が仲良く笑っている写真。

妻には白いタオルに包まれた赤ん坊が大切に抱えられ、その隣では少年が親友に頭を撫でられながらピースをしている。

もう1枚はつい最近、撮った物だ。

十梧と成長しためんどくさそうな顔をする少年が写っている。

「天矢……蒼仁は元気にやってるぞ……」

今は亡き親友に届くように語るように、十梧は虚空に言葉を発した。そして、虚しく響く……。

「十梧お！！まだ、話は終わってない！！」

「空気を読めよ!」

turn 蒼仁

目を覚ます

ぼやける視界を生み出している目をこすりながら起き上がる。薄暗い部屋の右端に設置されているベッドの上にいることがわかったが、ここまで来た経緯がわからなかった。

《お目覚めですか?》

視線を横にすると、待機モードのレディアントがそこに置かれていた。

「……ここ、どこ?」

《バニングス様宅です。翠屋について早々にマスターが倒れたのですよ。覚えてませんか?》

ああ、ヴィヴィオを背負って翠屋についてからの記憶が無い。そこら辺で倒れたのか?

「てか、なんで倒れたんだ?」

《驚祐様が言うには、疲労ではないかと……》

確かに、変な修道士とかさつきは大剣を持った男との戦闘で、最近、

あまり休めてなかったかもしれない。

「ふああ……眠い」

蒼仁は欠伸をしながらベッドに再び倒れ込み、目を閉じた。ベッドの質が良いのか、心地良い温もりに10秒もしない内に眠気が襲ってきた。

バーンッ

盛大な音と共に、ベッドの横に部屋の扉が壁にめり込んだ。命の危機を察知した蒼仁はベッドから飛び起きて、扉を失った部屋の入り口に目をやる。

「そうちゃああああんっ!!」

「ぐふうっ!?!」

入り口からベッドまで、およそ5mはある。その距離を助走もつけずに幼い声を出しながら蒼仁へと抱き付いた人影が1つ。

「か、叶恵……………」

「大丈夫、そうちゃん!?!どこか痛い痛いところない!?!」

まさか、“あのモード”になってるなんて……
ベタベタと体を触ってくる叶恵を見ながら、蒼仁は深いため息をついた。

説明しよう!!

今の叶恵はある特殊条件が揃った時に幼児化してしまう【幼児モード（蒼仁名称）】になっているのだ！

「ねえ、そうちゃん！ぬか漬けは？」

「家から持ってきたのがあるだろ……」

「さっき、全部食べた！」

「早っ！！」

「だって、そうちゃんのお見舞いしようと思ったら、しゅুকんとゆいちゃんに止められてね。やる事無くて、ずっと部屋でぬか漬け食べてたの！」

「だからってツボに入ったのを全部食うか？」

「しかも、3つ……」。

「ちなみにしゅুকんとは鷲祐。ゆいちゃんは唯華である。」

「ねえ、ねえ！そうちゃん！」

「近い！顔が近いから！」

「ドンドンと顔を近づけさせながら話してくる叶恵を蒼仁は手で押し退けようとするが、それ以上の力で押し返してくる。」

「その弾みに柔らかく大きい触り心地の良いメロンを掴んでしまった。」

「あんっ」

部屋に響く喘声

ダラダラと冷や汗を流す蒼仁は素早く叶恵の体から手を離れた。

「……そうちゃんのえっち」

叶恵は恥じらしいに頬を桃色に染め、ジト目で蒼仁を睨みながら言った。

この叶恵の態度に、とあるひぐらしの鳴く村に在住している鈍娘がいたならば「はふうー！お持ち帰りーっ！」と発狂していただろうが、蒼仁はそれどころではなかった。

「あ、起きたんですか？」

扉のない入り口から、純粹無垢な赤と緑の瞳でこちらを見ている少女がいた。

昼間に翠屋までの道筋を覚えてくれたいい子だ。そんな子にこんな誤解を生むような状況は教育上に悪い、悪すぎる！
その時、少女の目が何者かの手によって塞がれた。

「ヴィヴィオちゃん！蒼仁は大丈夫だから、心配しないでいいからね！」

唯華！？

唯華は少女を抱えながら、部屋の前から走り去って、3秒で部屋の中に入って叶恵の腕を掴んで、早々……

「何、やってんのよ！このバカがー！」

顔を思いつ切りぶん殴られた。

痛あつ!?

蒼仁にしがみつくと叶恵を唯華は力任せに引きずって部屋から出て行った。廊下からは「そうちゃん!そうちゃん!」と呼ばれる声があったが、顔面が痛いので無視した。まあ、痛くなくとも無視するけど……

「大丈夫ですか、蒼仁?」

唯華が出て行った後に始まった静寂は、数秒でベッド前まで歩いてきた人物に破られた。

「驚祐……」

「叶恵がああの状態になるのは久しぶりですね。前は確か、2年の体育会の時でしたよね」

2年の体育会……。

玉転がしてグラウンドの石に躓き、見事に転倒。

後ろから来た別のクラスの玉に引かれて、転がしてた奴に踏まれまくった不幸な事件。

早く保健室に行きたかったが、叶恵が幼児モードで何時までも行けなかった……。

蒼仁は思い出しては、深いため息を吐いた。

それを見た驚祐は面白げに笑うが、すぐに普段の……いや、真剣な面持になった。

「蒼仁、最近、何か変わった事はありませんか?そうですね。だいたい、ここ1ヶ月の間に」

さすが鋭い。

驚祐は昔からこうだった。隠し事をしているとすぐ気付く。

「1ヶ月前か……。
唯華からゲームを2、3本借りたな」

しかし「俺、実は魔法使いでさ。日々、謎の男達との戦闘に明け暮れてるんだ！」と言えるはずもないので、適当な理由ではぐらかす。実際に唯華からはゲームは借りているわけだが……。

「……そう言う事にしておきましょう」

鷲祐は呆れ口調でそう言いながら部屋を出て行く。その際に付け加えるようにこう言った。

「まあ、困ったら言うてください」

その言葉に蒼仁は「はいよ」と苦笑いしながら頷いた。

鷲祐が部屋が去って10分位だろうか。

部屋の前からトントンとノックする音が聞こえる。もちろん扉は叶恵によって無くなっているの、入り口の隣の壁を叩いている。

「雨井……蒼仁君でいいんだよね？」

そこにいたのは、茶色のサイドポニーの髪をした女性
確か、翠屋にいた……

「高町ヴィヴィオの母。高町なのはです」

「……雨井蒼仁です」

微笑む女性、高町なのはに自己紹介しながら会釈をする。

ヴィヴィオってあの子の名前だよな？唯華もそう言ってたわけだし……。

「昼間は娘が迷惑かけたみたいで、ごめんね」

「あ？え、いえ……別に大した事じゃないし」

頭を下げてくるなのはに蒼仁は頭を掻きながら戸惑う。

そう言えば不良に絡まれてるところを助けたんだっけ……自分で忘れかけてた。

「それで、1つ聞きたい事があるんだけど……」

顔を上げたなのはは慈愛の笑みから真剣な表情に変わっていた。

「その銀の珠ってデバイスだよな？」

なのはの質問に蒼仁はレディアントに念話を繋げる。

（さて、どうする？）

（正直に言ったほうがいいでしょう。おそらく、この方は管理局の人間ですし）

（管理局？あの次元世界の警察みたいなやつだっけ）

だったら嘘とか言ったら捕まりそうだな。

正直に言うしかないか

「……………はい」

「やっぱり……………じゃあ、森での魔力反応も君ってこと？」

「はい」

質問を答え終わるとなのは首にかけていた赤い玉を持つと、何も無いところからモニターが現れた。

何じゃありゃ!?

「……………うん、これでよしっと!」

なのはが何かを打ち込み終わると、モニターは音をたてずに消えた。あれも魔法の力なのか？

「悪いけど管理局に来てお話をしてもらっけどいいかな？」

あれ？何でだろ、寒くなった……………

蒼仁は“お話”の言葉に体感温度が下がったような感覚に陥る。

「修道士？」

「はい。何か知らないけど、俺を襲ってくるんです」

「そうなんだ……………」

部屋から出た蒼仁はレディアントを手に入れてから今までの経緯をなのはに話しながら2階の廊下を歩いていった。

階段に差し掛かると、芳しい香りが1階の方から匂ってきた。

「ご飯できたみたいだね」

グウウ

腹の虫が飢えに苦情を訴えてきた。

そう言えば昼から何も食べていなかったと思いつ返す。

「行こっか」

クスクスと笑うなのはの言葉に正直に頷いた蒼仁は階段を下りて1階の食堂へと向かった。

食堂につくと、白いクロスを敷いてある長いテーブルの上に、豪華な料理の数々が置かれていた。早速、手前にある皿に盛っていたスイートポテトに手を伸ばした。

ここである気配に気がつき蒼仁は体を屈めると、頭上を1つの影の通り過ぎた。

「何で避けるの!？」

影の正体

幼児モードになってしまった叶恵である。

何で、と聞かれてもあのロケットの推進力がごとく突っ込まれたら体が保たない。

「あ。蒼兄ちゃん」

蒼兄ちゃん？

おそらく自分の事なのか、と後ろを振り返ると真っ直ぐな瞳でこちらを見るヴィヴィオがいた。

「蒼兄ちゃんって……………」

「え？踏崎さんがこう言っていると喜ぶからって……………」

あの野郎…………いや、野郎じゃないけど…………。

「そうちゃんは妹属性なの！？それじゃあ、私も……………」

「言わんでいい」

何で同い年の幼なじみにお兄ちゃんと呼ばれなければならないんだよ。

「あ、起きたのね」

この家の主、アリサ・バニングスが奥の部屋から現れた。

「具合はどう？」

「おかげさまで」

大丈夫、と肩を軽く回して見せる。

それを見たアリサは「それはよかった」とイスに座った。

俺も座るか……

そう思い、近くにあったイスに手をかけた。
その瞬間

視界の死角にいる叶恵が動き出したのを察知し、後ろに飛び退いた。

察知した通り、目前を叶恵が通り過ぎていく。

あと、1秒遅かったら捕まっていただろう。

しかし、代償があった。

「にゃあああああ!!」

ヴィヴィオが犠牲になった。

「だから何で避けるの〜そうちゃん」

「嫌だからだよ」

「ふ〜ん、いいもん。ヴィっちゃんを抱き抱きしてあげるもん」

「にゅ〜」

叶恵が抱き締めるとヴィヴィオの顔がその大きな胸が形を変える。
羨ましいそんな光景だが、やられている側は圧迫されて息が出来ない状態である。
被害を受けて「う〜う〜」と悶え苦しむヴィヴィオがだんだんかわいそうになってきた。

「はあ……。やめてやれ……」

溜め息をはき、諦めたように言うと、叶恵の顔に笑顔が咲いて蒼仁に飛び付いた。

解放されたヴィヴィオは両手を地面につけて、すうーはあー、と深呼吸で体に酸素を送り込む。「大丈夫か？」

「は……はい」

苦笑いをしながら答えるヴィヴィオに手を差し出す。

「悪いな、病気みたいなもんなんだ」

手を取って立ち上がるヴィヴィオにそう言って、席に座る蒼仁。もちろん、叶恵は背中に抱きついていてる。

「病気？」

「まあな。こら、頭を噛むな」

頭にかじり付いてくる叶恵を右手を押し離しながら説明と昔話（幼稚モードの）をする。

「それで？」

「よく、わからない」

「ええ」

出した結論に不服そうにするヴィヴィオ。
仕方ないのだ。本当にわからないのだもの……

夕食を終え、アリサ邸から宿泊先の旅館に戻った蒼仁は部屋のテレビでアニメを見ていた。管理局へは、なのはさんと話し合い明日のパーティーが終わったからということになった。

『くらえ!!これが必殺!!天空烈破斬光連殺エターナルギャラクシーソオオードツ!!!!』

『グワアアアア!!』

やけに長いセリフであるが、実際には光った剣で敵を斬りつけるだけの技。
それだけなのに……

「おおおっ!!!カッコイイぞ!!!」

向かいの部屋にいる幼児モードが解けた叶恵もこのアニメを見ているのか、主人公が繰り出した必殺技にひどく興奮し、叫んでいた。

絶対、迷惑だろ……

呆れながら、テーブルに置いてあった饅頭を口に放り、湯飲みに入ったお茶を啜る。饅頭のおんこで甘くなった口の中をお茶の苦味が混入し、絶妙な味となる。

やっぱり、和菓子にはお茶が一番あつと再認識していると、部屋のドアが開いた。

「ん、驚す……!?!」

入り口にいる鷺祐を認識した蒼仁の脳は、目から得た情報に一瞬だけ活動を停止した。
いや、実際に止まったんじゃないけど……
それぐらい驚いたってこと。

何故なら

今まで地獄のような夏でも、体育でも、染まることのない鷺祐の頬が赤く染まっているのだ。

小学3年生から出会ってから7年間。
初めて見せる表情だったのだ。

「そ、蒼仁……」

「お、おう……」

「温泉に行きましよう……」

「お、おう……」

きごちない会話を交わした後、2人は無言で1階にある温泉へと歩き出した。

ポツーン

蛇口から垂れた水が桶に落ち、風流の感じる音が温泉中に響く。

「唯華に告白されたあ!？」

続いて響いたのは蒼仁の驚愕する大声。

温泉に入っている人々の視線が一気に鷺祐に集まる。

「そ、蒼仁! 静かにしてくださいよ!」

「わ、わりい……」

それにしても驚いた。

あのツンデレお嬢様が早くも行動に出たのか……。

まあ、チャンスは今ぐらいしかないか。

夏休みが終われば学校で鷺祐ファンクラブが本格的に動き出すと聞いている。

作戦名は

「怒涛のラブアタック」

全学年100人はいるファンが1日に3人ずつ告白していくのだ。

つまり、鷺祐は1ヶ月近く絶える事なく告白をされる。

そんなのは紳士である鷺祐でも精神的にキツイ。

唯華もこれを知っていたのか……

「それで……返事は？」

「……………」

伏せて黙る鷺祐

俺は頑なに閉じるその口が開くのを待つ。

何故かは知らんが、他の宿泊客達も生唾を飲んで待っている。

「に、逃げてきたのでまだです……」

「「「うおい！」「」」

鷺祐が発した言葉に、俺と周りの宿泊客が息のあったツツコミを入れる。

「そりやダメだよ、君」

「その女性に失礼だ」

「男だったら二文字ではい！だぜ」

ドンドンと出てくる人生の先輩方の意見を鷺祐は真剣な表情で聞き、理解したと頷く。

「わかりました。もう迷いません！」

温泉から立ち上がり宣言した鷺祐を、宿泊客は讃えるように拍手喝采を響かせる。

「頑張れよ！」

「少年よ、大志を抱け！」

声援を言い終えた宿泊客は、風呂場から出て行き、温泉に浸かっているのは俺と鷲祐だけになる。

「……いい人達だったな」

「そうですね……」

「……ふう」

「おやじ臭いですよ……」

「……うっせ」

嵐が去った後のような静けさの中、途切れ途切れに会話を交わしていく。

「蒼仁……」

「なに？」

「蒼仁はどうなんですか？」

「だから、何が？」

「叶恵の事ですよ」

その話題がきたか……

だけど、俺の答えは昔っから決まってる。

だが、今、本当の事を……“ 真実 ” を言ってしまうえば叶恵は“ あの時
の状態 ” になってしまう……

「さて、ね……………」

「……………その腕ですか」

鷺祐の視線が左腕に移る。

黒く痛々しい火傷の痕

鷺祐と出会う1年前

そして、今から7年前

全てを失い、“ 0 ” のスタートが始まった事を知らしめる為の証

確かにコイツは深い関わりを持つてるな……………。

「昔に何があったのかは知りませんし、知ろうともしません」

鷺祐は言葉を区切り

俺のことを真つ直ぐと見詰める。

「ただ……………親友^{タチ}として、何かをしたいんですよ」

「……………そっか」

鷺祐の純粹な気持ちの言葉を素っ気なく返す。

途切れた会話を、しばらくしてから俺はこの話題の終わらせる決まり文句を言う。

「時がきたら教えるよ……………理由も全部、な」

「またそれですか…」

呆れた様子を見せる鷺祐そろそろのぼりそうだったので、温泉から出る。

「明日、何時に出るんだっけ？」

「10時ですよ」

温泉で和んだ体に浴衣を着て、俺と鷺祐は部屋に続く廊下を歩いていった。

前方の右に自動販売機コーナーを見つけ、何かを買っていこうかと思ったら先客に唯華がいた。

「「あ」「

重なる2人の声

俺は鷺祐の肩を軽く叩いて、邪魔にならないよう早足で部屋へと向かう。

「……………あの」

「屋上に行きましょつか」

鷺祐は顔を赤くしてもじもじする唯華の手を、微笑みながら優しく引いて屋上へと連れて行った。

「叶恵……か」

部屋に戻ると、従業員が敷いていた布団へと入り、温泉でした鷺祐との会話を思い返す。

7年前、共に家族を失った病院での大火事。

この事件は新聞やニュースでもよく取り上げられた。

犯人が不明な事から、巻き込み自殺や、放火魔などの噂が多くあった。

だけど、この事件はそれらのどれでもない。

疲れた………

思考する意志よりも、睡魔が勝った。

いや、実際にはあまり思い出したくないから。

灯りのスイッチを明から消に切り替え、部屋を真っ暗する。

若干開いた窓から入ってきた風に揺れて、夏の風物詩である風鈴がチリーンと音を鳴らした。

その音を最後に蒼仁は眠りに落ちた。

明日が苦難の物語の始まりとも知らずに……………

第6話・Party& Battle 前編(前書き)

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

登校中の投稿なので、あまり見直ししていません……。

あと、最初は十梧の一人称になっています。

第6話：Party&Battle 前編

俺の名は空蔵十梧

特化戦闘部隊ラークインの部隊長である俺が今いるのは

あの忌まわしきタヌキが部隊長を勤める

機動六課のロビーだ。

「こんにちは。」

今日はどのようなご用件で？」

「部隊長の八神はやてに呼ばれてきた」

「はい、連絡は受けております。」

部隊長室へと向かうようにとのことですよ」

「そうか、ありがとう」

俺は受付に頭を下げた後、タヌキのいる部隊長室へと足を進めた。

部隊長室の扉の前に立つと、蹴っ飛ばして入ってやるうかと思っただが、弁償とか言っただけで散々な目にあう事が目に浮かぶので、感情を押しさえてノックを軽く3回した。

「入ってええよ」

中からマヌケな声が聞こえたので、部屋に入ると、デスクに座っている茶髪の女性、八神はやてが柔らかな微笑みでこちらを見ていた。

「よう来たな」

だが、騙されない！

コイツが俺を呼んだっということとは

また、「あの事」をダシに使ってこき使わせるつもりなのだろう！

「ほら、いつまでもそこに立つとらんで、座ったらどうや？」

はやてはソファアを指さしたので、なにも言わずに座った。

「今日、来てもらったのは、ちょこつとお話があるからや」

「話だと？先に言うておくが、風呂場の修理や、部屋掃除などだったら帰らせてもらうが」そのせいで俺の休暇がどれだけ潰れたことやら………

「今回はちやうよ」

はやてが仕事の顔に変わったので、仕事関連の話か……。さて、どんな厄介ことを人に押しつける気だ？

「あんた、最近増えてきているロストロギア狙いのテロ活動は知ってるな？」

「ああ、だいたいはな。だからこの機動六課が再建されたと聞いたが？」

「そうなんやけど。」

これまでの被害報告、あんたの隊も含めて見る限り、機動六課一隊の力じゃ限界があるんや」

「何でだ？」

機動六課はこの世界のみ守ってゆけばいいんじゃないのか？」

俺がそう言つと、はやてはため息をついて、イスの背もたれに体重をかける。

「もし、2カ所。

3カ所、4カ所って攻撃されたらうちの隊じゃ人手不足や。そ・こ・で・」

タヌキは声のトーンが上げながら、急にイスから立ち上がる。

「あんたのラークインから、何人かかしてもらえへん？」

「……………はあ。

もし、断ると言ったら？」

俺はため息をつきながら、無駄だと思つが聞いてみた。

するとはやては笑顔でこう答えた。

「あの事、バラすよ」

わかっていた、わかっていたが、俺はこめかみを押さえた。

「あ、あと。

昨日、なのはちゃんから連絡きたんやけど……………」

はあ……………あいつ等にどう言おう……………。

脅されて仕方なかったんだ……いや、俺の人生全てがかかっているんだ！！頼む！！……はあ……。ため息しかでない……。

「十梧、聞いてたんか？」

「すまない……もう一度」

「ん、もう！私もけっこうビックリしたんやで。“蒼仁君がデバイスを持っているんやから”」

「………なにいいいい！！？」

蒼仁が！？デバイス！？いつの間に！？

「ちょ！？どこ行く気や！？？」

「地球だ！！！」

「あんた、まだ仕事あるやろ！！！」

「そんなもん知るかあ！！！」

俺は部隊長室の扉を蹴っ飛ばして、廊下に出ると本局にある転送ポルトに向かって走り出した。

「くそ！！ 何か知らんが、待ってるよ蒼仁！！！」

10分後

管理局の白い悪魔に捕まって戻された十梧が、頭にタオルを巻いて部隊長室の扉を直しているところを多数の六課の局員が目撃した。十梧が部隊長室の扉を直している一方、蒼仁も蒼仁で苦労していた。

「……………みんな、どこだよ」

蒼仁は目の前に群がる人達と広い敷地を交互に見てため息をついた。

ことの始まりは10分ほど前

「そう言えば、十梧さんにこの事を話しているのですか？」

パーティー会場の入り口を入ると、鷺祐がそう聞いてきた。

「ああ……………」

大丈夫、基本的に帰ってきた時に言えばいいから」

「そうですか……………」

それにしても、2人とも遅いですね」

ホテルで叶恵と唯華が後で追いつくと言ったので先に行ったが、待つこと20分近くになる。

「女は男を待たせるもの」

俺が覚えている数少ない父さんの言葉

十梧さんから聞いた話では、父さんは風邪を引いてデートに来れなくなつた母さんを、雨の中1日中待っていたらしい。

どんだけ義理堅いんだよ父さん……………
ぶつちやけ言つて俺にはできない事である。

「ご、ごめん！遅くなつた！」

声ができる方を見ると、ドレス姿の叶恵と唯華がこちらに向かって走つてきた。

「いえ、大丈夫ですよ。さあ、行きましょう」

「そ、そうね／＼」

鷺祐はそう言つて微笑みながら唯華の手を握り、パーティー会場へと入つていった。

「……………早速、ラブラブだな……………」

蒼仁は少し呆れたように言つて、同時に微笑ましい2人を心で祝福した。

「2人ともいつの間にああなつたのだ？」

朝も見たが、普段通りに戻っている叶恵に蒼仁はホツとした。

「昨日のうち、さ」

「うぬ？」

それにしても、なぜこちらを見ようとしないのだ、蒼仁？」

近づいてくと距離をとる蒼仁に疑問を抱いた叶恵が聞いてきた。

「いや、だって……………」

蒼仁はそう言つと、横目で叶恵を見た。

中学生とは思えない、豊満な胸を主張するかのようには開かれた胸元、ドレスからチラチラ見える素足に蒼仁は目を向けられるほどの耐性がない。

「本当にどうしたのだ？顔も赤くなっているし」

「う、うるせえ！！早く、行くぞ！！」

蒼仁は誤魔化すように大きな声を出してパーティー会場に入っていた。

叶恵は首を傾げながらも蒼仁のあとをついて行った。

パーティー会場に入ると、金持ちの雰囲気醸し出す人達が自分の自慢話をしていた。

「まったく、みんな自分の自慢話ばかりではないか。
なあ、蒼仁」

「ん？ふあふいふあふいつふあふあ（何か言ったか？）」

「……………蒼仁よ。」

「TPOをわきまえろ」

叶恵はそう言うと、食べ物で頬を膨らました蒼仁にハンカチを差し出した。

「ふあんふうー（サンキュー）」

蒼仁は渡されたハンカチで口の周りを吹いた。

「それにしても、鷺祐と唯華はどこに行ってしまったのだろうか？」

「ん〜、どっかでイチャイチャしてんじゃねえの？」

蒼仁は右手に七面鳥、左手にフォークで刺したステーキを持って答えた。

「……………蒼仁、少しトイレに行ってくる」

叶恵は頬をほんのり赤らめさせてそう言うと、蒼仁から離れていった。

「行ってら〜」

蒼仁は骨と化した七面鳥を振った。

「ふうー、さて次は……………と？」

蒼仁は新たな料理に手を出そうとすると、服を引っ張られた感じにして、後ろを振り向いた。

「……………ヒック……………お母さん……………どこお〜」

後ろには、今にも泣き出しそうな男の子が服の裾を握っていた。

これが事の始まりだった。

泣きそうな男の子をあやした後、一緒に母さんを探しに行くのだが、どどんと蒼仁の周りに迷子を寄ってきてしまった。結局、全員の迷子を届けが終わった頃には、叶恵といた場所がわからなくなってしまった。

「不幸だ……………」

どこかの右手に幻想殺しを宿す高校生のセリフを口にしながら、そこからへんを適当に歩いていると、見たことのある金髪ツインテールの少女を発見した。

「よ、ヴィヴィオ」

蒼仁が声をかけると、体をビクッとさせ恐る恐る後ろを振り向いてきた。

「あ、そ、蒼仁兄さん」 ヴィヴィオは蒼仁を見ると、安堵を覚えた顔をした。

「蒼兄さん！？なんだ、その呼び方は？」

「へ？唯華さんがそう呼んだほうが、喜ぶって……………」

ヴィヴィオの話聞いてる蒼仁は自然と握り拳をつくり、引きつった笑顔で唯華をどう処すか、脳内シミュレーションしていた。

「ん？と言うことは、唯華に会ったのか？」

「はい、さっき手を繋いで歩いていました」

…………… どんだけラブラブなんだよ……………。

蒼仁は鷺祐と唯華のバカップルぶりに少し頭を抱える。

「蒼兄さんは何をしてるんですか？」

「……………迷子センター」

蒼仁が肩を落としながらそう言つと、こちらに向かってくる1人の女性の影が見えた。

「ヴィヴィオー！」

「あ、なのはママー！」

ヴィヴィオはなのはを見つけると、駆け寄っていった。

「ヴィヴィオ、ダメでしょ、一人で勝手に行っちゃあ。変な人に連れていかれるかもしれないでしょ？」

「……………はい」

なのははヴィヴィオを少し叱った後、蒼仁を見てきた。

「ごめんね。ヴィヴィオ何か迷惑かけてない？」

「いや、特に何もしてないですけど。」

それにしても、迷子だったら迷子って言えよな」

「……………はい」

ヴィヴィオはしょんぼりしながら言った。

すると、蒼仁はヴィヴィオの頭を軽くなで始める。

「大丈夫だって。」

俺だって方向音痴で、いつも叶恵達とはぐれるからさ」

「……………それじゃあ、蒼兄さんも迷子なの？」

「……………」

何も言えずに顔を引きつる蒼仁を見て、なのははクスクスと笑い、ヴィヴィオはなにも知らずに首を傾げた。

フツと

周りから人の声が消えた。

「……っ……っ……」

異変に気付いた、蒼仁達は辺りを見回すが誰一人としていなかった。

「これって……」

《マスター……！結界です……！》

ポケットに入れてあったレディアントが銀色に光る。

突如、蒼仁達の周りにナイフの形をした魔力弾が隙間なく張り巡らされた。

「っやば……！レディアント……！」

《いつでも……！》

「クリス……！」

「レイジングハート……！」

《ALL RIGHT……！》

蒼仁達が各々のデバイスを取り出すと同時に魔力弾が一斉に動き出した。

「セッティングアップ!!!」

ドオオンッ!!

轟音と共に大量の砂煙が辺りを覆った。

砂煙が薄れてくると、バリアジャケットとデバイスを手にした蒼仁達が防御魔法を展開していた。

「……………あなた、誰？」

蒼仁はヴィヴィオを見た途端に首を傾げる。

なぜならば、そこには金髪のスタイルのいい女性がいたからである。

「えっと……………ヴィヴィオです」

「嘘つくな!!俺がさっきまでたヴィヴィオはこれぐらいの身長でした!!」

「うっ、なのはママ」

「2人とも静かに…………」

「「はい……………」」

なに言わぬ殺気に恐怖した蒼仁とヴィヴィオは黙り込んだ。

突然、黒いモヤモヤが現れ、その中から例の修道士が多数出てきた。

「またコイツ等か…！」

「この人達って……………」

黒いモヤモヤが消える頃には、修道士の数は100を軽く越えていた。

「蒼仁君が言っていた、人達は……………」

「大正解……………」。

でも、こんなに現れたのは……………」

蒼仁となのはが互いに背中を見せながら話していると、一番前にいた修道士達から、雪崩のように突き進んできた。

「デイベイーン……………」

「アントいくぞー！」

プロミネンス……………」

蒼仁となのはは、自分のデバイスの先に魔力の塊を収縮し始め、そして

「バスター!!!」

放たれた砲撃は多数の修道士に直撃するが、当たらなかった修道士は仲間を気にもせずに進んでくる。

「ヴィヴィオ！普段通りにやるんだよ」

「うん、わかった!!」

ヴィヴィオは返事をした後、迫り来る修道士の大群に拳を構えて向かっていった。

「はあああああっ!!」

ヴィヴィオは先頭に拳を食わせ、次々と修道士を倒してゆく。

「うわ、すご……」

蒼仁はヴィヴィオの実力に、少々呆気をとられていたが、すぐ修道士に目を向けて魔力弾を放った。

「フッフ……」「トラッシュ」じゃ相手にはなりませんか……」

蒼仁は男の声が聞こえたと思った瞬間、最初に現れたナイフ型の魔力弾が右頬を掠めた。

「つつ!!」

蒼仁は後ろを振り返ると、空に浮かぶ1人の男性を見つけた。

緑色のオールバックにスーツ姿で、こちらに嫌な微笑みを向けてくる。

「あなたは……………」

「初めまして、雨井 蒼仁。

私は「メドウ」ともうします。

以後、お見知りおきを……………」

メドウと名乗る男はそう言って指を鳴らすと、蒼仁の周りにナイフ型の魔力弾が取り囲んだ。

「これはお前か!!」

「おっと、そこまで睨まないでください。

今日は取引をしに来たのですから」

メドウは微笑みながら、再び指を鳴らした。

そして蒼仁は空に現れた3人に目を見開く。

「叶恵、鷲祐、唯華……………?」

3人はぐったりしており、服の所々に切れていた。

「つてめえ!!」

蒼仁は怒りを露わに、レディアントをメドウに向ける。

「だから、取引ですよ。

簡単な事です。

私と一緒にきてください……でなければ」

メドウは顔一つ変えずに、叶恵の顔に触れた。

「叶恵に触んじやええ!!!」

蒼仁は怒声と共に周りにあつた魔力弾を、プロミネンス・シュートで撃ち落とし、メドウに向けて紅い砲撃を放った。

メドウはそれを片手で受け止め、弾いた。

「……………交渉決裂ですかねえ……………」

メドウはそう言って、目をつぶりため息をついた。

そして、瞼を開けた次の瞬間

顔を殴られ、地に落ちた。

「ぐう!?!」

メドウは一瞬何があつたのかが分からなかった。

ただ、空を見上げると、腕を振り切った蒼仁がこちらを睨んでいた。

「まだまだああああ!!」

蒼仁はそう叫ぶと、レディアントを振りかざして急降下し、メドウに振り下ろした。

「があ!!」

メドウはいきなりの攻撃に戸惑っていたのか、なす術なく吹き飛ばされた。

「俺の大事な奴らに手を出したんだ。死ぬ覚悟はできてるよな?」

蒼仁はそう言ってレディアントをメドウに向ける。

この時、蒼仁は体が異様に軽い事に気付かなかった

第6話・Party& Battle 前編(後書き)

感想、お願いします!!

第7話：Party&Battle 後編（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

今回はいつもより短めになっちゃいました。

あと

キャラ&デバイス&技名、募集をしています！！
応募方法は後書きで

第7話：Party&Battle 後編

「アクセセル！」

《axel shooter》

なのはに形成された数十個の桃色の魔力弾は修道士を次々に撃ち抜いてゆく。

「はあああああつ！！！」

聖王モードになったヴィヴィオは目の前の修道士を次々に長年使ってきたストライクアーツでなぎ倒してゆく。

「ヴィヴィオ、大丈夫！？」

「うん！！大丈夫だよ！！！」

2人はお互いの無事を確認すると、もう1人の少年がいる方を見た。

「蒼仁君……………は？」

なのはは首を傾げた

先ほどまで、そこで闘っていた蒼仁の姿が消えてしまっていたのである。

ヴィヴィオもそれに気がついたのか、辺りを見回した。

すると、はるか上空から降りてくる1人の少女を見つけた。

少女は長い青紫の髪を後ろで束ね、両手に銀色の手甲に、右が膝まで、左が太ももまでの長さのズボン、後ろにたなびく紅いマフラーが特徴のバリアジャケットに
右手に刃を雷に模した鎌を持った少女がなのはとヴィヴィオを空から見据えていた。

「あなたは、誰……………？」

なのはがそう言った瞬間、少女が鎌を両手に構え直し、ヴィヴィオに向かって急降下し始めた。

「っ！！ヴィヴィオ！！！」

なのははアクセルシューターを放つが、少女は速度を上げ、魔力弾は追いつけずにすべて避けられてしまう。

さらに速度を上げた少女は、瞬時にヴィヴィオの目の前に現れ、呟いて鎌を振り下ろした。

「ごめん……………さようなら……………」

なるほど……………「あの方」が言っていたのはこの事ですか……………フフ、ますます興味深い……………

メドウは口についた血を拭い、蒼仁を見て不気味に笑い出す。

「フフフ……………！」

面白い……………面白いですねえ、雨井 蒼仁！！！」

通常の3倍の大きさもある紅い魔力弾が十数発、メドウに向かって放たれる。

メドウは避ける気配も見せず、ただ上げた手の指を鳴らした。

それだけの動作で蒼仁のプロミネンスシュートは霧のように四散してしまった。

蒼仁は一瞬だけ驚いたような顔すると、レディアントを構え、メドウに向かって走り出す。

「フツ!!」

メドウが再度、指を鳴らすとナイフ型の魔力弾が360度に張り巡らされるように現れ、蒼仁に向かって飛んでゆく。

だが、蒼仁は雨のように降り注ぐ魔力弾の中、速度を変えず……むしろ上げて走った。

「ガアアアアツ!!」

魔力弾の雨を抜け、メドウの懐に入った蒼仁は怒りに満ちた叫び声と共に、レディアントを振り上げた。

「くうっ!!」

若干、宙に浮かんだメドウに蒼仁はレディアントを突きつけ、魔力を収縮し始めた。

「プロミネンスバスタアアア!!」

怒声と共に紅い砲撃はメドウを巻き込み、空へと突き進んでゆく。

「フ……………フフフ」

プロミネンスバスターによって、スーツがボロボロになり地に落ちたメドウの表情からは苦痛を見受けられず、蒼仁を見ては口角を釣り上げ笑う。

メドウは蒼仁の表情に怒りと裏腹にもう一つの感情が隠れているのがわかっていた。

それは「怯え」

「どうしたんだよ…早く立てよ!!」

メドウは「早く」が異様に強調されているのに気付き、思考を張り巡らせる。

早く私を倒したい

なぜ？

何かに怯えている

早くしないといけない理由がある

それは何か

「ちいっ！！」

蒼仁は何もしないメドウに躊躇いもなくプロミネンスシュートを放つ。

「何回、やっても無駄ですよ……………」

メドウはそう言って指を鳴らすと、またもや魔力弾を消えてしまった。

「クソが！！」

蒼仁は悪態をつき、さらにプロミネンスシュートを撃った。

しかも、今までとは比にならない程の紅い魔力弾がメドウに向かってゆく。

さすがにメドウも全てを消せなく、次々と体に魔力弾を受ける。

「ぐうっ！！」

苦痛な表情をしながらメドウは蒼仁から距離をとった。

「フ、フフフ……………」

さすがにリミットをつけている状態では勝てませんか」

「リミット？」

どうでもいいか……………」

いい加減……………死に……………」

「うう……………」

「っ……！」

蒼仁はメドウに向かって走り出そうとしたが、叶恵の呻き声に、体をビクつかせる。

メドウはそれを見逃さなかった。

「ほお……………」。

あの娘に見られたくないのですか？今の姿を」

「…何、言っただ」

「そうですね……………では」

メドウがその場から消えたかと思うと、次の瞬間には叶恵の前に立っていた。

「起こしても問題ないと……………」

メドウは叶恵の顔にゆっくりと手を伸ばし始めた。

「やめろ……！やめてくれ……………」

「フッフ……………」。

では、私と共に来てください」

メドウは不気味な微笑みをしながら、手を叶恵から蒼仁に向けた。

蒼仁はそれに従うように一歩ずつメドウに近づいていった。

《マスター!?!》

「フフフ……………これで、私達の念願が叶うので…」

「残念だけど、それは無理ね」

いきなり、叶恵や唯華とは違う少女の声が聞こえ、蒼仁は辺りを見回したがメドウと叶恵達以外は見つからない。

「ヌーンの旋律よ」

その歌声で人々の心のすべてを奪い去り

永久の僕と誘わん

マインド・ブレインド」

「っ!!その詠唱は!!」

メドウが少女の声に気をとられていると、背後に筋肉質な大男が拳を振りかざしていた。

「き、貴様は!!」

「……………遅い……………」

大男はそう言って、メドウの顔面を殴り飛ばした。

《今のは一体……………マスター?》

レディアントが呼びかけるが蒼仁には返事はなく、目が虚ろになっ

ていた。

すると大男が蒼仁を持ち上げ肩に乗せた。《な、何なんですか!!
あなたは!!》

大男はレディアントの言葉に少し、顔をしかめた。

「……………覚えてないのか?……………」

《はあ?あなたをですか?》

「……………転送時のショックか……………」

大男はそう言って手を前に出すと、空間が歪み始め、人が通れそうな穴が空間に開いた。

大男は穴に入り、後ろを振り返りメドウを見た。

「フ、フフフ……………」

抗っても無駄ですよ。

運命は動き出したのですからね!!」

メドウはそう言うと、目の前に黒いモヤモヤに消えていった。

「……………運命か……………」

大男はそつつぶやきながら、肩に乗せている蒼仁を見た。

そして、再び前を向き歩き出すと、空間に開いた穴は消えてしまった。

第7話：Party& Battle 後編（後書き）

蒼仁「キャラ&デバイス&技名募集、応募方法」

まず応募先は感想で………アント、あとは頼む」

アント「はい、わかりました。

このような感じでお書きください」

キャラクター

名前

性別

年齢

髪（色、できれば髪型）

目（色）

性格

備考（スキルや生い立ち）

デバイス

形状（剣や銃など）

性格

備考

技名

名前

使用武器

効果

アント《………》と言った感じです。

あと、どれか1つだけ応募するのもOKです《

蒼仁「感想もよろしくな」

それでは次話まで………

第8話：それぞれの始まり 前編

「……………いつの間にか消えていた、か……………」

「はい……………すみません。」

私の注意不足でした」

そう言うと、彼女は頭を下げてきた。

「……………頭を上げる高町一等空尉。」

あいつは大丈夫だ」

「そつや、そつや。」

なのはちゃんが気にする事ないで。

それに、この男に頭なんて下げる価値な……………いつ!!
なにすんねん!!」

「お前こそ何、言っただよ!!」

げんこつを食らわした頭を押さえながら、睨んでくるタヌキに苛立ちを覚えながら、蒼仁の事を思った。

俺が第97管理外世界着いたのは、数分前

状況は思わしくない方向へと進んでいた。アリサ・バニングスの別荘でパーティー中

結果が張られたと同時に例の修道士が現れ、応戦

だが、高町なのはの娘、高町ヴィヴィオは負傷

蒼仁は戦闘中に消え、消息不明。
修道士に連れ去られた可能性が大

しかも……………。

「あ、あの……………十梧さん……………」

弱々しい声に後ろを振り向くと、傷に包帯を巻かれてある蒼仁の友達、妃山叶恵が今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「……………叶恵ちゃん。」

蒼仁は大丈夫だ。

絶対、俺が連れ戻してくる。

だから、今は医療班の治療を受けてくれ、な？」

俺はできる限り微笑みながら言うと、叶恵は暫くしてからゆっくりと頷き、救護キャンプへと戻っていった。

叶恵、鷺祐、唯華、の関係のない人間の負傷。

俺はやるせない怒りがこみ上げ、握り拳に力が入る。

「はい、はい！！ちよつとどいて！！」

向こうから大きな声が聞こえたので、目を凝らしてみると蒼仁より幼い少年と少女が、局員を押しつけて歩いているのが見えた。

「ちよ、ちよつと君達！！」

どこから入ってきたんだ！？」

局員の1人が少年の肩を掴み、歩みを止めさせた。

すると、少年は少女に向き合って手を出した。

「おい、アーシア！

待機モードに戻れ」

「ええ〜！！そんなのめんどくさいよ、マスター」

「いいから、早くしろよ！」

「ぶう〜」少女は唇を尖らせたと思うと、光を放ち小さな球体のデバイスへと変わった。

そして少年は少女だったデバイスを局員に見せつけた。

「俺は、三提督直属特務機動員の南條ナンジヨウ 砂彦スナヒコだ！」

砂彦と名乗る少年の言葉に、俺は耳を疑った。

「三提督直属特務機動員だと！？あんなガキがか？」

「三提督直属特務機動員」

名の通り、三提督直属の局員で

主に三提督に関与する仕事などをしており

生半可な実力では到底なれるものではない。

それをあんなガキが……………

《マスター》。

もう、アウトフレームになっていいでしょ《

「っはあゝ、勝手にしろよ」

《へっへっ、んじゃらほいつ！》

変なかけ声と共に、デバイスは先ほどの少女へと姿を変えた。

「お、砂彦ちゃん」

「アイツを知ってるのか？」

「まあね、ここにある元家の近くにな住んどってな。ちよくちよく、ラインと遊んでたんや」

はやての話を聞きながら、砂彦の方を見ると相手もこちらに気付いたらしく手を振って歩いてきた。

「はやての姉ちゃん久しぶりだな！」

「ほんまやね。

アーシアちゃんも元気か？」

「はい！バリバリ元気です！」

「お前はいつでもバカみたいに元気だろーが」

「あゝ！！マスター、それひどい！！」アーシアは頬を膨らましなから砂彦を睨むと、視線を俺に向けてきた。

「あれ、どなたですか？まさか、はやてさんの彼氏とか！？」

「「違うわ！！」」

俺とはやては同時にアーシアにツッコミをいれた。

それを見たアーシアはニヤニヤと笑ってきたので、つい頭にげんこつを食らわしてしまった。

「俺は、特化戦闘部隊、ラークインの部隊長を務めている空蔵 十梧だ。よろしくな」

俺は自己紹介を言うと、砂彦も同じように自己紹介をしてきた。

「俺は、三提督直属特務機動員の南條 砂彦って言います。んで、こっちが俺のデバイスで……」

「アーシアって言います！！
よろしくお願いします！！」砂彦とアーシアはそう言って敬礼をする。

「それより、十梧部隊長はなぜここに？」

砂彦の質問に俺は頭を掻きながら答える。

「消息不明になった、雨井 蒼仁の仮保護者が俺だからだよ……」

「あ……………」

砂彦とアーシアはしまった！と言いたげな顔をして、頭を下げてきた。

「すみません！無粋な事を言ってしまったて！！」

砂彦の声は辺りに響くほど大きく、思わず笑みがこぼれてしまう。

「いいさー！

アイツは絶対に俺が助ければいいだけの話だ！！
だから、気にするな」

俺はそう言っつて、砂彦の頭を荒々しくなでる。

「……………はい！！」

砂彦の元気な声を聞いて、少し心に余裕ができた俺はホッと、ため息をつく。

「さて、と十梧。

あんたはこれからどうするんや？

今の状況じゃあ、無理にあんたを六課に入れるつもりは無いんやけど……………」

「いや、入るさ。

俺は機動六課として蒼仁を探す。

その方が何かとやりやすそうだからな。

だから……………」

俺ははやてと向き合つと手を前に出す。

「よろしく頼むぞ、はやて部隊長」

「こちらこそや」

はやてはニコツと笑つと俺の手を握り、握手した。

……………ここは……………どこ……………だ？

蒼仁は重い瞼を開けると、見知らぬ白い天井が見えた。

「あれ？まさかの夢オチ……………じゃあないな」

気だるい体をベッドから起こし、辺りを見回すと、丸めた紙や回線プラグ、カップめんなどが部屋中に転がっていたからである。

「……………汚いな……………」

「汚くて悪かつたわね……………」

部屋の自動ドアが開くと2人の人が立っていた。

1人は歳は蒼仁くらいの少女で、腰まで伸びた赤い髪が特徴

もう1人は、まさにTHEマッスルと言つて過言ではないほどに鍛えられた筋肉を持つ大男

2人は部屋に入ると、床に転がっているものを気にせず、蒼仁が

いるベッドに近付いた。

「…………お前たちは誰だ？」

「人に聞く前に自分から名乗るものじゃないの？」

少女はツンとした態度に少しイラツときた蒼仁だが、今はできるだけ情報が欲しかったので、何も言わずに名前を言った。

「…………蒼仁。」

雨井 蒼仁だ……」

「そう、私はカリナ」

「…………アドンだ…………」

カリナは素っ気なく、アドンは静かに言った。

「カリナにアドン……か。俺をここに連れてきたのもお前たちか？」

「ええ、レディアントの使い手だもの」

「レディアントの使い手？……………っ！」

蒼仁はそう言うと、自分の手元にレディアントが無いことに気付いた。

「おい！アントをどこに…………」

「……………ここだ…………」アドンが差し出した手のひらにはレディアントがちよこんと置かれていた。

《大丈夫ですか？マスター》

「おまえこそ……………」

レディアントを受け取った蒼仁は、カリナとアドンを警戒するよつに睨む。

「お前たちの目的は何だよ。」

あの修道士の仲間じゃなさそうだけど……………」

「修道士？」

ああ……………」トラッシュ」の事ね」

「トラッシュ？」

聞き慣れない単語に蒼仁は首を傾げる。

「……………カリナ、事の全てを説明する必要がある……………場所を変えるぞ」

アドンがそう言って部屋から出て行くと、カリナも続いていこうとしたが呆然とする蒼仁を見て

「アホ面してないで、早くついてきなさい」

「んだとー!」

「ぶん……………」

カリナは怒る蒼仁を気にせずアドンの後を追ひ、蒼仁も腹を立たせながら部屋を出て行った。

しばらく歩き、着いた場所は、一面にモニターが付けられている大きな部屋だった。

「なんか……SFっぽいな……」

蒼仁が部屋を見回していると、モニターに1枚の画像が映し出されていた。

3つの丸にそれぞれ、私達、アカナシム、管理局、と書かれていた。

「さてと、その画像を説明する前に、あんた。レディアントについてどこまで知ってるの？」

「どこまでって、デバイス………だろ？
記憶は無いって言ってたから、それぐらいしか………」

「そう。
それじゃ、教えてあげるわ。
レディアントがどのようなものか、をね」

カリナはそう言うと、パソコンのキーボードのようなものにカタカタと入力するとモニターに杖状態のレディアントが映し出された。

「レディアントは別名「想念の剣」と言って、ロストロギア「聖帝

器」の一種よ」

「ロストロギア？聖帝器？」

「ロストロギアは過去の遺産。

いわゆるオーバーテクノロジーって言った方があんたの世界ではわかりやすいかしら」

「オーバー……テクノ……え〜っと……世界遺産みたいなやつ？」

「まあ、そんなものね。

そして、聖帝器は200年前に存在した、「聖王シユリア」の力を分断し、その力を宿した8つの武器の事を言うの」

カリナがまたキーボードに触れると、レディアントの画像の横に、6つの武器が映し出された。

「これは「フェアリーウェイポン」と言って、精霊の力を宿した武器なの」

「フェアリーウェイポン……ねえ……」

「あら、反応が薄いわね」

カリナはどこかつまらなさそうに言った。

「順応性を高めてるだけだ」

「そう、なら続けるわよ。

フェアリーウェイポンは6つあって

火の精霊を宿す

「イフリートの炎剣」

水の精霊を宿す

「ウンディーネの水杖」

大地の精霊を宿す

「ガイアの轟腕」

雷の精霊を宿す

「ヴォルトの雷鎌」

氷の精霊を宿す

「セルシウスの氷槍」

風の精霊を宿す

「シルフの風弓」……。

全部、頭に入った？」

カリナは蒼仁をバカにするように見て、自分の頭を突つつく。
イライラする……。

「……どうでもいい……。

俺が知りたいのは、なんでここに連れてこられたかって事だよ」

「だから、言ったでしょ？あんたがレディアントの使い手だからよ」

「それがどうしたんだよ！！」

蒼仁がつい叫んでしまうとカリナは耳を塞いで、ため息をついた。

「はぁ……………」。

今のあなたの立場はね……………全次元世界の命運を握ってるかもしれないのよ」

「……………はあ？」

全次元世界の………命運？

カリナの唐突すぎる言葉に蒼仁は呆然としてしまつた。

「あなたとレディアントはね。

聖王シユリア復活の鍵なの。

もし、聖王シユリアが復活したら……………全次元世界は確実に滅ぶ道にある……………」

「ちょ、ちよつと待てよ！！

なに！？世界が滅ぶって……………どういう事だよ！？」

「言った通りよ。

聖王シユリアが復活すれば、全次元世界は滅ぶ。あなたの世界も例外じゃないわ」

嘘だろ？

先ほど会ったばかりの少女に、世界の命運がかかっているって言われて、はいそうですか、って思えるわけがない……………普通だったら。

蒼仁は何故か、昔、燃え盛る病院の中で聞いたある男の言葉が脳裏に響いた。

蒼仁、お前はいつか世界を背負うことになるよ

なぜなら

それがお前の罪に対する罰だから

「……………罪対する……………罰……………か……………」

「何か言った？」

「いや。」

それより、俺はどうすればいい？」

蒼仁がそう言うときカリナは驚いたように目を見開き、アドンも怪訝な顔で蒼仁を見る。

「あんた……………今の話、ちゃんと聞いてたの？」

「ああ、すっかりきっちり、一言も漏らさずな」

「普通だったなら、そんな簡単に納得できる訳ないんだけど……………。それも順応性を高めてるから？
はっ、呆れるわね」

カリナは呆れた顔をする。

「……………お前には、私達と共に行動してもらおう……………」

「お前たちに付いていくのはいいけど……………なにすんの？」

「世界に散らばっているフェアリーウェイポンの回収よ。
アカナシムより早く……………」

「……………はいはい、そうですねか……………んじゃ」

蒼仁はそう言って、部屋から出ようとしたが、カリナに呼び止められた。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！

どこ行くきよ！…！」

「ん、さっきのベッドのある部屋」

「まだ、説明はあるのよ！…！」

「後日、頼む。

俺は……………ふあ、寝たいから……………」

蒼仁は欠伸をし、左手をヒラヒラ振りながら部屋から出て行った。

「な、何なのあいつ…！」

イライラする…！」カリナは蒼仁の気ままな行動に腹を立て、癩癩を起こし、その様子にアドンは深いため息をついた。

「……………あいつは知ってたのか……………？
こつなる事を……………」

いつまでも消える事のない、燃え盛る記憶のワンシーンに佇む、兄

のような存在、そして、俺の全てを変えてしまった男の最後の言葉……。

蒼仁は廊下で立ち止まるとポツリと呟いたが、すぐに頭を荒々しく掻いた。

「んなわけないか……………」

蒼仁はそう言つと、また歩き出し、最初に居た部屋へと戻っていった。

第9話・それぞれの始まり 後編（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

キャラ&デバイス&技名募集まだやっています

第9話：それぞれの始まり 後編

ミッドチルダ総合病院

「さて、どうしましょうか……」

鷲祐は病院のホームのイスに腰をかけ、窓から限りなく青い空を眺めていた。

「魔法……ですか……」

鷲祐は小さくと呟き、ため息と共に、先ほどの話を思い返した。

「……………ん」

鷲祐は目を覚まして起きあがると、病室のベッドに寝ており

隣には、唯華と叶恵が腕や足に包帯をした状態で静かに寝息をたてながら寝ていた。

それを見た鷲祐はホツとしたが、不安そうに病室を見回した。

すると、すぐそこに窓があったので覗き込むと、鷲祐は驚きで目を見開いた。

見知らぬビル群に、2つの太陽、そして空を飛ぶ船。今まで培ってきた常識が壊れるような光景に、鷺祐は後ずさりをしてしまう。

「よお、大丈夫か？」

聞いたことのある声に、ゆっくり後ろを振り向くと、そこには自分の親友の仮保護者である人物が立っていた。

「じゅ、十梧さん！？」

「よお、元気そうだな」

十梧はそう言うと、近くのイスに腰をかけたので、鷺祐も寝ていたベッドに座った。

「さて、と。」

まずは…そうだな……パーティーの日に何が起きたかを話せるか？」

「……………はい……………」

鷺祐はパーティー日の事を思い出しながら話し始めた。

鷺祐は唯華と一緒に歩いていると、辺りをキョロキョロ見回す叶恵がいた。

「どうしたのですか、叶恵？」

「おお、鷺祐！」

「蒼仁を見なかったか？」

「蒼仁ですか？」

「残念ながら見てませんね……」

「んむ、そうか……」。

「トイレにいつている間にいなくなっていたのだが……」

叶恵はそう言うと、ため息をついた。

無理もない、蒼仁は一度、迷うと探すのは困難で大概は放送などを流してもらうのだが、こんな豪勢なパーティーを邪魔する事はできない。

「まったく、蒼仁っては何やってんだか」

「そうですね。」

まあ、それだからこそ蒼仁なんですけどね」

鷺祐がそう言うと、唯華と叶恵の2人は「うんうん」と頷いて少し笑った。

そして気付く

この場に自分達以外に誰もいないと

「え？

……………なに？これ？」

突然の事態に唯華は驚きを隠せずにいる。
すると、見知らぬ男の声が聞こえた。

「あなた方が、雨井 蒼仁の御友人ですか？」

声は空からであり、鷺祐達は顔を上げると
スーツを着た男が空を浮遊していた。

「マジシャンかなにか……………ではないな」

叶恵はテーブルの上にある皿を手にとると、スーツ男に向かって投げつけた。

スーツ男は避ける動作も見せず、ただ右手の指を鳴らした。
たったそれだけで、皿はスーツ男に当たることなく、粉々に砕けた。

「無駄ですよ……………」。

見るかぎり、あなたが妃山 叶恵ですか」

「なんで、私の名前を知っている！」

叶恵がそう言うと、スーツ男は薄らと笑い出す。

「フフフ……………」。

あなたをずっと見てきた者から教えてもらいましたからね」

「ずっと……………見てきた？」

「フフフ……」。

さて、お喋りはここまでです。
あなた方には………」

スーツ男が右手を上げると、ナイフ型の魔力弾が叶恵達の周りを取り囲んだ。

「……取引の材料となってもらいます」

残酷的な笑みを浮かべながらスーツ男が指を鳴らすと、魔力弾が一斉に叶恵達を襲った。

「……そうか、嫌な思いをしたな……」

「いえ………」

話し終えた驚祐は自然に手に力が入っていた。

守れなかった

やはり自分は弱い

昔から変わらない

僕には力がない……

驚祐が自己嫌悪になっていると、十梧が優しく驚祐な頭を撫で始める。

「自分を責めるな。
なにも知らない状態で、お前みたいな状況になったら、俺もなにも
できない……………」

「……………はい……………」

鷺祐は顔を伏せ、頬に涙を流す

暖かい……………いつか僕も……………

しばらくして鷺祐が顔を上げると同時に病室に1人の女性が3枚の
紙を持って入ってきた。

「あら、十梧さんいたんですか」

「よお、シヤマル。

それ、子供たちの診察結果か？」

「あ、そうそう。

これを見てください
ビックリしますよ」

微笑むシヤマルから渡された紙を受け取り、十梧は目を通すと、予
想外な結果に驚いた。

「リンカーコアがある上に、推定魔力ランク、最低でもAA!？」

「リンカーコア？魔力……………ランク？」

聞いたことのない単語に鷺祐が顔をしかめさせていると、十梧が手で両肩に痛くならない程度に掴んだ。

「これから話す事はすべて事実だからな」

その言葉に鷺祐はただ頷いた。

「気付いていると思うが、ここはお前たちが住んでいた地球とは違う世界だ。無数にある次元世界の1つで、時空管理局と言う組織が管理する世界

第1管理世界ミッドチルダなんだ」

「なっ!？」

「そして、この世界には魔法が存在している。

魔力と言うのは……魔法を使ったためのエネルギーのようなものだ。リンカーコアは魔力を持つ者には必ずあるものだ」

「つまり……僕は魔法を使える……?」

鷺祐は自分の胸に手を当てながら言うと、十梧は頷いた。

「ああ……鷺祐だけじゃない。

唯華と叶恵にもリンカーコアがある」

「……十梧さんにも」

「……そうだ」

十梧はそう言うと立ち上がり、病室の出入り口まで歩くと振り返り

鷺祐を見た。

「どうするか……お前の意見を聞きたい」

いきなりの問いに鷺祐は戸惑ったが、すぐに首に手をやり、少し考え後、こう言った。

「……少し、時間をください……。唯華と叶恵とも話をしたいので……」

鷺祐は十梧から隣のベッドで眠る2人に視線を移した。

「わかった。

1時間ぐらいしたら、また来る」

十梧はそう言うと、病室から出て行った。

「……本当にどうしますか」

鷺祐はわからなかった

今、自分がすべき事を

魔法と言う名の力を手にした

別に思い当たる節はない……

だが、体が、心が、何かすべきだと訴えかけてくる。

「……………」

鷺祐は目を閉じ、考える

何をしたいか

何をすべきかを

何ができるのか

考え…考え…考え…考えぬいた。

そして1つの答えに考えついた。

「……………」やっぱり、これしかありませんか……………」

鷺祐は考え出したたった1つの「答え」に苦笑し、ベンチから立ち上がり、自分の病室へと戻っていきこうと思った時

「大丈夫ですか！？ヴィヴィオ！！」

ベンチの向かいにある「402」と書かれた病室から、少女の叫び声が聞こえ始めた。

「ヴィヴィオと言えば……………」

鷲祐はパーティー前日に知り合った少女の顔が思い浮かんだ。

好奇心に身を任せ、402の病室をのぞき込むと、3人の少女がベッドの前に立っていた。

「だ、大丈夫だよ！アインハルトさん！2日だけ入院すれば……………」

「こんな事なら、私もついて行くべきでした……………」

銀髪の少女は右手に握り拳をつくり、今にも壁を殴りそうな雰囲気をかもし出している。

「リオ、コロナ（泣）」

ヴィヴィオは昔からの親友に助けを求めるが、2人とも苦笑しながらこう言った。

「「どんまい、ヴィヴィオ」」

「そ、そんな〜！」

「やはり、これからは私も一緒に行きますー！」

「……………行きますか……………」

鷲祐は静かにその場から立ち去り、自分の病室へと足を進めた。

病室に戻ると、唯華と叶恵が目を覚ましていた。

「起きてましたか……よかったです……」

鷺祐はそう言つて、胸を撫で下ろす。

「鷺祐……どこ行つてたの？」

半分、眠たそうな顔を手でこすりながら、唯華は鷺祐に聞いた。

「ちよつと、考え事を……」

「それで？何か考えついたのか？」

叶恵は腕を組ながら、鷺祐を見た。

鷺祐は答えるように頷き、自分のベッドに座つた。

「……今から言うことは事実ですから、ちゃんと聞いてください」

鷺祐は話し出した

魔法の事を

次元世界の事を

そして、自分達が魔法を使えるという事を……

「「……………」」

鷲祐がすべてを話し終わると、2人は難しい顔をする。

「信じないのなら、信じなくてもいいです」

鷲祐がそう言うと、叶恵と唯華は互いの顔を見合わせ、そして頷く。

「「信じる」」

2人がはつきりそう言うと、鷲祐は自然に笑みをこぼす。

「そして、今、僕がしたいと思っっていることは……………たぶん、あなた達と同じだと思いますが……………」鷲祐はまた話し出す

自分がしたいことについて

ここは、存在してはならない暗黒のみの世界

何も無い暗闇の中

修道士達が何かを取り囲むように、360度の円形に並んでいた。

その中心には、2人の人間の姿が見られた。

1人はマントで体全体を隠し

もう一人は片目に眼帯をつけた顔中傷だらけの男

「アーク様」

隻眼の男が低い声で言うと、アークと呼ばれたマントの人は一歩、前にでた。

「時八来夕……………」

アークは両手を高々と上げ始めた。

「長イ、長イ、長イ、長カッタ……………」。

ココマデ来ルノニ、非常ニ長カッタ。

ダガ……………」

アークが手を上げきると同時に周りに炎が現れ、辺りを照らした。

「ココマデ来タノダ!!」

我々ノ念願…………ソウ、聖王シユリア様ノ復活!!スナワチ、「アカナシム」ノ完全ナル復活ガ間近ナノダ!!」

炎はマントの人の周りを踊るように動き出す。

「サア、行ケ!!」

ソシテ、誓ツタ忠義ヲ果タスノダ!!」

アークの号令と共に、修道士は一斉に飛び、闇の中へと消えてしまった。

そして、数名だけが留まっております、その中にブレイドとメドウの姿も見られた。

「サテ……………メドウヨ。

報告ヲ……………」

「は！

リミッターを付けているとはは言え、レディアントの力に少々、手こずってしまい。

奴らに奪われてしまいました」

メドウはアークの前に膝をつき、頭を下げながら言った。

「フム……………」。

レディアントモマダ、発展途中……………」。

シバラク、泳ガセルノモヨイカ。

ソレニ、「ゼラン」ノ件モアル……………」。

成功モ失敗モシタワケデハナカロウ……………」

「はい」

メドウはそう言って後ろに下がった。

「サア、貴様達ニモ、大イニ働イテモラウゾ。

聖王シユリア復活ノ為ニ」

「……………はっ！！」

周りの返答を確認したアークは静かに闇に沈んでいった。

「それにしても、やけにご機嫌だなあ？お前」

アークが消えた後、ブレイドは横にいる男に声をかけた。
すると男は、爽やかな顔で持っていた刀をクルクルと回し始めた。

「だって、もう少しなんだよ！！もう少しで会えるんだ〜！！
だから、ご機嫌になるに決まってるじゃないか！！」

「会えるう？誰にだよ」

ブレイドがそう言うと、男は刀を回すのを止め、少し悲しげな笑顔を見せる。

「僕の愛しい……愛しすぎる人さ……」。

本当にもうちよつとだからね……………叶恵」

男は刀を懐にしまい歩き出した。

先の見えぬ暗闇の道を

あれから1時間たったか……………

さて、行きますか。

十梧は病院の1階ホールのイスから立ち上がると、4階にある鷺祐達の病室に向かって歩き出した。

エレベーターの前に着くと、果物が入ったカゴを持ったはやての姿

があった。

「ん？十梧も鷺祐君達のお見舞いか？」

「いや、答えを聞きにな」

「答え？」

はやてが首を傾げているとエレベーターのドアが開いた。

「まあ、来ればわかる」

十梧はそう言ってエレベーターに乗り込み、はやても続いていった。

「お、ここやな」

鷺祐達の病室の前に着いたはやては扉をノックする。
だが、返答を待たずに十梧は病室に入ってゆく。

「こ、こら、十梧！
なにしてんねん！」

はやては十梧の後を追いつつながら、病室に入ると、ベッドの上、正座で座る鷺祐達が目に入った。

「……………へ？何してるん？」

「十梧さん……………答えが出ました」

「……………言ってみる」

十梧は静かにそう言うと、鷺祐達は頭を下げ始めた。

「僕も私も蒼仁を探させてください!!」

声は病院、全体に響くくらいの大きさだったが、病室にいる鷺祐達は誰一人とも気にしなかった。

「……………理由はあるのか？」

十梧の問いに鷺祐が頭を上げ、答えた。

「友達を救うのに、理由はいりません!!」

「蒼仁がいなければ私達は出会う事もできなかったんです!!」

次に唯華が言った。

そして、叶恵がゆっくりと叶恵が頭を上げる。

「あいつには返しても返しきれない程の恩がある。

それに……………」

「それに？」

「蒼仁が作るぬか漬けを食べたい。

ずっとずっとな!!」

叶恵がそう言うと、はやて意外が笑い出した。

「ははは！！そうか、そうか！！叶恵ちゃんらしいな！！」

「ちょ！？十梧！！」

「これ、どうゆうことや！？」

いまいち状況を理解できないはやてに十梧は笑いながら言った。

「ああ、悪い、悪い。」

こいつらを六課に入れたい。

ただ、それだけだ」

「……………はあああああつ！！？」

「うつるさいわあああああつ！！あなた達！！」

この後、十梧達は

病院長にきつちりお説教をくらったとかくらわなかったとか……………

第9話・それぞれの始まり 後編（後書き）

アインハルトのキャラが……………なんかな

書きながら、「モロ崩壊してんじゃね？」って思いましたからね

（泣）

誰かアインハルトの性格を詳しく教えてくださいさああいつ！！

あと、感想お願いします

第10話：アカナシムの襲来 前編

パーティー襲撃から早3日

攫われた蒼仁はカリナの基地で、幽閉されて……………

「お〜い、アドン。

今日の飯ってなんだあ？」

「……………焼き魚にサラダ……………」

「わかった〜」

……………いるはずだった。

カリナは頭を抱えていた。

原因は1つ

蒼仁の自由気ままな行動だった。

研究室には勝手に入っては、機材をいじるは、食堂でつまみ食いはしているは……………

でも、部屋の掃除はしてくれてるわよね……………って、違う違う!!

とりあえず、ガツンと言ってやらないと……………

カリナは立ち上がると、部屋にいるはずの蒼仁の元へ歩いていった……………が

部屋には居なかった……

「……………どこよ、あのバカはあぁっ！！」

思わず叫んでしまい、通りすがりの作業員に変な目で見られてしまった。

……………っ！！

感情的になってんじゃないわよ！！

どうせアイツも……………

カリナの顔は一瞬だけしかめさせ、また歩き出した。

一方、蒼仁はトレーニング室で逆立ち腕立てをしていた。

「48……………49……………50……………51……………52……………」じじゅう

……………」

「何やってんのよ？」

「ぐうが！？」

後ろから声があったと思った瞬間に背中を思いつきり蹴られ、体を床に強打した。

「つてえ〜！！なにすんだよ！！！」

蒼仁は痛さのあまり、床を転がりまわる。

「こつちが聞きたいわ。

この際言っておくけど、ここはあんたの家じゃない。

あんたは私達にとって

「道具」みたいなものの」

カリナは蒼仁に冷たい視線を送りながら話す、一定の距離をとるため

「……………道具…ねえ」

蒼仁はそう言うと立ち上がり、自分の手を部屋の灯りにかざした。

「……………それも、罪に対する罰……………かな？」

「え？」

「とにかく、部屋でおとなしくしていればいいんだろ？
じゃあな」

蒼仁がトレーニング室から出て行った後、カリナは蒼仁が言った言葉を口ずさむ。

「罪に対する罰……………。詩人なのアイツ……………バツカみたい……………。
でも私もいつかは……………」

カリナはどこか悲しげな顔をした後、トレーニング室から出て行った。

場所は変わり

機動六課 部隊長室

そこには、自分のデスクに座るはやてと、立ちながらクリップボードに挟んだ紙を読む十梧がいた。

十梧が読んでいる紙には、機動六課で働く局員の名前が書かれており、紙の隅には
鷲祐、叶恵、唯華、の名前が書いてあった。

「……………まあ、これだけの期間でこんなに集まったな」

「私の人望、なめんといてくれる？」

「人望……………ねえ」

はやてに人望と言う言葉がしっくりこないと思いつつも、次の紙へと目を通した。書かれていたのは主に前線メンバーで

スターズ

- 1 . 高町なのは
- 2 . ヴィータ
- 3 . スバル・ナカジマ
- 4 . ティアナ・ランスター

ライトニング

- 1 . フェイト・T・ハラオウン
- 2 . シグナム
- 3 . エリオ・モンディアル

4・キャロ・ル・ルシエ

「そして……………」

十梧は一番下に書かれている人名を見て、肩を落とす。

「かの有名な「THE SWORD EMPEROR」こと、空牙
刹那……………」

クラガ セツナ
空牙刹那

6年前のJS事件で、機動六課に所属

事件解決に大いに貢献し、管理局と聖王教会からは「剣帝刹那」と呼ばれ、憧れの的である。なのは、フェイト、はやてと幼なじみでジュエルシード事件や、闇の書事件でも、その力を発揮している。

「何だ、このメンツは。次元震でも起こす気か？」

十梧は呆れたように言うと、クリップボードをデスクの上に置いた。

「あとは、十梧のライクインから何人か入ってくれば、世界征服はできるんとちゃう？」

「冗談なしでやれるな……………」

はやてと十梧が話していると、部屋のドアが開いた。

「やっと、メンテナンスが終わったです……………。あ！十梧です！」

「おお、リインか。
久しぶりだな」

「はい！本当に久しぶりです」

リインは嬉しそうに十梧の周りをクルクルと回る。

「また、痴話喧嘩でもしてたのですか？」

「「……………は？」」

リインの唐突すぎる言葉に十梧は戸惑った。
そして、はやては顔を赤くしながら、立ち上がった。

「……………んな、訳あるかい！！誰や、リインに変な事、吹き込んだの！！」

「シャマルですよ」

「シャ、シャマルウウ！！」

機動六課 医務室

「ツクシユン！」

「風邪ですか？」

「うっん、何だろ？」

あ、その箱はそこに置いてちょうだい」

「はい、わかりました」

鷺祐はシャマルが指差した方にダンボール箱を置いた。

現在、鷺祐、叶恵、唯華の3人は非戦闘員として、医務室でシャマルの手伝いをしていた。

「それにしても、一向に蒼仁の情報が入ってこないな……………」

叶恵はそう言っただけ息をつく。

「しょうがないじゃない。次元世界って数えきれないくらいあるんだから……………」

「でも、修道士と関わっているのは分かっているのですから、そうはかからないと思いますけどね。
ねえ、シャマルさん？」

「そつよ。」

はやてちゃんと十梧さんを信じてあげて」

シャマルはそう言うと、優しく微笑む。

「それに、蒼仁の事です。迷子になっているところを保護されるんじゃないですか？」

「あゝ、たぶん」

叶恵と唯華はうんうんと頷き、シヤマルは蒼仁ってどんな子なのかと苦笑いしながら思った。

その時

機動六課にアラーム音が鳴り響いた。

「これはなんですか!？」

「驚祐君達はここにいて!私はちよつと行ってきます!」

シヤマルはそう言うと、医務室から出て行った。

「……………何でしょうか」

「……………修道士が現れたんじゃないの?」

「……………違う」

突然、ベッドに座っていた叶恵が立ち上がった。

「え?違うって何が?」

「いや、わからないが…違う……………うつ!」

叶恵が頭を押さえて苦しみだし、倒れ込んだ。
唯華は急いで叶恵の頭を抱え、膝の上に置いた。

「どうしたの！？どこか、痛いの！？」

「あ…あた…まに…っ…る」

「頭がどうしたの！？」

「頭に…何…かが…入って…くる…う…やめろ…これ…以上…私に…い…」

苦しむ叶恵と唯華の下に魔法陣が現れ、光を放ち始める。

「そこから離れてください！！」

「な、なに！？」

光は強まり、叶恵と唯華を包み込み始めた。

「間に合え！！」

部屋が光に満ち溢れ、2人の姿が見失われる前に、鷺祐は強い光の中へと飛び込んだ。

しばらくして、光が止むと

鷺祐達の姿は消えていた。

機動六課でアラームが鳴る

10分前

蒼仁はベッドの上で腹筋をしていると、スピーカーから機械音が発せられた。

《侵入者、侵入者。

フロアB-1 魔力反応アリ

繰り返ス、侵入者、侵入者……………》

「……………侵入者？」

《……………魔力反の「雨井蒼仁。

今すぐ、司令室まで来なさい」返ス》

「カリナか……………司令室に行きますか」

スピーカーからのカリナの声に従い、蒼仁は司令室へと向かった。

司令室

カリナは、モニター越しに映る3人の侵入者を見ていた。

「さて……………そろそろだと思ってたけど」

カリナはそう言うと、目の前のコンソールの「REPUULSE」と書かれた赤いボタンを押した。

それと同時に蒼仁が司令室に入ってきた。

「侵入者って誰だ？」

蒼仁の間に、カリナはモニターを指差す。

「……っ！ブレイド………」

モニターに映し出されている3人の中に、大剣を肩に乗せて不気味に笑うブレイドの姿があった。

他には、隻眼でアドンよりも大きい大男に

蒼仁より背は低く、仮面をかぶり、右手には巨大な氷柱を思わせるような槍を持った少年がいた。

「んで、どうすんだよ？」

「逃げるわ」

「逃げる？どこに？」

「そんな事は後で教えるわ。はい、これ」

カリナはポケット中から何かを取り出して蒼仁に放り投げた。

「ん？アントか」

《はい、マスター》

「あんたはこれを持って、転移ルームまで行きなさい」

「お前は？」

「もうちょっとここで、時間稼ぎする。

すぐ追い付くから、早く行きなさい」

「わかった。早く来いよ」

蒼仁はそう言って、司令室から出て行った。

「……………さあ、やりましょうか」

蒼仁が行ったのを確認したカリナは、モニターに向き合いコンソールを操作し始めた。

「アイツ、大丈夫か？」

《気になるのなら、戻ればいいじゃないですか》

「いや……………なんか、「なに、あんた？ 転移ルームに行けっ言っただでしょ。それとも場所を忘れたの？ サル並みの知能ね」とか言われそう……………」

転移ルームに着くと、すでに転移装置に入っている研究員とアドンの姿があった。

「……………カリナはどうした？……………」

「ちょっと時間稼ぎするとさ」

「……………そうか……………」

アドンはそう言いつと転移装置から出る。

「お、おい。どこ行くんだよ」

「……………少しな……………」
お前は早く入っている」

アドンは蒼仁の首根っこを掴みを転移装置に入れると、転移ルームから出て行った。

「カリナのところに行ったのか？」

「たぶんな、あの人にとってカリナは自分の娘何だろうな……………」

「え？あの2人、親子じゃねえの？」

蒼仁がそう言うと、研究員を首を横に振る。

「違う。」

カリナの両親はアカナシムに殺されたんだ。
アドンさんはカリナの父親の友人でな、身寄りのないカリナを引き取ったんだ」

「……………そう、なんだ……………」

蒼仁はしばらく考え込むと、何かを決めたように頷き、転移装置から出た。

「お、おい！どこに行くきなんだ！？」

「俺もカリナのところに行ってくる！！」

蒼仁は何かを言う研究員を無視し、転移ルームから出て、カリナのいる司令室に向かう。

B-1フロア

ブレイドは大剣を床に突き刺し、指一本だけでその上に乗っかっていた。

「ああ？何もこねえじゃねえか。

わざわざ、来てやったのによお」「フン、我々を恐れて逃げたか。

……………それより」

ヴァントは腕を組み、仮面の少年を睨んだ。

「貴様が何故、それを扱えるのかが知りたいものだ。」「リユー」

……………」

リユーと呼ばれた仮面の少年は何も言わず、上を見て持っていた槍を構えた。

ブレイドはリユーの視線の先を見ると、嬉しそうに立ち上がり、剣を引き抜いた。

「やつあああああつと、お出ましかあつ……！」

ブレイドの視線の先には、武装された人型のロボットが赤く目を光らせていた。

《排除、排除、排除》

機械音と金属音がフロア中に響き、ロボットは銃を構えながらブレイド達に近づく。「排除されるのは、貴様等だ!!」

ヴァントは、ロボットの大群に詰め寄り、先頭の3体を素手で吹き飛ばした。

「……………」

リユーは何も言わず、瞬時にロボットの前に現れ、槍を突き刺す。突き刺されたロボットは、刺された部分から徐々に凍りつき、最後には砕けて散った。

「先駆けすんじゃえ!!ヴァント!!リユー!!」

ブレイドはそう叫びながら、ロボットの大群に上から突っ込み、数体を斬り刻んだ。

「クハハハハハ!!さあ、ショータイムの始まりだあ!!」

ブレイドの叫びはフロア中に響き、入り口に隠れているカリナは耳をふさいだ。

「まったく、うるさすぎよ」

カリナの手には銃があり、出るタイミングを見極めていた。

銃がカタカタと震える、いやカリナ自身が恐怖で体を震わせていた

「恐いんじゃない……これは……そうよ武者震いよ……」

カリナは自分に言い聞かせるように言った。

「まだ……まだよ……まだまだね……まだまだまだね……ま……」

「………恐いのならば……行かなくともいいぞ……」

「何、言ってるのよ。」

私がここで頑張らないと、リーダーとして示しが………って、アドン！」

カリナは振り向くと、自分の後ろで腕を組み、睨んでくるアドンを見つけた。

「………カリナは逃げる……お前の手が終えるような相手じゃない………」

カリナの肩を掴むと、アドンは転移ルームに戻ろうとしたが

「何よ！バカにしないで！私だって！」

カリナはアドンを振り切り、B-1フロアへと入っていった。

「戻れ……！！カリナ！！」

アドンもカリナの後を追ってフロアに入った。

「カリナ！アドン………って、あれ？」

司令室に着いた蒼仁だが、カリナとアドンの姿が無かった。

「あいつ等、どこだ………」

《マスター！モニターを見てください！》

蒼仁はレディアントの言われた通りにモニターを見ると、各フロアの映像が映し出されていた。

「……………なんかあるか？」

《B-1フロアを見てください！！》

蒼仁はめんどくさそうにB-1フロアの映像を探した。

「えっと………B-1、B-1って、確かブレイドが侵入した………あった………って、カリナ、アドン！？」

B-1フロアの映像には、ブレイド達と闘う2人の姿があった。

「なんで、あんな所に………」

《カリナの言っていた時間稼ぎとは、この事でしょう》

「アント！B-1フロアってどこだ！？」

《この真下です》

「よし、アントいけるか？」

《いつでも》

レディアントの返事に蒼仁は微笑む。

「レディアント、セットアップ!!」

《ALL right, my master》

レディアントから銀色の光が溢れ、蒼仁を包み込む。
そして、光から現れた蒼仁は自分の姿に驚いた。

「あれ？何か、変わってるし!？」

中世の騎士のような鎧から、動きやすくするため、最低限の防備が
された銀と白を強調したバリアジャケットに変わっていた。

《カリナが、あなたの戦闘の映像を見て考案したモデルですよ。あ
と、私自身も変わりました》

蒼仁はバリアジャケットからレディアントに目を移すと、確かに変
わって、銃のリボルバーのようなものが付いていた。

《性能と追加オプションは行きながら、説明します……………後で、カ
リナに感謝しないといけませんね》

「……………そうだな。」

とりあえず!!カリナ達を助けにいくぜ!!」

蒼仁はレディアントの矛先を床に向け、魔力を収縮し始めた。

「うお！？やべえ、使いやすくなってる。

これだったら……………！！

プロミネンス・バスター！！」

収縮を終えた朱い魔力の塊を一気に放った。

Bー1フロア

「くううっ！！」

カリナは壁に吹き飛び、小さなクレーターができた。

「カリナ！！」

「余所見するとは、随分と余裕だな……………」

「っ！！」

アドンはヴァントの振り下ろされた拳を、防御魔法で防ぐがすぐに破られた。

「かあっ！！」

ヴァントは拳の勢いを止めず、そのままアドンを殴り飛ばした。

こんなはずじゃあ……………

カリナは後悔し、そして自分の無力さを恨んだ。

「……カリナ……お前は転移ルームで、蒼仁を連れて逃げる……」

アドンはそう言って立ち上がり、手の杖型デバイスを持ち直す。

「何、言って……」

「……このままでは、共倒れだ……だから……」

「嫌よ……」

カリナは顔を伏せて、アドンの服の裾を掴む。

「もう、1人は嫌よ……1人にしないでよ……」

カリナは嗚咽の混じった声で言うと、アドンはカリナの頭を優しく撫でた。

「……大丈夫だ。」

「……お前には、蒼仁がいる……」

「……アイツは、絶対に逃げ出す……」。

自身の運命を知ったら……」

誰も同じ……逃げ出す……」。

「……大丈夫だ。」

お前と蒼仁は……どこか似ている……」

「?それって、ど……」

「お喋りはそれまでだ………死ね」

ヴァントは拳に風を纏わせ、カリナに向かって走り出した。

「いけ!!カリナア!!」

アドンはカリナを庇うように、前に出て両手を広げる。

「い、嫌あああああつ!!」

また、失ってしまう

目の前で

カリナは両手で目を覆った、その時

ゴオオオオオオ!!

轟音と共に天井から朱い砲撃がヴァントを飲み込んだ。

「があああああつ!?!」

ヴァントは何が起こったのか、わからないまま
苦痛に叫んだ。

「な、なに!?!」

カリナは天井に開いた穴を見ていると、1つの影が落ちてきた。
そして、最近、聞き慣れた

少年の声が聞こえた。

「オマケだ!!コイツも、貰っとけ!!」

砲撃の直撃に膝をついたヴァントにこれでもかと言つくらいに、朱い魔力弾が降り注ぐ。

「あ、あんた……………」

カリナは驚きで目を見開くと、少年はこちらを向き、笑つてこつ言つた。

「よー!ツンツンデレ!」

心が、少し和らいだ……………。

少女は初めて、そんな感覚を覚えた

第11話：アカナシムの襲来 後編

機動六課 屋上

シャマルはアラームが鳴ると同時にはやてから念話がきていた。

『シャマル、屋上に来てくれへんか！？ザフィーラが！！』

屋上に着いたシャマルは、空を飛び交う黒い物体を見た。
数は百を優に越している。

「シャマル！こっちや！！」

はやての声の方に振り向いたシャマルは目を見開いた。

「ザフィーラ！？」

至る所に傷を負い、ぐったりとして動かないザフィーラがいた。

「どうしたんですか、ザフィーラ！？」

「アラームが鳴った時、外でザフィーラが1人闘ったんです。
それで……………」

リンは悲しい顔をしながら言った。

「あの黒い物体は……」

「わからへん。」

でも、こっちに敵意を向けてるのは確かや」

はやてとシャマルが話していると、黒い物体が2人目掛けて向かってきた。

「はやてちゃん、危ない!!」

セツトアップするには遅いと思ったシャマルは、はやてを庇うように抱える。

その時、黒い物体に数発の魔力弾が撃ち込まれた。

「え?」

シャマルは何が起こったのかわからずに、辺りを見回すと空に飛ぶ十梧の姿があった。

「こら、十梧!!もうちょい遅かったら、シャマルがケガしてたかもしれないやろうが!!」

「うるさい!!こつちも、手がいっぱい、いっぱいなんだ!!」十梧はそう言いながら、不規則に動く黒い物体を避けつつ、魔力弾を撃ち込む。

「私と十梧がああ黒い奴らを相手をしてる隙に、ザフィーラを頼むで!!」

はやてはそう言うのと、自身のデバイス、シュベルトクロイツを取り

出した。

「わかりました！」

シヤマルはザフィーラを魔法で浮かすと、医務室へと戻ってゆく。

「なのはちゃんもフェイトちゃんもシグナム達も、ほとんどのメンバーが本局に行ってるって時やのに！
行くで、リインー！！」

「はいですー！！」

セットアップしたはやては愚痴を言いながらも、黒い物体に向かって飛んでいった。管理局本部

空に蠢く、無数の黒い物体に戦闘できる局員は本部とクラナガンの防衛をしていた。その中には、なのはとヴィータの姿もあった。

「デイバイン……バスターー！！」

「ラテーケン、ハンマーー！！」

2人の放った攻撃は100以上の黒い物体を倒したが、それでも溢れるように現れる。

「……………まったく、何なんだよー！！こいつらー！！」

「わからない。

でも、ここで諦めちゃ街の人達が……」

「わかってるけどよ……。」

ああー！なんでこんな時にアイツがいないんだ……よ！！」

ヴィータは向かってくる黒い物体を、アイゼンを振り、彼方へと吹き飛ばした。

「……早く、来て……刹那君……」

祈るように呟いたなのは、レイジングハートを握り直すと、黒い物体の大群に向かって数え切れないほどの魔力弾を放った。

「間に合ったばいな」

蒼仁はレディアントを肩に乗せながら、辺りを見る。

そして、カリナの方に歩き出す。

「な、何しにきたのよ……」

「ん？お礼しに来ただけだよ。」

レディアントとバリアジャケットの改良
ありがとな」

蒼仁は笑いながら、そう言った。

「それだけで来たの？」

そんなの、私があんたを利用するためにやったのに？」

カリナは目の前に悠然と立つ蒼仁に冷たい口調子で言った。

「まあ、確かにそうだな。
でもな、もう1つあるんだよ」

「……………なによ」

「それはな……………」

ドオオオンツー！

後ろを振り向くと、床に落ちた天井の瓦礫が空を飛び、その下に片目で蒼仁を睨むヴァントの姿があった。

「アイツ等をどうにかしてから話す！」

蒼仁は笑いながら言うと、ヴァント達に向き合う。

「……………あいつが雨井 蒼仁か？」

「そうだがあ……………クハハハハ！
無様だなあ、ヴァントオ〜！」

瓦礫によって擦り傷だらけになったヴァントを、ブレイドは嘲る。
そんな2人をよそに、リユーは槍を構え、蒼仁に向かって走り出した。

「……………」

間合いに入ったリユーは蒼仁に向かって突きを放つ。

「蒼仁！槍に触れるな！！」アドンの言葉に蒼仁は後ろに飛び退き、突きを避けたが、攻撃はそれで止まず

リユーの2度目の突きはバリアジャケットの肩辺りを掠めた。

「つつっ!?!」

蒼仁は肩に目をやると、掠れた個所から徐々に凍りついていた。

「つぶねえな!!離れろや!!」

蒼仁はがら空きとなったリユーの脇腹に、レディアントを叩き込む。

「オマケだ!

カートリッジ・ロード!!」

《cartridge load!!》

蒼仁が司令室から、B-1フロアに来る時にレディアントから説明を受けた

追加オプションその1

「カートリッジ・システム」

「プロミネンス・バスター!!」

ほぼゼロ距離の砲撃はリユーを飲み込み、ブレードとヴァントに向かって突き進んでゆく。

「ブレイド……………」

「クハハハハッ！！衝波旋空砲オ！！」

ブレイドの大剣から放たれた衝撃波は、蜷局を巻いてプロミネンス・バスターとぶつかり合い、相殺した。

そして、ブレイドが蒼仁目掛けて突っ込み、大剣を振り下ろす。

キーン

蒼仁は振り下ろされた大剣をレディアントで防ぐ。

「また、会ったなあ！！蒼仁！！」

「俺は会いたくなかったね！！」

蒼仁はブレイドの腹を蹴り、蹴った反動で空に飛び、魔力弾を形成した。

「プロミネンス・ショット」数十の朱い魔力弾はブレイドに向かって放たれた。

「クハハハハハハハッ！！」

ブレイドは狂ったように笑い、大剣から生じた衝撃波を飛ばした。衝撃波は向かいくる魔力弾を打ち消し、止まらずに蒼仁の左足を掠めた。

「くっ！！」

蒼仁は左足から出る血を見て顔をしかめた。

《マスター!!》

「オールオツケェだ!!」

床に着いた蒼仁は、右から槍を突き出し突っ込むリユアの攻撃を防御魔法で防ぐが、防御魔法ですら凍り始めた。

「まじっ!?!」

《マスター、左!!》

レディアントの言葉に左を向くが遅く、ヴァントの拳が肋に直撃し吹き飛んだ。

「ぐがあっ!?!」

吹き飛んだ蒼仁は柱を貫き、壁にめり込んだ。

「蒼仁!!」

カリナが駆け出そうとすると、アドンが肩を掴み引き止めた。

「何するの!?!」

「……………ここにいろ。」

そして、見極める……………」

アドンはそう言って蒼仁の方を見る。

「いってえな……………」

砂煙が舞う中、蒼仁は壁から抜け出した。

《3対1。分が悪いですね》

「うーん、パワーアップしたから、イケると思ったんだけどな」

《BDSを使いますか?》

「それって、確か……………」

「フン、つまらんな」

ヴァントは拳を突き出したまま、蒼仁が吹き飛んだ方を見た。

「おい、回収するぞ」

ヴァントが蒼仁に向かって歩き出そうとした瞬間。

砂煙の中から朱い砲撃がヴァントに向かって放たれた。

「なに!?!」

ヴァントはいきなりの事に反応できず、なす術なく砲撃に直撃した。

砂煙は砲撃により晴れ、レディアントを構えた蒼仁の姿が見えた。

「アントー！行くぞー！」

《a i l r i g h t ! ! B o o s t D r i v e S y s t e m
S t r t i n g ! ! 》

蒼仁の足下に白銀に輝く魔法陣が現れた。

「クハハハハハハハ！」

ブレイドは蒼仁頭上で飛び、持っている大剣を投げつけた。

《D r i v e ! 》

「だりゃあつー！」

蒼仁は落ちてくるブレイドの大剣をレディアントを野球のようにスイングし、打ち返した。

「……………」

蒼仁が体勢を崩したのを見たリユーは槍を構えて走り出す。

「ガキがあー！」

先程の砲撃で壁に打ち付けられたヴァントも、リユーと反対の位置から走り出した。

「アント!!!」

《わかっていきます!!》

T a r g e t R o c k o n!!!》

蒼仁の両脇にリユーとヴァントに面を向けた魔法陣が現れ、銀色の魔力を収縮し始めた。

「同時撃ちだ!!!」

《D o u b l e b r e a k!!!》

魔法陣から銀色の砲撃がヴァント、リユーに向かって放たれた。

「クハハハハ!!!」

「やっぱり、お前はおもしろいなあ!!!」

打ち返された大剣を手を取ったブレイドは天井を蹴り、勢いをつけて蒼仁に向かって斬りかかる。

「私達がいるのを忘れないでね!!!」

その声ブレイドが振り返ると、銃を構えたカリナが引き金を引いた。

「ちいつ!!!」

ブレイドは撃ち出された銃弾を大剣で斬った。

「今よ！！蒼仁！！」

「おうよ！！アント、カートリッジロード！！」

《はい！！》

レディアントから4つの葉莢が落ち、矛先に銀色の魔力が収縮され、今までの数倍の大きさの塊ができた。

「くらえ！！」そして、レディアントから放たれた銀色の砲撃はブレイドを飲み込んで天井を突き抜けた。

叶恵は肌に当たる強い風に目を覚まし、辺りを見渡すと目を見開いた。

「ここは……どこだ？」

そこは機動六課の医務室ではなく、見知らぬビルの屋上隣には眠っている鷺祐と唯華がいた。

「鷺祐、唯華！起きるのだ！！」

「しばらくは起きないよ。」

「そつゆう魔法だからね」

聞こえた声に後ろを振り向くと、仮面で顔を隠す男がいた。

「昔、教えたはずなんだけど……忘れちゃった？」

「お前は誰だ？」
少なくとも仮面で顔を隠して、親しくなった者はいないはずだが…
…」

「なんだい？その口調。」

「ああ、あお坊のせいかな？」

あお坊

昔、「あの人」が蒼仁を呼ぶときに使っている呼び方

「なぜ、蒼仁を知っている!？」

それに、その呼び方は……………」

「ああ……………」「僕が」使ってたからね……………」

叶恵は男の言葉に表情が凍りつく。

有り得ない

あの人はある日に

あの全てを失ったあの日に

混乱する叶恵をよそに男は仮面をはずし始めた。

「久しぶりだね……………叶恵……………」

仮面の下の顔を見た瞬間、叶恵の頬に一筋の涙が流れた。

「………兄さん」

仮面に隠れていた顔は

病院の火事で死んだはずの叶恵の兄

妃山 真武^{シンブ}だった

第12話：剣帝、ここに現る

「ちいつ！…何体、いやがんだ！！コイツ等！！」

「倒しても、倒しても、キリがあらへん！！」

機動六課隊舎、上空

全身に傷を負いながらも、黒い物体と闘う十梧とリインとユニゾンしたはやてがいた。

「流石にリミッター付けてるとキツいな」

十梧も機動六課に入る直前にリミッターをかけ、スリーランクダウンでAランクになっていた。

「文句言つとる場合やないで！！」

『はやてちゃん！！大変です！！』

『何や？シャルル』

『叶恵達が……消えました！！』

「何やって！？」

シャルルの衝撃的な報告にはやては驚いて声を出してしまつ。

「何だ？はやて。」

そんな大きな声出して」

「叶恵達が医務室から消えたんや」

「何だと!？」

『それで?なんか、分かったことあるか?』

『魔力の痕跡が見られるので、恐らく転移魔法で……。今ならまだ逆探知して、場所を割り出す事ができます』

『なら、頼むで』

はやてはそう言ってシャマルとの念話を切った。

「叶恵達が消えたってどういう事だ!？」

「何者かによって転移魔法で連れてかれたらしいんや。今、シャマルが逆探知してるところや」

「クソ!!何が起きているんだ!!」

十梧は悪態つき、怒りに顔が強張る。

「わからへん事を考えてもじゃあない。今は、ここを守る事が先決や!!」

「……その通りだな」

はやての言葉に共感した十梧は、迫り来る黒い物体にジャッジー
グルの銃口を向ける。

「早く終わらせて、助けにいくぞ!!」

「んな事、わかっとなるわ!!」

黒い物体と武装した局員が飛び交う空の下

転移魔法によってビルの屋上に来た、叶恵は、目の前に立つ青年の
存在を信じられずにいた。

今まで死んだと思っていた人間が目の前で立っているのだ。

あの日、業火の中で失った家族が目の前で優しく笑っている。

「兄……………さん……………」

叶恵は一步、また一步、と兄、真武に歩み寄る。

「叶恵……………」

真武は両手を広げ、叶恵を待ち受ける。

「兄さん!!」

そして、叶恵は真武の胸に飛び込もうと足に力を入れた、その瞬間

ドオオオオオンッ！！

大きな音と共に、ビルの真横に銀色の砲撃の柱が現れた。

「これは……………」

「よお……………真武。

楽しんでるかあ？」

叶恵は横を見ると柵に乗っている、大剣を持った修道士を見つけた。

「な！？おまえは……………」

「ブレイド……………邪魔しないでくれ。
感動的な再会が台無しじゃないか」

「俺に言つなよ……………」。

文句を言つならあ……………あのガキに言つんだなあ」

ブレイドは不気味な笑みを浮かべながら、銀色の砲撃が開けた穴の
下を指差す。

「はあ……………とことん、邪魔をしたがるな。

彼は……………」

叶恵は体を震わせ、その場に力なく座り込んだ。
真武から伝わる殺気に体が動かせないのだ。

「でも、もう邪魔はさせない……………」。
さあ、行こう叶恵。

誰も僕らを否定しない所へ」真武は殺気を抑えると、微笑みながら
叶恵に手を差し出す。

「……………」

叶恵がその手を取ろうとしたその時、頭の中が何かに押しつぶされるような痛みに襲われた。

「くうっ……………！頭……………が！」

頭を押さえ、叶恵は痛みに顔を歪ませた。

「大丈夫かい？」

真武が心配そうに叶恵に触れようとしたが、その手は払いのけられてしまった。

「か、叶恵？」

真武も驚いたが叶恵も驚いていた。

なぜ、今、この手を拒んだのだ？

勝手に動いた手を見つめながら、叶恵はヒドくなる痛みに耐える。

「叶恵……………また、僕を否定するのかい？」

あの日のように……………」

「あの……………日…?」

叶恵の反応に真武は眉をひそめる。

「覚えてないのかい?あの日の事を……………」

「あの日とは……………病院で火事があった時の事か?……………あの日に兄さんは……………死んだはずだと蒼仁が……………」

「死んだ?僕が?」

しばらく考える真武だが、何かに気付いたように笑みをこぼした。

「そうか……………彼が、か。」

面白い事になったじゃないか!」

「兄……………さん?」

「叶恵……………君には真実を伝えよう……………」

真武はそう言つと叶恵の耳元で話し出した。

そして、聞かされた叶恵は、その真実に目を見開いた。

「嘘……………だ」「人形さんは泣きつきましたん

人形さんは怒つりつません

人形さんは笑ついつません」

顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔顔
顔顔顔………

マントに隠されていた少女の体には、夥しい数の小さな顔が苦痛の表情を浮かべていた。

「……………何者なんだ」

レヴァンティを構えなおしたシグナムは、剣先を少女に向けて問う。

「私は……………負を代行する者……………」。

お姉さんも私と一緒に苦しも？」

負を代行する者と名乗る少女が両手を上げると、両の掌から2体の黒い物体が生み出され、シグナムに向かっていく。

「はあああっ！！！」

レヴァンティンで横に一閃、黒い物体は2体とも真つ二つに斬れた。

だが、少女の掌からは次々と黒い物体が生まれ、その数は100を超えた。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

《expression》

レヴァンティンから1つの薬莢が落ち、刀身にいくつもの節に分かれ、シュランゲホルムと化した。

「飛竜一閃!!」

炎を纏った連結刃は、辺りの黒い物体を次々に斬りつけてゆく。

「油断……………しすぎだよ」

シグナムは、瞬時に自分の懐に入った少女の蹴りを防ぐ術なく、吹き飛ばされた。

「うあああああつ!!」

吹き飛ばされたシグナムは飛行魔法で、ビルとの衝突は間のがれた。

「つつ……………肋骨を何本か、折ったな……………」

シグナムは肋を押さえながら、レヴァンティンを少女に向ける。

「痛い?……………でもね、私と一緒になれば痛さなんて無くなるよ……………」

少女は黒い物体を周りに従わせながら、ゆっくりと空をあるく。

そして、シグナムの目の前まで来た少女は黒い障気を纏わせた右手を上げる。

「ようこそ……………私達の世界へ」

時空管理局本部

上空

戦闘が始まってから1時間半
局員の半分が黒い物体に落とされている中、なのはとヴィータは闘
っていた。

「はぁ……………はぁ……………クソ！！全然、減らねえ！！」

3体の黒い物体をグラーフアイゼンで吹き飛ばし、ヴィータは悪態
つく。

1時間半も闘っているにも関わらず、黒い物体は減らず、むしろ増
えていた。

「でも、諦めるわけにはいかないよ！！アクセル！！」

《accel shooter》

桃色の魔力弾は数十体の黒い物体を撃ち抜く。

「わっお！まさに無尽蔵の体力だNE！！」

「誰！！」

「MEはここだYO！！」

なのはとヴィータは上を見ると、体を逆さにして宙に浮いて、ここ
らを見ている無精髭の男を見つけた。

「お前は誰だ！！」

ヴィータはグラーフアイゼンを構えて言った。

「ME?MEは「アパ」とCALLしてくれYO」

「コイツ等を動かしてるのはお前か!」

「NO!NO!MEじゃないよYO!でも、CONTROLして
いる人のFRIENDだけどNE」

アパと名乗る男はそう言うと、右手を突き出し親指を立てる。

「だったら拘束させてもらいます!」

「まあ、そんな事、SAYしなくていいからさ……」

アパは姿を消したと思った次の瞬間、なのはの後ろにいた。

「な!?!」

「気付くのがSLOWLだYO」

アパはなのはの背中を蹴り飛ばした。

「うあああああつ!」

「なのはあ!」

ヴィータはなのはに手を伸ばしたが、間に合わずなのははビルに突
っ込んでいった。

「うーん、つまらないZE!KILLしよつと」

アパは気軽に言うと、なのはが吹き飛んだビルを見た。

「てめえーっ!!」

怒りに身を任せ、ヴィータはグラーフアイゼンを構えてアパに向かった。

「ギガントハンマー!!」

「OH」

ギガントフォームになったグラーフアイゼンを力の限り振り下ろしたが、アパはそれを片手で受け止めた。

「なっ!?!」

「リミッターが付いてるって話だし、powerはこれぐらいだよ……NE!!」

アパはグラーフアイゼンを力で押し戻し、体勢を崩したヴィータの目前に立つ。

「Death・デコピン!」

額に軽いデコピンをが当たり、ヴィータは最初は何をやっているんだ?と思ったが、次の瞬間額から全身に激しい痛みが周り始めた。

「がはぁっ!?!」

ヴィータは大量の吐血をし、地に落ちてゆく。

「さーあのredゴスロリのカキもKiieeeした事だし、mainのwhiteでも……」

「スターライト……」

「ん？」

「ブレイカーツ!!」

ビルの中で輝く何かに気付いたと同時に桃色の砲撃がアパを飲み込んだ。

「おりよりよりよ〜!?油断……」

「1つ教えてやる……」

ドガッ

グラーフアイゼンがアパの肋にめり込む

「私は……」

グラーフアイゼンが肋にめり込み、アパの体が横に九の字になる

「大人だぁーっ!!」

ヴィータはグラーフアイゼンを振り切り、アパを吹き飛ばした。

『ヴィータちゃん、大丈夫？』

『ああ……体中、いてえけどな……』

『そう……それより、あの男は？』

『ここにいるYO』

念話に入ってきた、第三者の声に、なのはとヴィータは自分の周りを気を配る。すると、なのはのいるビルの天井が壊れ、頭から血を流すアパが現れた。

「ここでした〜!」

アパは嘲るように言って、なのはを蹴り飛ばす。

「きゃあっ!」

「可愛いvoiceのshoutだね」

なのはは立ち上がろうとするが、今までの疲れがピークに達したのか、足に力が入らない。

そんななのはの様子を見てアパは、ニヤニヤしながら振り上げた掌に魔力の塊を形成する。

「もっと、もっと、repeatして・YO!」

アパは魔力の塊をなのに向けて飛ばした。

ドオオオオオオン

魔力の塊を放った後、アパはすぐさま、すべて崩れるビルから脱出した。

「危ない、危ない。」

もうちょっとで、あの女一緒にpressされるところだったYO」

「あの女とは、なのはの事か？」

ザシュッ

声が聞こえたと同時にアパの肩から、血が飛び散る。

「Ouch!!誰だYO!!MEの肩をsliceしたのは!!」

「俺だよ」

崩壊したビル付近に舞う砂煙の中
揺らめく人影があった。

「YOUか!!YOUだな!!許さないZO!!」

アパはそう言うと、右手を上げた

シュンッ

何かが風を斬る音がした

「……………あれ？」

アパは右手首から上の感覚がないのに気付き、自分の右手を見るが、そこには手はなく、吹き出す血の柱があった。

「あがあああああつ！？」

アパは遅くきた激痛に顔を歪め、苦痛な叫び声をあげる。

「ちいいいつ！！YOUは誰だあああ！！」

アパは砂煙に揺らめく人影を睨んだ。

砂煙は徐々に晴れ、中から

気絶したなのはを背負い、片手に銃剣を持った青年の姿があった。

「俺は、空牙^{クウガ} 刹那^{セツナ}……………通りすがりのしがない魔導士さ」

刹那はそう言って、背負っていたなのはを優しく地面に寝かせる。

「俺のお姫様に手を出したんだ……………五体満足でいれると思うな……………」
刹那は怒りをあらわにアパを睨み、剣先を向けた。

劍帝、ここに現る。

第13話：旅立つ少年、踏み入れる少女 前編

時空管理局近隣のビル街

アパは斬られた手の断片から吹き出る血を押さえながら、剣先をこちらに向ける青年を睨んだ後、狂ったように笑い出した。

「HA：HAHA……：HAHAHAHAHAHA！！wonderful！！wonderfulだよ！！

THE SWORD EMPERORこと空牙刹那！！」

アパは笑いながら、左手に魔力を集中させる。

魔力は渦巻き、小さな竜巻となる。

「YOUとはやってみたかったんだYO！！そこにいる女はつまらなかつたしNE！！」

アパは左手を突き出し、刹那に向かって突っ込んだ。
常人では見切れない速さ、だが

刹那はそれを紙一重に避ける。

「……………ヴァル。デュアルブレード……………」

《YES, my lord.

form1mode2、dual blade》

刹那のデバイス「ヴァルネラビリティー」の1mはある銃身に付けられていた刃は中に収納され、グリップは垂直に立つ。

「……1つ教えてやる」

刹那はヴアルの銃身を日本刀のように持ち、目をつむって居合いの構えをとる。

「なのはは、つまらなくなどない……」

背後から迫るアパ

刹那は右足を軸に回り、後ろを向いて目を開く。

「俺にとっては最高の女だ!!」

ザンツ

ヴアルの銃身から引き抜かれたのはリボルバー型のカートリッジが搭載された日本刀

過ぎゆくアパの右肩は斬り飛ばされ、有無言わずに倒れた。

「お前に技を使うのが勿体ない……」

刹那は鞘となった銃身に日本刀をしまい静かに言った。

「おい!!刹那」

名を呼ばれた刹那は上を見ると、ヴィータがこちらに向かって飛ん

できた。

「お前、遅いんだよ!!今までどこほつき歩いてたんだよ!?!」

「悪いな。なかなか手強いもんでな」

刹那はそう言って空を見上げる。

「あいつらか……………」

ヴィータは忌々しそうに空を飛ぶ、黒い物体を見る。

「それよりも、なのはだ。目を覚ましそうにないし、背負って行くしか……………」

「悪いがあ、させないぜえ」

刹那は後ろから迫る気配に、回転しながら抜刀。

ギーン!!

剣と剣のぶつかり合う音が辺りに響き火花が散る。

「空牙刹那と見受けたがあ……………間違いはないなあ?」

「そうだが?」

刹那がそう答えると、男は口角を釣り上げて笑う。

その笑みから感じられた殺気に、刹那は男の剣を弾き、後ろに下がった。

「ヴィータ、なのはを連れてここから離れる……」

「なに、言っただけやがる!!」

私もたたか……」

「リミッターが付いてる状態のお前じゃ無理だ……。それになのはを早く手当しないといけない……。……。わかってくれ」ヴィータは何か言い返す言葉を探すが、刹那の言っている事は的を射ており、黙ってその言葉に従う事にした。

「わかった……。死ぬなよ……」

「大丈夫だ……。死ねば、なのはが悲しむからな」

ヴィータはなのはを肩を抱え、機動六課に向かって飛んでいった。

「さて……。待たせたな」

「いいいや、待つのは得意だからなあ。
でも……」

男は大剣を高々と上げると刀身に衝撃波が渦巻く。

「動き出したらあ……。ちょっとやさつとじゃああ、止まらないぜえ
？」

「生憎、俺もなんだ……」

刹那はヴァルに魔力を纏わせる

それを見た男は嬉しそうに笑う。

「クハハハハハッ！！

そりゃああ、いい！！

さあ、始めようじゃねえかあ！！」

互いに自身の武器を構え、鋭い眼光がぶつかりあう。

「我は剣帝……………」。

銃という名の剣を持って銃弾という刃を振るいし者……………」

「俺はあ、ただ求めるだけだ……………闘いを！！血を！！強さを！！
修羅の道を行く者だあ！！」

2人はほぼ同時に地を蹴り、一瞬にして刃と刃がぶつかり合う！！

「空牙刹那！！またの名を剣帝刹那！！」

「修羅道のブレイド！！」

力と力がぶつかった時の余波は、辺りのビルを全壊にさせた。

機動六課

空を浮遊する1つの物体

それは、決まった形はなく常に變形し、その色は夜よりも深い黒

バンッ

乾いた音が聞こえたと同時に黒い物体に魔力弾が撃ち込まれた。

「はあ……………はあ……………コイツで最後か……………」

ジャッジーグルを持った右手を下げ、膝をつける十梧

「やっとかいな……………」

十梧の隣で杖を支えに立っていたはやてが崩れ落ちる。

「逆探知はまだなのか？」

「ちよい待ちや」

はやてはそう言つとシャマルに念話を繋げる。

『シャマル、逆探知はまだか？』

『……………ちようど今、終わりました！』

場所はクラールヴィントを通じて送りますね』

クラールヴィントから送られたのは、クラナガン全体の地図

『赤い点がつけてある所にいると思われまます』

『ありがとな、シャマル。』

それで、ザフィーラの容態は？』

『大丈夫ですよ。』

ヴォルケンリッターの名は伊達じゃありませんよ。

それよりも早く叶恵達の救出を！』

『了解や!!!』

はやてはシャマルとの念話を終えると、十梧に送られてきた地図を見せた。

「叶恵達はこの赤い点の所にいるで」

「わかった。じゃあ……」

「空蔵隊長ー!!!」

十梧の言葉を遮ったのは、遠くから空を飛んでくる女性の声だった。

「誰や、あれ?」

はやては、白いドレスに銀の胸当てに手甲と脚甲を付けたようなバリアジアケットを纏った金髪の女性を見て尋ねる。

「俺の部下だ。タシア!!!コード013を発動したか!?!」

「大丈夫です。」

第1艦「デイスガ」で全艦へのコード通達をしてきましたので。それで、其方の方は?」

タシアは視線を十梧からはやてに向ける。

「私は機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐や」

「あなたが空蔵隊長の言っていた……」。

私は特化戦闘部隊、ラークイン戦闘員
アナスタシア・フォニクス二等空尉です。
タシア、とお呼びください」

タシアは紹介を終えると柔らかく微笑む。

「コイツは機動六課に入る1人だ」「タシア、な。よろしく頼むで」

「いえ、こちらこそです」

はやてとタシアは互いに手を出し、握手をする。

「さあ、急ぐぞー!!」

十悟は叶恵達のもとへ行くため、飛行魔法を使おうとした瞬間
右頬を魔力弾が掠めた。

「残念だけど……今、あなた達を行かせるわけにはいかない……」

魔力弾を放ったのは、隊舎の上に立つ仮面を付けた人
声からして女性である。

「今。ってどう言うわけだ？」

「答えることは出来ません。私はただ、邪魔すると思われる者の排除を任されているだけです」

仮面女性がそう言って取り出したのは、そのか細い腕に釣り合わない程大きいガトリングガン。

「空蔵隊長は先に行ってください。この方は私がお相手します」

タシアは十梧の前に出て、腰に携えていたレイピアを鞘から引き抜いた。

「……………任せた。だが……………」

「「死ぬな」ですよな？」

タシアは十梧のセリフを言い当て、振り返り笑う。

「ああ……………その通りだ」

十梧も一瞬だけ笑い、すぐタシアに背を向け飛んでいった。

「タシアさん、頑張つてな！」

はやても十梧の後を追い飛びだった。

「逃がすわけには……………」

「あなたの相手は私のはずですが？」

十梧とはやてを追いかけようとする仮面の女性にタシアは立ちふさがる。

「ならば、あなたを排除してからにしましょう」「仮面女性はガトリングガンを構え、仮面に空いている穴から感情のない瞳でタシアを捉える。

「エスパダ、いけますか？」

《いつでもOKですよ、お嬢様》

刀身の根元に埋め込まれた宝石が光り、タシアの足元に金色の魔法陣が展開される。

「私は特化戦闘部隊ラークイン戦闘員、アナスタシア・フォニクスです。以後お見知りおきを。あなたは？」

タシアはお辞儀をしながら自己紹介する。

仮面女性はタシアの行動と発言に首を傾げる。

「敵に名乗る必要があるのですか？」

「上流社会では一般常識です」

普通では何を言っているのだ。と言われても仕方ないのだが、仮面女性はガトリングガンを下ろし、コクリと頷いた。

「わかりました。私のコードネームは「グレイ」です」

「グレイさんですか………………。では、いざ尋常に」

タシアが剣先を向けると、仮面女性もガトリングガンを再び持ち上げる。

「……………」
「……………」

しばらく続いたの沈黙を破ったのはグレイ
引き金をひくと、銃口からはコンマ1秒で放たれる魔力弾

辺りは着弾した魔力弾により砂煙がまう

グレイは当たったかは確認しない、倒れていようが死んでいようが、
魔力弾を放ち続ける。

その時

砂煙が四方に散り、体中に金色のオーラを纏い、グレイを見据える
タシアの姿が現れた。

「こちらの番です！」

タシアはエスパダを構え、グレイに向かって駆ける。

「！」

傷1つ無いタシアを見て一瞬、戸惑ったグレイだが、すぐさま銃口
をタシアに向けた
しかし、既に時は遅し
タシアはグレイの懐に入っていた。

「はあっ！」

空を切ったタシアの突きは、グレイの頬を掠める

「っ！」

「逃がしませんわ！」

たじろぐグレイにタシアは容赦なく刺突を繰り返す。

腕、脚、腹、頬、肩、

タシアの攻撃は確実にグレイの体を傷つけてゆく。

「調子に……………」

グレイは自分の左腕をわざと刺させ、余った右手でガトリングガンの銃口をタシアに突きつける。

「っー！」

「のらないでください」

肉を切らせて骨を断つ

その言葉通りがピッタリである

ガトリングガンの引き金が引かれると、先程よりも強い威力の魔力弾が銃口のゼロ距離先にいるタシアに深刻なダメージを与えた……

……………ハズだった。

「離れなさい！！！」

タシアは右回し蹴りでグレイの鳩を狙い、左腕からエスパダを引き抜いた。

「な、なぜ？あの距離で無傷でいるはずが……」

鳩を押さえながら、後ろに下がったグレイは疑問を口にした。

「さあ、何でしょうね」

タシアはグレイの前まで歩くと、エスパダを振り、ガトリングガンを2つに斬った。

「チエツクメイト……」

グレイの首筋にエスパダを添え、静かに自分の勝利を告げた。

クラナガン郊外のビルの一角

叶恵は死んだはずの兄、妃山真武と対峙していた。

嘘だ………

叶恵は自分の兄からの事実を信じられなかった。

だが、否定する事ができない。

なぜなら……

「あの日の火事で真武兄いは死んだ……」

病院の火事から2日後

病室で隣のベッドにいる蒼仁に静かに告げられた。

では、目の前にいる人物は誰なのだ？
そっくりさん？幽霊？ロボット？ドッペルゲンガー？

もし

もし、目の前にいるのが本物の兄で言っている事も事実であつたら
……………蒼仁。
お前は何なんだ？

なぜ、病院に火をつけたんだ！？

少女は真実と虚実の狭間でさ迷う

少年と同じ世界に一歩
近づいた。

第14話：旅立つ少年、踏み入れる少女 後編

ビルが崩れる音

大地が抉れる音

風を切り裂かれる音

「はあああああつ！！」

「がああああつ！！」

振り下ろし、風払い、振り上げ、振り払う
刀と大剣がぶつかり合い火花を散らす。

そして、辺りに放たれた余波は触れる物を破壊する

「蒼天駆牙流……」

高速で乱れ交う剣撃の中、リボンで結んだ後ろ髪を揺らし刹那が繰り出そうとしているのは、空牙家に代々から受け継がれた秘伝の剣術

「駆牙一閃！！」

高速で繰り出された剣はブレイドの頬を切る

「クハハハハハッ！！」

ブレイドは狂ったように笑い、目には子供のような輝きが灯されて

いた。右手で振り上げられた大剣は風を切り、刹那を斬りかかる。

「ふう……………っ」

肺から空気を吐き出し、自身のデバイス、ヴァルを握る手に力を込める。

ガキイイインツ

辺りに響いた金属音と共に、刹那が踏み締めていた地面に10m程のクレーターができる。

「はあっ！…！」

ブレイドを押し返した刹那はヴァルを構える。

「斬撃！…！」

振り払われた刀からは斬撃は飛び、ブレイドに向かってゆく。

「衝波旋空砲お！…！」

大剣の先から放たれた衝撃波の竜巻は、斬撃を打ち破り、真っ直ぐ刹那のいる方に向かって突き進む。だが、既にそこには刹那はいなかった。

「どうした、俺はここだ」声にブレイドが後ろを振り向くと、刀を納刀させ、拳を構える刹那がいた。

「破衝拳！…！」

気を纏った拳はブレイドを大地に叩き込む。
さらに、刹那は抜刀する

「剛破！！斬影撃！！」

先程の斬影撃よりも強力な斬撃がブレイドの腕を切り裂く

「クハハッ！！」

ブレイドは短く笑い、腕から流れ出る血を気にもせず地面を蹴りあげ、刹那に迫り、そのまま鏝迫り合いとなる。

「お前たちの目的はなんだ？」

「目的い？俺は、強い奴と闘えばいい……………それだけだあ！！」
衝撃波を纏った大剣で押し返し、刹那を崩壊しかけるビルに吹き飛ばす。

「終わりって訳ないよなあ……………剣帝さんよお」

刹那が吹き飛んだビルの方を見ながら、ブレイドは笑っていた。

「……………自分達の欲望で人々を傷つけるのか？」

ビルの中から出てきた刹那は衝撃波により全身傷だらけだった。しかし、ブレイドを睨む目には怒りが映されている。

「……………少し本気をださせてもらうぞ。ヴァル」

《yes、my lord。full drive!!》

刹那の足元に山吹の魔法陣が展開され、ヴァルは眩い光に包まれる。

「瞬駆………」

小さく呟かれた技名は、蒼天駆牙流の高速移動術。

シュンッ

風が引き裂かれる音と共に、刹那の姿は消え失せ、次の瞬間にはブレイドの背後に現れる。その手に握られているのは突撃槍

《form3、Ash Blazer!!》

「はあああつ!!」

「ぐがあつ」

刹那はヴァルを振り下ろし、ブレイドを再び地面へと沈める。

「蒼天駆牙流………」

雷の魔力変換資質を纏わせたヴァルの剣先をブレイドに向けて構える。

「クク、クハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

ブレイドは狂ったように笑い出すと同時に、体から溢れ出した魔力を大剣に集中させる。

「落雷牙!!」

青い稲妻と化したヴァルが刹那の手から、ブレイドに向かって放たれる。

「はぁーっ!!」

ブレイドは逃げもせず、落ちてくる稲妻に大剣を振り上げる。

そして

激突!!

大地は余波で砕け
空間は衝撃で悲鳴をあげる

「はぁぁぁぁぁっ!!」

「ハハハハハアッ!!」

ぶつかり合う力と力

だが、2人の限界より、大剣の限界がきてしまった。

ギヤシャンッ

砕かれた大剣に攻撃を防ぐ術はなく、ブレイドは青い光に包まれて

いった。

「ふう……………」

《お疲れ様です》

自分のもとに飛んできたヴァルを手にとった刹那は、空からブレイドの様子を窺う。

《どうしたのですか？貴奴ならば、倒れてしますが…………》

「…………いや、なんでもない」

後ろを向き、この場から去ろうとした瞬間、刹那の腹に衝撃が走る。

「ぐうっ!?!」

その衝撃はブレイドからのものではなかった。

「なあっ!?!」

刹那は驚きに目を見開く

腹を殴りつけたのは手だった
手だけが握り拳をつくり、腹を殴っていたのだ。

「ちいっ!?!離れる!?!」

刹那はすぐさま後ろに下がり、手をヴァルで両断する。

すると、意外な人物の叫び声が辺りに響いた。

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOツッ!!」

HEY、YOU!!何回、Meをslicceすれば気が済むんだY
O!!」

目に涙を溜め、刹那を睨むのは

倒したと思っていたアパであった。

切り落としたはずの右肩は、傷が1つもない状態でアパに付いている。

「油断しすぎだぜえ?剣帝さんよお……」

しまった!

アパに気を取らせすぎたせいか、背後に迫る拳を構えるブレイドの気配を感じられずにいた。

「おらよお!!」

繰り出される拳

しかし

《round shield!!》

間一髪

刹那の背後に展開されたラウンドシールドは、ブレイドの一撃を凌ぐ。

「助かった!!」

《いえ、当然の事です》

刹那は礼を言いながら、フォーム3のヴァルを薙払う。

「ぐがあっ!!」

武器もないブレイドは、両腕を前に出して盾代わりにしたが、鮮血を飛び散らせながら、落ちてゆく。

「はぁ……………はぁ……………次はお前か」

黒い物体の排除

ブレイドとの戦闘

アパの不意打ち

今までの疲労が限界に達しようとしているのか、刹那の息が荒くなる。

「……………ん、いや。」

Me達はここから、escapeするYO……………」

アパはいつの間にか、ブレイドを肩に乗せて、魔法陣を足元に展開していた。

「それじゃあ、またNE!!」

アパの周りに光が溢れてゆく。

「っ!!!!待て!!!!」

刹那の言葉は虚しく響き、アパとブレイドの姿は完全に消えていった。

「ヴァル……………」

《何ですか、ボス》

「何が起きていると思う?」《わかりません。しかし、場合によるとJS事件と同等……………それ以上の何かが、起きようとしているのでは……………》

刹那はヴァルの返答に顔を曇らせ、ボロボロになったクラナガンの街並みを見た。

十梧とはやては叶恵がいると思われる位置に向かう途中、彼方の上に向かって放たれる銀色の砲撃を見た。

「あれは……………」

「ちい!!!!叶恵達、無事でいる!!!!」

十梧は疲労が限界に近い体に鞭をうち、飛行の速度を上げる。

「ちよ、ちよっと待ってや!!!!」

はやても速度を上げ、十梧の後をついて行く。

目的のポイントとされている地点にはビルが立っていた。

「あ！あれ、叶恵達ちゃうか!？」

はやてが指差すビルの屋上に、叶恵と横たわる鷺祐と唯華の姿があった。

心の中でホツとした十梧だが、叶恵に向き合う男を見て、目つきを変えてジャツジイーグルを構える。

「管理局だ!!その子達から離れる!!」

屋上に着いた十梧は銃口を男に向けながら叶恵の前にでる。

「久しぶりですね。十梧さん」

男は柔らかく笑うと、十梧はハッと、記憶の中のある少年の笑みと重り、ジャツジイーグルを下げる。

「真武……………なのか？」

「ええ……………」。

ハハハ、あなたのそんな驚いた顔が見れるなんて」

真武は笑いながらゆっくりと近付いてくる。

その刹那

十梧は体全体で殺気を感じ、ジャツジイーグルを再び真武に向ける。

「お前なのか？叶恵達をここに連れてきたのは」

「はい。真実を教えてあげようと思ひまして」

「真実？」

「……………僕達の目的が達成されましたので
あとは叶恵から聞いてください」

真武は懐から一本の刀を取り出し、ただ、振り払った。

シュンッ

“ただ振り払った” それだけで空間が裂けた。

目の前の光景に十梧とはやては驚嘆する。

「では、さよっ……………」

「待て！！お前らの目的はなんだ！？なぜ、クラナガンを襲った！
！」

裂いた空間に入ろうとした真武は十梧の問いに、淡々と答えた。

「今回の目的はある人物の誘拐。クラナガンを襲ったのは囹ですよ」

「ある人物？」

「冥王。と言えはわかりますよね？」

十梧は何を言っているのかわからない中、はやては顔色を変えて真武を睨む。

「イクスを攫って、何するきや!!」

はやての怒号と共に、魔力を振り絞り、三角の魔法陣を展開する。

「ブラッティードガー!!」

はやての周りに現れた数十の水色の短剣は、一斉に真武に向けて放たれる。

「無駄……………」

1回の撫で斬り

ただそれだけで、数十の短剣が全て消え去った。

「っ!!!化け物か!!」

「化け物……………そうですね。俺は化け物だ」

真武は自分を化け物と呼んで、自身を嘲る。

十梧は眉をひそめる。

「では、今日はこれまでです。さようなら」

十梧に別れを告げると、真武は空間の裂け目に入っていった。

真武が通った後の空間の裂け目は徐々に閉じてゆき、完全に閉じきると、はやてはその場に座り込む。「まさか、相手の目的がイクスやなんて……」

イクスとは誰かとはやてに聞いたかったが、今は叶恵達の方が重要と考えた十梧は、叶恵に話しかける。

「叶恵、大丈夫か？」

「……うぬ、大丈夫だ」

叶恵は気力のない返事をする。

当たり前か、死んだと思っていた家族がいきなり自分の前に現れたのだから。

十梧は叶恵を後にし、鷺祐と唯華の様子を見た。

……呼吸、心拍

どちらも異常がみられなかったので、ホッとする。

「はやて、叶恵を頼む。俺はこの2人を運んでゆく」

「……わかった」

そうして、十梧とはやては3人を抱えて機動六課に向けて空を飛んだ。

「………すげえな」

《すごいスペックですね》

蒼仁はレディアントを肩に乗せながら、自信の砲撃で開けた穴を見上げていた。

あの後、隻眼の男、ヴァントが「今回の第一目的が達成された」と言い、仮面の少年リユーと共に黒いモヤモヤの中に消えていった。

「蒼仁！！行くわよ！！」

「わかってるよ」

カリナの急かす声に従い、蒼仁は転移装置のある部屋に戻ってゆく。

「……………早くしろ」

部屋に着くと、アドンが既に転移装置の中に入っていた。

「そう言えば……………あんた。あの時、何を言っつもりだったのよ？」

「あの時？」

「ほら、アンタが砲撃でBー1フロアに来た時に……………」

「あ……………あれね。あれは……………」

「あ、あれは？」

カリナは何故か高鳴る胸に疑問を抱きながら、蒼仁の返答を待つ。

「今日の飯の焼き魚、塩焼きよりも下ろし大根と醤油で………がへっ！？」

転移する瞬間

蒼仁はカリナに右頬を思いっきり殴られたとさ

これが少年の旅立ち

第15話：失われた騎士の魂

先日の謎の襲撃から一夜明けた今日

十梧は機動六課ではなく、特化戦闘部隊ラークイン、部隊長としてクラナガンを自身の艦の甲板から見ている。

「……………ひどいな」

高々と建っていたビルのほとんどが倒れ、地面はひび割れ、道は瓦礫に埋もれていた。

街のなり果てた姿に眉をひそめながら見ていると、目の前にモニターが現れ、画面にはラークインの隊員が映されていた。

《こちら、調査隊。

施設の調査が終わりました》

「そうか……………それで、どうだった？」

《いえ、幾つかの資料や機材は見つけましたが、これといった物がありません……………。恐らく、逃走時に必要な物だけを持って行ったのかと……………》

「わかった。そこは崩れる危険性があるから、直ちに帰還せよ」

《了解！》

隊員が敬礼をしたところでモニターは消え、十梧は調査隊を向かわせた施設のある方を見た。

地面に開けられた穴から発見された施設は、管理局では確認されないものであり、調べれば襲撃した相手について、何か分かると踏んでいたが、ハズレだったらしい。

「何が起きてるんだ… ったく」

苛立ちを隠せない十梧は頭を荒々しく掻きながら、艦の中へと歩いていった。

部隊長室に向かつて廊下を歩いていると、向こうからタシアが見えた。

「あ、空蔵隊長。ちょうどよかった」タシアも十梧に気づき駆け寄ってくる。

その左手には昨日の闘いでできた傷を覆い隠す包帯。

あの後、絶対有利な状況から敵の増援の介入でグレイに逃げられしまったのだ。

「先ほど、機動六課の八神部隊長から連絡がありました、至急に六課本部に向え、とききましたが………」

「わかった。タシア、あいつ等を連れてきてくれ」

「はい、六課異動組ですわね」

「ああ、頼む」

「了解！」

タシアは敬礼した後、十梧に背を向けて走っていった。

「……………たぬき、大丈夫なのか？」

十梧がポツリと呟いた言葉の意味は、昨日の襲撃後の事をさしていた。

襲撃後

叶恵達を連れていた、十梧とはやては、フェイトのある緊急連絡でミッドチルダ総合病院へと来ていた。

「それにしても、ここは大丈夫だったのか……………」

クラナガンの街の酷い状態に比べ、建物に傷一つも無いどころか、病院周辺に黒い物体の被害の跡が無いのだ。

「それは……………」

「あ、フェイトさんに八神部隊長！」

「本当だ！」

ソファアに座っていた赤毛の少年とピンク色の髪の少女がこちらに気付き、フェイトとはやてを呼びながら駆け寄ってきた。

「おお！エリオにキャロやないか！なんで2人がここに？」

はやては驚きと嬉しさが混じった顔をする。

「グイグイオが入院してるって聞いたので、ミッドに着いて、すぐにお見舞いに向かったんです」

「でも、病院に来る途中にあの黒い物体が現れたんです……」

エリオとキャロの懇切丁寧な説明で大体の事はわかった。

「そして、襲われそうになった病院を守った、か……」

「あの……もしかしたら、特化戦闘部隊ラークインの部隊長の……空蔵十梧二等空佐ですか？」

十梧はエリオの言葉に眉を上げる。

「なんで、俺の事を……」

「いや、ある雑誌で「管理局員、100人に聞いた。上司であってほしい人ランキング！」と言う企画で、あなたが1位だったので……」

「ほお、そんなのが」十梧は興味なさそうにするが、内心はかなり嬉しい気持ちでいっぱいである。

「でも、2人でよく守ったな」

「私達だけじゃありませんよ」

「？」

キャラの言葉にはやては首をもたげる。
すると、病院の奥から歩いてくる2人の女性が見えた。

「スバルにティアナ！あんだ達もいたんか！」

「久しぶりです。はやて部隊長」

オレンジ色のストレート髪の女性、ティアナがはやてに敬礼する。
続いて青色の短髪の女性、スバルは、はやてに敬礼した後、十梧に
向き合う。

「久しぶりですね。十梧さん！」

「ん？おお久しぶりだな」

あっさりした挨拶

まるで前から親しいかのようにだった。

「なんや、十梧。スバル知ってたんか？」

「前に仕事でな。」

それにしても、4人共、大変だったな」

十梧は顔をしかめる

4人のあちこちに包帯とかすり傷が見える。

「いや、もつと頑張ったのは……………」

キャラはそう言って、先ほど座っていたソファーに視線を移す。

「……………スウ……………スウ……………」

寝息が聞こえたので、ゆっくりと近づき、見てみると、3人の少女、アインハルト、リオ、コロナ、が可愛らしい顔で寝ていた。

「コイツ等は？」

「ヴィヴィオの友達や。まさかこの子達も？」

「はい。僕とキャラが来た時には既に闘っていました」「ほお………」

十悟は3人に感歎する。まだ、15にもならない少女達が病院を守ろうとしたのだ。

「話はいいかな？」

フェイトの言葉に本来の目的を思い出す。

「病室は？」

「403号室」

病室を聞き出したはやては、早歩きでエレベーターへ進んでゆく。

「フェイト執務官。

あの話は……………」

「……………本当です」

苦しそうに、そして悔しそうに言ったフェイトの言葉に嘘は無い。
しかし、信じきれなかった。

自分の知る彼女は簡単にやられないと分かっているからだ。

こうしていても始まらない……………

十梧は彼女、シグナムがいる403号室の病室に向かった。

エレベーターで4階に着いた十梧は真っ直ぐ、シグナムのいる病室
へと向かう。

「……………これが」

403号室の前に着いた十梧は、ゆっくりと隣を開ける。

カーテンを閉めているせいか病室は暗かった。

奥のイスに座るはやての姿が見え、その隣にはシグナムが寝ている
と思われるベッド。

十梧ははやての前まで歩きベッドの方を見る。

「……………十梧か」

シグナムの姿に十梧は驚き、目を見開く。

下ろした髪は白く、目から騎士の魂が消え、生気が感じられない。

「シグナム、何があった？」

「……………負けてしまった……………それだけだ」

「誰に？どこでやられた？」「クラナガンのとあるビルだな。小さな女の子だった……………」

次々に出される質問に、シグナムは無感情に言葉を紡ぎ出す。

「疲れてるところ、悪いな」

「いや、大丈夫だ……………」

「ゆっくりと休めよ。行くぞ、はやて」

「……………」

十梧は俯くはやてを立ち上がらせ、病室から出て行った。

さて、病室から出たのはいいが、これからどうすればいいのやら……………

廊下に出た十梧は、シグナムの様子にショックを受けているはやてを見ながら、腕を組んで悩み始めた。

それと同時に、はやてがフラフラと動き出す。

「十梧。ありがとな……………。後は、帰ってええで……………」

そう言ったはやては、エレベーターではなく、階段に向かって歩き出し、上へと登っていった……………。

「あの時、声をかけるべきだったか？」

部隊長室のイスの背もたれに全体重をかけ、空を仰ぎながらポツリと呟くが、すぐに頭を横に振る。

「って、なんで、ためきの心配をしなきゃならんのだ？」

シグナムが死んだわけじゃない。

アイツの事だ。

今日にはケラケラしているに違いない。

そう考えていると、自動ドアが開き、タシアを含めた3人の男女が部屋の前に立っていた。

「失礼します」「」

3人は綺麗に揃った声と敬礼と共に部屋に入ってきた。

「よし、来たか。今から機動六課に向かう」イスから立ち上がった十梧がそう告げると、3人はまた敬礼し、「了解！」と力強く言った。

夜より暗き世界

真武、ブレイド、ヴァント、グレイ、リユール、メドゥ

そして、マントを羽織り、シグナムを倒した謎の少女

計7人がアークの前に立っていた。

「コノ度ノ作戦ハ、非常ニウマクイッタ。ソレモ、才前達ノオカゲ
ダ」

「「「ありがとうございます」」」

アークの言葉に答えたのは、ヴァント、グレイ、メドウの3人。
その他は、そっぽを向いたり、隣の者とはなしている。

「貴様等!!!アーク様の前だぞ!!!少しは慎め!!!」

ヴァントがそう叫ぶと、真武が後ろを向けて歩き出す。

「真武、どこに行くきだ!!!」

「どこでもいいじゃないか。グレイ、行くよ」

「.....はい」真武に呼ばれ、後をついて行くようにグレイも歩いていった。

「待て!!!貴様等!!!」

「ヴァントヨ、モウヨイ」

「ですが.....」

「ヨイ。ト、言ッタガ?」

「……………」

ヴァントはアークな宥められ、黙り込む。

その様子を見たブレイドとマントの少女は、クスクスと笑い始める。

「……………ブレイド、「ミニユス」……………後で、覚悟をしろ」

ヴァントは後ろにいるブレイドとミニユスを睨み、静かに言った。

「はぁ……………あなた方は鬨う事しか脳に無いんですか」

メドウはヴァント達に呆れながら言った後、アークに向き合った。

「冥王はゼランと共に、No.53に送りました。2週間あれば、
データを書き写せるようです」

「ソウカ……………」

心なしか、マントで覆い隠されたアークの顔が、笑みで歪んだよう
な気がした。

第16話：集う機動六課

ミッドチルダ 首都クラナガン

ある程度整備された道路を走る1台の黒いスポーツカー。

運転席に座るのはタシア。助手席には緑色のツンツン頭の男性。後部座席では、船のおもちゃで遊ぶ、山吹色の髪を持つ少女に、顔を青くしてゲロ袋を持つ十梧の姿があった。

「うぶっ……………」

「大丈夫？？空蔵隊長？」

少女は、十梧を気遣いながら頭をなでる。

「だ……だい、ブロooooooooooooッ!..!」

「駄目だコリヤ。ほら、「セン」汚いからこっちに来い」

「は〜い」

助手席に座る男性がそう言うと、センは言われた通りに男性の膝の上に座る。

「「ソルカ」。おま…ヴォooooooooooooッ!..!」

助手席に座るソルカを睨んだが、迫り来る吐き気に持っている袋に口を向ける。

その様子に後ろを向いていたソルカは呆れて、前に向き直る。

「くちやくい」

ソルカの膝の上に座るセンが、鼻をつまみ十梧の放つ異臭を訴える。

「わる…………ゲロロロロロッ!!」

「自重してくださいよ…………。タシア、窓を開けて」

「はい、わかりました」

タシアはドアに付けられている「開閉」と書かれたボタンを押す。

すると、車の屋根が開き、オープンカーへと変形した。

「わあ〜！気持ちいい！」センは立ち上がるうとするが、ソルカに引き止められる。

「タシア、バカ!!」

そっちは屋根の開閉ボタンだ!!早く閉める!!空蔵隊長の情けない姿が見られるだろうが!!」

「わ、す、すみません空蔵隊長!!」

「誰が情けない…………ガロロロロロッ!!」

後々、新聞で

「時空管理局、職員。

走行中のオープンカーでゲ？を吐きまくる！？」
と言う題名で新聞の端に載せられたとか。

機動六課 廊下

「あの……………大丈夫ですか？」

「いや……………問題は……………うぶっ！……………無い」

無事に（？）機動六課に着いた十梧は、タシア達とロビーで別れた後、フェイトに連れられ、会議室に向かっていた。

「すう……………ふう……………」

十梧は廊下に止まり、深く深呼吸をして吐き気を落ち着かせる。

「何やってんねん」

後ろから不意な一声

治まりつつあったものが、またこみ上げてきた。

「うっぷー!!」

両手を口に当て、顔を上に向ける。

こみ上げてきたモノが下がっていくのを確認すると、十梧は後ろを振り向き、そこにいる人物を睨んだ。

「タヌキイ!!もうちょっとで、この床がゲ?だらけになったじゃねえか!!」

「私を知るか!!そんなの!!遅いから見に来てやったのに!!」

……………へっ。なんだ、元気じゃねえか。

はやての様子を見て、十梧はホツとした。

……………って、待て!!

「なぜ、コイツの心配なんかしないといけないんだあつ!!」

両手を頭に、十梧は叫んだ。

通り過ぎる局員達に白い目で見られながら

「私としては、アンタの頭の心配がしたいわ」

はやては呆れながら言うと、十梧達の先を歩いてゆく。

「……………はやて」

フェイトははやての後ろ姿を見ながら、何やら思いつめた顔をする。その様子に十梧は首を傾げるが「まあ、いいか」と思い、はやての

後をついて行った。

会議室

自動ドアが開き、中へと入ると、ズラリと並んだイスに座る機動六課、隊長陣とFWの4人。

「やっと来たか」

待ちくたびれたと感じさせる口調で刹那は十梧を見る。

「会つのは初めてだな。剣帝こと空牙刹那」

十梧はイスに座る刹那の前まで歩き、右手を広げて差し出す。

「特化戦闘部隊ラークイン部隊長、空蔵十梧だ。これから、よろしく頼む」

刹那は立ち上がり、差し出された手と包帯が巻かれた手で握手する。

「ああ、こちらからも頼むぜ」

握手を終え、刹那はそう言つと、再びイスに座る。

「空蔵さんはこっちです」

十梧はフェイトの指示に従い、刹那の隣のイスへと座る。

そこで、ある事に気付く

「高町一等空尉はどうした？」

皆が直線に並べられているイスに座る中、に2つの空席が見えた。

「シグナムは病院だとして……………」

「なのはも病院だ」

十梧の問いに即答したのは刹那。

「やられたのか？」

まさかの出来事に驚きながらも、十梧は刹那に聞いた。

「ああ……………テロメンバーの1人にな」

刹那は知らず知らずに、握り拳を作っていた。

「そうか……………」

これ以上は聞かない方がいいと判断した十梧は、視線を刹那からはやてへと移す。

「これで全員やな」

はやてはモニターの前のイスに座り、この場にいる全員の確認をと

る。

「このミーティングは、昨日の襲撃。

最近、頻繁におこっているテロについてや」

はやての後ろにあるモニターに、テロ活動を行う修道士の画像が映し出された。

「この修道士をラークインが見つけたのは、今から約3ヶ月前。そうやな？十梧」

「ああ、この頃からテロが激化してきたんだ」

十梧が立ち上がり言った。

「この修道士を無限書庫でユーノ司書長に調べてもらったところ、ホームクルス【人造人間】と言う、ベルカ時代末期に使われていた生物兵器ではないかと思われた。

そしてこれが……………」

刹那はポケットから取り出した簡易デバイスのモニターから資料を探し出す。

ちなみに刹那のデバイス

ヴァルネラビリティーは、ブレイドとの戦闘で一部損傷が見られたので、シャーリーにメンテナンス中である。

「……………」

使い慣れていないせいだろうか、少し時間がかかる。

隣に座る十梧は、こっそり刹那の簡易デバイスのモニターを覗き込む。

モニターに映っていたのは

満面の笑みで焼き芋を食べる幼きなのは。

授業で発表をしているヴィヴィオ。

私服姿のなのは、ソファアに座るヴィヴィオ、浴衣姿のなのは、幸せそうに寝ているヴィヴィオ、なのは、ヴィヴィオ、なのは、なのは、ヴィヴィオ……………。

何も見てない、何も……………。

しばらくすると、はやての後ろにあるモニターに【ホームクルス人造人間】と書かれた資料がモニターに映し出される。

「ホームクルス人造人間は人造魔導体とは違い、1から人間を作り出す」

「1から……………？」

刹那の説明に疑問の声を上げるエリオ。

「そう、水、タンパク、脂肪……………人間の体を構成している物質と特殊な術式があれば、百……………万のホームクルス人造人間が造れる」

エリオはゾツとする。

もし、万を越す姿や形が同じ人間が目の前にいたら……………。

「マリアージュ以上に厄介ね……………」

ティアナは3年前に起きたマリアージュ事件を思い出す。

死体から生み出される兵士の大軍

だが、今回はそれよりもヒドい材料さえあればいくらでも作り出されるのだから。

「これが、その人造人間を纏めて^{ホムンクルス}いる思しき人物や」

はやてはコンソールを操ると、モニターに大剣を振るうブレイド、空を飛んでいるアパ。

そして不敵に笑う真武の姿の画像が映し出された。

「奴らの今回の目的は、聖王協会で保護されていたイクスヴェリアの誘拐。

理由は不明……………」

「イクス……………」スバルは不安の満ちた声で呟く。

「クラナガンの襲撃は囷と言っわけや」

「いや、まだある」

十梧ははやての推測に自身の意見を付け加える。

「恐らくだが、自分達の存在主張も兼ねられていると思われる」

「存在主張ですか？」

キャラはウェーブがかかったピンク色の髪を揺らしながら首を傾げる。

「テロとはそう言うもんだ。今の世界に不満を持ち、暴力で変革をおこそうとするバカ共だ」

紛争地域でのテロ鎮圧、時には戦場にもその足を運んでいるラークインの部隊長である十梧の長年の経験から出た意見は信憑性があった。

「それで、奴らの目的は？」

「わからん」

刹那の質問にきっぱりと答える十梧。

「ま、そんなもんやと思ってやけど……」

「おいたヌキ。何か言ったか？」

「さて、今後の機動六課としての活動内容やけど……」

「シカトか！」

「うるっさいわ！あんたは少し黙っときゃ！」

コントのような会話に皆が呆れる中、スバルが

「なんか………夫婦みたい………」

その一言に十梧とはやての動きが止まり、2人は阿吽の呼吸がごとく、同時にスバルの方に向けて叫ぶ

「誰がこんな奴と!!」

声が重なってしまった事で、十梧とはやては互いに睨み合う。

「何でいつも同じことを言う(んや)!!」

またもや同時

夫婦漫才でもやってみれば?と言いたいとフェイトは思うが、言った後が怖いので止めておいた。

「痴話喧嘩はそこまでにして、早く話を進めてくれ」

「誰が.....フンッ!!」

刹那の叱りに十梧とはやては各々のイスへと座る。

「.....まあ、話を戻して。機動六課のこれからの活動内容や.....」

苛々しながらもはやてが活動内容を話し始める。

「活動内容とは?」

「わからないよ.....って、君は誰!??」

いつの間にか隣にいた少女にエリオは驚き、イスから飛び退いた。

「私か?私は妃山叶恵だ。よろしく頼む」

至ってマイペースな叶恵は自己紹介をする。
エリオも戸惑いながらも自己紹介をする。

すると、誰かが叶恵は首根っこを掴まれ、猫のように持ち上げられた。もちろん十梧

「なにをやってるんだ？」

「いや、実は鷺祐と唯華がラブリ始めたのでな。居づらくなってる。仕方なく十梧さんを探していたのだ」

「仕方なくってなんだ。仕方なくとは」十梧は溜め息をつく

「今、大事な会議の途中なんだ、どこか別の所に行ってる」

「蒼仁の事か？」

「ああ、蒼仁の事も含めて……」

すると、叶恵は目つきを変え首根っこを掴む十梧の手を振り払う。

「蒼仁の事ならば、私も参加させてもらおう」

叶恵はそう言うとエリオが座っていたイスに座る。

「あ。そこ、僕のせ……」「妃山叶恵だ。よろしく頼む」……」

エリオの言葉が聞こえていないのか、はたまたシカトをしているのか、叶恵は隣に座るキャラ口に挨拶する。

「え？う、うん。私はキャロ・ル・ルシエ」

エリオ同様。戸惑いながらも挨拶するキャロ。

しまった…………。

叶恵の様子に十梧は右手を頭に当てる。

彼女達が蒼仁と言う単語に敏感な事は分かっていた
しかし、つい、口を滑らせてしまった。

「…………そいつ、誰？」

ヴィータは叶恵をじろりと見た後、十梧を向いて言った。

「この子は…………妃山叶恵だ…………だそうだ」

もはや諦め気味の十梧。自身のイスに戻ってゆく。

「…………まあ、ええか」

「いいの！？」

はやてがケロツと吐いた言葉に、フェイトがつっこむ。

「早く、活動内容を説明してくれないか…………」

刹那の言葉にその場にいるほとんどが黙り込んだ。

しかし、はやては

「まあ。焦らんでも、愛しのなのはちゃんも逃げへんで」

その言葉にピクンッと反応する刹那

「凶星か」

「凶星やな」

意地悪そうに笑うはやてと十梧

「……………終わらないのかしら」

ティアナは溜め息をつきながら頭を抱える

こんなんでいいのか？

機動六課

???

様々な機材が置かれている研究室のような場所

ずらりと並ぶ緑色液体が入ったポットの中に、アパの姿があった。

「やあ、アパ。元気かい？」

アパの入るポットに手を振り、笑顔で話しかける真武が現れる。

後ろには仮面で顔を隠しているグレイが頭を下げる。
その手には黒い修道服を持っていた。

「真武かYO。MEはalwaysにバリバリさ!」

アパは両手を突き出しピースをしてみせる。

「そうか………なら、頼みたい事があるんだけど」

「なんだYO?」

「僕の愛おしい妹、叶恵を見てきてくれないかな?。あ、もちろんみんなには内緒だね」

真武は右手の人差し指を唇の前で立てながら言った。

「OK!OK!真武のrequestならalwaysきくYO!」

アパはそう言うと、ポットのガラスを蹴破って、外へと出る。

「それじゃあ、頼むよ。はい、これ服」

真武はグレイが持っている修道服を受け取り、アパに投げる。

「Thank you!」

アパは服を掴むと同時に回転、数秒後に回転し終わると既に服を着用していた。

「それじゃあ行ってくるYO!」

アパが手を上げると、頭上に黒いモヤモヤが現れ、アパはその中へと飛び込み消えていった。

「……………さて、僕も準備するかな。ねえ、グレイ」

「はい……………」

開いた穴から液体が吹き出すポットに背を向け、真武とグレイは闇へと消えていった。

第17話：苦勞する十梧の1日

機動六課 廊下

会議を終え、十梧はバインドで動きを封じた叶恵を引きずり医務室へと運んでいた。

「十梧さん。いい加減離してもらえないか？」

「駄目だ」

「まさか……………私を誰もいない部屋に連れ込んで……………」

「なんちゅう妄想してんだ!？」

最近の子供は進んでいると言われているが、ここまでなのか!？
叶恵のボケに素早くつつこむ十梧。

疲れる……………

そう思いながら、会議での活動目的を頭で再度、確認する。

まず、空と陸で部隊を2つのチームに分割。

陸ではミッドチルダに現れるテロからの防衛。

あくまで可能性なのだが、相手の目的がロストロギア関連ならば、多く保管されている本局、クラナガンが再び狙われるかもしれないのである

空はラークインから一隻、艦船を貸して、テロ組織と蒼仁の搜索。

これには機動六課以外の部隊も出るらしい。

それを2週間ごとにチームを交代してゆく。

その為、陸と空のそれぞれに部隊長が必要となり

陸にははやて。空には十梧が配置される事になった。

「空蔵隊長」

廊下の向こうから声が聞こえたので、目をこらしてみると
タシア、セン、ソルカの姿が見えた。

「会議、どうでしたか？」

タシアの言葉に先程までおこなわれていた会議のワンシーンを思い出す。

それは活動目的の説明中、モニターに蒼仁の画像が映し出されたと同時に叶恵が謎の発狂。

「そうちゃああんっ!!」と叫びながらモニターに突っ込んでいったのだ。その後、バインドで動きを封じて今に至る。

今、例えば、あれが蒼仁の言っていた幼稚モード叶恵なのか？

まあ、とりあえず……

「……無性に疲れた」

「？」

溜め息をつく十梧にタシアは首を傾げる。

「隊長。その後ろで引きずってる子は？」

ソルカは十梧にバインドをかけられ引きずられている叶恵を見つめる。

「まさか……………誰もいない部屋に連れ込んで……………」

「お前も変な妄想するな！！」

「か、空蔵隊長！？それは犯罪ですよ！！」

「お前は真に受けるな！！」

「はは、冗談だ……………ですよ」

敬語を使い忘れそうになるソルカ。

おい……………

「よかった……………空蔵隊長は変態ではなかったのですね……………」

真剣に安心しているタシア。

タシア……………俺をどんな目で見てたんだ？

「高い、高い」

「わぁーっ！」

センは叶恵に持ち上げられ嬉しそうに笑っている。

セン、お前は少し静かにしようか。

と言っか叶恵はいつの間にバインドを解いたんだ？

「はあ……………。下見は終わったか？」

「はい。なかなかの設備でした」

タシア達を連れてきたのは、各々の部屋の配置や、職場の下見をさせるためであった。

「そうか。じゃあ、部隊長に挨拶したら、後は自由にしてくれ」

十梧は叶恵に再びバインドをかけ、医務室に向けて歩き出す。

「あ、空蔵隊長」

「なんだ？」

ソルカは十梧を呼び止め、にこやかな顔で

「もし、やるとしたら2階の奥にある……………」

「いい加減黙れえ！！」

ミッドチルダ総合病院

叶恵を医務室に連行した後、十梧はシグナムの様子を見にミッドチルダ総合病院に来ていた。

「そう言えば、刹那も来ているんだよな……………」

会議が終わり、少し話をしようと横を振り向くと刹那の姿は無く、

はやては「なのはちゃんと行ったんやろ」とあまり気にしていない様子で言った。

終わってから数秒たらずで、姿を消すって……。
ある意味、剣帝の名は伊達ではないと認識した十梧。

病院のエントランスを抜けて、ロビーにたどり着くと、見覚えのある白髪の少年がソファアに座っていた。

「砂彦……………だっけな」

「マスター！……………って、確か……………あなたは」

後ろから声があるので振り返ると、金色のショートヘアの少女がペットボトルを2つ抱えながら立っていた。

「アーシア……………病院じゃ静かにしろって……………」

前に向き直ると、ソファアから立ち上がり、こっちをむいてキョトンとする砂彦がいた。

「十梧さん……………だっけか？」

「久しぶりだな……………っと言うのは少しおかしいか」

会ったのはたった3日前なのだが、機動六課の異動、蒼仁の誘拐、テロ襲撃、といろいろとあり、十梧にとっては長く感じられた。

「シグナムの見舞いに来たのか？」

砂彦は昔、はやての家に遊びに行ってたのなら、シグナムとも親しい入院した聞いて病院に駆けつけたのだろう。
すると、砂彦は苦笑いしをする。

「そうなんだけど……なんか入りにくいと言うか……」

「なんか泣き叫んでたよね？」

泣き叫ぶ？病院にとって大いに迷惑な奴だな。

シグナムの知り合いなら、仕事関係、管理局の人間のはず
同業者として働く場所の風評が悪くなるのはあまりよくないな
行って、落ち着かせるか……

「俺は行くが……来るか？」

「え？ああ………はい」

十梧の突然の誘いに少し戸惑いながら受け取る砂彦。

403号室

「ジイグウウナ、アアム、ウザああああんつ！！」

「……………」

「ほらね？」

アーシアは十梧の顔を覗き込み言った。

扉越しでもしつかり廊下に響く女の声……

うるさすぎだろ？

確かにこれは入りにくいな。

でも、入らなければならぬ……。。

廊下の向こうからこちらを「また、あんたか」と言いたげに睨んでくる院長に苦笑いをしながら頭を下げ、シグナムと泣き叫ぶ女がいる病室の扉を開けた。

「ジイイイグウウウナ、アアアム、ウウウざあああんっ！！」

「うるさいぞ！！」

女の泣き叫びに負けないぐらいに十梧は大きな声をだした。病室は灯りもなくカーテンは締め切っていたので暗かった。

「うう……………誰ですかあ？……………ずずうーっ」

鼻を嚙る音と共に、シグナムが眠るベッドから人影が動いた。

「スイッチ……………これか？」

闇雲に壁に触っていた砂彦は電気のスイッチを見つけONにした。

灯りがつくと女が「うわっ！眩しい！」と言った。

腰まで伸びた青い髪

青い目の周りは涙で腫れていた。

服装からして管理局ではなく聖王協会の人間か？

「えっと……どちら様でしょうか？」

「それはこっちが聞きたいんだが？」

「私ですか？私はヴェーネ・フリージア。聖王教会シスター兼騎士をやっています」

ヴェーネはそう言っていると頭を下げてきた。

「ヴェーネか。」

俺は特化戦闘部隊ラークイン部隊長……現在は機動六課の空蔵十梧二等空佐だ」「」「機動六課？」「」

十梧以外の3人がまるで口裏を合わせたように言った。

「どうした？」

「十梧さんも機動六課なのか？」

「砂彦、お前もか？」

「私もですよ」

なに！？ヴェーネもだと！？そんな報告、聞いてないぞ！？

あのタヌキ……

「なにやっんねん？」

樽をすれば

後ろを振り向くと、果物が入ったバケツを持ったはやてが病室前で立っていた。

「おい、タヌキ！！お前……」

「おお、砂彦にアーシアやないか」

はやては気にせず砂彦とアーシアの元へ行く。

普通にスルーされた十梧は、顔をひきつらせ握り拳を作る。

「お……」

「ヴェーネ！！どうしたんや！？目、腫れてるで！！わかった、あの男やな！！」

「え？あ？はい？」

！???！なんだその無理矢理な解釈！！

「死にさらせやあつ！！」

「なんでだ！！ゴフウツ！！」

はやてのハチャメチャにつっこんだ後、十梧は顔面に飛び膝蹴りをくらって気絶したらしい……

ドンマイ、十梧

???

「ここがか……………」

荒れた大地に似合わぬ着物
黒い髪を揺らしながら

少年はその黒い瞳で見据える

暴力がすべてを支配する街を
そして、その暴力に怯える人々の苦しみを

「罪のない人々の光を曇らす闇は、私が許さん」

自分の決めた武士道ルに背かず
苦しむ人々の為

少年は歩きだ……………

ギョルルルル

「……………フッ。

腹が減っては戦はできぬ、と言う事か……………」

少年は清々しい顔でそう言うと、その場に大の字に倒れる。

《三日三晩、何も食べてませんからね》

首にかけてある勾玉のデバイスが光る。

「……ああ、見える。」

天国にいる父と母が見える」《なら、そのまま、G o t o h e
a v e nでもしてください》

デバイスらしからぬ言動

しかし、少年は話す体力すら無くなった。

すると、近くから足音が聞こえてきた。

ドンドン近づき

少年の前で止まった。

「………ほあ？」

左手にコップ

右手で歯ブラシを持ち

歯を磨く蒼仁は寝ぼけた顔で少年を見つけた。

第18話：武士道を持ちし少年

ミッドチルダ総合病院

十悟がはやてからの飛び膝蹴りで気絶している頃、刹那はなのはの病室にいた。

「……………それじゃあ、刹那君と一緒になんだね？」

「ああ」

刹那は今日の会議で説明された活動内容をなのはに話した。

「2人つきりで話すのって久しぶりだね」

「そうだな」

画面越しでは何回かは話したが、2人だけで話すのは約2週間ぶりである。

どちらも仕事で忙しく、特に刹那は、謎のテロ組織の調査であつちこつちに飛んでいて、この1ヶ月、一度も家に帰っていない。

「あ、そう言えば」

なのは何か思い出したかのように人差し指を立て、ベッドの隣にあるイスの上に置いていた雑誌を手に取る。

「どうしたんだ？」

「ええ」と……あつた、あつた！」

なのは雑誌のあるページを広げて、刹那に見せる。

【管理局員、百人に聞いた憧れの人ランキング！】と言うタイトルで

1位には空牙刹那と大きく書かれていた。

「『時空管理局本局航空武装隊第1039部隊所属

空牙刹那一等空尉

彼は多彩な剣捌きと剣技を持ち、その姿は光彩陸離と言っても過言ではなく

ガンソードアーツの実力者でその強さ故に剣帝の名を欲しいがままにし

管理局、教会で剣帝刹那と言われ憧れの的になっている』……………だつて」

記事の読み出し文を嬉しそうに読むのはに対して、刹那は複雑な表情を見せる。

「剣帝……か。大切な人を守れない人間が貰うにはもったいない称号だな……………」

刹那は自嘲するように言う。すると、なのはが刹那の顔に右手を近づかせ……………

「てやつ！」

「つて！」

デコピンをした

「そんな事言っちゃダメだよ。みんな、刹那君に期待してるんだよ」

「……………」

「それに……………刹那君はちゃんと私を助けてくれたよ」

なのははそう言って優しく微笑む。

刹那は啞然としていたが、次第に笑みがこぼれる。

「なのは……………」

「刹那君……………」

2人は若干、顔を赤くしながらも顔を近づけ、そして…………

「……………うおっほんっ!!」

ドアの方から声が聞こえ、光の速さで離れる刹那となのは。

「お楽しみのところすまへんな」

聞こえたのは長年の親友の声。

「はやて……………それに」

「よっ」

右頬に湿布を貼っている十梧が片手を上げて挨拶する。
はやてとの足踏み合戦をしながら

「った！やりやがったな！」

「動きが遅いんよ」

ここまで来て何をしている部隊長の2人よ

「はやてさん。まだ、ダメですか？」

「OKやでヴィヴィオ」

はやての後ろから現れたのは、愛しき娘の姿。

「なのはママ、刹那パパ」

なのはのベッドに小走りで近づくヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ、もう大丈夫なの？」

「うん！」元気よく答えるヴィヴィオ。その様子を微笑ましくみる
刹那。

「刹那“パパ”……か」

十梧はそう呟き、で刹那となのはを見る。

その瞳にはなぜか、悲壮が感じられる。

「いや……よう」

刹那が養子と言う前に、十梧の言葉に2人は驚愕する。

「今、ヴィヴィオが12歳だから……13歳の時に産んだのか……
今まで大変だったろ？」

……

「誰から聞いた？そんな話」

刹那は表情を崩さず、しかし、殺気を放ちながら十梧に聞く。

「ん？中学校の時、2人は駆け落ちして、止まった宿で
送禁止用語です）をして……」バツ
（放

なのはが頬を赤めながら、ヴィヴィオの耳を塞ぐ。
チャキッ

刹那が支給された銃剣型デバイスを十梧に構える。

「（R指定用語）したらヴィヴィオが生まれたって、さっき
はやてから……あれ？」

隣にいたはずのはやてが、バケットを残していなくなった。

つまり、俺は……

「砂彦にヴェーネ……あのタヌキは？」

「笑いを堪えながら、階段の方に逃げていきました」

ヴェーネがそう言うと「そうか……あのタヌキめが」とジャツジイーグルにカートリッジを装填しながら言った。

振り返り、質問してきた十梧の顔は人とは思えぬほどに怒りで歪んでいたと言う（ヴェーネ、砂彦、アーシア談）

「あんのおっ！！タヌキがあああっ！！」

十梧は廊下の窓から飛行魔法ではやてを追っていた。

「飛行許可とったのか？」

砂彦の言葉にその場の全員が苦笑する。

その後

本局に呼ばれ、説教と減俸をくらった十梧だった。

クラナガンが襲撃され、2日が過ぎた。

蒼仁はミッドチルダから、とある管理外世界でカリナ達の基地に身を潜ませていた。

第13管理外世界

【ヘヴィバッド】

別名 悪の巣窟

次元犯罪者が弱者を貪る弱肉強食の世界

「んで？」

腕を組み、床に正座する蒼仁を冷たい視線で見下げる。

「いや……散歩してたら、ね？」

「ね？じゃ、ないわよ」

視線を蒼仁から、隣で悠長に蕎麦を啜る、着物を着た黒髪の少年に移す。

「ん？」

「ん？じゃ、ないわよ」

「私の名前はクシナダ榎アキサメ灘秋雨、13だ。

好物はラーメンだ」

「そんな事聞いてないわよ」「ならば……………」。

コイツは私のデバイス、フブキ。正式名称はサクラフブキだ。そして、私の好物はラーメンだ。大切な事なので2回言ったぞ」

《どんだけラーメンが食べたいんですか？》

首にかけてあった勾玉をカリナに見せつける秋雨。

「悪かったわね。ラーメンがなくて」

カリナはイライラした態度をむき出しに、蒼仁を睨みつけ、秋雨に聞かれたくないのか念話を使う。

なに、厄介なの持っていくのよ!!

普通、助けない？腹減って倒れてんだぜ？

街に行けばそんな人間なんて転がるほどいるわ!! あんたはその転がる全員を助けるって言うの!?

“昨日”みたいな

.....

蒼仁が昨日、カリナとアドンと共に買い出しに街に出かけた時だった。

道の真ん中に腹をすかしたと泣く子供を見つけ、リンゴを1つ買って子供にやった蒼仁。

子供は嬉しそうに「ありがとう!!」と言って走っていった。

買い出しが終わり、来た道を帰る途中
先ほど子供が頭から血を流し死んでいた。

近くには血の付いた鉄パイプを片手にした男性がリンゴを美味しそうに食べていた。

それを見た蒼仁はレディアントを片手に男性に向かって走り出そうとした。

だが、アドンに肩を掴まれ、引き止められた。

「離せ!!!」と叫んだと同時に腹に衝撃が走る。

「あれが、この街の現状だ……………」

意識が闇に落ちる前に聞こえたアドンの言葉

次に目を覚ましたのは、翌朝

そして、目覚まし代わりに散歩をしていたところ、秋雨を見つけた。

1人助けたところで、何かが変わるわけじゃない

理解はしている

蒼仁はやるせなさに齒をかみしめる。

「念話してるところ悪いが……………」

「なによ?」

ギロリと秋雨を睨みつけるカリナ。

「そう睨まないで欲しい。ここから街へはどの方向へ進めばいい?」

「ここから北東よ」

「かたじけない。」

蕎麦、ご馳走になった」

秋雨はそう言うと、食堂から出て行った。

「って、おい!街は……………」

蒼仁が追いかけてようと、立ち上がり、走るが、カリナに足をかけられ転んで、鼻を床に叩きつけてしまう。

「った!なにすんだよ!?」

鼻の痛みに床を転がる蒼仁。

「あんたこそ、何しようとしてんのよ? 私達にはやるべき事があるのよ。アイツにかまってる暇がないほどにね」

「でもよ……」

「でも、じゃない。目の前の人間1人に構っていれば、あつと言つ間に世界が滅ぶわよ」

まだ、あまり実感がわかない
聖王シュリアの力で世界が滅ぶ

だが、カリナの目は嘘を言っていない。
そんな気がする。そして、何よりコイツは……

「話を聞いているの!?!」

「ブフツ!」

考え事をしている間

カリナは何かを喋っていたらしいが、耳に入らなかった。

蒼仁は顔面にカリナの右ストレートを受けて、床に倒れる。

「んで……何だつて?」

「船の支度が終わるまで、自由にしてなさいって言ったのよ」

……………自由?

その言葉に蒼仁は起き上がり、カリナを見上げる。

「自由つて……何しても良いんだな?」

「……………船は5日後に出るから…」

カリナはそう言って食堂の出入り口まで歩く。

「サンキューな」

「……………なにがよ」

「お前、本当に素直じゃないよな。デレはねえのかよ？」

「……………バーカ」

会話が終わり、カリナが食堂から出て行く。

「よつと」

蒼仁は飛び起き、ポケットからレディアントを取り出す。

《行くのですか?》

「当たり前だ。道案内頼むわ」

《恐くないんですか?……………死ぬかもしれないのですよ?》

「「怖い」……………ねえ」

恐いと言う単語に、蒼仁の表情が一瞬鈍る。

《マスター?》

「……………よし！行くぞー！！」

何事もなかったように、蒼仁は右腕を回しながら食堂をあとにした。

「着いたか……………」

基地を出てから、カリナの言う通りに北東を進むと、秋雨は当初の目的であった街に着いた。
成すべきは、弱き人の為

街に入ると、早速、爆発音が聞こえ、空へと上がってゆく煙が見える。

「行くぞ……………フブキ」

《はい、アキ》

首にかけてある勾玉が光、秋雨を包んでゆく。

「あ？なんだ」

光に気付いた男が1人、鉈を持って近づいてゆく……………
が

光が止んだと同時に男が吹き飛ぶ

そこに立っていたのは、鬼の仮面を被った武者の姿の秋雨
その手には、桜色に輝く刀を握りしめる。

「んだ！！てめえは！！」

吹き飛ばされ、怒り狂う男の怒声に、目つきの悪い男達がどんどんと群がり、武者の周りを囲む。

「この街で、こんな事をして、生きて帰れると思っなよ？」

リーダー格と思われる男が前に出て、秋雨を脅す。

だが、秋雨は恐れた様子を見せずに、刀、サクラフブキを構える。

「オラアツ！！殺っちまえ！！」

リーダーの掛け声と共に、群がる男達が各々の武器を構えて、秋雨に飛びかかる。

「ふう……………」

息を吐き出し、自身の気で縄張りを作る

制空圏

秋雨が祖父から受け継いだ名妓

周囲に気を張り、侵入したモノ全てを確実に…斬る！！

最大周囲、4メートル

その範囲ならば、頭上、背後、真横、関係ない。迫り来る男達をサクラフブキで斬り伏せる。

「つえーぞ！！このガキ！！」

「デバイス、持つてる奴は撃ちまくれ!!」

リーダー格の号令に杖型デバイスを持った男達が、秋雨の向けて魔力弾を放つ。

「ちっ」

《数が多いですね……………捌ききれますか?》

一向に減る様子の無い男達に、こちらに向かってくる、無数の魔力弾

「やるしかなかるっ」

いくらかは傷つくことを覚悟し、サクラフブキを握りしめたその時

敵の魔力弾が、上から降り注ぐ朱い魔力弾と衝突し、打ち消された。

「なんっ……………」

何かを言う前にリーダー格が吹き飛ぶ

上から飛来してきた、1人の少年の蹴りによって

「親分!! テメエツ!!」

頭にバンダナを巻いた、いかにも下っ端という感じの男が、ナイフを片手に少年に斬りかかる。

しかし、ナイフは易々と避けられ、下っ端は少年の持つ杖型デバイスによって、顎を強打そのまま気絶した。

「よっ！秋雨……だよな？」

「おぬしは……」

少し言葉を交わす2人だが、次には近づく男を吹き飛ばしていた。

「自己紹介がまだだったな。雨井……ひょいっと、蒼仁だっとりや
！！」

「蒼仁………はあっ！！殿はなぜ………ふっ！！ここに？」

話しながらも、迫り来る男達をなぎ倒してゆく2人

「そりゃあ………」

気がつけば、2人は背中合わせに男達に囲まれていた。

「俺、お人好しだから」

蒼仁は後ろにいる秋雨に、ニヤリと笑う。

「……………フツ。そうであったか。奇遇、私もだ」

お互い笑いあう蒼仁と秋雨

「さて、と………」

秋雨は正面向き、サクラフブキを構えて、群がる男達を睨みつけ……

「let's party!」

《アキ、そのネタには、眼帯と刀をあと5本、必要ですよ》

大丈夫だろうか？

蒼仁は後ろにいる秋雨に、計り知れない不安を感じた。

第19話：街でのひと暴れ

へヴィバッド

街の一角

廃れたビルとビルの隙間およそ、10平方メートルほどの場所に、女性と黒い服を着た男3人がいた。

「へへへ……………大人しくしな？」

男3人は不気味な笑みで、怯える女性の様子を楽しみながら詰め寄る。

「い、いや……………」

叫ぶことはできない

いや、叫んだとしても助けはこない

これから男達に何をされるのか、果てしない恐怖感に体が震える。

そして、1人の手が肩に触れたその時

「た、大変だ!!」

目の前の3人と同じ黒い服を着た男が、焦った様子でこちらに歩いてくる。

「んだよ、いいところだったのによ……………」

「やべーんだって！！ガキ2人が暴れてるんだって！！」

「ガキ？どんな奴だよ」

「1人が刀を持って鬼の仮面かぶった奴で、もう1人が杖持った……普通な奴だ！！」

「ったく、ガキ2人ぐらい始末……」「邪魔だあああつ！！！！」
……あ？」

男が言いきる前に、道路の方から雄叫びと同時に十数人の男達が吹き飛んでいった。

その光景に黒い服の男達は啞然とし、その間に女性は逃げていった。

「だああらつ！！」

吠えながら鉄パイプを振ってくる男の攻撃を避け、蒼仁は朱き魔力弾を16個形成

鉄パイプ男を含めた8人に2発づつ放った後、筋肉男が振り下ろす鉦をレディアントで防ぐ

しかし、徐々に押されてゆく。

力じゃ勝てないか……

「BDS!! ドライブ!!」

《All Right. Boost Drive System
triting!!》

蒼仁の足元に白銀色の魔法陣が展開され、鉦を押し返し、筋肉男の顎を蹴り上げる。

B (Boost) D (Drive) S (System)

術者の魔力と肉体を強化するレディアントに備わっているシステム
カリナからは詳しく説明はされていないが、1つだけ忠告された事
があった。

『心を乱している時に使わないで』

その言葉の意味はわからないが、今、それを考えてる暇は無い。

「アント……」 《Protection!》

右から迫り来る魔力弾を魔法防壁で防ぎ、レディアントの矛先に銀
色の魔力を収縮。

そして、魔力弾を放ってくる魔導士に向けて、周りを巻き込み放つ

純粹な怒りを目に灯らせながら……

その隣では秋雨が迫り来る攻撃を悠々と避け、サクラフブキの一振
りで、10人以上の敵を吹き飛ばす。

「ふう……手応えがない」

落胆した様子を見せると男達は怒り狂ったように、秋雨に一齐に飛びかかる。

「辛抱ない奴らだ……」

呆れながらサクラフブキを振るう秋雨
男達は吹き飛び、地に倒れ動かなくなった。

気がつけば、辺りの殆どの男達は地面に倒れているか、逃げていた。

「んで、どこ行くんのだ？」

敵がいないので歩きながら、行き先を秋雨に訊いた。

「あの高い宮殿のような建物が見えるか？あそこにこの街の統治者【ディラン・ハイフン】がいる」

秋雨が指差す方を見ると、確かに宮殿のような建物が高々と建っていた。

「頭を潰すってか？」

「この街の悪政はディランが元凶にある」

「ふ……」

会話が途切れる。

蒼仁と秋雨の間を横を黒い小さな弾が音速で通り過ぎた。

「…………マジ？」

目の先に見えたのは、機関銃を構えた男達と、円錐で黒く光る、バ
ルカン砲

1人の男がこちらを見て、ニヤリと口元を釣り上げた。

蒼仁と秋雨も冷や汗をかきながらつられて、ニッコリ笑う。

「去ねやああああつ！！！！」

怒号と共に、無数の銃弾が蒼仁と秋雨に向かって飛んできた。

「ちっ！！」

舌打ちをしながら、秋雨は飛行魔法で空へと逃げるが、蒼仁は空は
飛べないので、近くの建物に飛び込んだ。

「くそっ！！卑怯だぞ！！」

入り口付近の陰から魔力弾を生成。男達がいると思われるだいたい
のところまで操作し、四方八方に拡散させる。

着弾と同時に建物の出ると、外は蒼仁が思った通りになっていた。

「み、見えねー！！」

「あのガキ!!」

怒鳴る男達の声

魔力弾が当たった地面と建物から砂塵が舞い、男達の視界の障害をしている。

こうなれば、狙いを定める事もできない

「1ーに構え」

レディアントの矛先を砂煙の中にいる男達に構える。

「2ーに集め」

銀色のスフィアが現れる

「3ーに増やし」

両サイドに魔法陣が展開され、レディアント同様に魔力が収縮される。

「4ーで踏ん張り」

地面を踏みしめている足に力を入れる。

スフィアは今できる最高潮の大きさを迎える

「5ーで……………」

がむしゃらに放たれる銃弾が蒼仁の頬、腕、足を掠ってゆくが気にしている場合ではない。

「発射あー!!」

放たれる3つの銀色の砲撃は、砂煙を一気に晴れさせ、驚愕の表情を見せる男達を飲み込み真っ直ぐ突き進んだ。

「お見事」

空から降りてきた秋雨はそう言った。

砲撃は宮殿前の建物を跡形もなく一掃していた。

「んじゃ、行きますか」

「うむ」

蒼仁と秋雨は真っ直ぐ、ディラン・ハイフンがいる宮殿に向かった。

ディラン宅入り口前

街からは予想のできないほどに立派な宮殿だ。

庭には色とりどりの花が咲き、奥には噴水が見える。

「よし、行くか」

「待て」

蒼仁が宮殿内に入ろうとすると、秋雨が呼び止めた。やけに真剣な表情を見せるので罨でも仕掛けてあるのかと周りを警戒する

「ちゃんと、インターホンを押さなければ」

《宅配便にいつ就職したのですか?》

そう言って、門に付けられているインターホンを押す秋雨

律儀すぎるだろ……

『どちら様でしょうか?』

インターホンの画面からメイドと思われる女性が映し出された。

「デイラン・ハイフン男を肅正しに来た」

『は、はあ!?!』

当たり前だ

いきなり、鬼の仮面をかぶった子供に自分の主人をぶっ飛ばしにきましたって言われたんじゃ、驚くよな。

そう思っていると、庭に茂っていた草が触手のように動きながら蒼仁に向かって伸びてきた。

「なっ!?!プロミネンス・シュート!?!」

蒼仁は即座に魔力弾放ち、草触手の進行を止める。

「蒼仁殿!?!どけ!?!」

秋雨の言葉に蒼仁は魔力弾を放ちながら、右斜めに後退。

「はあっ!!」

秋雨の一閃は草触手を散り散りにするが、それも一瞬だけだった。草触手は止まる事なく2人に迫る。

「一時退散!!」

「賛成!!」

秋雨の提案に即座に同意し、宮殿から離れるが草触手はそれでも追いかけてくる。

「ふうははははっ!!どうだ!!私のヘリバルちゃんは!!」

声は宮殿から聞こえた。蒼仁は草触手に気をつけながら後ろを振り向くと、宮殿の屋根に立つ、小太りの男を見つけた。ヒゲは特徴的で、まるでマ?オのような形をしている。

「ディラン・ハイフン!!」

「あれが!?!」

「そう、私こそこの街の統治者であるディラン・ハイフンだ!!」

なんだ、そのいかにも悪役が自分の名前を名乗る時の言い方は?

若干、呆れながらも自身を捕らえようとする草触手を避ける。

「さあ！！私のカワイイヘリバルちゃんの餌になりなさい！！」デイルンがそう言うと同時に、宮殿の庭から巨大な何かが立ち上がった。

巨人だ

体中に草触手を生やしている巨人が庭から立ち上がったのだ。

「ど……………どこが、カワイイんだよ！！」

「ドラ？エのゴーレムだな」

《ゴーレム萌えなんでしょ？あのマ？オモドキは》

見るかぎり、巨人にはカワイイと言えるポイントが全く見当たらない。
つてか、サクラフブキ、んな事言つと、ますますマ？オに見えてくるからやめて……………

「な、なんだと！？ヘリバルちゃんのカワイさに気がつかないガキなぞ死んでしまえ！」

指差し叫ぶデイルンに応えるように、巨人はこちらに向かって歩き出した。

「BDS！！ドライブ！！」「フブキ、行くぞ」

《はい、アキ》

蒼仁は50相当の銀色の魔力弾を形成、ヘリバルちゃん（巨人）から伸びてくる草触手を撃ち抜く。

「蒼仁殿、援護を頼む!!」

「わかった!!」

秋雨は建物の上から飛行、ヘリバルちゃんに向かう。草触手のある程度斬りながら、逃したものは蒼仁が魔力弾で撃ってゆく。

すると、無駄だと分かったのか、ヘリバルちゃんは草触手での攻撃をやめ、自身の拳に巻き付けて何倍もの大きさにした。

「ボアアアアッ!!」

「断ち斬る!!」

雄叫びを上げ、拳を振りかざすヘリバルちゃんにサクラフブキの剣先に魔力を集中させながら突っ込む秋雨。

間合いに入ったのか、ヘリバルちゃんは秋雨に向かって拳を振り下ろす。

「潰れてしまえ!!」

やや狂喜の声をあげるディラン、しかし

「やらせるか!!」

蒼仁が放った銀色の砲撃で、拳を弾かれ、ヘリバルちゃんは体のバランスを崩した。

「破空……」

魔力が最高潮に達したのか、刀身の桜色が輝くサクラフブキ振り構え、ヘリバルちゃんの頭上を秋雨は急降下

「残酷劇!!」

秋雨が空から地面に着くまで1秒たらず
その場にいる者はその一太刀を目視する事はできなかった。

「ボ、ボア……」

唸ったと思った瞬間、その巨大な体は真っ二つに裂かれた。

「つまらぬ物を斬ってしまった……」 《私は斬鉄剣ではありませんよ?》

サクラフブキを鞘に納める秋雨。

「あ……」

蒼仁は気付く

ディランがない……

その後、デイランの宮殿をぶっ潰して（雇われていた人をちゃんと逃がしてから）、金庫の中にある金を街の貧しい人達に均等に配った。

聞く話によれば、デイランの会社に騙されてしまい。大量の借金を抱えさせられ、働くためにここに来た人達がここに集まるらしい。デイランが居なくなり、借金に苦しまずにすんだ街の人達の殆どはこの世界を去っていった。

「……………こんなもんか」

《そうですね》

蒼仁は小さな石を積み重ねて作った墓の前で、両手を合わせて黙祷する。

この墓は先日殺された、リングをあげた男の子のものだった。

誰も居なくなつた商店街を歩くと、予想通りに道端に転がっていた男の子。「なあ、アント……………」

《なんですか？》

「俺さ……………実は悲しめないんだ」

《……………はあ？》

「ま、それだけの話。んじゃ、行くとしますか!」

《マスター。それは……………》

レディアントは余計な詮索は止めた。

蒼仁は背筋を伸ばしながら、街の入り口にいる秋雨を待たせないように歩き出した。

カリナ基地

帰ってきて即座に蒼仁と秋雨は正座を強いられ、太ももの上には石が乗せられた。

そして、目の前には腕を組み、鬼のような殺気を放つカリナ。

「あの……………カリナさん？」

「黙れ……………」

「はい……………」

「カリナ殿……………」

「気安く呼ぶな……………」

「はい……………」
「どつする？冷や汗が止まらない……………」

蒼仁はチラリと隣の秋雨を見る。

ボタボタ……………

ハンパない冷や汗の量だ……………

と、とにかくこの状況の原因の究明を！！

そう思つて、前を向く蒼仁だが、すぐに横を見る……………

「なに、さっきから目をそらしてるのよ……………」

「あ……………その……………」

だ、だって……………そ、その水玉の生地が……………

蒼仁が目をそらすその理由。目線からギリギリのラインだが、カリナのパンティが見えているのだ。

「そのつて何よ……………」ドスのきいた声が蒼仁の耳に突き刺さる。

どうする？どうすればいい！？待て！！パターンを読め！！パターンを！！

真実を述べてしまえば必ず俺の顔面がブレイクされてしまう……………

コイツの性格上……………ツンツンは恐らく自分から気付けば何事も無かつたように後ろにさがるはずだ！！

だが、気付かせるための要素がこの場には無い！！

正座している足も鉄の床と石に挟まれギブアップ寸前……………

いち早くこの地獄から解放されるには、いかにしてコイツのパンテ

イが見えている事を知らせるかどうかにかかっている!!

……………仕方がない。

この手は使いたくなかったけど……………

秋雨……………

どうした？蒼仁殿

『青い水玉模様』って言うってみてくれ

なぜ！？このような雰囲気になんかそんな事を……………

この状況から抜け出せる唯一の方法なんだ!!

本当か！？なら……………

「うおっほん！えー、青い水玉模様……………」

一瞬の静寂……………

最初は怪訝そうな顔を見せたカリナだが、言葉の意味がわかってきたのか顔をだんだん赤くしてゆく……………。

さらば……………友よ

そう心に呟いた蒼仁

「116……………」

だが、現実はずつた

「変態があー!!」

カリナのメガトンキックが蒼仁の顔面に炸裂!!

効果抜群だ!!

「なんで……………俺？」

綺麗な弧を描くように、蒼仁は正座をしたまま後ろに倒れる。

「まったく……………解除」

蒼仁と秋雨の脚に乗っていた石が消え、晴れて自由になった、が…………

「大丈夫か？蒼仁殿」

「世の中、うまくいかないな…………」

「？」

この世の厳しさを改めて知った蒼仁だった…………

「んで、何を怒ってんの？」

食堂で焼いた豚のような肉を食べながら、先程の拷問理由を訊いた。

「あんた等、ディラン・ハイフンとこ行ったんでしょ？」

あからさまに不機嫌なカリナ。まだ、顔が頬がほんのり赤いと言う事はパンティの……

「あん!？」

……すみません

「行ったけど？」

「ディランの残党がね。船のマスターキーを盗んでいったのよ」

「……………マジで？」

第20話：私達のデバイス

カリナ基地 食堂

なんてこった……………船のマスターキーが盗まれるなんて……………

「でも、よくディランってわかったな」

この基地には監視員が外を迂回し見張っているため、侵入を許すことは難しいはずだが……………

「私達の中にディランの部下が混ざっていたのよ。実際に4人がこの基地から姿をくらましたわ」

カリナが苛々しているのは、どうやら俺と秋雨の事だけじゃないらしいな。

「まあ、結果として原因を作ったのはあんた等、バカ2人のせいよ」

確かに……………

あの時、ちゃんと捕まえておくべきだったな

「それで、どうする？」

「取り返しに行くわ。たぶんここにディランが隠れているはずよ」

カリナの目の前にモニターが現れ、ヘヴィバッドの世界地図に赤い

点が記されていた。

「【アタン・テラス】。A級次元犯罪者が集う、ヘヴィバッドの首都みたいな街よ」

「周りの街より3倍ぐらいデカいな……見つかるのか？」

「普通に探せば無理ね」

「なら、どうやって……」

「人の話は最後まで聞きなさい。今日から5日後にアタン・テラスにあるカジノでパーティーが行われるの」

モニターが世界地図右上に、『アタン・テラス統治者主催 カジノパーティー』と書かれたチラシが映し出される。

「……んで？」

「あんだ、鈍いわね。ディランはあんだ達に宮殿を潰されて、財産もない状態なのよ？」

呆れ口調で話すカリナに尚、わからないと言いたげな表情を見せる蒼仁。

「金よ!!!か・ね!!!カジノで金を増やそうとしてるの!!!」

「そんなに単純か？」

単純すぎて気付かなかった……

「聞く話じゃ、ディランはそんな男よ」

「……………」

『ふうははははっ!!どうだ!!私のヘリバルちゃんは!!』
『さあ!!私のカワイイヘリバルちゃんの餌になりなさい!!』
『へリバルちゃんのカワイさに気がつかないガキなぞ死んでしまえ!!』
……………。

「うん、そうだな」

見た目からしてバカっぽいし、たぶん頭の中もヘリバルちゃん
っぽいだろうし…………

「そのパーティーに参加して、ディランを捕まえてキーを取り返す
と…………」

「残念ながらそれは無理ね。まず、パーティー会場には重度のAM
Fが張られてるのよ」

「AMF?」

聞き慣れない単語に復唱する蒼仁

「AMF。アムキロツケルト簡単に言えば、魔法を使いにくくするフィールドの事よ」

「それじゃ…………」

「カジノの中ではほぼ魔法が使えない。しかも、それだけじゃない。騒ぎを起こした人間はすぐに拘束、地下で射殺」

「物騒だな……」

「そう言う世界なのよ。それに無一文のディランは絶対、マスターキーを換金所で金に変えるつもりよ」最悪な展開だ。

初っ端からこんなトラブル続きで、本当にアカナシムを阻止できないのか？

って言うか……

「なんで、管理局の手を借りないんだ？」

管理局は警察みたいなものだし、こんな危なっかしい事を任せればいいんじゃない……。

「それは無理。管理局にアカナシムが潜り込んでるのよ」

「どこにでもいるな……」

蒼仁は焼いた肉を一気に頬張り、食器を台所に持って行く。

「トラッシュを無限に製造できる奴らなら不可能ではないわ」

トラッシュ……ホームクルス人造人間だっけ？いつも修道士姿で聖王がなんやらくっって言ってる奴。

「あいつ等、話せんのか？」「製造途中にプログラムを組み込めばね。そのかわり魔力が著しく下がって、戦闘では使えなくなるの。だか

ら、管理局で情報の収集、偽造、隠滅をしてるのよ」

まるでスパイだな。

B級映画でありそんな設定だと思いつながら、食器を洗ってゆく蒼仁。

「作戦は？」

「デイランが換金所でマスターキーを出した後、誰かがカジノで騒ぎを起こす。その間にマスターキーを奪取する」

「騒ぎを起こしたら地下で射殺じゃなかったのか……。俺はやだぞ、そんな死に方」

「大丈夫よ」

カリナが自信ありげな笑みを浮かべる。

蒼仁はそれをぼけーっと見ている。

「……………何よ」

「いや……………お前みたいな奴でも、そんな風に笑うんだなーっと思いつ……………」

蒼仁が言い切る前に、飛んできたコショウが額に当たり、辺りに散らばる。

「な、なにすん……………フェックション！！」

「うるさい……………死ぬ……………」

テーブルに置いてある調味料を次々に投げ飛ばしてくるカリナの表情は鬼を震え上がらせるほど冷徹である。

「ちょ、マジっ！？……あぁっ！！ラー油が目にいいいいいいっ！！！」

《蒼仁さんは女心と言つものが分からないんですね》

食堂の扉に寄りかかる秋雨の首にかけられている勾玉、サクララブブキが光る。

「……………はたして、そうなのか…？」

ぼそりと疑問を呟く秋雨

《何か言いましたか？》

「いや、何も言っておらん」

秋雨は両手を上げ、背筋を伸ばしながら廊下の奥へと歩いていった。

「ま、待てえ！！包丁は危ないって！！包丁は！！ぎゃあぁあぁあぁあぁあぁ！！！！」

機動六課 訓練所

こんにちは、高町ヴィヴィオです

クラナガンが襲撃されてから3日。

病院に入院している間、色々な事が起こりました。

なのはママとシグナムさんは、私と入れ替わるように入院して

病院が襲われてる時は、アインハルトさんとリオ、コロナが傷つきながらも守ってくれました。

でも、クラナガンの街はメチャクチャに破壊されちゃって………

もう何もできない自分が嫌で、刹那パパとフェイトママにお願いして、夏休みの間だけでもいいので機動六課の仕事を手伝わせてもらうことにしました。

最初はフェイトママにダメって言われたけれど、一生懸命説得をしたら刹那パパが、2つ条件つきで許してくれました。

1つは、無理をしないこと

2つは、危なくなったら隊長陣及び刹那パパの助けを呼ぶこと

その条件を守れば、機動六課のお手伝いをしてもいい

少しだけ、刹那パパとフェイトママが言い争ったけど、結局はフェイトママが折れました。

決め手は「俺が命に代えてもヴィヴィオを助ける!!」それでいいだ

る……」

あの言葉……嬉しかったな

そんな事があり、早朝の訓練に参加していますが、この事がアインハルトさんとリオ、コロナにバレちゃって結局、3人と一緒に頑張っています。

「ヴィヴィオ、行くよー!!」

「はいつ!!」

張り巡らされる青いウィングロード

聖王モードのヴィヴィオは廃ビルから乗り移り、ローラーブーツで駆けてくるスバルを待ち構える。

「はあっ!!」

「やあっ!!」

次の瞬間には激突

ぶつかり合った拳と拳が生み出した風圧に、辺りに粉塵が巻き上がる。

「やるね!!」

「スバルさんこそ!!」

互いに笑みを見せるが、それも一瞬

再び駆け出すスバル

その反対を走るヴィヴィオ

そして、ウィングロードが交差する度に拳と蹴りの応酬が行われる。

それが11回目に差し掛かった時

その均衡は崩れた。

「おおおおつ!!」

「はあああつ!!」ヴィヴィオは左足でスバルの横っ腹を狙うが、左腕で防がれ押し返された。

しまった!!

振り上げられた拳を見て、そう悟る。

体勢を崩れているヴィヴィオにスバルの拳を防いだり避ける術はなく、直撃し、ウィングロードの無い空へと吹き飛ばされる。

「つと!ヴィヴィオ、大丈夫?」

「あ、はい!大丈夫です」

心配な声をかけるスバルにヴィヴィオは飛行魔法を使用し、苦笑をしながら答える。

「あーっ!! 私も早くデバイスが欲しい!!」

「叶恵、うるさいですよ」

「何を言っておる!! 驚祐はあれを見て燃えないのか!! ほとばしる汗!! ぶつかり合う拳と拳!! まさに漢!!」

「あの2人は女よ?」

「漢は性別じゃない!!」

「「はあ……………」」

こんな時に蒼仁がいれば……………

聞き分けのない叶恵を黙らせる唯一の人間

雨井蒼仁が消えてから数日あまり

彼の必需性が再確認できた驚祐と唯華である。

「こらー! 無駄話はだめですよー!」

「「「はい」」」

可愛く頬を膨らませる銀髪の妖精みたいな小さな軍曹
ラインフォース・ツヴァイの前に集まる3人。

現在、叶恵達はラインに魔法を教わっていたのだった。

「それでは、最後にシュートイベーション・ラークインVerをやりますよ！」

リインが右手の人差し指を立てると、周りに魔力弾が数発形成される。

「内容はいつもと同じで、今から5分間、魔力弾を避けながら、この訓練場のどこかに設置された10個のターゲットを見つけつけて壊すですよ！！あと、当たったらやり直しですよ！」

「はい！！！！」

元気よく応える3人に微笑むリイン。

「では！スタートです！」

リインのかけ声に魔力弾が3人に向かって飛んでゆく。

「私、右！！！」

「では、左！！！」

「え〜と……後ろだ！！！」

唯華は右、鷺祐は左、叶恵は後ろに、それぞれ別れ、魔力弾の数を分断させる。

このシュートイベーション・ラークインVerは、従来のシュートイベーション、処理や回避が困難な自動追尾弾や思念操作弾に対する対応のための訓練に、敵の搜索を組み合わせたものである。ラークインは紛争の鎮圧やテロの拿捕を仕事にし、いつも死と隣り合わせの部隊である。

そんな訓練を軽めだとしても、局員ではない少年少女が3日。魔法を教わってから、たった3日でこなそうとしている。

ラインの目の前に浮かぶモニターに

02:51

残りターゲット数:3
と表示されている

「十梧が言った通りです」

ラインが3人の教導を請け負うと決まった日に、十梧が

『あいつ等だと、このメニューじゃ物足りないな』

その言葉通り、魔力弾の形成と防御魔法のプロテクションは半日たらずで覚えてしまった。

何というか、呑み込みが早いのだ。当初のメニューは魔法の基礎だけのはずだったが、本人達の強い意向で訓練も行う事になった。

それを予想していたかのように、十梧はこのメニューを予めラインに教えていた。

「あの……ラインさん？」

かけられた声にハッとすると、目の前に全身汗だらけの唯華がリイ

ンを見ていた。

その後ろには息を切らしている鷺祐と、「まだまだあー!!」と疲れた様子を見せずにシャドーボクシングをやっている叶恵がいた。

モニターには

01:35。

残りターゲット数：0

「で、では！今日の訓練はここまでです！」

「「ありがとうございました!!」「若干慌てるラインにぺこりと頭を下げる鷺祐と唯華だが、叶恵は何か不満げな表情を見せる

「なぬ？まだ、動き足りぬぞ!!」

「さすが……学校No.1の体力……ですね……」

鷺祐は頭をあげると、そのまま地面に崩れるように倒れる。

「このまま戻るのもなんだし、みんなの訓練も見てくるか!!」

叶恵は自分の提案に頷きながら、近くにいるスバルとヴィヴィオの方へと歩き出した、が

「待ちなさいって」

「ぐえっ」

唯華に着ているTシャツの襟を掴まれ、カエルが潰されたような声を出して止まる叶恵。

「何をする、唯華!？」「何をする、じゃないわよ。訓練する前に十梧さんに終わったら来いって言われたじゃない」

「十梧さんが？」

「もう、忘れたの?」

「……又ハハハハハ!」

「笑って誤魔化さない」

話をしながら機動六課隊舎に向かう2人は、力尽きて倒れている鷺祐を忘れていった。

「僕はどうなるんでしょうね?」

指に止まった小鳥に話しかけるが、返事の代わりに指を啄まれた。

機動六課 研究室

途中、唯華が思い出し、無事に救出された鷺祐を合わせて3人は研究室前に立っていた。

なぜ、入らないのか?

それは、扉越しに聞こえる2人の喧騒のせいである。

「やから、まだあの子達には危険やっって言っとるやないか!」

「危険は承知の上だっただけであいつ等言っただけだろっ！だから試験を受けて、囑託魔導師になっただろっ！」

予想できるように十梧とはやての声だ。

話に出たように叶恵、鷲祐、唯華の3人は囑託魔導師の試験を受けて合格していた。

「……どうしますか？」

「どうするって……入る？」

「それしかないだろ？」

鷲祐と唯華の意見を聞かないうちに叶恵は研究室の扉を開けたが、2人の口喧嘩は止まらなかった。

「バーカ！！バーカ！！」

「うるせえ！！タヌキが！！」

「うるさいわ！！ヘタレ部隊長！！あん時、私のはだ……」

「来たぞ？」

「「のおおおっ！？」」

十梧とはやての間に叶恵はひょいと顔を割り込ませた。すると、2人同時に驚きの声を上げる

しかも、“同時”が気に入らなかったのか互いに睨み合う。

「真似するな！！合わせるな！！バカ！！ボケ！！」

コンマ1秒もズレのないハモリっぷりに、叶恵は「おお」と小さく拍手しながら感嘆の声をあげる。

（数分後）

「ぜえ…………ぜえ…………」

まさにシンクロ

息切れすらハモリ始める2人。

「ま…………真似を…………」

「そこまでにしてよね…………」

呆れ口調で唯華は言うと、いい加減疲れたのか、溜め息をついて互いに距離をおく十梧とはやて。

「それで、何かようなのか？」

叶恵は訊ねる。さつさと要件を聞いて訓練場に戻りたいから

「ああ、それはな…………あれ？シャリオは？」

「じ、じじです」

部屋の物陰から機動六課のデバイスマイスターのシャリオ・フィニ

ーノことシャーリーが出てきた。

「なんで、そんなところにいるんや？」

「だ、だって〜！」

十梧とはやての喧嘩を止めようとしたが、こちら話を聞かずにヒートアップし、恐くなって隠れました。なんて言える訳がない……

「ま、とりあえずシャリオ。あれを出してくれ」

「はい、よいつしよっと」

シャーリーは近くにあったデスクの下からダンボールを取り出し、設計図やら予定表がバラバラに置かれているテーブルの上に置いた。

「これが、あなた達のデバイスよ」

ダンボールの中から出てきたのは

黄色の六角形の宝石。

真ん中の丸の中にVと記されている白いカード。両刃の剣をモチーフにしたネックレス。

「おお！これが！」

叶恵は早速、自身のデバイスになる黄色六角形の宝石を手にとる。

「武器、バリアジャケットはあなた達の要望通りにしたわ。あとはその他の機能なんだけど……」

シャーリーは啞然とする。今さっきまで自分の横にいた少女が一瞬のうちに消えていることに

「あの……叶恵ちゃんは？」

「部屋を飛び出していきましたよ。たぶん、訓練場に行ったかと」

鷺祐は苦笑いしながら答える。

「……ヤバい！」「」

大人3人が焦った様子で一齐に走り出した。何かわからないが、鷺祐と唯華もその後を追う。

次回に続く……

第21話：暴れ馬

管理局　　???

薄暗い部屋

1人の男がモニターの前で跪いていた。
服装からして、艦長クラスの階級である事がわかる。

「シテ、奴ラノ動キハ？」

「……はい。隊を2つに分け、一方は陸の守衛。もう一方は空での探索です。どうやら、もう一度クラナガンを襲うと思っているのでしよう」

「フム………」

モニターに映るマントとフードで全身を覆い隠すアークは、その低い声で短く唸る。

「ナラ、奴ラノ思イ違イヲ現実ニシテヤロウ」

「では、空の方は？」

「止メロ。奴ラミタイナノガ飛バレレバ、些カ面倒ナ事ニナル」

「わかりました。私の方でどうにかしましょう」

「ウム、健闘ヲ祈ルゾ………」アークの言葉を最後にモニターには

喧しい音と嵐が走る。

「すべては、聖王シユリアの為に……」

男はそう呟くと、歩き出し、部屋から出て行った。

訓練場

シャーリーが何かを言おうとしていたな？と思いながら、最高速で訓練場に辿り着いた叶恵は手に持つデバイスの試運転の相手を探していた。

「妃山さん、何をしているのですか？」

声をかけられ、後ろを振り向くと

銀色のツインテールと青と紺の虹彩異色の瞳を持つ少女、アインハルト・ストラトスが立っていた。

「アインハルト……か、ちょうどいい。私のデバイスの試運転に付き合ってはもらえぬか？」

「デバイス……ですか？」

「おお！見る！」

叶恵は嬉しそうにデバイスを突き出し、アインハルトに見せびらかせる。

「でも、なんで私なんですか？はやてさんや十梧二等空佐に頼めばよいのでは？」

アインハルトがそう言うのと、叶恵は気恥ずかしそうに

「じ、実は情けない話、デバイスをもらって興奮してしまい、2人共置いてきてしまったのだ……」

「では、待てば……」

「イヤだ！私は今すぐに使いたいのだ！それに性能を確かめるには、お前の方がいいしな……」

叶恵は拳を軽く握り、ファイティングポーズをアインハルトに見せる。

「あなたもストライクアーツか何かを？」

「ストライクアーツ？ああ、ヴィヴィオ等の武術の流派か。私は……そうだな……我流だな」

「我流……ですか」

アインハルトは少し考えた後、叶恵に向き直り「いいでしょう」と言った

「では、いいですか？」

「うぬ！」

アインハルトの問いに頷き、叶恵はデバイスを構える。

「セットアップ！」

アインハルトは銀

叶恵には藍色の魔力光が全身を包み込む。

輝きを失ってゆく2つの光の中から、アインハルトと叶恵がその姿を現した。

「おおおっ！！スゴいぞ！！！」

叶恵は自身の姿に興奮気味になる。

一見、スバルのバリアジャケットに酷似しているように見えるが、腰に巻かれているのはベルトではなく包帯、ズボンは白く膝を隠すほどの長さがある。

そして、その手には手の甲に蒼い球が埋め込まれたガンドレッド

「さあ！やるか！」

叶恵はアインハルトに向き合い、拳を構え、右足を前に左足を後ろに右自然体になる。

「では……………」

大人モードのアインハルトは、左足を強く踏み出し、叶恵に向かって走り出す。

では、まず小手調べに……………」

アインハルトは距離を詰めると、拳を叶恵に放つ。

「ふっ！」

「なっ!?!」

アインハルトは驚愕する。

拳を屈んで避けられ、腕を掴まれたと思った次の瞬間には、自身の体が逆さに宙を舞っていたからである。

「くう！」

体を捻り、空中で体勢を戻しながら無事に着陸する。

「合気道……………は初めてか？」

「合気道？」

アインハルトは立ち上がりながら、疑問の声をあげる。

「日本の武道の1つでな、小よく大を制する…だな」

叶恵は笑みを浮かべながら説明し、再び構え、走り出す。

「今度はこっちから行くぞ!!」

そう叫ぶと同時に、叶恵はアインハルトに右フックを繰り出す。

「くっ!」

苦痛の声をあげながらも、左腕で攻撃を防ぎ、叶恵の左足を蹴り払う。

そして、体勢を崩しているのを機と見たアインハルトは、拳を腹目掛けて繰り出す、が

「残念だな!」

「っ!」

余裕の笑みをこぼす叶恵はいつの間にか拳の上に、腕の力で逆さに乗っていた。

一瞬、啞然とするがアインハルトは右足を振り上げるが、軽々と避けられてしまった。

「どうした?こんなものではないのだろ」

ある程度距離をとり、変わらない笑みをアインハルトに向ける叶恵。

変則すぎる……。

これまで、幾度となく闘ってきたが

叶恵のような闘い方をする人間はいない。

しかし、倒せない相手ではない。

落ち着いて相手の動きを読めばいい……。

アインハルトは戸惑う頭に冷静さを取り戻そうとする。と、頭上から聞き慣れた赤いゴスロリ副隊長の怒った叫び声が聞こえた。

「コルウラアツ！！叶恵！！なに勝手な事してるんだ！！」

「げっ！赤ちび！」

「赤ちび言つな！！」

怒鳴り散らすヴィータに耳をふさぐ叶恵だが、背後から強烈なげんこつをくらう。

「ったあ！！」

痛みに頭を押さえ、涙目になりながら後ろを振り向くと、こちらを見据える赤い瞳と目があった。

「何をやってるんだ」

呆れ顔で叶恵を見る刹那。

「ゴラアアアツ！！叶恵え！！」

訓練場全体に響くような雄叫びをあげながらこちらに向かってくる獣とその後ろを走っている4人を見ると、罰が悪そうな顔をする。

「諦めて武装を解け」

「わかつ……」

《寝言は寝てから言いな》

突如、聞こえた声に刹那は叶恵のガンドレットを見る。

《俺の魂は……まだ、動いてないぜ!!》

ガンドレットに埋め込まれていた蒼い玉が輝き出す。

「刹那!! 離れる!!」

十悟が叫んだ時にはもう遅かった。

《オラアツ!!》

叶恵の周りに蒼き波動が溢れ、柱のように天に向かって昇ってゆく。

「ちいつ!!」

蒼い波動の柱から、服はボロボロだが、外傷は見られない刹那が出てきた。

「あれは、なんだ!？」

「蒼い衝撃ブルーインパクトや!!」

刹那の問い掛けにはやてが答え、ある物を投げ渡した。

「ヴァル……」

《久方ぶりです、ボス》

「そうだな、行けるか？」

《当たり前です》

ヴァルネラビティの返答に少し微笑み、蒼い波動を身に纏う叶恵を睨み付ける。

「希望は勇氣に、意志は覚悟に、不屈の魂はこの胸に！今、契約を元に汝の力を解き放て！」

刹那の手にある瑠璃色のクリスタル、ヴァルネラビリティが輝き刹那を包む。

「セットアップ……ヴァルネラビリティ！」

光の中から現れた刹那は、黒く長いコートを羽織り、その右手には銃身の長い銃剣。

「私達も手伝うで！」

隣にバリアジャケットを纏ったはやてが並ぼうとするが、左手を伸ばし

「俺、一人で十分だ……」

そう言った刹那は妙に目が輝いていた。

「まさか……………」

はやてが若干、呆れたような顔をする。
入ってしまったのだ。

スイッチが

バトルマニアの……………戦闘を始めて
10分経過

「うおおおおおっ!!！」

《ヒヤツハアアアアアアッ!!》

辺りに響くは、剣と拳がぶつかり合う音
2人……………いや、1人と“デバイス一機”の雄叫び。

刹那が振るうは、フォルム1モード2、日本刀の形のヴァルネラビ
リティー

叶恵……いや、デバイス一機が振るうは蒼い波動を纏わせた渾身の一撃。

叶恵は最初に発せられた蒼い波動に気を失い、デバイスに体を操られている状態にある。

《人間のクセにやるな!!》

「デバイスのクセに生意気だな!!」

デバイスにもし表情があつたなら、刹那と互いに笑いあっているだろう。

ぶつかり合っていた力と力は反発し、互いを突き放すが、次の瞬間にはまた高速で激突する。

「あれ、大丈夫なのか？」

2人の邪魔& a m p ;被害にあわないように、離れた場所に避難していたヴィータが率直な意見を述べた。

「まあ、大丈夫やる。何やかんやで刹那君も手加減してると思う……」

「剛破斬影撃!!」

《ルツアアアツ!!》

飛来する巨大な斬撃と蒼き波動が衝突し、辺りの大地は砕ける

「……………大丈夫か？」

「……………大丈夫やる」

「大丈夫じゃねーだろ」

「そうですね」

「そうですね」

「そっね」

ヴィータが問い、はやてが答え、十梧がつっこみ、アインハルト、鷺祐、唯華の3人が肯定する。

「そろそろ止めてくれないとシュミレーションが壊れるんですけど……………」

涙目のシャーリーは苦笑しながら言う。

「おおおおおっ!!」

《ヒヨオオオオツ!!》

しかし、周りの事を気にせず戦い続ける2人。

「ああー!!もっ!!誰か止めてー!!」

「……わかった」

シャーリーの叫びに答える声があった。

「アーシア……」

《はい!!》

十梧達の背後から声がした。

「よっ!!」

カキーン

野球でよく聞く金属音が鳴り響き、十梧の横を魔力の塊が通り抜け

《おう!?!う、動かねえ!?!》

叶恵に直撃し、そのまま金縛りにあったかのように体が硬直し、地面に転がった。

「なにやってんすか？」

はやての隣まで歩いてきたのは、白い髪に12歳とは思えぬ170cmの身長を持つ南條砂彦。

「まあ、あれだ。戦闘狂の闘いを見ていた」

砂彦の問いを十梧が答える。

「刹那君もそこまでにせえへんと、愛しのなのはちゃんに言いつけるで〜」

「……………わかった」

渋々だが、ヴァルネラビリティーを鞘となった銃身に納め、叶恵にバインドをかけた。

《おいっ！！その白髪年増ガキ！！》

「……………年増じゃねし！元からだ！」

刹那のバインドを縛られながらも立ち上がる叶恵。デバイスから吐かれた言葉に怒鳴る砂彦。

《マジックホームラン直撃して、少ししかたってないのに〜！？ありえないよ！？》

砂彦が先ほど放った技は、マジックホームランと呼び、特殊な波長を纏った魔力の塊を自由自在に変化できるアーシア（バットver）で打ち出し、当たった相手は約5秒は頭が混乱

解けたとしても十秒は体の自由がきかない。
だが、叶恵は動き出す

「刹那君！！」

「……………わかった」

はやての言葉に、刹那は叶恵を縛るバインドを強めた

その時

叶恵のガンドレッドに埋め込まれた蒼い玉が、今まで以上の輝きを見せ、波動でバインドを砕き、大地を削り、大気を唸らせる

《ハハハハハハツ！！これが俺の最終奥義！！》

叶恵の周りの大地が一気に吹き飛び、刹那達に向かってくる。

「ちっ！！！」

「くっそが！！！」

刹那が斬り、砂彦とヴィータ、アインハルトが打ち砕き、十悟が撃ち抜く

これによって大地の破片は塵に化し、砂塵となって辺りを舞う。

「本気になりやがった……」

額に冷や汗が流れる。

送られた資料に書かれた性能、設計図、制作過程……被害報告
全てにおいてS級

しかも人間の体を操るデバイス。

だが、奴は知らない。

今、操っている人間が何者かを

《覚悟はいいか!!》

先程とは比にならない蒼き波動が拳に纏わりつき、嵐のように逆巻く

刹那もその様子に余裕の表情を消し、十梧は鷺祐と唯華の前に立ち、
2人の安全を確保させる。

「十梧!!あれを止めるにはどうしたら……」

「止めれない。使用者の魔力が底尽きるまでは動くぞ」

「なっ!?!それを知つとる上であの子にデバイスをやったんか!!」

はやての表情が怒りに満ちる。

後ろにいる鷺祐と唯華にもそのようなデバイスを使わせようとする
十梧に腸が煮えたぎる。

「何でや!!何で、そんなデバイスを……」

「……まっ白のノート」

「はっ？」

「まあ、アイツを信じるさ」

はやては茫然し呆れる。

十梧の表情には緊張感は無く、変わりに何か楽しそうだ。

「来ますよ！！」

アインハルトの声に前に向き直る。

《消えろおおおっ！！》

雄叫びを上げるデバイス。叶恵は蒼き波動が渦巻く拳を振り構えて、走り出す。

「アーシア！もう一発……………」

《わかったよ！！》

砂彦が片手に球状の魔力の塊を形成する。

「……………てい……………」

不意に

砂彦の耳に小さな声が聞こえた

それと同時に叶恵の動きが止まっていた、いや、微かだが震えていた。

「私の体で……………」

今度ははっきり聞こえた。

声の主は

「何をしている……………！」

叶恵

「うおおおおおっ！……！」

《うおっ！？》

拳の矛先が足元の地面に変わり、そのまま叩き付けた！
蒼き波動が天、高々と登る

シュミレーションで作られた背景は全て、消え失せ
辺りから白い煙がたちこめる。

「私の体は……………」

ゆらりと煙の中を動く影は、崩れるように倒れた

「……蒼仁の物……」

第9 無人世界 グリユーエン軌道拘置所

とある男性管理局員がこの拘置所の中を歩いていた。
理由は1つ

ある男の留置されているかの確認

その男は無限の欲望と呼ばれ
アンリミテッド・デザイア

その名の通り

己が欲望のために動く異能の天才

その驚異の頭脳を用いて、人造魔導師、戦闘機人を作り出し

聖王のゆりかごでミッドチルダを火の海にしようとした。

そして、局員は茫然とする。

その男が居るはずの部屋にはネズミー匹もおらず。
変わりに置き手紙が机の上に乗っていた。

ここに来た局員へ

退屈なので、遊びに行つてきます。ついでに捕まった娘達も連れて
いきますが
必ず帰つてきますので、ご安心を

ジェイル・スカリエッティより

第22話：ヒャーリジデバイス

機動六課

ドゴッ

鈍い音が廊下に響く

「はぁ……………はぁ……………」

「……………いいか？」

医務室前

振り切った拳をおさめ、肩から息を吸うはやて。前に立つ十梧の頬は赤くなっている。

「……………ちゃんと説明してくれるやろっな？」

「あぁ……………」

問いに短く答え、背を向けて歩いてゆく十梧。

その後を煮えたぎる怒りを抑えながらついて行くはやて。

その手には叶恵が使っていたデバイスが封印されて握られていた。

十梧とはやてが向かった先は新しく造られた第2研究室
中に入ると、タバコが部屋中に染み込んでいるかのような匂いがし
た。

「ん？十梧隊長じゃん……ないですか」

部屋奥から現れた緑色のツンツン髪に学者服を羽織った男
ソルカ・ハースン
その手には煙を漂わせるタバコ

「吸うんだったら、換気扇つける」

「あ、わり……悪いです」

敬語だが敬語じゃないんだが、中途半端な話し方をするソルカはは
やてに視線変えて

「入籍でもしたか……んですか？」

「バ、バカか、あんたは！！なんでこんな奴と私が結婚せえへんと
いけへんのや！！」

「別にあなたと十梧隊長が、入籍したとは言ってませんよ」

顔を赤くするはやてに

悪戯っぽく笑うソルカは、タバコを吸い、煙を吐き出し十梧に向き

直る。

「どうせ、バカ馬の苦情でしょ？」

「バカ馬？」

「ほら、あんた……あなたが持つてる【ヒアールジデバイス】だ……ですよ」

はやては手に持つデバイスを見る。

「ヒアールジデバイス……」

「異常までのスペックを誇り、それを制御できる人間とAIが少ない。そのように、人間を操る事もできる物だってあるし、最悪、死ぬ事もある。」

まさにデバイス界の異端」

ソルカは淡々と述べる。

バンッ

はやては怒りに、ヒアールジデバイスを机に叩きつけた。

「やったら……！尚更、あの子達には……」

怒鳴るはやての目の前に手を突き出し、黙らせるソルカ。

「いいや。むしろあの子達だからこそなんだ……ですよ」

はやてから手を下ろしたソルカは、胸ポケットから灰皿を取り出し、タバコの火を消す。

「汚れもない、真っ白なノートを染めてしまうのですよ」

ソルカは妖しげな笑みを浮かべる。

「何を言ってるんや……？」

「簡単に言うとな……」

首を傾げ、怪訝な顔をするはやてに十梧がホワイトボードにミッドチルダ式

近代ベルカ式

古代ベルカ式

と書きなぐった。

「俺達の使っている魔法の術式はこの3つだ」

「それぐらい常識やろ？」

「そつだな、だが」

十梧は続いて、ヒールリジデバイスと書き周りを丸で囲む。

「これらでは……」

3つの術式から線を丸に向かって伸ばし、触れたと同時に×のマークをつける。

「ダメ、使う事は愚かへタしたらケガや叶恵みたいになる。だが…」

3つの術式が書かれている下に、横に長細い丸を書いた。

「新しい……………」。

そう、新しい術式を造る必要があるのですよ」

ソルカは机に置かれたヒアリーリジデバイスを拾い言う。

「新しい術式？」

「そう！ヒアリーリジデバイスを使いこなす新たな術式ですよ」

ソルカはどこか嬉しそうに語る。

「その為にあの子達を…」

「はい」

ソルカの即答に、はやては怒りに握り拳を震わせる。
それでは実験の為のモルモットではないか

「理由は3つです。

1、あの子達の術式がベルカ式である。

2、3人ともAAクラスの魔力保有者。

3、“あの子達”だから」

はやては疑問に思う。

最後の言った言葉、おかしくあらへんか？

前の2つはまだわかるような気がする

だが、あの子達だからと言う理由はどうゆう事なのだろう

「何故、あの子達なんだ？って、思ってんだろ」

十悟にズバリ言い当てられたのが気に入らないのか、はやてはムスツと頬を膨らませる。

「新たな術式を作るには、手探りで何かを作るような自由な発想力が必要になるんだ……ですよ」

ソルカはホワイトボードに、叶恵、鷺祐、唯華、と名付けた棒人間を書く。

「私とあの子達が初めて会ったその日、私はあの子達にあるテストをやらせました」

「テスト？」

「発想力、想像力、その他もろもろを調査する問題で、答えは複数存在します」

机の引き出しからソルカは「ソルカ先生の試験打破テスト」と書かれた紙を一枚、はやてに渡す。

「その複数ある答えを統計した結果

3人とも、素晴らしい発想力と想像力でしてね。例えるならSラン

クオーバーですね」

3人の棒人間の上に「発想力、想像力、Sランクオーバー」と書く。

「その時、私はこう確信しました。『この子達ならやれる』ってね。だから、囑託試験を“合格させた”んですよ」

楽しそうに喋るソルカ。“合格させた”？

「「どうゆう事だ（や）？」」「重なる声

十梧とはやての2人は互いを睨む。

「「いい加減（せえ！！）しろ！！」」

その様子に溜まらず吹き出したソルカ。

「ハハハハ！タシアの言った通りだ！本当に仲がいいですね」

「「だれが！！」」

また同時

十梧とはやてはさらに目を鋭くして睨み合う。

「いやまったく！あなたはどう思いますか“剣帝さん”？」

ソルカの言葉と共に部屋の扉が開き、入ってきたのは赤と黒の髪を持つ刹那。

「いつから気付いた？それでも気配は消していた方だが……」

「……あなたが十梧隊長とはやてさんの後ろをストーキングした辺りからだ……です」片目を閉じて舌を出し、意地悪そうな顔をするソルカの喉仏にヴァルネラビリティーの剣先が向けられる。

「これ以上ふざけた態度をとるなら、一生喋れないようにしてやるぞ」

表情では笑みを見せる刹那だが、その瞳は笑っていないかった。

「まあ、まあ。落ちついて、落ちついて」

だが、依然に態度を変えないソルカは向けられた剣を気にせず話し始める。

「実は私、十梧隊長に頼まれてあの子達に勉強を教えましたか……すみません、ちゃんとした事、教えてません」

ソルカはそう言うと、十梧に頭を下げる。

「試験はちょっとした脅は……コネを使いました」何かを言い掛けたようだが、気のせいであろう。気のせいだ……よな？

十梧は自分の部下に底知れぬ不安を持つ。

「率直に聞く。あいつ等にヒアーリジデバイスを扱えるのか？少なくとも叶恵は……」

「剣帝さん。あなたは何を見てたんですか？叶恵の最後の1撃……」

あれは彼女の意思で放たれたものでしょ？」

ソルカはホワイトボードに書かれた叶恵の棒人間に赤で丸をする。

「あとの2人も……」

その時

部屋に付けられてあるアラームが赤く光り、騒々しい音が緊急事態を知らせる。

『はやて部隊長!』

はやての目の前にグリフィスが映ったモニターが現れる。

「どうしたんや、グリフィス君!」 『臨海第1空港と民間避難所に向かう人間と未確認の飛行兵器を発見しました』

「臨海第1空港だと!?!」

十梧は思わず声が大きくなる。

何故なら臨海第1空港には機動六課に貸す、艦を置いているからだ。

『現在、108部隊が現場に急行していますが、本局から機動六課出動命令が!』

「わかった。私もすぐ行く!

せつちゃん!十梧!」

「「せつちゃん!?!」」

はやての言葉に十梧とソルカは刹那を見る。

「……………なんだ?」

「いや……………」

「……………プフツ」

「そんな事しとる場合じゃないで!

なのはちゃんとフェイトちゃんとシグナムにティアナまでいないんや!

開いた穴はアンタらが埋めてな」

ハラウン執務官とランスター執務官はは2日前に仕事でどこかに行っただっけ?

十梧がそう思っていると重い一撃が脳天に衝撃を与える。

「なに、ボケーツとしてんのや!」

「痛いんだよ!てか、なんでハリセンなんか持ってんだよ!」

痛みに頭を押さえながら睨んでくる十梧を気にせず、はやては六課全体に放送をかけた。

『再建された機動六課初出勤や!!隊長陣3人、FW1人がおらへんけど!気合いいれていくで!!!』

「「「おおおーっ!」「」「」

部屋の外

どこかで数人のかけ声が聞こえた。

「せつちゃんはスターズ隊、十梧はライトニング隊の隊長代理頼むで！」

「わかった」「他の奴らは？分けないのか？」

「十梧、頼むわ。もちろん全員」

「マジか……了解した」

めんどくさそう顔をしながら承諾した十梧。

彼の元々の仕事は、総勢千名を超える程の隊をまとめる部隊長。

その役柄をはやてはよく知っている。

だから、分断するのではなくすべて十梧に任せ、なるべく刹那の負担を減らし、動かしやすくする。

はやてが今、思い浮かぶ理想的な組み合わせだ。

第2研究室から出た十梧と刹那はみんなが揃っているはずの、屋上のヘリポートに向かって走っていた。

「それにしても、空蔵二等空佐とはやては仲がいいな」

「はあ!？」突然の刹那の言葉に声がうらがえる。

「バカ言つな！俺はあのタヌキに弱みを握られ、言いように……」

「そうか？俺から見ればあんたは楽しそうに見えるが？」

「楽しいわけ……」

十悟が何かを言う前に、ヘリポートで飛び立つ準備をしている2つのヘリを見つける。

「刹那あー！！早くしろ！！」

「空蔵隊長ー！！」

ヘリ付近で刹那と十悟を呼ぶ声

「この話は後でな」

「……つたく」

刹那はニヤリと笑い、十悟はスッキリしない表情で皆のもとへ駆けてゆく。

ヴァイスが操縦するヘリに乗り込んだ刹那、ヴィータ、スバルそして、新たにスターズ隊になった砂彦とそのデバイスアジアは、目の前のモニターに映る十悟が話す作戦を聞いていた

『刹那率いるスターズ隊は臨海第1空港に向かい敵の殲滅と逃げ遅れた人の救出。』

現地には陸士108部隊もいる。到着しだい合流してくれ』

「わかった」

『よし、みんな無事に帰ってこいよ!』

十梧の言葉と共にモニターが消える。

「スバル。お前は陸士108部隊と一緒に逃げ遅れた人の救出を頼む」

「了解です!」

「俺、ヴィータ、砂彦の3人は、敵の殲滅にあたるぞ」

「わかった」

「了解」

「わかりました!」

4人が役割を了承したと同時に、ヘリの機体が大きく揺れた。

「っ!?!どうした、ヴァイス!」

「早速、敵さんのご登場だよ!」

ヴィータはその言葉に窓を覗き込むと、四角形をした謎の飛行物体がヘリに突っ込んできた。

「しっかり捕まってるよ!」

ヴァイスはそう言うと同時にヘリの速度を上げ、飛行物体の攻撃を避ける。

飛行物体はヘリの後を追いかけてくる。
しかも、ドンドン距離を詰めてきている。

「追いつかれちゃうよ!」

「んな事、わかってらあ!」

追いかけてくる飛行物体を見ながらアーシアはヴァイスに知らせる。
ヘリを急降下させながら叫ぶヴァイス。

「ハッチを開ける!!俺がでる!!」

「いや、私が行く!!」

ハッチが開く

「アーシア!」

「はい!」

アウトフレームから、球に戻ったアーシアを手に持ち砂彦が空へと飛び込んだ。

「セットアップ!」

その言葉と共に光に包まれ、光が止むとバリアジャケットを装着し、

右手にバット状のアーシアを握った砂彦。

『おい、砂彦!!!』

「ここは任せて、さっさと行ってください!!!」

砂彦の前にモニターが現れヴィータは叫ぶが、振り返らずに飛行物体を見据える。

『……………頼めるか？砂彦』

モニター越しに映る刹那に、コクリと頭を縦に振った。

「ヴァイス、出せ!!!」

「いいのか？」

「ああ」ヴァイスは高度をあげ、その場からへりを飛ばしてゆく。

《今日はやけにやる気だね?》

「そうか？まあ、いいか」

砂彦は突進してきた飛行物体を、アーシアを振り上げて吹き飛ばす。

「来な!! 屑鉄にしてやるよ!!!」

ヴァイスのへりが飛行物体に襲われている頃

アルトが操るへりは民間避難所に向かって飛んでいた。

ヴァイスの乗る物とは一回り大きいへりで、内部も十数人は乗れる

スペースがある。

そこで、十梧はメンバーに作戦内容を説明していた。

「エリオ、キャロ、ヴェーネは近寄ってくる敵の殲滅。俺とタシアは陸士108部隊と協力して民間人の移動。終わり次第そっちに加わる。」

操縦士、目的地まではあとどれくらいだ！」

「あと、2分もすれば着きます！それと、私のことはアルトで！」

「それじゃあ、アルト！ハッチを開ける！」

アルトは十梧に「了解」と答えながら、ヘリのハッチを開ける。

「最後にヤバくなったら、逃げて俺を呼べ！3分で助けに行く！」

「「はい！」」

エリオ、キャロ、ヴェーネはそう返事してハッチから空に飛び降りていった。

「ストラーダ！」

「フリード！ケリユケイオン！」

《《stand by ready!!》》

「キュルル！」

赤と桃色の光が発せられ、本来の姿に戻ったフリードに乗るエリオ

とキヤロ。

「わぁ！2人とも、カッコいいね！」

明るい声に2人は横を見る。

そこには、艶やかな青い髪をなびかせ、優しく笑みを見せるヴェーネ。

その身を守るバリアジャケットは、聖騎士を思わせるような風采
右手にはヴェーネの剣型デバイス、ヴェルナー

「初めての同じ任務だけど、よろしくね！」

「はい、こちらこそよろしく願います！」

互いに挨拶を交わすエリオとヴェーネだが

依然、キヤロは自分の胸に手を当てて黙っていた。

「どうしたの？キヤロ」

「大きい……いや！何でも無いよ！」

顔を赤くしながら、ヴェーネ、特に破壊力のある胸と自分の胸を交互に見てため息をつく。

「来たみたいだよ」

空を飛ぶヴェーネ達の斜め下

破壊されたビルの破片が散らばる道路を走る十数の修道士姿の人造

人間を見つける。

「あれが、ホムンクルス人造人間……」

「ただの人にしか見えない……」

「でも話し合いは通じないよ。やっつけるしかないんだ」

そう言ってヴェーネは急降下

走る修道士の前に剣を構え立つ。

「……我らは聖王……」

「うるさいっ！」

振り払われた剣は連結刃

自在に伸びる刃は目の前にいた修道士を一片に切り裂いた

「本当に砂になった……」

エリオとキャロは斬られた修道士達が砂と化していくのを、目を丸くしながら見ていた。

だが、いつまでも呆然とはしていられない。

前に迫る四角形の飛行物体を視界に捉え、エリオはストラダを握り直す。

「行くよ！ストラダ！」《All Right! Form Zwei・Desnform!》

ストレージの後方に付けられていた噴出口が2つから4つの増え、

火を噴きエリオは空を翔る。

「フリード！ブラスト・レイ！」

キャロの号令と共にフリードの口内が赤くなり、業炎を飛行物体に向かつて放った。

「うわゝ、すごい。

私も負けてられないか！」

上空で闘う2人を見た後、新たに現れた修道士にヴェルナーの剣先を向けて走り出す。

アカナシムの襲撃によって、破壊されたクラナガンのビル街の海側のはずれ

そこにヴァントの姿があった。

「ふん……………」

その後ろには50名以上のホムンクルス、トラッシュユが歩いていた。

「つまらん仕事だが…………これもアーク様のため」

ポツリ呟いたヴァントが視線の先には

機動六課があった…………

第23話：守れ！前編

t u r n 砂彦

炸裂音

1つまた1つと破壊されてゆく四角形の飛行物体

その中心にいたのは

白き髪を持つ巨身の少年

南條 砂彦

「はあっ！！」

ヴィータのグラーフアイゼン程の大きさを持つハンマーもといアジアを振り払い、飛行物体を同時に3体を破壊する。

しかし、破壊された飛行物体から出る煙の中から、新たに飛行物体が次々と10体以上は現れる。

《うっわー。まだ来るよ……》

アジアは呆れ口調で言う。

へりを降りてからあれこれ1時間弱

刹那達が行った臨海第1空港に近づく飛行物体を破壊し続けている。

だが、壊しても一向に減る様子がない飛行物体に対して、砂彦は疲労を隠せずにいた。

「はぁ……………はぁ……………」

顎から滴り落ちる汗

肩から深呼吸し、悪くなるばかりの状況のイライラした気分を落ち着かせる。

「早く……………終わらせてくれよ……………」

刹那達が向かった空港の方をしばらく見た後、前に向き直りハンマー型のアーシアを振り上げる。

「アーシア!!」

《はいはい!》

アーシアが光を放つ

しかも、ドンドンと縦細に肥大化してゆく。

アーシアの能力は

使用者がイメージした通りの形や大きさなどに自在に姿を変える事ができる。

《はい、できた!》

光が四散し、中から現れたのはグラーファイゼンのギガントフォルムに匹敵するほどの大きさを持つ、巨大なハンマー。

「ぐうっ!」体のバランスが後ろに崩れる。

これほど大きくなったと言うことは、同時に質量も変わっている。当たり前のように12歳の筋力では支えきれない事がない。

しかし、砂彦は己の腕に強化魔法を施し、体勢を立て直す。

「くっつらええー!!!」

向かってくる敵を見据え、タイミングを見計らい、巨大なハンマーを振り下ろす

飛行物体は下の廃墟と化したビルを巻き込みながら全てを叩き潰され、辺りには跡形も無くなった。

「うおおおっ!!!」

だが、それだけでは終わらない。

潰れた廃墟ビルの砂塵の中から現れた飛行物体

その真下、地面にのめり込んでいた巨大なハンマーを砂彦は全力で振り上げる。

真下に目となるカメラが設置されていないのか、回避行動を取れずに飛行物体はただ、破壊される……

《……………半径1キロに敵機の反応なし……………。
ふうー！ひと段落だよ……………》

アーシアの報告に安堵の溜め息をついて、近くの廃墟ビルに降りた砂彦は機動六課との連絡をとろうとした。

「こちら、スターズ5。

本部……………応答が無い？」

目の前のモニターには砂嵐が流れるだけで、ロングアーチからの返答が無い。

嫌な予感がする……………

「アーシア…機動六課に戻るぞ」

《え？任務は…………》

戸惑うアーシアをよそに、砂彦は機動六課への帰路を辿っていった。

turnヴェーネ

伸びる連結刃は、群となして襲いかかる修道士を一刀両断する。

「大したことない……………けど。すこし多すぎじゃないかな？」

不満げな表情をするヴェーネの瞳に映るのは
100を優に越す修道士達の姿と、数十の黒い飛行物体。

「はあ……………はあ……………」

背後で息を荒げる赤毛の少年、エリオはヴェーネに背を向けてストライダを構える。

その隣には飛竜、フリードリヒに跨るキャロ
エリオ同様、表情に疲れが見える。

「うーん……………形勢的に不利だね」

ヴェーネは腕を組み、唸りながら周りを見る。

地には滅る事の無い修道士姿のホムンクルス人造人間

空には我が物顔で飛行する四角形の物体の群れ

状況は悪化してゆく一方だ。

「十梧さん、呼んじゃう?」

ヴェーネは振り返り、エリオとキャロに問うが
即答で

「「まだやれます!」」

「「よし!じゃあ、もう一踏ん張りしよ!」」

ヴェーネはそう言って、自身のデバイス ヴェルナーを振りかざす、
刀身には熱くたぎる炎が纏われる。

「シグナムさん、直伝!!」

飛竜………一閃!!」

振り下ろされたヴェルナーは、鞭のようになりながら目の前の修道士を一掃してゆく。

「行くよ、ストラダー!!」

《Explosion》

ストラダーダから排出される2つの薬莢が地面についたと同時に、エリオはソニックムーブで上空に浮上

「うおおーっ!!」

《Thunder Rage!》

槍を迸る青き雷

それを薙ぎ払い、周辺に寄ってくる飛行物体を横に断ち切る

そして、エリオは空を飛ぶ見覚えのある人影を見つけ尚、上昇する。

上空に見えたのは黒いマントを羽織った黒髪の青年

ミーティングではやてが見せた、クラナガン襲撃の首謀者と思しきメンバーの1人

名は……妃山 真武

「こんにちは」

急接近してくるエリオに、焦った様子を見せずににこやかに笑う真武。

その笑みには寒気を覚える。

「あなたをクラナガン襲撃の容疑で逮捕します!!」エリオはそう叫びながら、さらに加速

雷を纏った槍の刃先を真武に向けて突撃

しかし

「遅いよ」

そこには真武はおらず
代わりに、重い一撃が腹をえぐる。

「ぐっ!？」

吐血し、何があったのかわからないまま
エリオは廃墟ビルを貫通しながら吹き飛ばす。

「エリオ君!!」

目の前が暗くなる中

耳に入る少女の叫び声に、エリオは意識を覚醒させ、差し出された
手を握る。

「大丈夫!？」

フリードに乗ると、キャロが心配な面持で話しかける。

「大丈夫だよ、キャロ。ありがとう……」

腹がまだ痛むが、彼女を心配をかせげないため、エリオは口の血
を拭いながら笑う。

「まったく!無茶すぎだよ!」聞こえた声の主　ヴェーネは真武
に向かって廃墟ビルの壁を垂直に走っていた。

ベクトル操作

魔力で自身にのしかかる重力の進行方向を曲げるミッド式の魔法。

だが、ヴェーネの使うそれは微々たるもの

AIの無いアームドデバイスを使い、ややこしい演算を苦手とする彼女では扱える魔法じゃないため、殆ど己の身体能力で上ってゆく。

「とりやつー！」

ビルの屋上に着くと、ヴェルナーの剣先を真武に向けて伸ばすが

ヒュンッ

風を斬るようなそんな音が聞こえたその刹那に
ヴェルナーの刀身が散り散りとなる。

「意味ないよ…！」

真武の手には刀身の長い日本刀が握られていた。

「どうかな！」ヴェーネの力強い声と共に余裕の笑みを見せる真武の頬を、散り散りになったヴェルナーの刀身の1つが急速に回転しながら飛行し掠った。

ヴェルナーのもう1つの形態

その名も、『フラインエッジ飛来刃モード』

連結刃から刀身を均等に分離させ、魔力によりバラバラになった刃を自由自在に操る事ができる。ヴェーネは真武からの超高速攻撃を受ける1秒たらずで、連結刃から飛来刃モードへと移行していた。

「ん……………」

四方八方から飛んでくる飛来刃に、真武は手に持つ刀で防ぐが捌ききれない。

「見切れないでしょ！」

自慢げに言い放つヴェーネの視線の先、真武の後ろには拳に雷を宿して突進するエリオの姿があった。

「紫電！」

「あ……………」

「チエーン・バインド！！」

真武が刀を振り払おうとしたが、キャロから放たれた魔力の鎖が腕に絡みつき、それを許さない。

「一閃！！」

エリオの一撃は抵抗できない真武の頬を捉え、紫電を撒き散らしながら建物へと吹き飛ばした。

「ナイス、エリオ！」

元の形に戻ったヴェルナーを片手に、ヴェーネはエリオに左手の親指を立てる。

と

エリオとキャロの目に恐怖が映される

ヴェーネもその後ろの殺気に気付いたが

体が動かない

ひんやり、冷たい感触が肩に伝わり

「……………やあ」

この一言と共に、ヴェーネは背中を斬りつけられた

臨海第一空港

t u r n スバル

辺りは静寂

空港は燃えてるわけでもなければ、壊されてもない

ただ、作り出された極寒の中で凍りついていた

逃げ惑っていた人も

避難を誘導する魔導師も

すべてが堅く閉ざされた絶氷の中

そんな地獄のような場で繰り広げられているのは、まさに死闘

「おおおおおっ！」

雄叫びを上げるスバル

その体の至る所が凍り付いている。

それでも彼女はローラーブーツを走らせ、青い髪を揺らしながら氷の世界を疾走する。

行く先には、不気味な笑みを浮かべながら大剣を振り払おう修道士姿の男 ブレイド。

大剣から発せられた衝撃波は3つ

それぞれがスバルに向かう。

「マツハキヤリバー！」

《Lord Cartridge!》

リボルバーナックルから排出された薬莢は、地面に落ちる前に凍りつき、砕け散る。

「リボルバーシュートオツ!!」

リボルバースピナーの回転で生じた衝撃波を、自身の真っ正面を走ってくる衝撃波に向かって拳から放つ

2つの衝撃波はぶつかり合い、氷の地面を砕き、相殺

その跡をスバルは高速で走り抜け、ブレイドへと近づいてゆく。

「甘めなあー!!」

ブレイドは地面に大剣を突き刺すと、氷に亀裂が走り、亀裂から衝撃波が火山の噴火のように立ち昇る

「つくう!!」

衝撃波の柱を左腕に受けてしまったスバルは苦痛に満ちた悲鳴をあげる。

ブレイドは一瞬の間を逃さなかった

スバルに高速で接近、腹を大剣で殴りつけ、その手で傷を負った左腕を掴み、2メートルはある氷へと投げつける。

投げられたスバルは、抵抗の1つもできずに氷へと叩き付けられる。

「ん〜あ？おおい、つまらねえーぞお？早く……立てよお!!」

ブレイドは立ち上がらないスバルに向かって、今まで以上に大きい衝撃波を放つ。

スバルの左腕はまったく動かず、うまく立てない

だが、迫る衝撃波に対して避ける気配がない、いやもとから避ける気がない。

なぜなら、叩きつけられた氷の中には2人の人間、おそらく親子な

のである。子を庇うように抱きかかえる女性が凍っていた。

今、避けてしまえば衝撃波は氷付けの親子を砕いてしまう。
スバルは痛む左手を前に突き出し、青いバレーボール程のスフィア
形成する。

氷を砕きながら距離を縮めてくる衝撃波を見据え、スバルは引き構
えた右の拳に力を入れ

「ドイツバイイン……バスタアアツ！！」

放たれた青い砲撃は直進し、衝撃波とぶつかり合う。

2つの力は一瞬の均衡を保つが、青き光が衝撃波を貫き、ブレイド
に向かって真っ直ぐ進んでゆく。

「クハハハハハッ！！そうでないとなあっ！！」

ブレイドは大きな声で笑いながら、青い砲撃に吞まれていった。

t u r n 刹那

「あつちは確か、スバルの方か？」

爆発音がした方を一瞬だけ見た刹那は、即座に首を曲げる。

その横を氷槍が通り抜けてゆく。

「……………死ね」

冷たい口調を言い放ちながら、刹那に氷柱に似た槍を突き出す仮面を被った少年 リュー

刹那はリュウの攻撃を避けるとその場から飛び退きながら、3つの魔力弾を放つ。

「……………無駄」

リュウは迫り来る魔力弾を手に持つ氷槍を振り払う。氷槍に触れた魔力弾は一瞬にして凍り、砕け散る。

《魔法も例外なく凍りますね》

「厄介だな」

刹那は自身が身に纏っているバリアジャケットとヴァルネラビリティの刃の凍り付いた部分を見ながら言う。

リュウの持つ槍は少し触れるだけでも凍りつく、非常に危険な代物である。となれば接近戦は好ましくない
選ぶべき戦法は……………

「ヴァル。フォーム2チェーンリボルバー！」

《All Right、My lord!
form2.Chain Revolver!》

ヴァルネラビリティーが山吹色の輝きに包まれ、刹那の手には2連銃身の白き双銃が握られていた。

「……………意味ない」

リユーは氷槍を地面に叩きつけ、1メートルはある氷柱を5つ作り出すと、刹那に向かってそれらを放った。

「ヴァル！ヴォルカニックレイジ！」

《Volcanic Rage, Set!》

双銃の銃口をリユーに向けた刹那の周りに、10の熱く燃えたぎる炎を宿した槍の魔力弾が形成される。

「シュートツ！」

引き金を引くと同時に放たれる炎熱の槍は、向かいくる氷柱を溶かし落とす。

残った5発のヴォルカニックレイジは立ち込む蒸気を晴らし、リユーへ突き進んでゆくが、氷槍に触れると凍りつく。

だが、これは予想の範囲内
刹那は立て続けに高速で魔力弾を撃ち込んでゆく。

「……………いい加減」

後手に回っているリユーは、次第にイラついた様子を見せ始めると氷槍を空に高々と掲げ

「我に応え。仇なす者を永久の虚無へと誘え（いざなえ）！セルシ

ウスの氷槍！」

リユーがそう叫んだ

その途端、刹那の周りに黒い影がさす。

《上です！》

「なっ!?!」

空を見上げた刹那は驚愕する。

自らの遙か頭上に空港全体ほどの大きさを持つ氷塊が雲のように浮かんでいた。

「……終わりだ」

刹那が空から前に視線を変えた頃には、リユーの姿は消えていた。

「どっするか……」

「刹那ーっ!」

空を見ていると、避難者の護衛をしていたヴィータが飛んできた。

「あれは何だよ?!いきなり出てきやがって……」

「敵の置き土産さ。それより、あれを壊すぞ」

「当たり前だ!あんなの落ちて来ちゃ、避難者もヤベーからな!」

ヴィータはグラーフアイゼンを持ち構えながら答える。
刹那は「そうだな」と言いながらまた、空を見上げる。

turnヴィヴィオ

「刹那パパ達、大丈夫かな……………」

「大丈夫だって！みんな強い事はヴィヴィオが一番わかるじゃん！」
心配そうな声を出すヴィヴィオに、八重歯を見せながら励ましの言葉をかける元気な少女 リオ。

管理局員ではないヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオの4人は安全のため、シャマルと叶恵達が医務室にいた。

「……………叶恵さんは」

「大丈夫ですよ。頭を少し打った程度ですし……………」

「あたしもいるしね！」

話しているアインハルトと鷺祐の間に入った山吹色の髪を持つ少女
センは胸をはって言った。

「そうだね、センも居るからね」

鷺祐は微笑みながらセンの頭を撫でる。

センは居心地良さそうな顔で「えへへ」と笑みをこぼす。

その横で唯華が頬を赤く染めて羨ましそうな顔をするが、頭をブンと振ってベッドに眠る叶恵に視線を移す。

「叶恵が使ってたデバイスって、私と鷺祐が持つてるのと同じよね……………」

「姿形は違っていても、何かがあるのは間違いなさそうですね……………」

鷺祐と唯華は自身のデバイスを取り出す

これが自分達に何をもたらすのか……………」

不安が募る一方だ。

重々しい空気が流れると、そう思ったその時

各部屋に取り付けられている警報機が一斉に鳴りだした。

「なに?!」

ヴィヴィオの声に続いて、ロングアーチからの状況報告が流れる。

《テロの首謀者と思しき人物が人造人間ホムンクルスを引き連れ、機動六課の敷地内に侵入!!! 総員、第一級警戒を!!!》

「本当の目的はこっちかい……………」

歯を噛み締め、モニターに映るヴァントと人造人間ホムンクルスを睨むはやて

闘いはまだ序曲

生きたいならば

抗って見せよ脆弱な者共よ

第23話：守れ！前編（後書き）

今回は訂正などしていたら遅れました

すみません

間違いが多くて多くて……………（泣）

ビチャード・オンさん

本当にありがとうございましたm（|）（|）m

それにしても

やっとセンでたよ（笑）

ぶっちゃけ忘れてましたからね

忘れたと言うと

アギト……………1回も出てねー

15話でシグナムと一緒に出すべきだったと後悔します。

完璧、出るタイミングを失いましたよ、アギト（笑）まあ、頑張つて出しますが……………

では、また次回まで

感想、よろしくお願いします！！

第24話：守れ！中編

turnはやて

モニターに映るのは

50は超える修道士姿の人造人間ホームクルスと、それらを率いるように前を歩く筋肉質な男。おそらく、テロの首謀者の1人であろう。

「やられた……………」

主力メンバーが全員出動していることは管理局の中で最も手薄になる。これではJS事件と同じではないか。

と、筋肉質の男が設置されている監視カメラに気付いたのか、カメラに向かって歩き出し

ガシヤッ

機材が潰された音と共にモニターに砂嵐が走る。

「カメラ1台破損。別カメラの映像に移し替えます」

ルキノがパーソナルを慣れた手つきで、モニターに別カメラからの映像を写す。

そのカメラは入り口に設置されているカメラで、テロの後ろ姿を写していた。

と、いきなり

はやての目の前にヴィヴィオの顔がドUPされたモニターが現れる。

「な?! ヴィ、ヴィヴィオ!?!」

『敵が外にいるんですよ!?! だったら私たちが闘います』

「なに言ってんねん!! ストライクアーツみたいなスポーツと違うんやで!!」

『わかってます……でも、このまま黙ってるわけにはいかないんです!!』

ヴィヴィオはそう言うと、はやての返事を待たずに通信を切った。

「……どうするんですか?」

ルキノが苦笑いしながら聞くと、はやてはため息をつき

「さすがはなのはちゃんの娘って事はあるで……。空蔵二等空佐に繋いで」

「はい!……っ!?! これは……通信妨害!?!」

ロングアーチの1人が苦々しく言う。

モニターには「error」と赤く表示されている。

「どづいっ……」

「簡単ですよ。外との連絡をとられると厄介難ですよ」

後ろから見知らぬ男の声にはやては、ガタツと音をたてながらイス

を立ち上がり振り向く。そこには緑色のオールバックの髪に、スーツを着た男が立っていた。

「何者や！？あんたは！！！」

「あなた方が言うテロの首謀者ですよ……」

「フッフ」と微笑む男を睨むはやて。

turn 驚祐

外に出たヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ、そして驚祐と唯華の6人は、ホムンクルス 人造人間のいる方へと走っていた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「数が多いんです。なら、こちらもなるべく多い方がいいんですよ」アインハルトの問いにそう答えた驚祐は、手に持つ自身のデバイスを強く握る。

怖い………

驚祐の胸の中にはホムンクルス 人造人間への恐怖心とデバイスへの不安感で満た

されている。

「驚祐……………」

と、唯華が立ち止まり、驚祐の肩をチョンチョンと指で突っついてきた。

「……………何ですか？」

恐怖を誤魔化そうと微笑みを作って唯華の方を見る。
そして

グニイ)

唯華に両頬をつままれ、左右に皮膚が伸びる。

「ふぁ、ふぁにおふるんふえふふぁ（な、何をするんですか！！）」

「……………大丈夫。驚祐だったら何でもできるわ」

真っ直ぐと驚祐を見つめながら言い切った後、恥ずかしくなったのか唯華は頬を赤く染めながら

「し、しっかりしなさいよ！わ、私のこ、こいびとなんだから……………」

そんな唯華の様子が可愛らしく、驚祐は心が落ち着き、自然に笑みがこぼれる。

「そうですね……………。では、キスでもしておきますか？」

「きつ！？バ、バカ言わないで早く行くわよ！！」

顔を真っ赤にした唯華は鷺祐の手を引っぱり、走り出す。

「いいなあ、ラブラブで……………」

鷺祐と唯華を待っているリオが羨ましげに2人を見ながら言う。

「大丈夫だよ。リオだっていつかそんな人ができるよ」

リオを励ますように言うコロナ

「今はそんな話をしている場合じゃないですよ」

アインハルトの注意にリオとコロナは「はい……」と返事する。

「みんな、準備した方がいいよ……………」

ヴィヴィオの真剣な声に3人は前に向き直ると、生気をまったく感じさせない修道士姿の人造人間ホームクルスが10人程歩いている。

「行くよ！クリス！！」

ビシッと了解のポーズをとるうさぎのぬいぐるみを被ったデバイス。クリスもといセイドリックハートから光が発せられヴィヴィオを包んだ。

それに気付いたのか、人造人間ホムンクルス達は各々の武器を構えて一斉に走り出した。

「ドイツバイン……バスター!!」

光の中から走る砲撃は、人造人間ホムンクルスを呑み込み、塵と化させた。

光が止み、拳を突き出した大人モードのヴィヴィオの後ろ

三色の輝く光

アインハルト、コロナ、リオも戦闘体勢に入る。

「鷺祐、私たちもいくわよ!!」

「そうですね!」ヴィヴィオ達に追いついた鷺祐と唯華は自身のデバイスを前に突き出す。

「天封テンホウ!!」

唯華と

「アルミギティ・ホーク!!」鷺祐の

「セットアップ!!」

初めてセットアップ

そして、実戦が始まる。

turnエリオ

状況は限りなく最悪な方に転がっていた。

指に力が入っているのかと疑問になる程、手の感覚が無くなっている。

そんな手で刃の先端が無いストラダーを握り、額から流れる血を拭いながらエリオは立ち上がる。その後ろにはフリードが多大なダメージより気絶したキャラコを、その傷ついた身で庇っている。

「まだ、立つんですか？」

声をかけたのは宙を浮かぶ真武

手に持つ得物の刃からエリオに視線を移し、笑みを見せる。

その笑みからは暖かなものは一切、感じられず。ただ、背中が凍り付くような寒気に襲われる。

「……私も……忘れちゃ……いけないよ……」エリオの隣に千鳥足のような足取りで立つヴェーネ。

その背中には真武から受けた傷を塞ぐため、自らの炎を施した痛々しい跡が見える。

「まったく……」

笑みを崩さず呆れた口調で喋る真武は、羽織っている黒いマントを翻し、エリオとヴェーネに向かって急降下する。

振り下ろされる刀に、2人は左右対象に避ける。

空を斬った刀は地面にその一撃の跡を一筋の亀裂として残す。

ストラーダの剣先を軽々と折った真武の斬撃は脅威なるものだ。

「ストラーダ！」

《Sonic Move!》

先に動いたのはエリオ

高速で真武に近づき、ストラーダを横に薙ぎ払う。真武はエリオに見向きもせず、ストラーダを刀で防ぐ。

ぶつかり合う刃と刃

だが、火花も金属音も何も発しない。

「っ!!」

エリオは驚愕する。

ストラーダが真武の刀に物音たてず、静かに斬り裂かれていく

このまま進めば斬られる

そう思ったエリオは急停止しようとするが、勢いが強すぎて止まらない

死を覚悟をした

「エリオ！」

大声で呼ばれると共に、腹に衝撃が走り、エリオは体をくの字に曲げて後方へと飛んでゆく。

腹にはヴェーネのデバイス、ヴェルナーの幾つかに別れた刃
真武の刀から遠ざかるエリオの横をすれ違うようにヴェーネは駆け
る。

「インフィニティースパロー!!」

ヴェーネに散り散りになっていたヴェルナーの刃が集い、周囲で竜
巻のごとく回り始める。

剣の竜巻に真武は避ける動作を見せず、防御の体勢もとらずに、今
から繰り出す凶技の名を呟いた……

「次元斬……………」

シャンッ

振り上げられた刀は空を切った

それだけ

ただ、それだけで

ヴェルナーの刃は全て完全に砕け散り

ヴェーネは赤い血に全身を汚し

その背後の廃墟ビルは真つ二つに両断される

残るのは表情を絶望に染めるエリオと、切り裂かれた空間が、次元の狭間を見せているだけだった……
turn刹那

空を埋め尽くすのは
長い年月をかけて育った北極や南極の氷の大地を思わせる程の巨大で厚い絶氷

その下、臨海第一空港
そこには氷付けにされた民間人と、バリアジャケットを纏った3人の管理局員

「落ちてきませんね……」

ブレイドとの戦闘で体中が傷だらけで今にも倒れそうに見えるスバルが空を見上げながら言う。
絶氷は落ちる気配を見せない。ただ、そこで太陽の光を塞ぐように浮かんでいる。

「いつかは落ちるだろうな」

「まあ、そうだろうな……………」

白い息を吐きながら刹那とヴィータは喋る。

「どうするんですか?」

「破壊する……………と言っても、この吹雪じゃあ満足に飛べないし、撃てないし……………」

スバルの問いに答える刹那

リユーが姿を消した後、刹那達の周りには荒々しい吹雪、ブリザードと呼ばれる南極で起きる地吹雪に似た現象が発生していた。

風速20メートルはある吹雪の中で空を飛ぶのは無謀である。もちろん、それは地面にいる時も同じであり、特にバリアジャケットは-20度以下氷点下の中では10分と保たない。

だが、ブリザードが発生してから12分弱、刹那達はその場で絶氷の様子を見続けていた。

答えは簡単

刹那のデバイス、ヴァルネラビリティーの銃口から炎の魔力変換資質を放ち、暖をとっていたからだ。

一見、簡単そうに見えるが実際にやるのは難しい。出す火が強ければそれほど魔力を放出してしまい、底を尽きるのが早くなってしまう。逆に弱すぎれば寒さに体を蝕まれ力尽きる。

そして丁度いい暖かさの火を持続させるのもかなりの技術が必要である。

「残量、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。まだ、8割はある」

「そういえば、何で撃てないんですか？」

またもやスバルの質問

刹那は「やれやれ」と言いたげな口調で話す。

「あんな巨大な氷を適当に撃ってみろ。砕けた氷塊が下の空港に落ちていくだろう？」

「確かに……………」

スバルは頷きながら肯定する。

オオオオ

と、巨大な物体の動く音が獣の雄叫びのように聞こえた。そう、絶氷がゆっくりとだが、降下し始めた。

「せ、刹那さん……………」

「どうした？」

焦るスバルに陽気な声で答える刹那は空を見上げる。

「さてと……………」

目を細め、絶氷の弱点とも言える箇所を見定める。

「……………見つけた」

そう呟く刹那は、ヴァルネラビリティーからの火の噴出を止め、ス
タンドードの銃剣からフォルム3の剣に近い突撃槍、アシユブレ
イザーに変える。

「ヴィータ」

「わかってらあ！」

答えるヴィータはデバイス、グラーフアイゼンに魔力を纏わせ、ゴ
ルフのパターのように振りかざす。
絶氷が空港に落下するまであと、約20メートル

「今だ!!」

その場を飛ぶ刹那の合図と共に、ヴィータは振りかぶっていたグラ
ーフアイゼンを縦を思いっきり振った。
その軌道線上には刹那

「行ってえ…こいつ!!」

グラーフアイゼンの側面が刹那にぶつかったと思ったその瞬間

赤を纏いし山吹色の光が一筋

空に向かって光速で駆け上がってゆく。

光は途中で幾度も曲がり、その箇所を狙いを定めたように、また真っ直ぐに飛んでゆく。

「おおおおつ！！」

刹那の雄叫びが聞こえたと同時に、光は絶氷を貫いた。

次の瞬間

吹き荒れていたブリザードは何事もなかったように止み、太陽を隠していた絶氷は砕けて塵になり、雪のように空港に降り注いだ。

「」苦労様です！」

救護班の隊員が刹那達に向かって敬礼する。

ブリザードのせいで近づく事のできなかったが、刹那がそれを止めたので、現在、氷付けにされた人達の救助をおこなっている。

「……………駄目だ。繋がらねえ」

ロングアーチとの連絡に砂嵐しか映らないモニターに、ヴィータは苦々しく言う。

「嫌な予感がするな……………」

顎に手をやり、機動六課のある方角を見るが、何も無い。敵の通信妨害か何かか？

そう思っていると

突如、天からクラナガン全体に響き渡るような掠れた男の声が聞こえた。

第24話：守れ！中編（後書き）

感想、よろしくお願いします

第25話：守れ！後編（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

やっと書けた……（泣）

気がついたら今まで一番長く書いていました（笑）

相変わらずのグダグダですが

どうぞ、よろしくお願いします

第25話：守れ！後編

t u r n 刹那

掠れた男の声が響くと共に、空に現れたモニター。それにはマントとフードで体全体を隠す男が写し出された。

『初メテダナ…… 剣帝刹那モトイ空牙刹那ヨ……』

「お前は誰だ？」

焦る様子も見せずに冷静に答える刹那

『我が名ハアーク。今、クラナガンノ襲撃ヲ命ジテイル者ダ……。今回ハ我、個人ノ要件デ貴様ニ話シタイ事ガアル』

「要件だと？」

『アア……… 剣帝ヨ。我ノ下デ働ク気ハ無イカ』

「何を言ってる……！？」

刹那は気がつく

周りの人が

ヴィータ、スバルが

風も雲も何もかもが

自分以外の時が止まったように、全てが1ミリも動いていない事に
「何をした!!」

右手に持つヴァルネラビリティーの銃口を向ける。しかし、引き金は
はまったく動かない。

「ヴァルもか……」

『貴様ト2人ダケデ話シタカッタカラナ……。ソレデ、返事ハ?』

打つ手がない……。

そう感じ取った刹那はヴァルネラビリティーを下ろす。

「言わずともわかるだろ」

『ソウカ……マア、ソレモヨイカ』

『ククク』といかにも悪人っぽい笑い方をするアークに刹那は不快
になる。

「何故、俺を仲間にしようとしたんだ?」

『貴様ノ心ノ闇ガナ……アマリニモ黒イモノデナ』

「闇だと?」

『アア。ヨク見エルゾ……貴様ノ闇ガナ』

アークの視線がまるで自分の心を覗き込んでいるような、そんな不

思議な感じに刹那は戸惑う。

『デハ、今日ハココマデニサセテモラウゾ……マタ会オウ。剣帝刹那ヨ……』

そう言うと同時にモニターは消え去り、周りの人や物が動き出す。

「なに、ボーっと上なんか見てんだ？」

ヴィータは何事もなかったように刹那に話しかける。

本当に止まっていたんだな……それにしても心の闇、か……。

刹那は自身の胸に手を当て目を閉じる。ゆっくり深呼吸した後、目を開ける。

「少しな……機動六課に戻るぞ」

そう言って飛び立つ刹那に、ヴィータとスバルは互いに顔を見合わせて首を傾げた。turn十梧

撃つ
貫く
穿つ
斬る
突く
殴る
蹴る

それらの激音が轟き響く

クラナガン郊外に設置されている民間避難所を守る防壁の外側

「気合い入れろお!!」

「ボサボサすんなっ!! さっさと動けえ!!」

「左!! 早く弾幕を張れよ!!」

「負傷した奴は後ろに下がって、救護班のベースにむかえ!!」

「これ以上、奴らを進ませるなっ!!」

あっちこっちから怒号が飛び、魔力弾が砂嵐のように飛び交う。

そんな中、黄色の道の上をローラースケートで疾走し、無数の魔力弾を避けながら人造人間を殴り飛ばす、赤髪で金色に目を輝かせる女性、N2Rのノーヴェ・ナカジマがいた。

「ノーヴェ、下がりなさい!!」

ウィングロードを駆使しながら、ノーヴェな近づくギンガ・ナカジマは撤退命令を叫ぶ

「大丈夫だ!! まだまだやれる!!」

体中にある傷口から出る血がバリアジャケットを赤く染める。

だが、ノーヴェは拳を構えてギンガに戦闘の継続を示す。

そんな彼女の横に剣を持った人造人間が現れる。

「伏せてください!!」

叫ばれたその言葉ノーヴェは身を低くする。頭上では剣が風を切る音が聞こえ、がら空きの顎を殴りあげる。打ち上げられた人造人間ホムンクルスは放たれる金色の魔力の矢に塵と化する。

「サンキュー! タシア!」

「はい、油断なくいきましよう!」

ノーヴェの視線の先

ホムンクルス 人造人間の攻撃を華麗なステップを踏みながら避けるタシアはデバイス、エスパダはレイピアではなく、弓のボウモードで、次々に襲いかかる敵を撃ち抜いてゆく。

「負けてられないツス!!」

そう言ったのはノーヴェの上の空をライディングボードで飛ぶ、N

2 R

ウエンディ・ナカジマ

突進してくる飛行物体を軽々と避け、ライディングボードを足から手に移し、魔力とは違うエネルギーを銃口に集め、狙いを定める。

「これ、言ってみたかったんすよね」

呑気な事を言いながら、引き金に力を入れる。

「Jack Pot (大当たり)!!」

その言葉と共にミッド式の砲撃に似たエアリアルキャノンを放ち、飛行物体を貫通、下の人造人間ホムンクルスを数体を巻き込んだ。

「Sweet Dreamネンネしてなツスよ！」

「ウエンディ！！後ろ！！」

得意げに言い放ったウエンディはギンガの叫びに後ろを振り向く。そこには5体の飛行物体が高速で接近している。

間に合わない！

そう感じたウエンディはライディングボートを盾のように飛行物体の方向に向けようとした瞬間

飛行物体は3発の灰色の魔力弾に撃ち抜かれ、2本のナイフが刺さり、爆発した。

「ウエンディ。あまり姉を心配させないでくれ」

「チンク姉！！」

ウエンディに優しく注意するのは、彼女とノーヴェの姉、チンク・ナカジマ。

何故か、十梧の肩の上に乗っている。

「ウエンディ・ナカジマ！！そんなに先行すんなっ！！」

「は、はいッス！！」

「ッスはいらない！！」

「はいつ！！！」

ウエンデイに怒号を飛ばしながら

1体、1体、確実に人造人間ホムンクルスに魔力弾を当ててゆく十梧。

「私も負けてられないな！」

チンクはそう言うと、両手に計8本のナイフ、ステインガーに先天固有技能のランブルデトネイターを使用。接触すると同時に爆発する爆弾ナイフを十梧に近付いてくる飛行物体に投げつけ、爆破する。

「やるな！！！」

「そちらこそ！」

2人は互いに笑い、すぐに敵の殲滅にとりかかる。

「一気に片を付けるぞ！！！」

「！！！！おおおおおつ！！！！」「！！！」

十梧の声に

その場にいる局員達は勝利への執念の雄叫びをあげた。

turnはやて

「まずは、自己紹介ですね。私はメドウと申します」

はやては目の前にいる

テロの首謀者だと名乗る男、メドウを睨みながら、ポケットにしまっているデバイス、シュベルトクロイツを手に持ち、いつでも行動に移せるようにする。

「まあまあ……。私は別に闘いに来たわけではありませんので……」

メドウはその緑色のオールバックを撫でる。

確かに、闘う意思と言うものが感じれないが、何か別の寒気が走るような嫌なものを感じる。

「……なら、何しにきたんや？」

「話します」

「話し？」

「ええ、とっても重要な事なので……。あと、そのボタンを押しても無駄ですよ」

メドウの後ろ

ビクツと肩を震わせたロングアーチの女性が触れているボタン

機動六課の緊急事態を本局に知らせる為のボタン

虚仮威こけおどしかと思ひボタンを押すが、目の前のモニターの端に小さく出るはずの送信の完了のテロップが現れない。代わりに、赤い液体

が肩の激痛と共に視界に入る。

「あああああつ！！」

「まったく、無駄だと言ったのに……」

イスから転げ落ち、断末魔をあげる女性に対し、冷たく言い放ったメドウは手に持つ魔力のナイフを女性の首筋を狙って投げる。

「や、やめ……」

シヤアアアアアッ

人間からこれほど血が出るのか？と思えるほどに女性の首筋から血が噴水のように吹き出て、周りを赤く染める。

「あ……」

その場にいる全員が凍りつき、唯一、メドウだけが面白げに笑っていた。

「鋼の軛くびき！！」

メドウの足元から銀色の刃のようなものが彼の手足を刺し、拘束する。

「おやおお……」

焦る様子も見せず、メドウは出入り口の方に視線を向ける。
そこには、盾の守護獣ザフィーラと学者服を羽織って息をきらすソ
ルカ。

「はぁ……………はぁ……………なんで、てめえがいやがるんですかよ!？」

「フフフ……………。喋り方が可笑しくなっていますよ……………」

怒鳴るソルカに依然に笑みを崩さないメドウ。

「チツ!んな事はどうでもいい!!なんでお前がここにいるんだ
【ルシャ】!?!」

「ルシャ……………そう呼ばれるのは実に久しぶりですね……………」

メドウはどこか懐かしそうな顔で言う。

「では、私も久しぶりに言わせてもらいますよ。

【兄上様】」

その言葉にソルカは苦虫をかんだような表情を見せる。

「さて、話を戻しますか……………」

四肢を貫き刺され体が動かずにいるメドウは余裕な表情ではやてに
視線を戻す。

「古代遺物管理部機動六課。私たちアカナシムはあなた方に宣戦を
ここに誓言します!?!」

つり上がっている口角をさらに吊らせ、不気味な笑みを見せながら高らかにそれを告げた。

その刹那

メドゥを拘束していた鋼の軛が塵になり、欠片が灰のようにサラサラと床に落ちてゆく。ソルカはポケットにしまっていた銃を取り出し、メドゥに向けて撃つ
放たれたのは魔力弾ではなく実弾。

「おっと……」

メドゥは身体をを捻らせ、銃弾を避けると十数はある魔力のナイフをソルカに向かつて放つ。
だが、それは軌道線に横入りしたはやてが展開する魔法障壁に打ち消される。

すかさず、ザフィーラは再び鋼の軛をメドゥ目掛けて放つが跳躍され、いとも簡単に回避されてしまう。

「では、詳しい内容は後ほど説明がありますので……」

お辞儀をしたメドゥは目の前に現れた黒い障気の中へと入り込んでゆく。

「待ちやがれ!!」

鳴り響いた銃声

しかし、撃ち出された銃弾は黒い障気に掠りもせずに通り返け、天井を貫いた。

一時の静寂

壊したのはソルカが銃を床にたたき投げた音と「クソが!!」と虚空に吠えた残響……。
turn ヴィヴィオ

「おおおおつ!!」

恐怖を振り切る雄叫びをあげ！
力一杯に拳を握りしめ！
大地を砕かんばかりに足を踏み出し！
今できる全開を相手にぶつける！

なのに……

「無駄だ!!」

その声の通り
ヴィヴィオの一撃は届かない。
それは、彼女の腹をえぐる大地から生まれた拳が隻眼の男、ヴァン
トから3メートル周囲内に寄せ付けさせないようになっているからだ。

「くはっ……」

少量の吐血

肺が潰れちゃったかな……？

だが、そんな一瞬の考えさえも命取りになる。

追撃のごとく右左の両サイドからヴァントの身長の3倍近くはある巨大な大地の壁が圧殺しようとする。

逃げようとするヴィヴィオだが、大地から生えた手ががちりと体を掴んで、動こうにも動けない。

そんな危機一髪な状況を打ち壊す、2人の声が聞こえた。

「霸王断空拳!!」

「轟雷炮!!」

左はアインハルト

右はリオ

霸王の拳と雷電の蹴脚はヴィヴィオに迫る大地の壁を打ち砕き、彼女を縛る手も破壊する。

「ありがとう!!アインハルトさんにリオ!!」

「いえ……………」

「どういたしまして!!」

3人は短く会話を交わすとすぐに後退する。

「いつけえええつ!!」

叫びをあげたのはコロナ

ヴァントの正面

クリエーション
創生起動で体を岩石で構成されているゴーレム・ゴライアスが拳を
構え、走り出す。その肩には主であるコロナが乗っている。

「援護します!!」

ゴーレムの後ろ。

緑と黒が主張されるバリアジャケットを身にまとい、片手に銃型の
デバイス、アルミギティ・ホークを構える鷺祐が魔力弾を形成して
いた。

と、その隣に黒いモヤが現れ、中から人造人間ホームンクルスが襲いかかってくる。
だが、鷺祐は焦らずに魔力弾の形成に集中する。

なぜなら

「させないわよ!!」

彼女、踏崎唯華が近寄る敵を遠のいてくれるからだ。

唯華のデバイス、天封テンホウは昔、日本の侍が携えていた刀に酷似してい
た。

しかし、何故か鞘から刀を抜刀できない。だが、今、それを考える
時間はない。抜けないのなら抜かないまま戦えばいい。

人造人間ホームンクルスの攻撃を防ぎきると、その場で回転。

勢いを殺さずに相手の首に天封を叩き付け吹き飛ばす。

「シューーートツ!!」

放たれる魔力弾はゴライアスより速く

ヴァントに向かって真っ直ぐ突き進んでゆく。

「フンッ！」

ヴァントが手を前に突き出すと、大地から分厚い壁が鷲祐の魔力弾を受けきり、砕けた破片は槍のように研ぎ澄まされ、前方に向けて放たれる。

「みんな、下がって!!！」

向かってくる石槍にゴライアスを盾にするが、凌ぎきれず……

「ああっ!?!」ゴライアスはその巨軀を撃ち抜かれ、後ろにいたコロナは悲痛な声を上げる。

それと同時にゴライアスを貫いた石槍が着弾
辺りは砂煙が舞う。

「素晴らしい……この力。まさに【ガイアの轟腕】……」

自身の右手首にはめている腕輪を神々しく見つめるヴァントの頬を
魔力弾が掠める。

「……………あれを凌いだか」

「はあ……………はあ……………」

砂煙の中、揺らめく影

アインハルトを先頭にヴィヴィオ達がいた。

傷だらけではあったが

大したケガもなく、闘志はまだ消えていない。

「ここまでよく闘った。それは褒め称えよう……しかし!!」
細めていた目をカツと開き、右腕を掲げる。

それを合図にか

大地が揺れ

ヴィヴィオ達の足元の地面に亀裂が走り、その隙間から多大な魔力が溢れ出し彼女達を襲う。

「……………うあああああつ!!」「……………」

散り散りに吹き飛ばされる6人。

地面に落ちる鷺祐

闇に落ちようとする意識を地面で頭を叩き、引き戻す。

足をやられましたか……鷺祐は動かない左足を見た後、皆の無事を確かめる。

「さて……………小奴でよかるう」

気絶しているコロナの前ヴァントが魔力を纏わせた拳を振り上げていた。

まさか、殺す気なのか!? そう感じ取った鷺祐は手に持つアルミギティ・ホークの銃口をヴァントに向け、引き金を引く。

しかし、銃口からは弾も煙も出てこない。

「また、ですか……………」

鷺祐は苛立ちを隠せずに毒づく。セットアップしてから魔力形成の

補助はできても、デバイス本体の機能を何一つとして示さない。

「フンッ！その男の子よ！^{おのこ}そこで見ている！」

鷲祐にそう言いはなったヴァントはその右腕をコロナに振り下ろした……

しかし

コロナは死ぬ事はなかった。

何故なら、白き髪と長身を持つ、新たな星^{スターズ}が彼女を守っていたからだ。

「間に合った……な」

turn 砂彦

「ほお、これを受けきるか……」

感歎の声をだすヴァント。

「受けるだけじゃない……ぜっ！……ぜっ！……」

ハンマー状態のアーシアで防いだヴァントの右腕を押し返し、右の

横つ腹目掛けて薙ぎ払うが、大地から生えてきた壁に阻害された。

《なんなの、その力!?!》

「チツ!！」

足元に揺れを感じ、砂彦は即座に後退

すぐに砂彦が立っていた地面から石槍が生える。

「大地を操れるのか……………」

「その通り。ガイアの轟腕……………大地を司る地神の力!！」

避けた石槍が碎け

破片が矢のごとく砂彦に飛来する。その後ろには気絶したコロナ

「チツ!！アーシア!！」 《りょーかいつ!！》

アーシアが光り、ハンマーから砂彦の長身を隠すほど大きな盾へと形状変化し、無数の石の矢を防ぐ。

「無駄だ!！」

繰り出されたヴァントの拳は盾のアーシアを易々と貫いて、砂彦を殴りつける。

《きゃあああああつ!！》

「ぐオツ……………」

予想外のダメージにアーシアは待機モードに戻り、砂彦はコロナに

被さるように倒れる。

「死ね!!」

トドメへと誘う拳を振り上げるヴァント。しかし、その身に色とりどりの魔力弾が撃ち込まれる。

「はあああつ!!」

負傷により動けないヴィヴィオ、鷲祐、リオは魔力弾を放ち、行動可能なアインハルトはヴァントへと駆け寄っていく。

「小癩なつ!!」4人を睨んだヴァントは怒りに呼応するように輝くガイアの轟腕を付けた右腕で地面を叩くと、魔力が噴き出る大きな地割れがアインハルト目掛けて進んでゆく。

「皆さん!!」

跳躍で避けたアインハルトは気付く、進む地割れの先には動けないヴィヴィオ達がいる事を

「余所見をするな!!」

頭に走る衝撃

ヴィヴィオ達に気を取られアインハルトは背後からのヴァントの攻撃をマトモに受け、気を失って地面に落ちる。

「アインハルトさつ!!……」

叫ぶヴィヴィオ

しかし、その声はすぐに打ち消された。
昇る魔力は柱のように
ヴィヴィオ達を呑み込む。

「フンツ！無駄だ……」

倒れるヴィヴィオ達に背を向け、コロナに向かって歩き出す。

「やらせない……」

コロナの前

両手を広げる砂彦とフラフラしながら天封を構えてヴァントを睨む
唯華。

「邪魔だ……死にたくなければ退け……」

「嫌よ……」

意識が朦朧する中、はつきりと答える唯華

「なら……散れ」

ヴァントの裏拳は顎を確実に捉え、吹き飛ばされた唯華は空を力なく舞い落ちる。

「貴様もあなりたくなければ……」

「答えはわかってんだろ……」

睨むヴァントに怯むことなく、その場から逃げようとしぬ砂彦

「そんなに大事か？その娘が……」

「違う。人を助けるのに特別な理由はいらない……それだけだろう」
強い意志を瞳に宿しながら砂彦は言い切る。

「理解ができません。貴様にはその娘を守る力も無いのにな……」

ヴァントは呆れたように冷たい表情を砂彦に向け、右腕を上げる。

「黄泉にて後悔するがいいっ！！」

「後悔はしないっ！！」

膨張する魔力の塊を前に、断固、ヴァントの言う事を否定する砂彦に

「よく言ったぞ、少年！！」

そんな声が聞こえた。

それと同時に

ヴァントの体が弓のように曲がり、吹き飛んでゆく。

「人が困っている時に手を差し伸べる！！人として至極当然の事だ
！！」

砂彦はコロナを抱きかかえながら

黒い髪を揺らし

瞳をギンギンに輝かせ

腕を組み、堂々と地面に立つ

目の前の少女を見る。

「人道を踏み外せし、愚かな者をこの拳と魂で討ち滅ぼしてやるう
！！」

《覚悟は決めたかーっ！！》

叫ぶ。辺りに響くほど叫ぶ
少女とそのデバイス。

「貴様あぁっ！！」

頭から血を流し、怒りに震えるヴァントは一瞬にして少女に詰め
寄り魔力を纏った拳を振るう。
だが

「ぬるいわぁ！！」

拳はゴォと音をたてて空を切り、少女は視線から一瞬消え失せたと
思うと、ヴァントの頬に膝蹴りをかます。

「糞があぁ！！」

鼻から血を吹き出すヴァントのガイアの轟腕が輝き、大地が震える。

《来るぜ！！》

「了解！！」

デバイスの忠告に少女は大地を蹴り上げ、高く飛ぶと共に乱れ咲く

ように地面から生える石槍を避ける。

《左右前後！！四方八方！！》

デバイスの言う通り

少女を取り囲むように大地の壁が迫る。

「死ねえ！！！」

ヴァントの叫びと共に全ての壁はぶつかり合い砕け散った。

そう思った瞬間、砂煙から蒼き衝撃波が柱のように天を貫くような勢いで昇ってゆく。

その衝撃波の中心

少女が髪を逆立て、仁王立ちでヴァントを見据えていた。

「貴様は……っ！！貴様は何者だ！！！」

吠えるヴァントに少女はニヤリと薄ら笑い

自身の名とデバイスを名乗る

「私は妃山叶恵！！そのデバイス【ラグホース】！！貴様のような輩をぶちのめす最強の麗人だ！！！」

バカ

ここに現る

第25話：守れ！後編（後書き）

後編と言っても

まだ終わってませんね（泣）

あと1話、長くて2話しないと蒼仁が登場しないかもしれない
主人公なのにな（笑）

では、また次回

【蒼の衝撃VS地神の腕】

感想、お願いします！！

第26話：蒼の衝動VS地神の腕（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

遅れました（泣）

ちよいと色々ありまして、もとから遅い書くペースがさらに遅くなりました

毎回のようにグダグダ感があると思いますが
どうぞ、よろしく願います

第26話：蒼の衝動VS地神の腕

t u r n 叶恵

回る

回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回る回る回る回る回る

回りまくる

宙に浮かぶ叶恵は足に蒼き波動を宿し、コマを思わせるほど横に高速回転する。

「おおおおおっ!!」

相対するはヴァント

右腕に備えている腕輪

ガイアの轟腕を輝かせ、魔力を圧縮した拳を振りかざす。

激突

それは1秒足らずで起きた。

それは周りの大地を震わし、砕き、塵へと化させた。

「うおおおっ！！！」

「があああっ！！！」

初撃を終わらせた2人は雄叫びを上げながら、次々とお互いの攻撃をお互いの攻撃で防ぐといった、一瞬の油断もできない攻防へと展開していった。

turn砂彦

「……………デタラメだ」

叶恵とヴァントが闘う場より少し離れた位置

頭を高くするようにコロナを抱える砂彦は呆然とする。

あれが魔法を覚えて1週間も経たない人間なのか？

叶恵の戦い方を見ていると自然にそう思ってしまう。

近距離で放たれる魔力弾を瞬時に魔法障壁で防ぎ、攻める時は息もつかせぬ怒涛の勢いで攻撃を繰り返す。

まるで、何年も前からそれを当たり前に行っているように叶恵はヴァントと戦っていた。

「凄いわよね、彼女」

声にふと隣を見ると、緑色を強調したバリアジャケットの湖の騎士シヤマルが倒れていたヴィヴィオ達を横に寝かせ、回復魔法を施し

ていた。

「シャマルさん……」

「砂彦君とコロナも治さないかね。センちゃん」

「は~~~~い!!」

微笑むシャマルに呼ばれて、どこからともなく現れたのは、白衣の大きさと体が釣り合わぬ山吹色の髪を持つ幼き少女セン

「悪いけど、2人の治療頼める？」

「うん、いいよ!」

笑顔で了承するセンは、砂彦とコロナの額に手を当て、ほのかな温めを帯びた魔力を流し込む。

「……………はい。おわり!」

「早すぎじゃ……………あ」

肩を回すとあつたはずの痛みと違和感が無くなっていた。コロナも切り傷や青くなった打撲の跡もすっかりなくなっている。

「あ、ありがとう……………」

「うん!きずからして、だいたいごはん3杯分だね!」

ご飯3杯分？

センの言葉に首を傾げながら、砂彦は立ち上がるが、右手に持つア
ーシアが反応を示さない。

「ダメージが大きすぎたみたいね」

「A Iに傷が無いのが何よりか……………」

砂彦は歯をかみしめる。

力がない事に

ただ、ここから傍観しかできないことに
悔しさを感じながら……

turn叶恵

「グランドスピア!!」

大きな岩の槍が6本

叶恵の足元の地面から突き出してくる。

叶恵はそれを高く跳躍して避けると、左足を折り畳み、右足を伸ばし
どこかの仮面を被ったライダー伝統の必殺技のような体勢をとる。

「ライドアア!!」

《いつくぜええ!!》

ガンドレッドに付いている蒼い玉から、蒼き波動が撃ち出す。

その反動を利用し、勢いをつけてヴァントへと斜めに急降下する叶

恵。

「キイイックー!!」

叶恵の蹴撃は腕を交差し防御態勢とるヴァントに食らいつき、地面を削りながら後退させてゆく。

「フンツー!!」

ヴァントは腕を解放ち、叶恵の蹴り弾き返すとその細い足を掴み、グルグルと振り回す。

「おおおおおっ???!」

《世界一速いメリーゴーランドだぜえいつ!!》

目を回し始める叶恵に対し、楽しげな声をあげるラグホースの緊張感のない声にヴァントは苛立ち、叶恵を投げ飛ばす。

体を不規則な回転をしながら飛ばされる叶恵は、地面に手を突き出して勢いを止める。

「目がまわるぞお〜」

《ヒヤハハハ!!おもしれえなっ!!》

千鳥足みたいにフラフラになりながら構える叶恵。頭に浮遊感があるものの真っ直ぐと瞳で相手を捉える。

その真っ直ぐな瞳にさらなる苛立ちを覚える。

ヴァントが強く大地を踏むと亀裂が走り、叶恵の辺りまで広がっていった。

「グランドクラッシャー!!!」

亀裂から溢れる魔力の勢いで、数ミリしかない砕けた地面の破片が弾丸のように飛び、叶恵の体を掠めてゆく。

「ぐうっ!!! ラグホース!!!」

《まかせな!!!》

飛んでくる地面の破片をラグホースから発生する蒼き波動を下方に使ってさらに細かく微塵に砕いてゆく。

しかし、左右からグランドスピアが迫ってくる。

「出力を!!!」

《ドウラア!!!》

蒼き波動は竜巻のように逆巻き、岩の槍を粉碎、破片はしばらく竜巻に巻き込まれた後、ヴァントに向けて放り投げられる。

「これも駄目か……」

ガイアの轟腕が付いた右手を振るい、飛んでくる岩の塊を砕くと、呆れたような口調で言う。

「なら諦めてかえ……」

「仕方がない……本気で殺す」

ヴァントから向けられる殺気に叶恵の表情から余裕が消え失せ、額からは一筋の冷や汗を流す。

「ツヴァイ・ワイメトウーテ第2術式解放……！」

大地が波打つように揺れ始め

そして、地神の力の断片が呼び覚まされる。

t u r n 十 梧

陸士108部隊とN2Rとの民間避難所の救出を終えて、機動六課に戻る途中、ホムンクルス人造人間と飛行物体と戦闘していたエリオ達が負傷し戦闘続行不可能

ヴェーネに到つては出血が激しく早くしなければ命が危うい。

そんな時にだ……！！

機動六課一帯の上空に広がる黒い雲は何だって言うんだよ……！！

しかも、周りには方は超える飛行物体がウヨウヨ浮遊してやがる。

「何なんですか……アレは？」

「わからん……行けるか……？」

「やってみますよ……！」

アルトは操縦レバーを前に倒し、へりで出せる最高速度で前に進ん

でゆく。

それと同時にジャツジイーグルに通信が入る。出ると少しノイズが走るモニターに刹那の顔が映し出された。

『こちら刹那！！あれは何だ！？』

「知らねえよ！！任務を終わらせて帰ってきたらもうこんな感じだ！！！」

『とにかく合流をする！！』

「わかった！！！」

刹那との通信が切れたのを確認すると、機動六課のはやてに通信を繋げる。

しかし、モニターに映し出されるのは「error」の文字だけで、砂嵐が騒がしく鳴るだけだった。

「くそっ！！！」

「前方に飛行物体が接近しています！！！」

繋がらない通信に苛立つが、敵はこちら待ってこれないようだ。

フロントから十数機の飛行物体がへりに向かって突っ込んでくるのが見える。

「ハッチを開けてくれ！！！」

「空蔵隊長！！私毛……………」

タシアは立ち上がり後ろを付いて来た。

「タシアは残ってヴェーネ達の手当てしてくれ!!」

「……わかりました」

渋々ながらも、タシアは座ってヴェーネ達の手当てに専念する。

「ハッチ開きました!!」

アルトの言葉にハッチ近くに歩き、ジャッジイーグルをセットアッ
プしながら飛び降りる。

「カートリッジロード!!」

《load cartridge!》

ジャッジイーグルから薬莢が1つ落ち、周りには魔力で形成された
剣。

「ソードバレット、シュート!!」

剣は柄を軸に回転し、円を描きながらへりに近づく飛行物体を切り
裂いてゆく。

だが、破壊された飛行物体が巻いた爆煙を四散させ、新たな飛行物
体が次々と姿を現す。

「さあ、来やがれ!! 纏めて粛正してやるっ!!」

轟き叫ぶと同時に魔力弾を放ち、機動六課突入への開戦の狼煙をあげる。

turn刹那

流石、特化戦闘部隊ラーケインの部隊長を名乗るだけの事はあるな

……

刹那はヴァイスが操縦するヘリの中、機動六課周辺の写しているモニターを見ながら思う。

敵の攻撃を軽々と避けると同時にカウンターで破壊する。四方八方から突っ込んでくる飛行物体にも一瞬にして全機撃ち貫いている。

体がウズウズする。これが終わったら模擬戦でも申し出てみるか……

……

「おい、刹那。今、関係ない事考えたろ？」

「いや……何でもない」

なんだ？ヴィータもスバルも疑いの目で見てくるぞ……まあ、いいか。

「ヴァイス、ハッチを開けてくれ。俺達も出る」

「はいよ！俺も微弱ながら援護させてもらっぜ」

へりをオートモードにし、スナイパーライフル型デバイスのストームレイダーを手にしたヴァイスが立ち上がる。

「よし、行くぞ！」

ハッチから飛び降りた刹那の周りに群がってくる飛行物体を白き双銃のヴァルネラビリティー

フォルム2・チェーソリボルバーから放たれる魔力弾で全てを穿つ。

「ウイングロード！！」

刹那の隣を青い道が通り、その上をスバルがローラースケートで疾走する。

「リボルバーキャノンツ！！」

放たれた衝撃波は道を阻む飛行物体を破壊する。

難なく避けた飛行物体はへりにいるヴァイスと刹那の射撃により撃ち抜かれ、スバルの視界には敵など1体もいなくなる。

と、前方に伸びるウイングロードが何かにぶつかったように消えた。

「結界か！？」

「どけえええっ！！！！」

轟き響いたのは叫ぶヴィータの声

その手にギガントフォルムのグラーファイゼンを振りかざし、結界へと突き進んでゆく。

しかし、敵にもそれなりの思考を持っているようだ。

数機の飛行物体はヴィータの行く先を阻むように一斉に突撃してくる。ついでに、地上からは人造人間ホムンクルスが敵味方問わずに魔力弾を撃ちまくっている。

「俺とヴァイスはヴィータの援護！！スバルは地上の人造人間ホムンクルスの撃破！！」

「了解！！」

「わかりました！！」

刹那とヴァイスはヴィータに近寄る飛行物体を確実に落としてゆきスバルはウイングロードを下へと向けて、乱れ飛んでくる魔力弾を避けながら地上にいる人造人間ホムンクルスに蹴りで先制攻撃をしかける。

「豪天爆砕！！ギガントオ！！」

3人のおかげであまり傷つかずに結界に近付いたヴィータはグラィファイゼンを振り下ろした。

「シユラアアクツ！！」

ハンマーの巨大な側面は衝突すると共に辺りに衝撃を撒き散らす、結界を少し歪ませる程度でしかなかった。

「クソ……………っ」

「「ヴィータ、どけえええええ！！」」

聞こえたのは2人の男性の声

1人は上空でフォルム1スタンダードリボルバーのヴァルネラビリ

テイーで魔力を収束している刹那
もう1人は……………

「十梧っ!!」

ヴィータの視線の先

魔力光で輝くジャッジーグルの銃口を結界の歪みに向けている十梧。

「刹那!! タイミング合わせて撃つぞ!!」

「わかった!!」

十梧の案を了承し

刹那は収束している魔力に炎の魔力変換資質を加える。
2人の魔力に気付いたのか、飛行物体が攻撃を仕掛ける。
しかし、狙いは定まっている
もう遅い……………

「今だ!! ギガ・プロオ・キャノン!!」

「プロミネンスバーナー!!」

進行方向にいる飛行物体を破壊しながら、炎熱の砲撃と灰色の砲撃は結界の歪みをピンポイントに当てる。

「っいつけええええ!!」

2つの砲撃は衝突しながら混じり合い、倍に増した威力で結界を貫いた。

「す、すい」

地上で人造人間ホムンクルスと戦っているスバルは感嘆の声をこぼす。

貫かれた箇所から徐々に魔力が四散し、結界に3メートルほどの穴ができる。十梧と刹那とヴィータが迷わず入っていき、スバルも慌ててウイングロードで結界内へと入ってゆく。

「刹那さん！！ヴァイスさんはいいんですか！？」

「大丈夫だ！！アイツの事だから安全な場所まで離れてるだろ！！」

「十梧。他の奴らは？」

「3人共負傷。特にヴェーネは失血がひどくて、急がないといけねんだ……………つと！」

向かいくる魔力弾に4人は会話を止めて回避行動をとる。

機動六課周辺にアリの大群を思わせる程にウヨウヨと人造人間ホムンクルスが杖型デバイスを持っていた。

「まずはコイツ等をどうにかしねえとな……………」

「だな」

十梧とヴィータが各々のデバイスを構えた

それは突如、起きた。

大地がいきなり盛り上がり、周りにいた人造人間を巻き込んで5メートルはある石の槍が突き出てきたのだ。

ホムンクルス

「敵か!?!」

「YES!?!」

聞いたことのある声と視界の隅に高速移動する人影に刹那は銃剣を振るうが、空を切る。

「HEY! HEY! SuddenlyにこれとはAwfulだYO
!?!」

黒い修道服と中途半端な英語、前回のクラナガン襲撃でなのはを落とした張本人アパが刹那の前に体を逆さの状態で見れる。

「貴様が……………」

「テメエ……………っ!?!」

声に怒りを宿らせ、ヴァルネラビリティの剣先を向ける刹那とグラーファイゼンを握り直すヴィータ。

至ってアパは特に恐れる様子もなくヘラヘラ笑っている。

「まあまあ、CoolになろうYO。どうせ何もできやしないんだから……………YO!?!」

アパが両腕を上げたと思ったら、2つに裂けて伸び、4人のデバイ

ズにグルグルと巻き付いてきた。

「な、なんだ、コレ!?!」

「くう!! 離れない!!」

アパの腕を引き剥がそうとするが力が強すぎて離れず、逆に腕まで巻き付き始めた。

「離せ!?!」

腕を巻き付けられる前にヴァルネラビリティーを放した刹那は、アパの腹に高速の回し蹴りを繰り出した。

「ぐえっ」

直撃

しかし、蹴った手応えのなさに刹那は眉をひそめ、その様子を見てアパはニヤリとほくそ笑む。

ズボリ

泥に足を落としてしまったような音が聞こえ、十梧は目を見開く。なぜなら、刹那の足がアパの腹に飲み込まれてゆくからだ。

「フュージョンっ!! H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A
っ!?!」

足を伝つてもがく刹那の体に着々と絡み付いてゆくアパ。

「ちいつ!! ジャツジイーグル……」

アパに捕まっていない左手でベルトに付いている青色のカートリッジに十梧は転送魔法を使用。

転送先はジャツジイーグルのマガジン。

「フリーズバレット!!」

ジャツジイーグルの引き金を引くと、冷気を纏った銃弾が撃ち出されアパの体を一瞬に凍らせた。

「碎け!!」

「「おお!!」」

刹那とスバル、左右からの拳の一撃で凍ったアパの体は散り散りに碎けた。

「助かった……」

ひと息つきヴィータは絡み付かれていた腕を動かそうとする。

「……動かない？」

腕だけではない

足、肩、首、体全体が何かに固定されているような感じがした。

十梧に知らせようとするがいきなり声が出なくなつて、口がパクパクと動くだけ。

「どうしたんですか？ ヴィータ副隊長」

ヴィータの異変に気付いたのはスバル
それにつられて十梧と刹那もヴィータに振り向く。

『体が動かねえし声も出ないんだ!!』

念話を用いて皆に自分の今の状態を知らせたヴィータ

「動かない？」

疑問に思った十梧がおもむろにヴィータの肩に触れようとしたその時

ゴオッ!!

振り上げられるグラーフアイゼンを間髪で避けた十梧はヴィータ
から距離をとる。

「……………ヴィータ？」

『わ、私じゃねえ!! 体が勝手に……………避ける!!』

薙ぎ払われる一撃を刹那がラウンドシールドで受けきる。

「アパか……………」

「正解だYO!!」

ヴィータの背後に姿を出したのはアパ

「このゴスロリの体の主導権は現在、MeとなってるYO。自らの手で自らをKillする事だつてできる……………」

薄ら笑いするアパにスバルは嫌な寒気を感じる。

「そんな事、YOU達は望まないYONE? だったらおとなしくあれをLookしててYO……………」

アパが指差す先

小さな影が1つ、ゴツゴツとした岩の体を持つ化け物と戦っていた。

「叶恵!？」

十悟は表情を驚愕に染める。

turn叶恵

さて、どうしたものか……………」

叶恵は力が入らない左腕を押さえながら、目の前にいるヴァント“
だった”化け物をどうするか考えていた。

第2術式解放

ソヴァイ・ロイメトワード

これが何なのかは分からないが、これを使用したヴァントは苦しみ叫びこのような姿になった。自我が無いところ見ると、力を使いきれなかったとみる。

しかし、そんな事はどうでもいい……………」

むしろ最悪な方向へと転がり込んでしまったのだ。理性の無い獣と同じ、しかも力は私よりは上だろうか？

まったく厄介だ。こちらはまだコイツ（ラグホース）を使いこなせ

ていないと言うのに。

《行けるか？》

「……………当たり前だ、と言いたいところだが無茶すぎたか……………」

序盤、ラグホースから生み出される蒼い波動を使いすぎた結果、左腕に力が入らないという事態に陥った。

「……………ウウウウツ」

獣が唸るような声を出しながら、ヴァントは一步、一步と近づき、その巨人な腕を横に振り払い叶恵を吹き飛ばした。

叶恵はヴァントが生み出した岩の槍にクレーターを作り、地面にずり落ちる。

《ヒヤハ！あん時みたいに俺がやるうか？》

「断る……………」

《いいのか？このままじゃ死ぬぜ、アンタ》

「死なない……………私はやらなければならぬ事がある！！」頭から血を流す叶恵はそう言って右の拳を握り締め、恐れのない瞳でヴァントを睨み付ける。

そくだ……………私は、私は兄さんから聞かなければならぬ事がある。

そして、見つけなければならぬんだ……………蒼仁を

だから……………

「こんなところで死ぬわけにはいかないのだっ!!!」

意志強き叫びをあげる叶恵の足元

ミッド式や古代、近代ベル力式とは違った魔法陣が浮かび上がった。それは、紺色に光る六角形の真ん中に*（アスタリスク）に似た紋章が描かれた叶恵だけの魔法陣!!!

《おお!?!》

「力を貸せっ!!!ラグホース!!!」

《わかったぜ!!!俺のマスターさんよ!!!》

ラグホースの蒼い玉が輝きはじめる。すると叶恵の足には白き雷が宿った。

《雷の魔力変換資質か?まあ、いい!!!準備はいいか、マスター!!!》

「ああ!!!私の想いに応えろ!!!蒼の衝撃フルインパクトオ!!!」

《震える!!!俺の魂!!!》

カッと眩い光と共に蒼い波動が叶恵の身体を包み込む。

「ガアアアアッ!!!」

危険を察知したのかヴァントは拳を叶恵に振り下ろす。

「おおおつ!!」

雄叫びをあげる叶恵は腰を振り、体重を乗せた拳をに放つ。その一撃はヴァントの腕を粉々に粉碎する。

「ガアツ!!」

痛みに悶えるヴァント

絶好のチャンスに叶恵は空高く跳躍し、蒼い波動を右の拳に集中させる。

「ガアアアツ!!」

ヴァントの口から無数の石槍が放たれ、叶恵を落とそうと狙う。

しかし、叶恵は逆にそれを足場として利用し、ヴァントに近づいてゆく。

あと3メートルの距離

ヴァントが残った腕を振り上げる。

「邪魔だあつ!!」

障害となる腕を白き雷が宿る足で蹴り払って破壊。
なす術のないヴァントに拳を振りかざし

「これぞ!! 剛腕爆砕!!」

蒼天衝破!!」

蒼き波動を纏った拳は
ヴァントの顔面を真つ正面を捉え、触れる物全てを壊した。

t u r n 十 梧

「ワオツ!! wonderful!!」

叶恵が化け物を倒すのを見て楽しげに声をあげるアパ。
その間にヴィータの肩に小さな虫が止まっているのを見つける。恐
らくあれがヴィータが操られている原因か……………。

「……………いいか?」

『いつでもいいぜ』

アパの卑怯な手に十梧は苛立ちを抑えながら刹那と念話で作戦を話
し、タイミングを計る。

そして、アパが浮かれて、ちょっとした隙が生まれた瞬間

刹那がヴァルネラビリティーで奴の首に刃を

俺はヴィータの肩にとまっている虫を魔力弾で撃ち抜いた。

「ありゃりゃ油だ……………」

アパの言葉は途中で刹那の一閃で首を切り落とされた事により止まった。

だが、油断は禁物。

ヴィータの安全を確認し、ジャツジイーグルの銃口を首の無いアパに向ける。

「お、おい!!十梧……」

いきなりヴィータが消えそうな声を出すので振り返ると、彼女は顔を赤くしている。何故………？

「だ、大丈夫だから………はなしてくれ!!」

現在、ヴィータは十梧に護られるように抱き抱えられている。

そう言うことが、と気付いた十梧はヴィータを自分の腕から解放した。

「悪い、悪い」

「まったく………き、気をつけるよ!!」

顔を会わせないようにするヴィータに、十梧は疑問に思いながらもアパに注意を怠らない。

「……………いいいいいいいたいYOOOO!!遠慮の微塵も無くs
liceしたYONE!!」

首だけが宙に浮いている摩訶不思議な光景

まるで、首を抱える首なし騎士のお化けデユラハンを連想させる。

それにしても、本当にしつこいな……………。

「ま、そろそろGoodbyeのTimeだったしNE」

そう言うアパの真下に黒いモヤモヤが現れる。

「またNE!!」

「まちやがれ!!」

手を振りながら黒いモヤモヤに入ってゆくアパに十梧は魔力弾を撃つが既に遅く

アパの姿は無くなっていた。

第26話：蒼の衝動VS地神の腕（後書き）

どうだったでしょうか？

楽しく呼んでもらえたなら嬉しいです

では、また次回まで……………眠い

第27話：異質な予言（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

どうやったらず早く執筆できるか知りたいです（泣）

あ、あと

皆様のおかげで

100,000PV&10,000ユーブを達成しまし

たー！！

ありがとうございますー！！

第27話：異質な予言

turnアパ

闇が無限に広がる道を自身の首を抱えたアパが歩いていった。

「いや、死ぬかと思ったYO……… 剣帝さんマジで遠慮なかったN
E、あれは………」

離れていた頭と胴体をグリグリと押し付けて無理やりくっつける。

「よお、アパア」

道の途中に現れた黒いモヤモヤから、大剣を片手に持つブレイドがアパを見かけ、話しかけてきた。

「YOYOYO。ブレイドじゃんYO」

「その首、ぶった斬られたのかぁ？」

ブレイドは大剣の峰でアパの頭をつつくと、簡単にゴロンと道に転がり落ちた。

「ちよいちよい!! 待てYO!! 今Reviveしていた所なのにYO!!」
「クハハハハ!! 相変わらずおもしれえ体をしてんなあアパはよお!!」

慌てて頭を捨るおうとするアパの体は、足を挫いて道の上でド派手

にこけた

それを見てブレイドは体を仰け反らせて大きく笑う。

「……んで、ヴァントは逝ったか……」

ブレイドはニヘラとした笑みを崩さない、しかし瞳には別の感情が見受けられる。

「まあNE……あのままガイアの轟腕に取り込まれて“あっち”に行くよりはマシな死に方をしたYO」

体の上に頭を置くと、首の断面から液体状の触角のようなものが1本生えて、首の周りに巻き付く。するとアパの頭と体がくっつき傷跡もキレイになくなった。

「その心に揺れるのは悲しみ？怒り？憎しみ？」

暗い闇の中から現れたのは、ポロポロのマントに身を包みボサボサとした白色の髪を揺らす少女ミニユス。

ブレイドに近づくミニユスは大剣を自身の喉に向けられ立ち止まる。

「おっと……それ以上近づくなよ？」

「あら。残念……」

ミニユスがクスクスと笑い声をあげたのは、ブレイドの背後大剣の剣先には誰もいない……

「揺らぐ心は判断を鈍らせる……Do you know？」

ブレイドの腰あたりに軽く手を添えようとするミニユスの手をアパは掴んで止めた。

「M s・ミニユス、それはNOTだYO……」

今までの発言、行動からはまったくイメージがつかないほど真剣な面持ちになるアパ……

「M EのS p e a kの仕方をC o p yしちゃダメだYO!!」

やはりいつもと変わらないアパだった。

「フフ……それは悪い事をしたわね」

「そうYO!! Think Overしたなら、ここはM Eに免じて………NE?」

手を離しておどけるアパにミニユスは黙って微笑みながら闇に立ち去ってゆく。

「……わりいなあ、アパ……」

「どづいたしましてだYO。…でも、らしくないNE。“代わり”はいくらでもいるのに……」

「さあなあ……まあ、長い付き合いだったから情が移ったかもあるなあ」
ブレイドは何ともいえない顔をした後、「まあ、いいかあ」と眩き髪を掻きながら歩いていった。

「物語は進んでゆく……誰にも止められない早さで」

アパとは別の声に振り向くブレイドだが、そこには誰一人としていなかった。

turn十梧

謎のテロ集団アカナシムの2回目の攻撃を受けてから翌日。クラナガンからは逃げるように住民が引越しを始めている。まあ、確かに法の番人時空管理局本部があるのにも関わらず、こちらも連続で襲撃されちゃあ逃げたくはなるか

この事態に上層部はアカナシムに対応するための部隊に何度も交戦をした我らが機動六課を選んだわけだがこちらの都合上、少し待ってくれ、とタヌキが言ったので始まるのは2日後からとなった……………

「オウオオロロッ！！」

もう限界です……………

我慢できない吐き気を耐えてきましたが、ここにきて臨界点を突破したようだ。

口から放たれた大量のゲロをに手に持つ袋へと流れてゆく。

「大丈夫ですか？」

運転席で心配そうに後ろを振り向いてくるタシア、だが

「バカタシア！！余所見をするな！！前を見る！！」

助手席に座るソルカの注意に「え？」と前を向いたタシアの視界には大型のトラック。

十梧達を乗せた車は対向車線を走っていることになる。

「あ、危ない！！」

急いでハンドルをきるタシア、車はギリギリのところまでぶつからず、無事に車線に戻った……………1人を除いては……………

「あがががあ……………」

「白目を向いて気絶しているが……………いいのか？」

後部座席で退屈そうにする刹那は、口から泡を吹く十梧の様子にソルカを尋ねると

「いいんだ……………ですよ。気絶している間は吐かないわけだ……………ですし」

確かに

ソルカの意見に頷きながら納得した刹那は十梧をそのまま放置し、車の窓から目的地の聖王教会を見る。

聖王教会

まだ吐き気と目が回るような感じがするが、なんとか聖王教会の下町に着くことができた。

ちなみにソルカとタシアはある用事で、教会騎士団の方に車を走らせている。

「お待ちしていました。剣帝刹那」

声に横を振り向くと、髪を短く整えたシスターが立っていた。

「久しぶりだな、シスターシャツハ」

「はい、久しぶりです」

お互いに挨拶を交わす刹那とシャツハ。
知り合いなのか？

「そして、あなたが空蔵二等空佐ですね？

初めまして、私はこの聖王教会で騎士カリムの秘書を務めておりますシャツハ・ヌエラと申します」

「あ、ああ……」

「はやてからはあなたの話はよく聞いています」

思い出し笑いだろうか。表情に若干の笑みが含まれている。

「……………た、例えば」

あ、あのタヌキ。余計な事言っていないだろうな
そんな心配を持ちながら、恐る恐るシャツハに聞いてみる。

「ええ、最初に会った事件のことや車に弱いこととか……………」

「そ、そうか……………はあ」

よ、よかった……………例の事ではなかった。
思わず安堵のため息をつく。

「それでは行きますよ」

そう言つてシャツハは歩き出し、その後を俺と刹那はついて行く。

カリム執務室

シャツハに導かれるままに教会を歩くと、ある部屋の前で止まり扉
をノックする。

それにしても、刹那の人気は聖王教会でも健在らしい。道行くシス
ターが話しかけたり握手などを求めたりしてくる。まったく、剣帝
の名は伊達ではない……………あれ？前にもこれ言つたような……………。

「騎士カリム。剣帝刹那と空蔵二等空佐をお連れしました」

「入ってください」

部屋の中から女性の声が聞こえ、シャツハが扉を開けて「どうぞ」

と入ることを催促する。

部屋の中は女性が座っている机と右奥には円形のテーブル、机の上にはティーポットがあるので紅茶でも飲んでいたと見受けられる。

「久しぶりです剣帝刹那」

金色の長髪を持つ女性が机から立ち上がり、刹那に挨拶する。声からして先ほど部屋から聞こえた声の主であることがわかる。

「そして、初めまして空蔵二等空佐。私はこの聖王教会で騎士を務めておりますカリム・グラシアです」

「それじゃあ、こちらも……特化戦闘部隊ラークイン部隊長。そして今は機動六課部隊長八神はやての代わりに来た、空蔵十梧二等空佐だ。よろしく頼む」

挨拶も終わり、俺と刹那は使われていないイスに腰をかける。

「それで、騎士カリム。話とはなんだ？」

単刀直入すぎる、が俺もそうは思っていたんだが……

「……本当ははやてとなのはさんとフェイトさんにもこの場で話したかったのですが……」

そう言つて真剣な表情でチラリと俺を見るグラシア

高町一等空尉は入院中、ハラウン執務官はランスター執務官と一緒に別の仕事で遠出している。そして、はやては……

アカナシムの1人メドウに殺されたロングアーチの女性の葬儀に出ている。

今日、初めて会う信用のできるかわからない人物に代理だからと言
って大事な事をさらりと話すほど甘くは……………

「まあ、いない人はしょうがないですね。早く話しを終えて、茶に
でもしましょう」

そんなんでいいのかよ!!なんだよ!!さっきの真剣な表情はよ!!

「そうだな」

刹那!!お前はそれを肯定するな!!

もう……………なんか、話を聞く前に精神的に疲れてきた。「どうした
んですか?グツタリしているようですが……………」

いや、あんたのせいだよ
とグラシアに対して無性につっこみたかったが、そこはグツと堪え
ることにする。

「……………何でも。それより」

「そうですね」

グラシアは瞳を閉じ、自身の希少技能【レアスキルプロフェーティン・シユリ
フテン】を発動させると、腰の周囲に十数枚の金色のカードが回り
始める。

これが、未来を詩にして予知できるレアスキルか……………

「ん?」

突然、刹那が何か異質を見つけたように眉をひそめる。
その異質は、1枚だけ他のカードの軌道を外れ、グラシアの顔周辺を回る白銀のカード。

「これです……」

グラシアは白銀のカードを手に取ると、そこに書かれている文章を読み上げた。

「閉ざされた歴史の彼方

忘却された世界の古城が大地に息吹を吹き込んだ時

それは始まりの詩うたとなる

その身に堅き鎧を

その剣に死を

その心の臓に不死を纏う魂なき軍団

それを率いて始まる戯曲に、法の番人は踊り狂う。

太古の礎の虚無へと葬られた禁の聖王の魂

その力を封じた神の名を持つ武具

目覚めに白銀の髪を靡なびかせる種子

3つが揃いし時

種子は自らの戒めに絶望し、霸王との闘いの果てにその命を天に捧げる

それは万物を統べる者が降臨する交響曲シンフォニーを奏でる

世界の革変に受け入れた者には永久の祝福を

受け入れぬ者はその身に刻むだろう

自らを破滅へと誘う真なる鎮魂歌を………」

グラシアはそれを読み終えると、ひと息ついてイスに座った。

唱えられた詩には禁の聖王や種子などの意味不明な部分もあったが、まずわかったことは不死身の軍団を率いた奴らが管理局に喧嘩を売ってくると言うことだ。

ん？もしかしてその軍団って………」

「アカナシム………」

刹那はポツリと呟く

どうやら、考えていたことは一緒だったらしい。しかし、アカナシムが従えている人造人間は不死身に程遠く、一定以上のダメージを与えてしまえば灰になってしまうほど脆い。

「グラシアはアカナシムがほぼ不死身の軍団を率いた奴だと？」

「はい………最初は何か失敗でもしたのかと思いましたが、アカナシムの襲撃にもしやと………」

ほう、それでタヌキ達に話そうと思ったのか。

「待て。ならば前の文節は何の事を示す？」

刹那の鋭い意見に確かにと頷く。

閉ざされた歴史の彼方

忘却された世界の古城が大地に息吹を吹き込んだ時

それは始まりの詩^{うた}
もし、この予言が本当に起こりつつあるならばこの事柄も起きてい
るはずだ。

「調べる必要があるな」

刹那は立ち上がり部屋の扉へと歩いてゆく。

「おい、刹那」

「ゆっくりしてられないんだ。騎士カリム、茶は後で事件が終わ
ったら貰う」

十梧の呼び止めに応じず、刹那は微笑みながらそれを言い残して、
部屋から出て行った。

「せっかちですね」

「……そうだな」

いや、せっかちと言うよりは焦っているような気もする。

自分の勤める隊の仲間が1人死んだ。

それがどうしても許せなくて、また誰かが死ぬのを恐れている。

刹那はおそらくそう思っているはず。

「いいんですか？追いかけてなくても」

「いや、帰るための車が無いんだ。離れる事はできないだろ」

ソルカとタシアが教会騎士団に行っているため、当たり前のように

車は無い。

「そうですか……。はやて……。様子どうでした？」

妹思いの姉を思わせる心配な表情で話してくるグラシア。

昨日の事件により

機動六課の隊員の半分が辞退を申し出た。

隊員全員の理由は「死にたくない」

たったその一言だけだが、その一言で大いなる意味がある。

それは、「機動六課」間違いなく死ぬ」と言う方程式を頭に思い浮かんでいること。

それは部隊長にとって自分は隊員達に信用されていないと決めつける材料となる。

今朝、食堂で見たはやての表情は暗く……。そして今にも泣き出しそうなの

そんな感じがした。

「あ、あの！もしよければ……」

グラシアがいきなり手を掴んできて、真っ直ぐとした瞳で俺を見つめてきた。

「はやてを慰めてもらえませんか？」

「あ？ああ………」

何故に俺？と言いたかったが、グラシアの面持ちがあまりにも真剣だったのです承するしかなかった。

「よかった……。では、お茶にしましょうか。」

シャツハ」

安堵な表情を見せるグラシアはシスターシャツハを呼んでお茶を持ってくるようにと頼んだ。

蒼仁……お前は今、何をしているんだ？。

窓から見える空を見つめて、いなくなつた友人の息子の事を思った。

第27話：異質な予言（後書き）

なんかビミョーだった気がします。

さて、次回はやっと蒼仁のターン………眠い

また、次回まで

第28話：共鳴する種子 前編（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

テスト前にどうにか書けました（-|-#）
でも、やはり何回見ても駄文乙（泣）

それに、執筆中に保存して閲覧してみると
ちゃんと変換したはずなのに違う漢字になっていたり、せつかく書
いた箇所が無くなったりすると言つ2つの出来事にマジ泣きたくな
りました……。

こんな小説ですが
ごゆるりと楽しんでいただければ嬉しいです。

第28話：共鳴する種子 前編

アタン・テラス

次元世界を移動するための艦を動かすマスターキーをゴーレムフェチマ？オモドキ（デイラン）の部下に盗まれ、それを取り戻すためにアタン・テラスと呼ばれる地域で行われるカジノパーティーに潜入することになった蒼仁達であった……。

t u r nカリナ

「……………」

街の入り口付近

カジノに入るために赤色のドレスを着たカリナが腰に手を当ててブスツとした表情をしていた。

声をかけようとしてくる男達は、この顔に怯え、なにも見ていなかったような素振りをして通り過ぎてゆく。

そんなカリナの目線のさきには、ボーッと突っ立っている蒼仁がいた。彼は先ほどから街の方を見てばかりで、一言も喋らない。

別に見てもらいたいわけではない。ただ、何故かイライラしているのだ。このイライラの原因は根拠はないけれど蒼仁
そんな気がするのだ。

t u r n 蒼仁

目がチカチカするほど眩い光を放つ街並みを見る。

どいつもこいつもバカみたいに着飾りやがって、アホみたいに笑い
やがって……イライラする。

デイランが治めていた街での出来事を思い出して、拳を強く握る蒼
仁。

それと同時

スナツプの利いたカリナの平手打ちが蒼仁の頬をとらえ、パァンと
よい音を街に響かせる。

「いてえわ!!」

「……………」

ヒリヒリと痛む頬を手で押さえてカリナを睨む蒼仁だが、彼女は何
も言わずに「フンッ」そっぽを向いた。

「なんだよ、つたく!!この貧乳!!」

ゴオッ

それは空気を突き破って蒼仁の顎をえぐり殴った。
放たれたのはカリナの左アッパー

腰、脚、腕

この3つがうまく連動した1撃はプロさえも魅了するだろう。

「その技のキレ……世界を狙えるぞ……」

意識が闇に落ちるギリギリで踏みとどまった蒼仁の後ろから関心の声があがる。

肩にかかるぐらいの黒髪と桜の模様が彩られてある着物を着た櫛灘秋雨だ。

デイランの街で共闘して以降、俺達と一緒に行動している。理由は「おもしろそうだから」だそうだ。

《ただいま戻りました》

秋雨の胸元で光る勾玉は、デバイスのサクラフブキ通称フブキ。

「買ってきたのか？」

「うむ」

秋雨の手に持つ袋にはインスタントラーメンが入っていた。

本人は1日3食をラーメンでもよいと言うほどのラーメン好き艦にラーメンが無いので、カリナからお金（自分で持っていたのは落としたらしい）を借りて、アタンテラスに着いて早々に買いにいったのだ。

「それにしても大丈夫だったか？」

「なにがだ？」

なにがだつて……………。

俺より2歳年下なのだから、変なオツサンに絡まれたりしたら……………

「おおー！いつ！いつ！こっちのゴミ箱に人が詰められてるぞ！」

「なんだと！？誰だよ！？こんなむごい事した奴」

向こうで2人の声が聞こえる。

ゴミ箱に人が詰まってるって、どんだけ奇妙な状況だよ……………

「ちつ……………見つかるのが早かったな。蒼仁殿、カリナ殿。速急にカ
ジノに向かうぞ！」

「お前かよ！！」

俺のさっきまでの優しい心をどうしてくれる

もうお前なんか心配するものか。

そう思いながら、誰にもバレないようにその場を去っていった。

幾つかの怪しげな視線に気付かずに

先ほどの場所からだいぶ離れた街道で、速まらせていた足を通常の
速度に戻す。

「アキ。お前、なにやった？」

アキとは秋雨の愛称

そう呼んでくれと言われたので、そう呼んでいる。

「む？私はただ。怪しげな人物に声をかけられたので、左肘の関節をポキツとした後、ゴミ箱に…… スパァーン！！ ……何を
する蒼仁殿……」

どこから取り出したのか蒼仁はハリセンを右手に秋雨の脳天を思いつきり叩いた。

「この世のどこにそこまでする13歳がいるんだよ！！」

「ここにいる！！」

「威張るな！！」

胸を張って誇らしげに言う秋雨に再度、ハリセンを振るう。

《ナイスです。蒼仁さん》

秋雨のツツコミ役の子ブキが賞賛してくれた。……今までコイツと過ごした子ブキの苦勞が実感できる……。

まあ、ツツコミは叶恵で鍛えられているからいいけど……。
叶恵と言えば、なんである時
自分の姿を叶恵に見せる事を俺は恐れたんだろう。

蒼仁はアリサ・バニングスの別荘で行われたパーティーの事を思い出す。

緑のオールバックとスーツを着た男メドウ

なんとなくだが、アイツは何かを知ってるんじゃないのか？

メドウは人質になった3人の内、近くに浮いていた唯華に手をふれずにわざと叶恵に触ったような感じがした。

その時、心の奥底で何かが騒ぎ出したんだ。駄目だ駄目だ駄目だ、叶恵の目を開けさせては駄目だ……と。

「……ど……そ……ん……の。蒼仁殿？」覗き込んでくる秋雨の声それに蒼仁はあとで時間がある時にと考えるのを止めた。

「なにまたボーっとしてんのよ」

冷淡な声のカリナは握り拳を見せつけながら、蒼仁を睨んでくる。

「もう一発やってやるのか？」と脅しているように見える。いや、脅しているな確実に……。

カリナをツンデレからツンドラに認識した蒼仁は何かないかと辺りを見渡す。

すると男に囲まれている2人の女性を見つけた。

1人は長い金髪に赤い瞳をした女性で

もう1人がオレンジ色で前者より少し短めのロングをした女性
どちらも美人で、周りにいる男は皆、鼻の下を伸ばしていた。

「あの2人は……」

「知ってんの？」

「管理局の執務官よ。なんで、こんなところに……」

カリナは顎に手を当てて、何かを考え込み始めた。

「管理局がいたらダメなのか？」

「【次元世界不干渉条約】がある」

「次元世界不干渉条約？」

秋雨が言った聞き慣れない単語を蒼仁はオウム返しのように口にする。

「アタン・テラスの統治者の力は強大で、管理局もあまり敵に回したくないの。それで、統治者が提案した条約。これがある限り管理局はヘヴィバッドに入る事はもちろん干渉する事もできない………
…はず」

何か引つかかる

それを言いたげな表情を見せるカリナ。

すると蒼仁が視界に入った巨大な建物に歩みを止める。

「これが………か？」

「そう、これが目的地の【カジノ・ブレッジ】」

それはカジノと言うより威厳を放つ古城。

蒼仁は何故か体を震わせた。

見えない何かが頭の中に突き刺さるような痛みに襲われ、うまく体のバランスがとれなくなる。

ふらつく足をどうにか安定させ、痛みが治まるのを待つ。

「大丈夫か？蒼仁殿」

「悪い、アキ」

蒼仁の様子に気付いた秋雨が肩を貸してくれたおかげで倒れずにするんだ。

しばらくして、頭痛がすーと無くなってゆき、蒼仁は安堵の息をつく。

「……そんな……まさか……でも……」

カリナが無言でこちらを見てくる。その顔は心配ではなく、難しい事を考えているような感じでブツブツと何かを呟いていた。

「カリナ」

「……しかし……それよりも……」

聞こえていないのか？

まさしく自分の世界に入り込んでいる状態なのであろうか。全く反応しない。

「……貧乳……」

ヒュッ

空気を裂く音と共に

カリナの素早い一撃が蒼仁の鳩尾に炸裂した。

「体重×回転力……それが音速を生み出したか」

体が崩れ落ちる蒼仁の横で、秋雨が冷静な実況判断をしている。

「……………作戦は前日に言った通り。失敗は許さないわよ」

「では、蒼仁殿。ご武運を……………」

カリナと秋雨はそう言った後、人混みのなかに紛れ込んで消えていった。

「っのやる……………覚えてろよ……………」

激痛が治まらないがいつまでも倒れているわけにはいかない。立ち上がった蒼仁は、フラフラした足取りでカジノ・ブレッジに向かって歩き出した。

turnフェイト

私とティアナは管理局から極秘の任務を受けある人物の行方を追っていた。

そのため第13管理外世界へヴィバット

通称、悪の巣窟と呼ばれる世界に来ている。

この世界と管理局は次元世界不干渉条約によって立ち入りを禁止されている。

しかし、もうここしかないのだ。

“彼”の足取りを知る手掛かりがある研究所は

だから、私は無理も承知でヘヴィバットの首都、アタン・テラスの統治者との交渉を挑んだ。

しかし返ってきた答えは意外で

「私が開催するパーティーに出席する事を条件にする」

あまりにも簡単すぎて疑うほどだ。

だが、極秘任務は世に知れ渡る前に終わらせなければならぬ。だから、悩んでいる暇もなく。ただ、「わかりました」と言う返事で承するだけだった。

そしてパーティー当日

しつこく声をかけてくる男達に囲まれ、非常に困った状態に至った。まあ、しょうがない事ではある。

それほどフェイトは魅力的であるのだから。

今年で25歳

女も羨むような容姿を持つフェイトがドレスを着て歩いているのだ。自然に男達の視線を釘付けにするだろう。

迫る男達に愛想笑いしていると、男と男の間から見覚えのある少年を見た。

確か……………そうだ

あの写真の子だ

フェイトは機動六課のブリーフィングルームで行われた会議の時に

モニターに映し出された写真を思い出す。名前は雨井蒼仁だったよね……。

何でこんなところに？

いろいろと疑問があるのだが、今は保護が先決である。蒼仁に近付こうと一歩を踏み出すが、行く先を1人の男が邪魔をした。

「おっと、どこに？なんなら俺も……」

「これまでにしないと公務執行妨害で管理局の冷たい牢屋行きよ」

そんな声と背中に銃型のデバイスの銃口が向けられ男は「ヒイツ」と情けない声をあげて、フェイトの前から立ち去っていった。他の男達も蜘蛛の巣のように散り散りに逃げていった。

「大丈夫ですか？フェイトさん」

「ありがとう、ティアナ」デバイスのクロスミラージュを待機状態に戻したティアナ。

彼女もフェイト同様にドレスを着用し、通り過ぎてゆく男の視線を奪っている。

「……………」

蒼仁がいた方を再び見るフェイトだが、すでにその姿は無かった。遅かった……………

「どづしたんですか？」

「ん、ちょっとね」

見間違いかもしれない
仕事に支障がでる可能性もあるので、ティアナには言わないでおこ
う。

そう思ったフェイトはティアナと共にその場を後にし、カジノ・ブ
レッジへと向かった。

カジノ・ブレッジ

turn 蒼仁

「……何とか入る事ができたな」

蒼仁はカジノ・ブレッジのパーティー会場内への侵入に成功し、軽
くだが一息をついていた。

カリナが立てた作戦には入り口で行われている検問で引つかかる物
をそれぞれが持たされているだ。

なので、入り口から堂々と入るわけにはいかないのです、各々で方法
を考えて別ルートを使ってパーティー会場に入る必要があった。

そこで蒼仁が考えた方法

それは………

「ったく………」

「いらっしやいませ」

入り口から髭を伸ばしたえらそうな爺さんが愚痴を言いながら歩い

てくるので、手にワイングラスを乗せた皿を持って接客する。

そう、今の蒼仁の姿はウェイターである。

どうやって入るかとウロウロしているところメガネをかけた男に新人のウェイターと間違われて捕まり、そのまま職員入り口から皿を持たされ、パーティー会場に放り込まれた。

アリサ別荘のパーティーの時もだが、なぜこうもウェイターに間違われるのだろうか？

蒼仁はそんな疑問を考えながら、爺さんにワイングラスを渡した。

「楽しい時間をごゆるりと……」

「……何やってんのよ」

お辞儀をした蒼仁の後ろ

腕を組んで立っているカリナがいた。

「何って、ウェイター？」

「だから、何でそんな事してるのよ」

「風吹くままに〜ってなノリでいったらこうなった」

おどけたように笑うが、カリナは依然と冷たい視線で蒼仁を睨む。

な、何かしないといけないのか？

さすがにこうも睨まれると、焦るのが人間

とっさに蒼仁はカリナにワイングラスに入ったカクテルを渡した。

「どうぞ、お客様」

「私、未成年だけど」

この対応はバツサリと切り捨てられる。

それじゃあ、何をすれば……………？

辺りをキョロキョロと見渡して、あたふた様子を見せる蒼仁にカリナは顔を伏せる。

「クスッ」

微かにだが、少女の短い楽しげな笑い声に蒼仁はカリナに視線を戻す。

「なによ」

顔を上げたカリナはいつも見せるしれっとした表情。だが、何か柔らかなものも感じられる。

「この会場にお集まりになされた紳士淑女の皆さん！！」

会場が暗くなり、3つのスポットライトがステージに乗っている七色のサングラスをかけた司会者を照らしだした。

「さあ！！さあ！！では、今宵のメインイベント【108式ルーレット】の幕開けです！！」

司会者の右横。

仕切られた赤いカーテンを作業員と思われる2人組におろされる。目測で10メートルはある巨大なルーレットがその姿を表した。

達よ。我が種子達よ。我が種子達よ。我が種子達よ……

ビデオレコーダーを何度も再生するように、同じトーン、同じ速さでその言葉が蒼仁の頭の中をまわる。

「大丈夫？」

誰かが肩を叩く

それと同時に頭に響いていた声も止み。蒼仁は額にかいた汗を袖で拭って立ち上がる。

後ろを振り向くと、ウエートレスの女性が心配そうな顔をしている。

「具合悪いの？」

「大丈夫ですよ……」

蒼仁はそう言ってその場から離れていった。

turnカリナ

3色のスポットライトが照らすステージ前
カリナはルーレットの方をジッと見ていた。
その瞳には多機能を搭載したコンタクトレンズ。

半径は5m弱。

1マスの大きさは約30平方cm。

まあ、こんなものね。

ルーレットの大きさを図るカリナ。

「参加者も全員お揃いのおようですので、ルールを説明します!!
ルーレットを回す前に私が許容される誤差の範囲を指定します!!
その範囲内ならば50離れようが、100離れていようが、セーフ
となります!! 誤差の範囲は勝ち残れば勝ち残る程に狭くなり、最
後の1人になった方はカジノ・ブレッジマスターから素敵な賞品を
贈呈します!!」

「ふーん……………」

興味なさげに司会者のルールを聞くカリナ。

何故、彼女がこのイベントに参加したかと言うと

作戦でこのカジノのメインコンピュータをハッキングし、艦のマ
スターキーがあるとと思われる換金所の倉庫にかかっているロックと
この会場を包むAMFの2つを解除する必要があるからだ。

この会場で唯一メインコンピュータと繋がれている機材はルーレ
ットを除いてないのだ。

そこで、イベントに参加して最も近い所から誰にもバレないように
先日作ったお手製のウイルスを送り込んで、ファイアウォールまで
たどり着けば……………。

カリナは横目で左右の人間が自分を見ていないのを確認。ルーレッ
トのプラグと思われる所にコンタクトレンズからウイルスを送信す
る。

「……………それは何だい?」

カリナは肩をビクリと震わせて、ゆっくりと声のした右を見る。

そこにはボサボサした紫の髪を持つ仮面で顔を隠している男がいた。

「ウイルスか何かかい?確かにこの会場でメインコンピュータと

繋がっているのはこれだけだからね」

「……………さあ……………」

おもしろげに話す仮面の男

カリナは心中で驚きながら、表情に出さないように冷淡な声で答える。

「答えてくれないね…。なら、勝負をしよう」

「……………勝負？」

「そう。このルーレットとでどちらが最後まで残る事ができるか。

もし、私が勝てば君がやっている事を近くににいる職員に言う、とか」

仮面で隠れているがこの男、笑っている。

カリナは仮面の男を睨み無言で頷き勝負を受け入れた。

「では最初の許容誤差範囲は54!!」

確率は2分の1か……………。

バニーガールが液晶の下に赤と黒、0～9までのボタンがついた手のひら程の長方形の機械を渡す。

その時に、無駄に胸を揺らすバニーにイラツとしたカリナだった。

「制限時間は10秒!!それまでに自分が予想した番号をその機械に打ち込んでください!!」

司会者が機械の説明を終えるとルーレットからガコンツと共に球が弧を描いて転がり始める。

「始め!!」

司会者の後ろに巨大なモニターが現れ、残された時間を表示する。
時速………球の直径………マスの位置
コンタクトレンズからの3つの情報から予想されるだいたいの位置
をカリナは機械に『黒・13』と打ち込んだ。

「終了!!」

モニターの数か0になり、後は球がどこに転がり込むかだけ
会場が静寂に包まれる。

そして、球が入ったマスの数字は………赤の14。機械の液晶に表
示されるSAFEとOUTの文字に歓喜と悲嘆の2つの声に参加者
からあがる。

もちろんカリナはセーフ。隣の仮面の男も同じようで、余裕そうだ。
「では、当たった方のみステージ前にいてください!!」

一回目ではあまり減らず、見た数では4、5人がトボトボと観客の
人集りに歩いてゆく。

「続いて2回目はあゝ!!許容誤差範囲27!!」

司会者が会場に響く。

ゲームは始まったばかり

「楽しくなってきたじゃないか」

「そうね」

楽しげな仮面の男に素っ気なく答えるカリナ。

参加者は既にこの2人を含めて5人となる。

テンションのボルテージがMAXの司会者が、ややヒステリック気味な叫び声で10回目の許容誤差範囲を告げる。

「許容誤差範囲い！！5オ！！」

これを合図に転がる球

参加者は機械に自分の予想した数字を打ち込む。

カラんと音を立てて球が入ったマスは、黒の35。

「クソツ！！」

「わぁ……………」

「ノオオツ！！」

外した3人はそれぞれ声を上げながらステージ前から立ち去り残ったのはカリナと仮面の男の2人となった。

もう少し……………」

カリナはコンタクトレンズを通して、送り込んだウイルスの位置を確認。あと3分でファイアウォールのロックを解除するまでにいた

った。

「どこまで行ったんだい？そろそろファイアウォールまでは行っているね？」

横目で仮面の男をギロリと睨む、男は「おお、怖い怖い」とおどける。

何者なのコイツ？

そんな疑問を抱えながらマイクを構え始める司会者を見る。

「さあああつ！！次で決まるのかあつ！！？第11かい……」

ダァンッ

司会者の叫びよりも大きな音が辺りに響き

時間を表示するモニターに人くらいの大きさをした何かが入り込んでいった。

いきなりの出来事に騒ぎ始める客

「なっ………！？」

カリナは目を見開く。

モニターにめり込んでいる人物……蒼仁だ。

ウェイトアの服は腹を中心に破れ、口から血を吹き出している。

「……つまらんな」

群がる人集りに一筋の道ができる。
その道を歩き笑みを見せるの女性

「それで、終わりのわけではなかるう？」

後編に続く……

第28話：共鳴する種子 前編（後書き）

テストに試合に修学旅行！！

執筆する時間が限りなく少ないなあ（泣）

でも、修学旅行は楽しんできます！！

では、また次回まで

第29話：共鳴する種子 中編（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

修学旅行帰ってからすぐの投稿なので

疲れのせいで誤字が……………ウツプ

もう飛行機なんて乗りたくない……………（泣）

第29話：共鳴する種子 中編

t u r n 秋雨

アタン・テラスの地下

薄暗い廊下を巡回するスーツの男。その手には黒光りする機関銃が握られている。

コンッ

静かな廊下に響いた音に、男は曲がり角に人の気配を感じて駆け寄る。

「誰だ！」

角を曲がって機関銃を構える男。しかし、その銃口の先には一人すらいなかった。

気のせいか？

そう思った男の首筋に強い衝撃を受けて意識を失った。

「ふう……………なかなか嚴重だな」

姿を現したのは秋雨。

天井に張り付いて巡回を待っていたのだ。

カリナが立てた作戦で秋雨の役割は換金所の倉庫にあると思われる艦のマスターキーの奪取。

「さてと、あとはここを真っ直ぐに行って突き当たりを……」

目的地である倉庫までの道筋を確認していると、こちらに近づく足音が聞こえ始めた。

秋雨は身を屈めて、道の角から様子を窺う。

……………こない？

足音だけは確実に近づいてきているのだが、気配を感じられない。

秋雨は前後左右を確認するが物影の1つすらなかった。

時間の無駄になる。見つかる前に倉庫に向かえば問題ないと身を乗り出した。

「……………こんにちは」

背後

女性の声に秋雨は後ろを振り向く。そこには顔全体を隠す奇妙な仮面と2メートルはあるバルカン砲を持つ女性と思しき人物がいた。

この者、気配がしない？

秋雨は女性に警戒しながら所持していた木刀を構える。

カリナがまだAMFを解除しておらず、サクラフブキに応答がない。

「……………私の名前はグレイ……………あなたは？」

「名乗る必要がない」

そう答えた秋雨にグレイは首を横に振って

「ダメ。あなたの名前は？」

「名乗るひつ……」

「ダメ」

「櫛灘秋雨だ」

折れるのが早い秋雨

グレイは満足げ（？）に首を縦に振ってバルカン砲を構えた。

「……………始め」

バルカン砲から雨のごとく銃弾が放たれてゆく。秋雨はそれを横に跳ぶことによつて回避する。

道の角によつて銃弾がこちらに届かない内に秋雨は倉庫に向けて走り出した。

木刀とバルカン砲ではあまりにも分が悪すぎる。

ある程度なら斬り防ぐ事は可能だが、あの濁流のように迫ればひとたまりもない。故に秋雨は撤退の選択をとった。

「カリナ殿、急いでくれ……」

秋雨はそう呟いてグレイを背に走ってゆく。

t u r n 蒼仁

悲鳴と怒声

その2つの叫びが響き渡るカジノ・ブリッジのパーティー会場いきなりの出来事に我先にと出口へ逃げ惑う観客の中、たった1人の女性が笑みの表情で立っていた。

「いて……………」

モニターにめり込んでいる蒼仁は腹と背中の中苦痛に呻いた。ふと下を見ると、カリナと仮面の男の姿が見えた。こりゃあ、後で説教か。

そんな事を考えながら、モニターにめり込んでいる体を動かし、抜け出して落ちる。

下にあった巨大なルーレットに着地すると、振動で転がっていた銀色の球が宙に浮かぶ。

それを一発の魔力弾が撃ち抜いた。

狙撃したのは女性

手に持つ刃を取り付けたショットガンから薬莢がカランと床に落ちる。

「カリナ。あの人、誰？」

口元の血を拭いながら蒼仁はカリナに訊いた。

「…………レベッカ・シックザール。このアタン・テラスの統治者。次元世界不干渉条約の原因。あなたの何百倍強い」

「わかりやすい説明、ありがとさん」

カリナとの短い会話をしながら、レベッカへと歩み寄る蒼仁はポケットからデバイス、レディアントを取り出す。

「AMFは？」

「解かれてた」

そりゃそうか。

デバイスの起動までままならないほどの強力なAMFの中で、女性が魔力弾を撃つ事はできないか。「レベッカ・シックザールさん、でいいんだよな？」

ある程度の距離まで近づいた蒼仁は立ち止まり、確認の質問をする。

「ああ、アタシがレベッカ・シックザールだ。
小僧は？」

クルクルと銃剣を回しながら答えるレベッカ。
近くにあったイスに腰をかける。

「雨井蒼仁。どこにでもいそうな一般中学生を夢見てる可哀想な少年さ」

後半からはふざけに入っている自己紹介を頭を掻きながらめんどくさそうに言った蒼仁。

次には真剣な眼差しでレベッカを睨む。

「なんで、真武兄さんの事を知ってた？」

少し時間は遡る。

蒼仁はウェイターの仕事を着々とこなしながら、カリナが参加しているルーレット大会を見ていた。すると、背後からある言葉が囁かれた。

「妃山真武は生きている」

“妃山真武”

その単語に反応した蒼仁は後ろを振り返ると同時に、腹に魔力弾が直撃し吹き飛ばされた。

「真武、兄さんねえ……」

兄さんの部分が強調されたのかは、わからないが。真武について何かを知っている事はわかった。

「知りたいかい？」

「ああ」

問いかげに短くしつかりと答える蒼仁。

その答に満足気に笑むと同時に立ち上がったレベツカは、電光石火とも言える速さで蒼仁との間合いを数cmに詰めた。

「なら、生き残って見せる!!」

振り下ろされる銃剣

蒼仁はその軌道線に手をかざした。

「アント、BDS!!」

《All Right Master! Boost Drives System Starting!》

レディアントが蒼仁に応え、足元に銀色の魔法陣を手に杖でレベツカの一閃を防ぐ。

「聖帝器レディアントか!!」

コイツ、レディアントまで知ってんのかよ!!

火花を散らして鏝ぜりあう銃剣と杖だが、徐々に蒼仁が押されてくる。

完全な力負けになる前に蒼仁は銀色の魔力弾20発を形成し放った。

「ハッ!!」

魔力弾はレベツカの一閃によりすべて両断されるが、その代わり数秒のスキができた。

バックステップで離れた蒼仁はレディアントの矛先に魔力を収縮する。

レベツカも銃口に魔力を収縮しているのが見える。

真っ向勝負ってか?

「エクサノヴァブレイカー!!!」

「死に失せな!!!」

最大までに溜まった魔力が輝き、そして放たれた。

銀色と灰色

2つの砲撃がぶつかり合った衝撃の余波で周りのテーブルやスロツトなどが吹き飛び、窓が風圧で割れてゆく。

互いの攻撃は均等を保った

一瞬だけ

銀色が灰色に押される。それはレベッカの砲撃が蒼仁の砲撃を上回る威力を誇っている証拠。

「っ!?!」

驚愕に表情を染める蒼仁を灰色の砲撃が呑み込み、後ろの壁を破壊して貫通した。

崩れ落ちる壁と砂塵が舞う中、山のように積み重なった瓦礫の上に頭から血を流し、息を荒くする蒼仁の姿があった。

「ハア…ハア…ハア…」

顔色一つ変わっていない事から、本気を出していない。

そんなレベツカにここまで差を付けられた蒼仁はチツと舌打ちをする。

「真武の奴め、法螺を吹いたな……。つまらん」

真武の名を友人を呼ぶように言い方で呆れたように話すレベツカ。胸ポケットから葉巻を取り出して口にくわえる。

「もうちょっと、歯応えがあるかと思っただが」

そう喋りながら葉巻に火をつけ一服。

口から煙を吐き散らす。

魔法じゃあ太刀打ちできないか……。なら！

「アント、（ベーター）ドライブ!!」

《Gear Change! Drive!》

白銀の魔法陣が展開

レディアントを前にかざす蒼仁の瞳が黒から銀へと変わる。

BDSは俺の中にある何らかの力を魔力に変えたり、身体能力の向上させるシステムで、ドライブを変える事によってその力の配分が変わる。

初期状態である ドライブは魔力と身体能力を均等に力を分ける。

ドライブはその配分を身体能力に傾けたドライブである。

「おりゃあっ!!」

跳躍のために足場にした瓦礫の山を崩壊させ、蒼仁はレベッカとの間合いを一気に詰め、レディアントを振り払う。

「ほお……!!」

一撃を防いだレベッカは感歎の声をこぼし、表情に強い笑みを浮かべた。

それは、獲物を見つけた獣のような瞳。

蒼仁を押しつけ、レベッカは銃口に魔力をコンマ1秒でMAXまで収縮

間髪入れずに砲撃を放った。

しかし、砲撃は獲物に当たらず床を打ち砕いて破片を宙に浮かべるだけだった。

「こつちだよ!!」

声が響いたのは上

上を向いたレベッカは、自らの砲撃で作り出した床の瓦礫を蹴り出す蒼仁を視界に入れた。まるでサッカーボールのように蹴り出される瓦礫は回転しながらレベッカの元へと飛んでゆく。

「面白い!!」

レベッカは笑いながら飛来する瓦礫を足場に蒼仁へと近づいてゆく。

人間か？あいつ……。

何とも人間離れな光景に蒼仁は若干、呆れるようにため息をつく。
相手との距離が5m弱

残っている瓦礫を足を振り上げた時の遠心力で回転しながら蹴り出す、オーバーヘッドシュートに似た技をを繰り返した。

昔、ワールドカップを見て触発された叶恵とよく練習したな……。

そんな事を思い出していると、最後の瓦礫はレベッカの銃剣によって両断されてしまった。

「もう、終わりかい？」

「まさか」火花を散らして、ぶつかり合う銃剣とレディアント。そして、互いに引かぬ攻防を繰り返す。

turn秋雨

上で爆発音が聞こえ、建物全体が揺れた。振動に天井に張り付いていた埃が舞い落ちる。

「汚い雪だな……」

ポツリと呟いたのは秋雨。押さえている腹辺りが血の赤で滲んでいる。

現在、秋雨はグレイに出会った場所から倉庫への道の間にあたる迷路のような通路を歩いていた。

何とかグレイを撒くことができたが、それまでに何発か銃弾を受け

てしまった。

手持ちにあつた止血剤でこれ以上の出血を防ぐ事はできた。しかし、流れてしまった血は戻ってこないため、たまに頭がククララして千鳥足のように足取りがふらつく。

何かないかと所々にある部屋に入って物色するが食料は見つからず、代わりに怪しげな機材と人体実験を行われたと思われる研究室を見つける。

まあ、悪の巣窟と呼ばれているぐらいだ。こんな物が有つてもおかしくはないかと秋雨は解釈して見つけては破壊した。

「ラーメン……ラーメン……ラーメン……ラーメン」

譫言のようにラーメンを口にし始めた秋雨に扉の隙間から薄く光が漏れる部屋が目に入った。

右左と見てみるが道は無く、さらに後ろを振り返ると最初っからそこにあつたように壁が物言わぬ顔であつた。

つまり正面にある部屋までの一方通行しかないのだ。

「……怪しい」まるで自分を誘っているような不審な扉。行く先は限られている。

「ハッ！」

何かが仕掛けられている可能性があるのです、秋雨は木刀を振り払い扉を斜めに両断。

扉の上の部分がずれ落ち、部屋の中が見える。

そこには人が入っている緑色に光るポットが2つあつた。

ポットの中にはそれぞれ人が入っており

1つは橙色の髪をした少女

もう片方は長く青紫色の髪をした少女。

どちらも裸のため、あまり長く直視できない。

「これは……………」

部屋の中に入った秋雨は机に置いてあったクリップボードに挟めてあった数枚の資料に目を通した。「素 de 26・デ」

「これで生み出され 体の中で最高峰と呼ぶに相応しいcode イムはデータをプログラムに書き出すよって、そのデータの人間の能力、魔力、技を得る事きる。だが、その最高峰でも聖王シユの高貴なる魂の欠耐えきれずにスラリス ト】になった。

私は恐らくこの後、に殺され であろう。彼女をこのような結末に たのであるのだから。もし、この場 見つけた者に 推測を残す。

イ じ能力 持った素 り出す事に成功できたのならば
の王と れた者のデータをプログラムに加え によって聖…
…」

1枚目の紙は所々破れている上に、下の箇所が切り取られていた。

「よくわからん」

続いて2枚目を見ようと紙をめくろうとした秋雨の耳にクシューと言つ音が入り、横を振り向くとポットの1つが開かれようとしていた。

液体が床に流しながらポットから現れたのは橙色の髪をした少女

秋雨は咄嗟に木刀を構える。こんな場所にいるのだ。精神操作されている可能性がある。

ガタン

意識がないのか、少女の体は液体で保っていたバランスが崩れて、前に体重がかかってポットから落ちる。

「つと!？」

秋雨は木刀を投げ出し、落ちる少女の体を急いで抱き寄せ、地面への衝突を防いだ。

ホッと一息をつく秋雨は少女の顔を見る。安らかそうに眠っているその寝顔は、世間一般的に可愛いと言えるもので、秋雨はしばし少女に目を奪われる。

「……………つて!このような事をしている場合ではなかった!」

自分の目的を思い出してハッとするが、少女をこのままにするわけにもいかない。

困り果てる秋雨はもう片方のポットを見る。

ポットの中では長い青紫髪の少女が拳を振り絞っていた。

感じるのは殺気

秋雨は羽織を脱いで橙髪の少女に被せる。

直後、青髪の少女がガラスを殴り破り、破片と液体が部屋中に飛び散った。

ポットから飛び降りた青髪の少女の胸元に、赤く

【素体code027ゼラン】

と記されている。名前だろうか？

「……データのインプットが終了していません。すぐさま冥王をポットに戻しなさい」

冥王？

「断ると言ったら？」

青髪の少女ゼランと対峙するように秋雨は木刀を構える。

「……仕方ありません」

そう言いながら、近くのデスクの上に置いてあった黄色の宝石を手取るゼラン。

「……あなたを排除します」

宝石から発せられる輝きが雷を放ちながらゼランを包んでゆく。

そして、光の中から現れた時には雷を模した刃の鎌とバリアジャケットを装着し、青く長い髪は白銀の色へと変わっていた。

「消えてください」

無情なる言葉と共に、鎌が秋雨の首を刈り取ろうと振り払われる。

「ちい……！」

雷のごとき一閃を紙一重に避けた秋雨だが、代償に唯一の武器であ

った木刀を真つ二つにされた。

《さて。漸く、私の出番ですか？》

「当たり前だ」

秋雨の胸元

AMFが解除された事によって起動したデバイスサクラフブキが光を放つ。

纏われるは夜叉を連想されるようなバリアジャケットにこの世の悪を睨みつける鬼の仮面。

手には桜に似た波紋を刃に描く、桜色の日本刀。

「この施設はなんだ？ぬしらは何をしようとしている？」

「答える義理はありません。私はただ……」

鎌を構えて駆け出すゼランに、秋雨にサクラフブキを振り上げる。

「あなたを排除します」

「それは願わぬな！」

一閃と一閃がぶつかり合い火花を散らす。

振り切った各々の武器をすかさず相手に振るい、またぶつかり合う。防御も回避もせず、ひたすらに攻撃

互いに互いの攻撃を防ぐ

攻撃は最大の防御

それを言わざるをおえないほどの攻防戦、いや例えるなら攻攻戦を

10代前半の若き2人が成した。

しかし

秋雨によってその流れは崩れる。

止血剤で塞いだグレイの銃撃の傷口がゼランとの戦闘で開き、サク
ラフブキを振るう度に血がポタポタと流れ出る。

「……………っ！」

《アキ！？》

視界がぼやけ、体のバランスがうまくとれずに足をふらつかせる。

ゼランは好機を逃さず、鎌で秋雨の足を振り払った。世界が逆転する
そんな感覚に気をとられるほど集中力が欠ける。腹に突き刺さる痛
みが意識を覚醒させた。

「ガアアッ！！」

突き刺さった鎌の刃から走る電流が傷口に伝わり、体全体に痛みが
回る。

ゼランは刃に突き刺した秋雨をそのまま壁に叩きつけた。壁は容易
く隣の部屋へと貫通し、放られた秋雨は床に転がる

「ヒイイツ！」

情けない男性の声に、首を動かして視線を横に向けると、パンツ一
丁で縄に縛られたディランがそこにいた。

「な、んでお前がここに……………！！」

「それは「ちらがきき……」

ゼランの一振り避けるため、体に鞭を打って横に飛んだために言葉が途切れる。

「おおおっ!？」秋雨の代わりに被害を受けたのはディラン。その立派なヒゲが鎌によって右部分を斬られてしまった。

「わ、私のヒゲがあっ!!!」

「避ける、バカ者!!」

悲劇(?)に泣くディランの足を秋雨は掴んで投げ飛ばした。理由は、ゼランの鎌から発せられている雷を球状にしたものがディランに向かっていたからである。

しかし、秋雨は続いてきた雷球を受けてしまう。
「があっ!!!」

走る激痛

秋雨は気を失い、体から白い煙をだしながら倒れた。

《ア……キ……》

サクラフブキのダメージも大きく、音声途切れ途切れだが秋雨を呼び覚まそうとする。

だが、その声は届かず。鎌を振り上げたゼランが秋雨を見下ろす。

「……さようなら……」

振り下ろす直前
短い別れの言葉

それは叶わなかった。

「……………あつ！」

突如、目を大きく見開き、悶え苦しむようにゼランが頭を抱えてしやがみ込んだ。

足下には銀色の魔法陣が展開され、白銀の米粒ほどの小さな粒子のようなものが辺りを漂う。

「あ、ああ……………あああああああああつ！！！！！」

響く絶叫が上の階から伝わる少年の絶叫と重なり合った時

古城が揺れた。

第29話：共鳴する種子 中編（後書き）

修学旅行で行った

京都、大阪、奈良。

初めて乗った飛行機にメッチャビびった（泣）

いきなり加速した時なんて、心臓が止まりそうになった（泣）

離陸した時の浮遊感に気持ち悪くなった（泣）

着陸した時の振動にびっくりして

「ビビってやんの（笑）」

と隣の奴に笑われた（泣）

帰りの便は、羽田空港経由で2回フライトするハメになった（泣）

空から見た夜の東京の

景色に感動した（泣）

とにかく、感想ください（泣）

第30話：共鳴する種子 後編

t u r n 蒼仁

ああ、ヤバいな

そう察した蒼仁。

それは自身の体が疲れによって少しずつ反応が遅くなってきたのに気付いたからだ。

肉体強化のBDSである ドライブを使っている蒼仁は、普段の3倍の力を発揮している。

それにも関わらず、レベルカは疲れた様子も見せずに、ただ、今行われている闘いを純粋に楽しんでいるような笑みを浮かべながら銃剣を振るう。

防いでも増えてゆく傷

攻防一戦の均衡は崩れ

レベルカの速く、重い一撃をひたすらに防ぐ

防戦一方に蒼仁は追い込まれる。

「ほら!!!」

剣撃に揺らいだ体に、鋭い回し蹴りを見舞われる。

蒼仁は体をくの字に曲げるが、運よく床に空いていた小さな穴に足を引っ掛けて吹き飛ばずに。

いや、吹き飛んだ方が良かった。

それは、左腕に走る激痛が嫌なほど思わせてくれた。

ポタポタと液体が床に落ちる音を聞きながら蒼仁は左腕を見る。しかし、そこにはあるはずの左腕がない。

答えは簡単

レベツカが蹴りの後、目に追えないほどの一閃で斬り飛ばされたのだ。

それを裏付けるように、銃剣の刀身には赤い血が滴っていた。

もし、あの時に吹き飛んでいたら、浅く斬られる程度で済んでいただろうと自分の運を呪う。

「小僧……冷静だな」

確かに

レベツカの言葉に心の中で肯定する蒼仁。不思議だ。

片腕が斬られたと言うのに、何故、こんなにも落ち着いていられるだろうか？

「ぎゃあぁっ」とか「腕があー!!」など、普通は痛みを叫びをあげるところなのだが、そういう気にならない。

「死にたいのか？」

そんな疑問に考える暇をいつまでも与えるレベツカではなかった。振り下ろされる銃剣をレディアントで弾き、一閃の軌道を逸らす。右腕しかないのと、体力に底が見え始めてきた蒼仁にとってはそれが精一杯だった。

次々と迫り来る剣撃を紙一重で避けながら、蒼仁は酸素が行き渡ら

ない頭で策を練っていた。

“勝つ” 為ではなく、生きる“逃げる” 為の策を……………

「ぐうっ！」

考えるのは無理

レベッカの裏拳を頬に受けて、そう確信する蒼仁。

防ぐのもままならないのに考え事をしながら闘うなど自殺行為にも等しい。

『カリナ!!』

『わかってるわよ!!』

カリナに念話を飛ばすと、こちらの考えをわかっているような口調で返事をしてくる。

『不安要素が盛り沢山だけど、1つだけ策は有るわ!!』

『それって何だよ!?!』

「余所見を……………」

念話を切る。

そして、レディアントをかざしてレベッカの剣撃を防ごうとするが、圧倒的な力で防ぎきれない。蒼仁は咄嗟に後退

そのおかげでバリアジャケットに斜めに斬られた跡が残る程度になった。

その一撃では……………

「するな」

銃口の奥が光る。

宙に浮く蒼仁は避ける術も無く、撃ち出された魔力弾をすべて受け、一息つく間もなく、放たれた砲撃に呑み込まれ、砲撃と共に壁に激突瓦礫が雪崩のように落ちる中、蒼仁は体中に走る痛みを耐えながら立ち上がる。

「どうした？かかってこい」

レベッカは挑発の後、「真武について知りたいのだろうか？」と付け加えるように言った。

当たり前だ！と叫びたかったが、口から言葉を出す体力もなくなり、フラフラする体のバランスをとるのが限界。

「チツ」

そんな蒼仁を見て、つまらなそうな表情でレベッカは舌打ち。

銃剣の銃口先に魔力を収縮。あつと言う間に出来上がったスフィアは直径3メートル近くあり、その威力は非殺傷設定を解除せずとも一人を殺すほど。

「……………死ね」

無情に言い放たれた冷たい言葉と共に、灰色の巨砲が蒼仁へと真っ直ぐ突き進み、壮大な爆発音を響かせながら直撃した……

割り込んだ2人の女性が放った、金とオレンジの砲撃と

turnフェイト

間に合った。

フェイトは後ろで虫の息である少年、雨井蒼仁を見た後、アタン・テラスの統治者である、金の髪と青い瞳の女性
レベッカ・シックザールを睨み付ける。

「レベッカ・シックザール。これはどういう事ですか？」

「はて、何のことかな？」

「ふざけないで！！外にいる人造人間はアナタの差し金でしょ！！」
ホムンクルス

おどけるレベッカに、ティアナが怒鳴る。

今、カジノ・ブレッジの周りではテロに使用されている生体ロスト
ロギア人造人間が華やかな街で破壊の限りを尽くしている。
ホムンクルス

「なぜ、あれがここに？」

「知りたいか？ならば……」

レベッカの姿が消え、現れたのはフェイト達の頭上。

「生きてみせる!!」

蒼仁の時と同様の言葉を叫び、戦いの始まりの合図のように放たれる魔力弾は、100を優に越える。

「蒼仁君、こつち!」

腕を引っ張られ、蒼仁は魔法障壁を展開しているフェイトとティアナの後ろへと立たされる。

直後、魔力弾が霰のように降り注いだ。

「なんで、君がこんな所に!?!」

「成り行きで!」

魔力弾を防ぐフェイトの質問にそう答えた蒼仁を、ティアナは驚いたと思っただら目を鋭くして睨んできた。

「その成り行きで腕を斬られたの!?!」

ティアナの迫力に思わずたじろぐ。

この人は怒らせない方がいいな……、と心の中で静かに誓った。

ん?てか……

「俺の名前、知ってるんですか?」

名乗っていないのに

「君を心配している人達がいるんだよ」

そう言つてフェイトは微笑む。

俺を……………心配？

思い当たる人物は4人、いや、“師匠”を合わせて5人。

十梧さん、唯華、鷺祐、そして……………叶恵。

「闘っている最中に、無駄話は関心しないな……………」

魔力弾が降り続ける中、レベッカがティアナが張る魔法障壁の前に瞬く間に現れ、銃剣で一閃。

障壁に斜めの線が入り、ガラスのように散り散りに砕ける。

「死ね……………」

剣先をいきなり過ぎて、防御体勢もとれないティアナに向け、音速を超える刺突を放った。

死んだ。

ティアナは目を瞑つて、死を覚悟した。いや、仕事の間柄、任務前には覚悟していた。

だが、死を目の前にすると弛んでしまう。

ごめん、スバル。

訓練学校から共に過ごしてきたパートナー。

今回の機動六課での仕事を終えたら、クラナガンにあるアイス屋に行くと言つ小さな約束を破る事に心の中で謝罪した。

しかし、それは無駄になった。

何故なら、レベッカの銃剣は蒼仁に防がれて、ティアナに届かなか

ったのだから。

「なるおっ!」

吠え、鐳ぜりあいから蒼仁は力で押し切ると、レベッカは後ろに跳躍して、自らが作った瓦礫の上に立つ。

「さて、3人ならば楽しませてくれるかな」

レベッカは笑む

闘争心に瞳をキラキラと輝かせ、これから繰り広げられる闘いを楽しみにしている。

「私がフロントアタッカー。ティアナはセンターガードをお願い。そして……………」

ポジションを指示するフェイトは蒼仁に視線を向ける。

「蒼仁君は近接戦はできる?」

「あんまり、後方支援なら何とか……………」

フェイトは左腕がない、痛々しい蒼仁の姿に心苦しめる。

あの子が見たら、泣くだろっな、と。

現在、機動六課で預かっている妃山叶恵を思い浮かぶ。「さて、殺るか」

感慨にふける暇もなく、レベッカは動き出し、瓦礫の上から姿を消した。3人はそれぞれの配達からレベッカの姿を追う。

キンッ

近くに転がっていたウィンググラスが、ティアナの横を飛んで通り過ぎる。

攻撃ではないとわかった脳は、一瞬だけ全身の緊張感を解いた。

その一瞬をレベツカは逃さない。

まさに瞬光と呼べる速さに、ティアナは反応することもできず、レベツカの掌底をまともに受ける。

「ぐうっ!？」

大勢を崩すティアナに追撃をと銃剣を振り上げるレベツカに蒼仁が放った魔力弾が迫る。

「フッ」

レベツカは焦る事なく銃剣を振り下ろし魔力弾を叩き斬ると、銃口を蒼仁に向けて引き金を引く。

響く銃音

しかし、肝心の弾が撃ち出されていない。不発かと思ったフェイトとティアナだが、蒼仁が違った。

「がはっ!？」

腹部と右肩に走る衝撃

内臓が傷付いたのか、蒼仁は片膝をついて吐血をした。

口を拭って顔を上げると、目の前には銃剣を振り下ろすレベッカ。咄嗟に前へと転がって避ける事に成功した。

「ハアアツ!!」

頭上を金色の閃光が駆け抜ける。

視線の先で、フェイトとレベッカが高速移動で斬り合いを始める。空を自在に駆けながら、交わる際に火花を散らしあう。

「クロスファイアーシュートツ!!」

背後でティアナが20相当のオレンジ色の魔力弾を撃ちはなった。それも正確にレベッカだけを狙い、当たらずとも移動範囲を絞らせる。

蒼仁もそれに加勢するように魔力弾を放った。

「まだまだ、足りんな」

レベッカは銃を上に向けて撃つが、またもや銃弾が射出されていない。

その瞬間、上から見えない衝撃が雨のように蒼仁達に降り注いだ。

「があっ!!」

「くうっ!!」

蒼仁とティアナは衝撃に立つことも出来ずに床に叩きつけられ、這いつくばる。

腕に力を入れ、立ち上がるうとするが、体にのしかかる見えない圧力がそれを阻害する。

レベッカが放った魔力弾の重力の魔力変換資質が原因であった。

これは、触れた相手にかかる重力を増やす効果を持ち、触れれば触れるほど体にのしかかる重力が増えてゆく。

現在、蒼仁とティアナに掛かっている重力は推定200
成人男性3人を持ち抱えると同等の負担である。

「やはり、つもらん」

呆れたようにため息をつくレベッカは、銃口の先に魔力を収束し始める。

「させない!!」

《Full Drive! Riot Blade!》

レベッカに向かうと共に、バルディッシュがアサルトフォームから片刃の長剣、ライオットブレードに姿を変える。

「はあああつ!!」

バルディッシュを上段に振り上げ、収束されていた魔力を両断そのまま振り上げたバルディッシュをレベッカに振り下ろした。

ぶつかり合う銃剣と長剣

辺りの物を余波で吹き飛ばし、ギギツと鏝ぜりあいながらフェイトは話し始める。

「なぜ、あなたはあの子を攻撃する!!」

「このルールを知ってるだろう? 騒がしく目障りな奴は殺すと」

「あの子は何もしてない!!」

t u r n 蒼仁

体中の骨が折れているような感覚と激しい頭痛に右手で頭を押さえ、うずくまる蒼仁。

そして、頭の中では4つの光景が写真のように映し出されていた。

1枚目は緑色の液体が入ったポットの中で、膝を抱えている少女の写真

2枚目は、深緑色のオイルバツクの男、メドウが雷に模した刃を付けた鎌を少女に渡す写真

3枚目は大剣を持つ修道士、ブレイドと戦っている写真。

最後の4枚目

優しい笑みで少女の頭を撫でる、1人の青年

それを見た途端

体から痛みが無くなり、代わりに心がやけに静かになった。

トクン、トクン………

周りの音が小さく、心臓の音がやかましいほど聞こえる。我が種子
よ………

何を求む……………

頭の中で響く声

罪深き種子よ……………

その強欲な心で……………

全てを求むならば……………

解き放て……………

その禁忌たる力を……………

声が静まり、周りの音が正常に聞こえ始める。

立ち上がった蒼仁は閉じていた瞼を開き、レディアントを上にかざす。

足元に煌めく白銀

ミッド式でも近古ベルカ式でもない魔法陣を展開する。

「レディアント…………… (オメガ)ドライブ……………」

《マスター!? やめ…………… Boost Drive System.
Drive》

レディアントは止めようとしたが、別人格によってその力は発動された。

《……………全てをこの手に》

白銀

古城の、床、壁、扉が全て輝く白銀に染まってゆく。

そして、蒼仁自身も

斬り離されていた左腕が浮いて、蒼仁の体と接合。

何もなかったかのように左手が動き、魔法陣から出てくる粒子によって切り傷が無くなった。

「全てを我が手に……」

《Radiant・Caliburn》

レイアントが光に包まれ、その姿を杖から白銀が煌めく一振りの剣に変貌する。

その瞳でレベツカを捉え、剣を振りかざし、霞のようにその姿を消失させた。

「我が体を傷付けた罪。冥府へと送ってやろう」

その言葉を発した。

レベツカの背後で

振り上げられる剣がレベツカを切り裂いた。遠くから見ればそう見えるだろうが、実際は違う。

蒼仁が斬ったのは高速移動が生み出した賜物である残像。

本物は上にて銃剣の引き金に指をかけていた。

《Gravity&Stealth》

放たれるは不可視の重力の魔力変換資質を組み合わせた魔力弾。

それに対し、蒼仁は剣を腰あたりに居合いの構えで時を待つ。

魔力弾との距離が1mに入ると、蒼仁は剣を振り払った。

剣から迸る白銀の光が一闪の軌跡に沿って、魔力弾を四散させずに

受け止める壁となる。

「返してやるっ」

剣先をレベッカに向けると、壁に受け止められていた魔力弾がレベッカに向かって飛び始めた。

向かいくる自身の魔力弾を軽々と避け、目にも留まらぬ速さで蒼仁の前へと出て、その手の銃剣を振り下ろす。

ギイーン

剣と銃剣のぶつかり合って生まれた力が、あっちこっちに乱れ飛び、会場にある窓を全て割る。

「お目覚めはいかがかな？」

「腕を斬られていたのだ。良いわけがなかるっ」

笑むレベッカに睨み付ける蒼仁。

しばらく鏝ぜりあいが続いた後、2人から闘気が薄れてゆく。

「久しぶりだな」

「フンッ。貴様の顔なぞ見たくなかったがな」

端から見ていたフェイトとティアナは混乱に陥る。

治った左腕もそうだが、蒼仁の雰囲気ガラリと変わり、今のレベッカとの会話からして、知人と話しているような物言いだである。

「さて、“ゲーム”の景品がこうなってしまったからな……」

「ゲームだと？それは……」

蒼仁の言葉が一発の銃音によって遮られる。

後ろを振り向く、レベツカの視線の先

両手で銃を構えたカリナが立っていた。

「小娘。何をした？」

「撃っただけよ」

銃から空になった薬莢をカリナは床に落とす。

レベツカの隣で、ドサツと蒼仁が倒れ込んだ。

カリナが撃つたのは蒼仁だった。

「聖王シユリアの復活を阻止する為なら。一人、簡単に殺せるか」

「あなた達だって、復活させるために殺してるじゃない」

互いに笑う2人

フェイトとティアナは驚愕に表情を染める。

狂っている

こつもあつさりと人を殺してしまうのだから

「それに私は……」

カリナは手から銃を放す。レベツカは床に落ちる銃に目をやる。つまり、隙ができた。

「誰も殺してないし」

その言葉にレベッカは反応するが、1秒遅かった。

「吹き飛ば……」

そう言ったのは床に倒れている蒼仁。

杖に戻ったレディアントから今出せるありったけの魔力を解き放った。

紅蓮が辺りを支配する。

炎の牢獄とも言える火柱が、中にいるレベッカを燃やし尽くそうとする。

蒼仁は立ち上がり走り出した。

理由は1つ

「カリナ、逃げるぞ!!」

逃げるため

真武について聞き出したかったが、これ以上戦えば、確実に命が危うい。

名残惜しいが、蒼仁は増えてしまった謎を解くために逃走を始める。

第31話：逃走（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です
毎度毎度、一週間を過ぎる投稿でしたが

今回は何故か一週間前投稿に成功しました（驚）

まあ、相変わらずのグダグダ感ですが（笑）
では、どうぞ！！

第31話：逃走

プロミネンスバスター
アレスト・ピラア

プロミネンスバスターに炎の魔力変換資質を加え、地表から吹き出したマグマの如く、相手の足元に展開した魔法陣から放たれる火炎型砲撃魔法。

アタン・テラスに着く前にカリナと、もしもの事態になった場合に共同で作ったAAAランク相当の技で、火柱は対象者を中心として半径3mを範囲とし、捕縛としても使える。これで、しばらくはレベツカも動けないはず。

「カリナ！逃げるぞ！」

「言われなくても逃げるわよ！」

蒼仁とカリナは近くの割れた窓から白銀一色と化した古城を飛び出した。

「待ちなさい！」

「ティアナ」レベツカの重力の魔力変換資質から解放されたティアナは蒼仁達の後を追おうとするが、フェイトによって止められた。

「まずは、レベツカからだよ。外には人造人間ホームクルスだらけだし、そう簡単には街からは出れないから」

確かに、今外には何百もの人造人間ホームクルスがたむろっているのだ。

ティアナは深呼吸をし、落ち着きを取り戻す。
その人造人間ホームクルスを操っているレベッカ・シックザールに近づく。

炎が次第に弱くなり、薄らと人影が見えてきた。

「しくじった。ああなれば死なないのだったな」

切り裂かれる火柱

飛び散る業火が辺りの物を燃え上がらせ、傷一つもないレベッカが悠然に立っていた。

フェイトとティアナはそれぞれのデバイスを構える。

「レベッカ・シックザール！あなたの目的はなに！？事情があるなら管理局は……」

「戦争がしたい……」

フェイトが言い切る前にレベッカが口にした言葉。

『戦争がしたい』

この一言に2人は表情が強張る。

「執務官。人が生きているうちにはある事が常に繰り返されている話し出したレベッカを炎が赤く照らす。」

「それは、『破壊』と『創造』だ。この2つが順序よく行われる事

で、人はこれまで進化してきた。
そして、戦争は……。人を飛躍的に進化させる」

バルディツシユの柄を握る手が怒りに震えだすフェイト。
ティアナも鋭い目でレベツカを睨み付ける。

「今の世界は腐っている。何故だが分かるか？それはな……」

フツと笑みが消えたレベツカの周りから、辺りに燃え広がった火を
全て吹き消す強風が発生する。

「貴様等がいるからだ！！管理局！！」

怒号を合図に4つの竜巻が発生。床を削り、フェイトに向かって疾
走する。

フェイトは竜巻の1つをバルディツシユで切り裂き、残りの3つを
ティアナのクロスファイアーシュートを含めた魔力弾で撃ち抜いた。

「先ほど、管理局との次元世界不干涉条約の条約文を引き裂いてや
った！！」

これをミッドチルダにいる腑抜け共に贈ろうと思うのだが、これだ
けでは足りぬと思つてな！！」

レベツカの握る銃剣が荒々しい風を思わせるフレームになり、黒か
ら緑に変色していった。

「首を添えてやろうと、考えてるんだ……お前たちのな」

狂気を孕んだ笑みに背筋がゾワリとする。

頭が警告していた。

逃げると

途端に巻き起こる爆風

銃剣から疾風の太刀が放たれ、フェイトとティアナの首を刈ろうと空を駆け抜ける。

フェイトはソニックムーブの高速移動で回避を出来るが、ティアナにそのような魔法はない。

迫り来る凶刃

ティアナは咄嗟に蒼仁達が出て行ったのと違う窓に飛び込む。

行動が早かったおかげが、足に浅い切り傷を負っただけで事を終えた。

無事を確認したフェイトは心中でホッと一息を付いて、レベッカの近くにある柱に狙いを定め、バルディッシュを振りかざす。

「アークセイバー!!」

バルディッシュから、旋空する黄色い光刃が放たれ、柱を砕き、レベッカへと向かってゆくが、銃剣での一閃で儚く四散する。

しかし、目的は達成された。

それは、砕けた柱から生まれた瓦礫と砂塵。

目くらましには十分な役割を果たす。

レベッカの様子を確認したフェイトは、すぐに古城から抜け出し、ティアナの後を追った。turn 蒼仁

蒼仁は呆然と立ち尽くす。

華やかだった街並みが、瓦礫の山と火の海と化し道中のあちらこちらに人の死骸が転がっていた。

言い例えるなら地獄。

そんな光景に蒼仁は奥歯を噛み締める。

何で、こんな簡単に人が死ぬんだよ

この世界、ヘヴィバッドに対しての怒りがこみ上げてくる。

蒼仁の感情の高ぶりに反応するかのように、体の周りを舞っている白銀の粒子が輝く。

「カリナ。まだか？」

「……まだ、ね。全然、繋がらない」

物陰に隠れているカリナが操作している機械。

トランシーバーに似た機能を搭載しており、念話ができない状況でも離れた相手と会話ができる優れ物。何か、緊急の事態に陥った時に使用せよと、各1人に1つずつカリナに渡されていた。

そして、今。艦のマスターキーを奪還するため侵入した秋雨に連絡を入れるため、カリナが機械と奮闘しているのだ。

「……なあ」

「なに？忙しいんだけど」

「俺のこの力って何だよ」

蒼仁は1つの疑問をカリナに問い掛ける。

変わってしまった髪色もそうだが、斬り落とされた左腕を治し、あのレベッカとも太刀打ちできた見覚えのない力。

そして、この力を行使した別人格。

「……………分かったわ」

そう言ったカリナは機械から目を離し、蒼仁を真っ直ぐと見る。

「あんたは……………【聖王の種子】。聖王シュリアの……………生まれ変わりよ」

「俺が聖王シュリアの……………生まれ変わり!？」

こういうのを転生って言うんだっけ？

世界を滅ぼす力を持つ奴の生まれ変わり……………か

「種子の中でも、力を強く持った人を【ピュアル】って呼ぶのよ」

「そのピュアルって……………まさか」

「察しの通り。あんたはそのピュアル」

なるほど、この力は聖王シュリアの物ってことか。

「じゃあ、この……………ドライブを使ってる時に俺の体を操ったのは

聖王シュリアってわけか……」

蒼仁のその言葉にカリナは怪訝な表情を見せる。

「聖王シュリアに……操られてた？」

「ん？たぶんな。あの時、意識はあったけど、体は別の奴にあやつら……つぐえ!?!？」

大きく一步進んできたカリナは蒼仁の胸ぐらを掴んで前後に激しく揺らす。

「このバカ!!それを早く言いなさい!!」

「だ、だから……今……言ったん……じゃん」

言い訳を言っても聞き耳を持たないらしく、頭をブンブンと揺らさせ、次第に目が回って気分が悪くなってきた。

「ちょ……マジ……気持ち悪い……」

「ふんっ!」

手をパツと放したカリナは、すぐに後ろを向いて機械を再びいじり始めた。

地面に手をついて、頭の酔いが覚めるのを待っている蒼仁の耳に、情けない男性の叫び声が聞こえた。

まさか、まだ人が？

そう思った蒼仁は立ち上がり、何も言わずに走り出した。

近づいているのか、聞こえる声が大きくなってきた。

すると、視線の先に修道士の姿をしたトラッシュが何かを取り囲んでいるように、大量にいた。

「ヒイイッ!!」

あの中か。

それにしてもこの声、どこかで聞いたことのあるような……………。

蒼仁に気付いたのが、トラッシュが全員、体の向きを変え、戦闘態勢に入った。

「プロミネンスシュートッ!!」

紅蓮の炎を纏った魔力弾が十数体を焼き消すが、難なく避けたトラッシュが剣を構えて飛び込んでくる。

それを上体を反らして避け、隙だらけの腹部を蹴り上げる。

「アント

《Load Cartridge

Prominence Buster!》

薬莖を排出するレディアントを突きつけ、至近距離からの紅の砲撃を辺りを巻き込みながら放つ。

砲撃によって囲いの半分が灰になって消え、中心にいた人物が姿を現した。

「た、助かったあ!!」

「ディラン!？」

そこにいたのは、パンツ一丁で何とも情けない姿をしているディランがいた。

その両肩には秋雨と橙色の髪をした少女を乗せている。

「アキを助けてくれたのか？」

「フンツ!このまま人身売買に放ってやるうかと思っただけだ!」
理由はともかく助かった。

蒼仁は秋雨の首筋に指を乗せると、確かに伝わってくる鼓動にホツとした。
腹部に負った傷がヒドいが、ちゃんと止血されているので命に別状はない。

秋雨の生存に安心した蒼仁は、視線を隣に横たわる橙色の髪をした少女に向ける。

「この娘は？」

「知るか。このガキが連れて……………ヒイイツ!!」

腕を組むディランの頬をトラッシュの魔力弾が掠り、情けない声がまた響く。

グダグダと話している内に、すっかり囲まれてしまった。

『蒼仁殿……………』

秋雨を見ると、微かに瞼を開けていた。

「アキ、大丈夫か？」

『すまん。少し喋れぬので、念話で話す』

「いいよ。それより、話って？」

秋雨からの念話で、ある案を提供された。

「いけるのか？」

『この傷だと、少し遅くなるが……………大丈夫だ』

蒼仁は「よし」と呟き、秋雨を背に、橙色の少女を片手に抱えたと、取り囲むトラッシュユまで入る程の巨大な魔法陣を展開し、レディアントの矛先を地面に向ける。

「プロミネンスバスター・アレストピラア！」

瞬間

魔法陣から吹き出る数本の火柱が、トラッシュユを焼き尽くす。

「ヒヤアアアッ！！」

コイツを誰か黙らせて

隣で悲鳴を上げるディランに溜め息をつく。

何はともあれ、道ができたのだ。

蒼仁は背負った2人を落とさないように、カリナがいる所まで走って戻る。

「ま、待てえ!!」

付いて来たのかよ……

荷物が増えたような気がして、蒼仁は再び、先よりも深い溜め息を吐いた。

カリナがいる場所に近づくと、アリのようにウジャウジャとたむろするトラツシユの集団が見えてきた。

「ヤバツ!!」

カリナの危機に蒼仁は抱える2人に気を払いながら、今出せる速度で走る。

足音に気付いたトラツシユ達が、魔力弾を放ってくる。

「ディラン、頼む!!」

「んなつ……ぶうつ!!」

蒼仁は抱えていた2人をディランに投げ渡し、向かいくる魔力弾を跳躍で避ける。

上から見ると、100mはあるトラッシュの列の先にカリナを守りながら闘う、フェイトとティアナの姿を捉えた。見るからにして悪戦苦闘の状態である。

「アント。カートリッジロード！」

《load cartridge!》

レディアントから合計4つの薬莢が排出。

蒼仁の周りに白銀の魔法陣が4つ展開され、魔力が収縮されてゆく。

「エクサノヴァブレイカー!!!」

《face break!》

4方向に放たれる白銀の砲撃は、大地を砕きながら群をなすトラッシュを尽く（ことごとく）蹴散らし、幾つかの道ができる。

「こつちよ!!!」

蒼仁の意図を最初っから理解していたカリナは、フェイトとティアナを連れて1本の道を全力で走り抜ける。

カリナ達が通り抜けたのを確認した蒼仁は、ありったけの魔力弾を追いかけてくるトラッシュに向けて降り注がせる。

秋雨と橙色髪の少女を抱えるディランの所まで走ってきたフェイトとティアナは、振り返って魔法陣を展開する。

「プラズマスマッシュャーッ!!!」

「ファントムブレイザーっ!!」

放たれた2つの砲撃によって、残ったトラッシュをすべて灰へと化した。

辺りに敵がいなかったことを確認し、地面に降りた蒼仁はカリナの元へと駆け寄った。

「大丈夫か？」

「ええ」

相変わらずの素っ気ない返事だが、どこか怒りが込められているような気がして、苦笑いをしながら「わりい」と謝った。

「話は終わったかな」

蒼仁とカリナの様子を窺っていたフェイトが話しかける。

「話を聞きたいのだけれども……腕は大丈夫？」フェイトはそう言っ
て、心配そうに蒼仁の左腕を見る。

「もう、大丈夫です」

無事である事を見せるために、左腕をブンブンと振り回す蒼仁。
それを見て、フェイトは優しく笑うが、次の瞬間には真剣な表情に
変わる。

「雨井蒼仁君。あなたをこの事件の重要人物として保護します」

そう言い告げると、蒼仁に手を差しのばしてくるフェイト。

蒼仁は悩む。

この手を取れば闘うことも、左腕を斬られることもない、平和な日常に戻る事ができる。

それは大いに喜ばしい事だ。

だが、蒼仁は古城での出来事で増えた謎が気になっていた。知りたい、いや、知らなければならぬ。そんな感じがするのだ。

「あなたの友達だって、心配してるのよ」

ティアナのその言葉

友達とは、おそらく

驚祐、唯華、そして叶恵

あいつ等、お人好しだから絶対に心配してるんだろうな。

蒼仁は情けない気持ちになりながらも、嬉しさに心を温める。

「空蔵二等空佐もあなたを探しているのよ」

空蔵二等空佐？

まさか、十梧さん！？

管理局で働いてたのかよ！！

出張が多い人だなと思っていたけどそういう事か。

「これ以上、苦しむ事は無い……」

「いいえ。ここで帰ってもこいつはこれから苦しむ」

フェイトの言葉に横槍をいれたのはカリナ。

「それはどういう意味？」

「蒼仁は狙われてるのよ。アイツみたいな奴らからね」

カリナが指差す方。

半壊した建物の上にいる人物に蒼仁とフェイト、ティアナはデバイスを構える。

銃剣を携えし、レベッカ・シックザールは口にしていた葉巻を投げ捨てる。

「その小娘の言う通りだ、執務官。その小僧を黙って渡してくれば、痛みが無いように殺してやる」

何とも滅茶苦茶な要求だ。渡そうが、渡さないが、先に待っているのは死だけであるのだから。

「なぜ、この子を襲うんですか!？」

「それを……」

レベッカの銃剣に風が集い始め、竜巻のように渦巻いている。

「死ぬ奴に言う必要はない!!」

銃剣が振り払われ、纏っていた風が周りの建物を破壊しながら進んでくる。

蒼仁は左に飛び、銃剣が振り払われ、纏っていた風が周りの建物を破壊しながら進んでくる。それを3人はそれぞれで避けた。

蒼仁は建物の陰に飛び込み、空になったマガジンにカートリッジを装填する。

《load cartridge!》

床に落ち、弾む薬莢をレディアントで打つ。

薬莢は1発の弾丸と化し、レベッカへと突き進んでゆくが、風の壁に阻まれた。

「シルフの風弓……!？」

カリナから発せられた言葉に蒼仁は肩をすくめる。

フェアリーウエイポン

シルフの風弓

想像していたのと、全然違う物だな。

もっと……こう、弓っぱいのだと思ってたけど。

そう考えているうちに、身を隠していた建物がレベッカの爆風によって壊されてゆく。

「つとお!？」

風に飛ばされ、空を舞う蒼仁に一筋の剣閃が打ち込まれた。

走る激痛に更に激痛が加わる。

レディアントを握る右腕が斬り落とされたのである。

「ぐうっ……………」

「……………空貫」

腹部に向けられた銃口から撃ち出されたのは、疾風を纏いし銃弾。蒼仁は痛みに目を見開き、大量の血を吐き出した。

銃弾が体を貫いて、内臓を吹き飛ばしたから。

「やめろおおおっ！！」

レベッカの上空

最速で下降する金色の煌めき。

フェイトのオーバードライブ

真・ソニックフォーム

フェイトが振り下ろす双剣を受け止めるレベッカ

拮抗した力は衝撃波を生み出し、蒼仁は地面へと真っ直ぐ落ちてゆく。

グシャリッ

嫌な音が静かに響く。

倒れる蒼仁にティアナが駆け寄った。

容態は一目でわかる。

右腕の損失、内臓損傷、首が不自然に曲がっている事から骨髄の骨折結果、死亡。

死に対する絶望の感情は、レベッカへの怒りへと変わってゆく。

「モード3!!」

《mode3・Blazer》

大威力射撃型の遠距離からの砲撃を目的とした、クロスミラージュモード3 ブレイザーフォルム

足元にオレンジ色の魔法陣を展開して放つは、エースオブエースから受け継がれた星の光

「スターライトブレイカーッ!!」

クロスミラージュから放たれた巨砲は真っ直ぐとレベッカに向かって突き進み、直撃したと思われた。

「ぬるいな……」

吹き荒れる風が、レベッカを直前とした砲撃の軌道を上空へ反らした。

屈折する砲撃は、その狙いをティアナへと変わる。

「己が技に墜ちろ」

轟く爆発音。

ティアナがいた辺りに爆煙がたちこめる。

「さて、あとは1人……………」

横目でフェイトを捉えるレベッカ。

その直後、白銀の輝きにレベッカの姿が消し去られた。

フェイトは目を疑う。

白銀の光を辿った先には、ティアナを背に立つ
無傷の蒼仁が立っていた。

斬られた右腕も、貫かれた腹も、ねじ曲がった首もすべてが何事も
無かったように治っていた。

「……………こりゃすごい」

蒼仁は自らの右手を見て呟く。

まさに不死身の体を手に入れた気分だ。

痛みはちゃんとそれ相応のものを感じているので、若干、涙目であ
る。

シャンッ

白銀が断ち切られ、レベッカが全てを現した。

全てが黒く染められ、闇の帝王と思わせる風貌のバリアジャケット
を装着している。

「これを着るのも久し振りだな……」

懐かしそうな口調

レベツカの表情が弛んだかと思つた瞬間
蒼仁の左腕が吹き飛んだ。

しかし、直ぐに接合され再生する。

「さあ、思う存分やらせてもらつぞ」

溢れ出す魔力

吹き荒れる風

「やってやる!!」

輝き揺らめく粒子
たなびく白銀の髪

2人は動き出す。

始まつた死闘は異様なものだった。

斬

再生、撃

貫

再生、撃

斬、斬

再生、撃

貫、貫

再生、撃

斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬!

「らあっ！！」

繰り返される蒼仁の拳

それに無数の風の太刀が猛威を振るい、どれだけ傷を付けようが瞬時に再生し、止まることなくレベツカの顎を殴りつける。

振り切った腕は掴まれ、銃剣から放たれる銃撃によって千切られた断面からは血が噴き出し、蒼仁の顔は痛みに歪んだ。

それでも、千切れた右腕は傷痕あともなく、元通りになる。

16の竜巻がレベツカの前方に発生し、まるでドリルを思わせる竜巻の円錐たる部分を向けながら蒼仁を取り囲み進む。

きつちりと隙間なく囲んであるため、避けるスペースが狭い。

別に避けずとも死ぬ事はないとわかっているが、痛いことには変わりはない。

蒼仁は右斜めにある2つの竜巻の間にある隙間に通り返っていく。

「屠牙」

竜巻を抜けたと思ったら、レベツカの銃撃が体を襲う。

暴風の銃弾は、蒼仁の肉を削ってゆく。

「あゝああっ！！」

痛みに苦しみ叫ぶが、傷は早速、治り始めている。

傷は塞がったと言うのに、体は傷の痛みを覚えている不思議な体感をしながら、蒼仁は展開した3つの魔法陣から放たれる砲撃をレベ

ツカに浴びせる。

「刃空」

銃剣の振り下ろすと、風の刃が四方八方に乱れ飛び、砲撃を打ち消し、蒼仁を切り刻んでゆく。

攻撃がはいらなくなり、蒼仁はカジノ同様に後手に回り始めてきた。

その時

秋雨からの念話が入る

『蒼仁殿、準備ができた』

逃走への支度が整った。民家の屋根に降り立った蒼仁はレディアントを前にかざして、魔法陣を展開した。

《road cartridge》

マガジンに込められた6発のカートリッジを全て排出。蒼仁の周りに100以上の炎の魔力弾が形成される。

「プロミネンスシュート・ブロス アップ！」

一斉に放たれた魔力弾はレベッカへと向かう。

「無駄だ！」

銃剣から洗練された刀よりも切れ味のある風の太刀が魔力弾を容易く切り裂く

それによって、レベッカの視界が遮られた。

何故か？

それは、風に裂かれた魔力弾が爆発を起こしたのだ。
しかも、1つの爆発がまた新たな爆発を生み
レベッカの視界が爆炎に覆い尽くされる。

「鬱陶しい……」

そう呟いて風で煙を吹き飛ばすが、その先に蒼仁はおるかカリナ達の姿も無かった。

蒼仁が立っていた屋根に足を着けたレベッカはバリアジャケットを解除し、胸ポケットから葉巻を取り出して口にくわえる。

「まあ、いい……。ゲームは楽しむものだ」

葉巻に火をつけながら、レベッカはそう言って口から煙を吐き出した。

第32話：月下の涙

t u r n 十 梧

大抵の人間は夢の中にいる真夜中の2時
特化戦闘部隊ラークインでの仕事を終え、機動六課の自室に帰って
きた十梧。

ホムンクルス
人造人間の襲撃から2日たった。

あれ以来、敵からの攻撃も通信もなく、事件解決への手掛かりも何
一つ入手していない。

分かった事は、敵の組織名はアカナシム
メンバーの1人、メドウが機動六課に宣戦布告してきた事。

何故、アカナシムは管理局に対してではなく、“機動六課”にだけ
宣戦をしてきたんだ？

部隊を1つずつ潰していくうえで、まずは機動六課から？
何か違うな……………。

アカナシムが機動六課に何らかの恨みを持っている？

だったら、無差別テロを行っていたのは何でだ？
機動六課を再び設立させるため？

いや、それだと別の部隊が作られる可能性もある。

……………結局は分からないことだらけだな。

「はあ……………」

溜め息を吐いた十梧は、人差し指でネクタイを緩め、シャツを脱ぎ捨てると、白の無地のTシャツを着る。

寝るか……………

そう思い、ベッドに歩き出した十梧に、デスクの上にある小さなダンボールが視界に入った。

「……………」

近づき取ってみると、配達物で、差出人の名前と住所が書かれておらず、送り先は空蔵十梧ではなく

“八神はやて”と書かれていた。

一切の電灯がつけられていない隊舎の廊下を、窓から差し込む月明かりが照らしていた。

十梧はダンボールを脇に抱えて、送り先であるはやての部屋へと向かっていった。

「配達員はちゃんと仕事してんのか？」

愚痴をこぼしながら、アカナシムについて考え始める。

機動六課に潜入

隊員を1人殺害し、宣戦を言い放った男、メドウ

本名はルシャ・D・アルハウス。

うちの（ラークイン）デバイスマイスターである

ソルカ・ハースンの双子の弟

そして

時空管理局が創立された70年前から商業界で随一の業績を叩き出していた【デイルミス・カンパニー】の社長を代々継いできた家系の次男

だが、ミッドチルダに建っていたデイルミス・カンパニー本社は5年前

当時18歳のルシャがソルカを除いた家族を惨殺した後、火を放つてその姿は何処にもない。

頭を失ったデイルミス・カンパニーは1年後に倒産。

殺人罪で追われていたルシャは、ある部隊によって極刑、つまりは殺された。

遺体もソルカの目で、本人と確かめられている。

ルシャ、いやメドウは戸籍上でこの世にいるわけがない人物である。

亡霊……はあり得ないか。

ザフィーラの鋼の軛が効いていたと聞いている。

その後に軛が砂のように散り散りになったとも聞いたな。

特に不振な動きもなく……か

AMFが張られたのか？

しかし、全ての監視カメラをチェックしたが、それを発生させる何かはなかった。

メドウが何かAMFに似たスキルが発生させる機械を持っていた？
スキルはソルカの話を聞く限り無い。

残るはAMFを発生させる機械、これが可能性としては一番高いな。
もし、敵の全員がそれを持っているのなら、闘いは至難を極めるな

……

これからの事を考えると頭が痛くなってきた。

疲れからもきてるのか？

早くこれを置いて寝るとするか……

思考をしている内に部屋の近くまで来ていた。

十梧は扉の前まで歩み寄り、なるべく音をたてないようにしゃがんでダンボールを床に置く。

「終わった、終わった」

屈んだ体を伸ばし、仕事で凝った肩をトントンと叩いていると、ウーンと、自動ドアが開いた音がした。

「……………」

正面を向いた十梧の視界に茶色のセミロングの髪の女性、八神はやてが映る。

何か言おうと口を開いたが、彼女の顔を見て言葉を詰まらせる。泣いていたのか、目が赤く、髪はクシャクシャになって酷い有り様だ。

「……………帰ってきたんか」

「あ、ああ。さつきな」

普段の明るさのない、トーンの低い声に驚きながらも答える。はやての視線が下がり、十梧が持ってきたダンボールを見つけた。

「……………何やこれ」

拾い上げた小さなダンボールから十梧に視線を変える。

「さあ。俺の部屋に置いてあったが……………」

十梧が頬を掻きながら説明すると、彼女はダンボールのガムテープを剥がして、重なっている4つのフタを開けた。

「……………っ！！」

はやての目が揺らぎ、手放されたダンボールが床に落ちて、中身が辺りに散らばった。

ダンボールの中身を拾い、十梧は顔をしかめる。

それは刃渡り10cmはあるナイフ、柄に紙で

「死んで償え」と赤い字で書かれていた。

他にも「返せ」「愚図が」と罵倒の言葉が書かれた紙が4、5枚落ちていた。

差出人に名前が無かったのは、こついう事か…

「う…う…」

力なく崩れるはやては、両手で顔を隠し、指と指の間から嗚咽を漏らす。

「あ?!ちよつ…こ、こんなところで泣くなよ…な?」

泣くはやてに慌てる十梧は、とりあえず部屋の中に彼女をいれさせる。

「ひっぐ…あ…」

ベッドに腰をかけ、一向に泣き止まないはやて

十梧は部屋中を歩き回りながら、何かいい案がないかと眠気を取り払って頭をフル回転させる。

作戦や指揮だったら容易く答えを導き出せるのだが、毎日を仕事に追われていた十梧は、この場合どう対応すればいいのかわからない。

刹那なら幼なじみだし、何やかしらのフォローが出来るだろうな…

……

十梧はそう思いながら、ダンボールの中に入れたナイフを見た。

おそらく、機動六課襲撃の時、メドウに殺害された隊員の家族、もしくは恋人や友人が送ってきたのだろうか

愚か、実に愚かだ。

喪失感で空いた心の穴を埋めようと、怒りと憎悪に身を任せ人を傷付ける。

だが、それで穴は埋まらず。

死んだ人間は帰ってこないと現実に叩かれ、自分のやった行為を死ぬまで後悔する……

「……ごめんなさい……」

ポツリ、と

はやてが掠れるように言った謝罪

「……守れなくて……ごめんなさい……」

何でお前が謝る？

お前はよくやったろ？

全力を尽くしたんだろ？
胸を張れよ、堂々としてるよ……

十悟は「ごめんなさい」を言い続けるはやての隣に座り、なにも言わず、頭を優しく撫で始める。

逃げるように抜ける隊員、先の見えない闘い
耐えない心労に限界の直前の状態
過去に自分も味わった苦しみだった。

口のうまくない十悟にとって、今できる最大の慰め

その荷を一緒に背負う事

同じ部隊長としての立場として……

「……………ごめんなあ……………ごめんなあ……………」

「……………泣くなよ……………」

そうして、夜は更けていった……………

アカナシムの襲撃から3日

隊員が減った機動六課は妙な静けさが、各部屋を支配していた。

この一週間に2回の襲撃に忙しく、隊員の疲れがピークにきているもある。

そんな隊舎の中

唯一、騒がしく音をたてている部屋があった。

「おかわりーっ!!!!」

本当に騒がしい……

食堂にてご飯、焼き鮭、みそ汁、と日本風の朝食をとる長身の白髪、南條砂彦は女2人によってカチャカチャと積み重なっていく皿を呆れながら見ていた。

【暴食の再生】

襲撃で重軽傷を負った砂彦達を数秒足らずで治してしまった、センのレアスキルである。

どんな傷でも、死なない限りは必ず再生させる事ができる

ただし、このスキルには代償と言えるものがあつた。

それは空腹。

負った傷に見合う分の食事を胃袋に放り込まなければならぬのだ。

つまり、傷が大きければ大きいほど、空腹さ壮大になってゆく。

砂彦も襲撃の翌日の朝に強烈な空腹に襲われ、普段の3倍近くは食べた。

センが言っていた事の意味がよく分かった。

そして今

最も傷の酷かった2人が食堂のテーブルを、食べ物を平らげた皿で埋めようとしていた。

1人は腰まであるコバルトブルーの髪と瞳を持つ、明るそうな女性
聖王教会シスター兼教会騎士であるヴェーネ・フリージア。
真武との戦闘で体を斬られ、大量の出血と内臓の破損。

もう1人は

短い黒髪と黒い瞳のポーンツシユの少女
妃山叶恵

ヴァントとの戦闘にて、トドメに使った蒼天衝波に体が耐えきれず、
両腕の複雑骨折したあげく毛細血管の破裂。

2人とも重傷であったが、センによって傷跡は一つもない。

「んん……つぶう！」

コップ一杯の水を飲み終えた叶恵はひと息つき
椅子の背もたれに体重を預ける。

しばらくして、飛び上がるように立ち上がり、リズムに乗るように小刻みにジャンプをしながら、空を裂くような左のジャブを連続で繰り出す。

「ハッ！」

最後に右のストレートを打ち出し、拳風で重なった皿がガチャッと音をたてながら揺れる。

動きを止めた叶恵は自らの拳を見て、体が全快した事を確信して頷く。

ガシャラッ！

「あ……………」

揺れに揺れた皿がバランスを崩し、自分の反対側へと雪崩のように落ちていくのを叶恵は呆然に口を開いて見過ごす。

「あ。じゃねえ……………」

苛立ちの声をあげたのは、叶恵とヴェーネの向かい側にいる砂彦。長い手足をつまく利用して、皿を床へ落ちるのを防いでいた。

「す、すまぬな！あはははは」

申し訳なさそうに笑いながら、持っている皿をテーブルへと置いていく叶恵を見て、砂彦は自らの右腕を見た。

そこには、美しく滑らかな円を描くプレスレット。

見たことの無い鉱石で造られたこれは叶恵がヴァントを倒した時

ヴァントの右腕に詰められていた腕輪が光の粒子となり、砂彦の右手にブレスレットとなって再構築された。

ソルカの分析での結果

ロストロギアと断定。

詳しく調べようとしたが、ブレスレットは砂彦と同化、肉体の1つとなり、無理に剥がそうとすれば手首の頸動脈までも剥がしかけないので、流石にソルカは「解体したいな」。あ、そうだ！事故死に見せかけて殺っちゃえば……」と危なげな事を言いながら諦めた。

無限書庫にも記述が無いこのロストロギアは、ヴァントがそう呼んでいたように、ガイアの轟腕と名付けたのはいいが一向に起動する兆しを見せない。

適合……いや、資格がないのだろう。

少なくとも自分には……

砂彦は心の中で自嘲し

おそらくガイアの轟腕を扱う資格のある目の前の少女を見る。

「ん？」

視線に気付いた叶恵

砂彦は即座に顔を横にプイッと向け、口を開いた。

「なあ、聞いていいか？」

「何だ、藪から棒に……」

ま、いいぞ」

叶恵はどこから取り出した焦げ茶色のツボをテーブルの上にドンと置いて答える。

「あんたって何で強いの？」

「それは修行したに決まっておるだろう」

「修行って……」

次元世界で1番安全な地球の中で、最も安全な日本に住んでるくせに、そんな強くなる必要性ないだろう。

「修行って、師匠が誰かいたの？」

「いたぞ。たぶん、地球史上最強の師匠だ」

尋ねてくるヴェーネに意気揚々と答えながら、ツボと蓋を縛ってある紐を解いていく。

「私、鷲祐、唯華、そして蒼仁の4人でよく師匠に挑んだものだ」

叶恵は修行の時の事を懐かしむように楽しみに語る。

砂彦は訓練で鷲祐と唯華を見た限りだが、かなりの実力を持っているなと思いつく。

雨井、蒼仁……。

叶恵達の幼なじみ

そして、この事件に何らかの関わりを持ち、現在行方不明の人物。

「蒼仁ってどんな奴？」

「ふうふういんか？（蒼仁か？）」

ぱりぱりと景気のいい音をたてながら、ぬか漬けを頬張る叶恵はモグモグと口を動かし、食道が物を通過するのが皮膚越しにわかる。

「そうじ……んつう！？」

答えようとした叶恵だが、どうやら喉にぬか漬けを詰まらせたらしく、顔を青くして苦しみ悶える。

「あら、大変」

暢気ながらもヴェーネは急いで水の入ったポットを手に取り、叶恵の口を無理やりこじ開けて直接喉に流し込んでいく（*よい子はマネしないように）。

「あばばばっ！」

何とも惨い状況に砂彦は顔を引きつかせる。

「疲れた〜。あ、おっはよー砂彦君！」

食堂の入り口の方から声がして振り向くと、朝の訓練を終えたりオが手を振っていた。

「よっ。今、終わったのか？」

「まあね。いや、本当にハードだよ、ここの訓練は……」

溜め息混じりのリオの言葉に、砂彦は確かにと苦笑しながら頷く。剣帝と謳われている空牙刹那と鉄槌の騎士ヴィータの隊長陣に、闘うのが仕事の特化戦闘部隊ラークインに所属しているタシアが教導しているのだ。

そんじょそこらの部隊とは、計り知れない訓練である。

「それで、アーシアは大丈夫？」

リオは心配そうに尋ねる。

ヴァントとの闘いで大きなダメージを与えられていたアーシアは、シャーリーのもとでフルメンテをしてもらっている。ついでにバリアジャケットを新調するとも聞いたが。

「今日の昼あたりには戻ってくるってさ」

「そっか、それはよかった」

「ああ、それにしても……」

砂彦の視線がリオから、リオの後ろで隠れているコロナに変わった。

「す、砂彦君、おひやおうっ！」

「……おう」

挨拶を交わすが、コロナは顔を赤くして視線を合わせようとしない。

俺、なんかしたっけ？

疑問を抱き首を傾げる砂彦とチラチラと砂彦の様子を窺うコロナの間に立つリオは、ニヤニヤと両手を頭の後ろにやって笑っていた。

「はぁ……しんどい……」

疲れ果てた声の主は、食堂にフラフラと入ってきた唯華。

その後を鷺祐が考え事をしているような難しい顔をして歩く。

「おはよう、唯華に鷺祐！」

「うん……おはよう……って！叶恵！？」

挨拶をしてきた叶恵を見た唯華は、ヒステリックな声を出して驚いた。

それもそのはず

叶恵とヴェーネはこの3日間、ずっと眠り続けていたのだから。

センの暴食の再生は、傷を癒やすが、その人が受けたダメージまで取り除く事はできない。

「い、いつ起きたのよ！？」

「ほんの30分ぐらい前にだな」

「どこか、調子の悪いところない？」

「ない。至って健康だ」

万全であることを示すように、肩をグルグルと回してみせる叶恵。

「なら、ちょうどいいです」

そう言つて微笑む鷺祐の手と唯華の手が、叶恵の肩をガシツと掴み、そのまま呆気をとられた顔で固まる叶恵を引きずつて歩き出した。

「な、何をするのだ!？」

「いや、叶恵にも“アレ”をやつてもらつかと……………」

「アレとはなんだ、鷺祐!？」

「知らないわよ……………あのマッドサイエンティスト（ソルカ）に聞いて……………」

「マッドサイエンティストって誰なのだ!？一体なにをされたのだ!？」

「フッフ……………べ、別に私達がとんでもない訓練に苦しんでる時に、叶恵がぐっすり眠っているのが腹立つたわけじゃないんだからね……………」

「ツンデレ風だけど、一切のデレを感じないぞ!！」

「まあ、来てクダサイヨオ……………」

「鷺祐え!！最後がカタコトだぞ!！とりあえず離せえ!！」

「「放サナイ」」

「ぎゃあああああ……………つ!！」

食堂から鷺祐と唯華に叶恵が連れて行かれ、一時の沈黙が部屋を支配する。

「なんじゃありゃ……」

「さあ……」

果てしなく凄い光景を目の当たりに、砂彦、リオ、コロナは茫然としている。

「仲がいいんだね」

「「「いやいや……」」」

ヴェーネの暢気すぎる発言に、その場の人間は全員つつこんだ。

「あ。そう言えば、みんな12歳だよな？」

「え？そつですが……」

ヴェーネの唐突の質問にリオが答える。

「だったら、この子知ってる？」

首にかけていた銀の十字架、待機モードのヴェルナーからモニターを出して、砂彦達とだいたい同じくらいの歳で着物を着た黒髪の少年が写っている写真を映し出した。

砂彦は首を捻って頭の中で覚えている人物達と照らし合わせてみるが、誰一人として、この少年に当てはまらなかった。

「見たことないな……」

「ないね……」

「私も……」

「そっかあ」

3人の返答にヴェーネは残念そうな表情をする。

「どういう人なの？」

「ん〜……。妙に大人っぽい、その年相応の性格じゃない子」と唸りながら答える。

「よお、お前ら。なにしてんだ？」

ヴェーネの後方

寝癖だらけの髪をくしゃくしゃと掻き、口元に涎の跡がついた十梧がヴェーネ達に片手をあげていた。

「……おやじクサツ……」

「朝っぱらから、ひでえーなっ!?!」

異口同音

100人に聞いて、100人が4人と同じ台詞を叫ぶだろうと思わ

せるまでに、十梧の姿はおやじ臭いのだ。

「すみません、あまりにもおやじ臭かったもので……」

「真剣な顔でそう言われると、ますます悲しくなってくるんだが……」

ヴェーネの真つ直ぐな言葉の釘は十梧の心にグサリと突き刺さり、反論できずに隈のある目から涙を流させた。

「空蔵部隊長、寝てないんじゃない……」

リオの言う通り。十梧の顔は眠気が完全に抜けきっておらず、今にも倒れて眠りそうである。

それもそのはず、昨夜は様々な諸事情によってあまり睡眠をとっていない。

「ちよつとな……。ガキのお守りをしてたら寝れなかった」

苦笑する十梧。

なにも知らないリオはただ首を傾げるだけだった。

「あ、そうだ。おやじ部隊長」

「やめろや!!変な名称をつけんの!!」

「そんな事よりも、この子見たことあります?」

抗議をスルーされた十梧はまた泣きそうになるが、ヴェーネが見せてきた写真に目を見開く。

「秋雨……………か？」

「秋雨を知ってるんですか！」

イスから立ち上がり、十梧の手をとって瞳を輝かせるヴェーネ。

「今、何処で旅をしてるか知ってますか！！」

「イテテテッ！！知らねえよっ！！てか、手が握り潰されるから離せ！！！」

本当に女性か？と疑うほどの力で握られている十梧の右手は、ピシピシとピキピキの不協和音を発し、悲鳴を上げている。

「ええ……………」

十梧の手を離れたヴェーネはガツクリと肩を落とす。
あまりにも落胆した様子だったので、十梧は少し考え、ヴェーネにこう言った。

「風雅じーさんにちよいと聞いてやるよ」

十梧はズボンのポケットから、黒プレート 待機状態であるジャックジーグルを取り出し、モニターを展開する。

「風雅……………まさか、クシナダ 櫛灘 フツガ 風雅の事か？」

「よく知ってんなって……………三提督直属特務機動員だったら知ってもおかしくはないか」

コンソールを操作しながら十梧が口にした言葉に、リオ、コロナ、ヴェーネは砂彦に視線を向ける。

「……榎灘風雅。70年前、伝説の三提督と共に時空管理局を支え、俺らの部署だと「影の4人目」って言われてる」

「そして、ラークインを創立した初代部隊長」

砂彦の説明に付け加えるように十梧は言った。

「暑苦しい爺さんですよ。俺がラークインに入りたての頃は訓練で部隊長だったのに、「気合いだあ!!!」とか叫んで教導してたな」

思い出すように苦笑いする十梧に、砂彦は同意するように縦に首を振る。

「砂彦君も会ったことあるの?」

「1回な。近くにいるだけで火傷しそうだった……」

砂彦が言い終えた。

その時

『おおああああおっ!!!十梧かあっ!!!』

轟いた老人の声は、叶恵とヴェーネが積み上げた皿の城を崩壊させるばかりか、食堂にある窓全てに罅をいれた。

咄嗟に耳を塞いだ砂彦とヴェーネだが、それでもツーンと耳鳴りがする。

ドサッ

隣で声を防げなかったリオとコロナは、あまりの衝撃に気絶をし、床に倒れる。

最も近くにいた十梧が一番の被害を受けたかと思いきや、慣れてしまったのか、耳を塞がなくなるとも気絶する事はなかった。

ノイズが走るジャツジイーグルのモニターに上半身裸の老人 櫛灘風雅が映し出されている。

その肉体は衰えを知らないのか、余分な肉もシミすらない。ボディービルダー顔負けの完璧な筋肉を持っている。

「……風雅じーさん。

いい加減、声を抑えてくれ……」

『はははっ!! すまんすまん!!』

だから大きいって……

相変わらずの元上司に、つつこむ気力を失った十梧は用件を聞いて、さっさと通信を切ろうと考える。

「なあ、あんたの孫……………秋雨ってどこにいった？」

この質問に、風雅は顔をしかめて答える。

『秋雨は……………わからん』

「知らない？」

両親を失った秋雨を大事にしていたのに？

『実は旅をさせておつたんじゃが。最近、音信不通になっての』

「音信不通？いつ頃からだよ」

『……………一週間ぐらいかの』

……………一週間。

蒼仁が行方不明になった時期と重なる。

このじーさんの孫だったら、お人好しも遺伝しているはず……………。

ただの厄介ごとに首を突っ込んだだけならばいいが

アカナシム関連の事件に巻き込まれている可能性がある。

もしかしたら、秋雨の消息を追ってゆけば……………

……………考え過ぎか

十梧は先読みしすぎた思考を、落ち着かせるように一息つく。

「搜索願とか頼んだのか？」

『いや、必要なだろう。この儂が鍛えたからのう！』

「そうか……。」

悪いな、こんな朝早くに……。」

『よいわ。1人での稽古にも飽きてきた頃じゃ。今度、久方振りにお前の稽古をつけてやるわい！』

「え〜。俺はもう部隊長だぜ？」

『儂から見れば、まだまだ雛よ！！わはははっ！！！！』

風雅のバカでかい笑い声に、罅が入っていた窓が何枚か割れ、モーターに再度ノイズが走る。

十梧はこれ以上の被害をくい止める為に、通信を即座に切った。

「……………生きてるか」

「……………なんとか……………」

「……………死ぬかと思った」

気絶したりオとコロナを庇っていた砂彦とヴェーネが弱々しく答える。

十梧はふらふらと歩きながら、調理場に向かって生存確認をする。

風雅がラークインの部隊長だった頃は、これが日常だった。

後
食堂に入ったヴェータが悲惨な現状に「アカナシムの襲撃か!？」
と驚いたとか……

第33話：抱えし闇

丁寧に束ねた三つ編みを風に揺らしながら、剣帝こと空牙刹那は訓練場に立ち尽くし、その赤い瞳で空を仰いでいた。

「離せえええっ！！シヨツカー！！ぶっ飛ばすぞおおおっ！！」

耳に意味不明な言葉を発する騒がしい少女の声が入り、上に傾けていた顔を正面に戻す。

視界には先ほどまで訓練をしていた鷺祐と唯華。そして、2人の手で掴んでいる叶恵が入り込む。

「連れてきたわよ」

刹那の後ろ。

緑色のツンツン髪に、タバコをくわえた口をニヤリと歪ませた白衣のマッドサイエンティスト。

ソルカ・ハースンを睨み、唯華は食堂から引きずってきた叶恵を前に放り投げる。

「上出来です」

「つう……。お前の仕業か!？」

「ええ。3日3晩も寝やが……。寝ていたあなたのデータ採集がしたいと思ひまして」

叶恵にそう話しながら、片手で展開していたモニターから空間シュミレーターにアクセスする。

「……シャリオからは許可をとったのか？」

刹那は横目でソルカを見ながら尋ねる。

前に叶恵がラグホースに操られていた時に破壊された訓練場を寝ずに修理したのはシャーリーであり、今でも完璧に修復したわけではないので、彼女の許可を無くしては利用することはできない。それだというのにソルカは……

「当たり前を取ってねえ……ませんよ」

あまりにも至極当然の物言いに、刹那は注意をする気もおきない。もし、この場にシャーリーがいたならば気迫でメガネに輝をいれるほど激怒していただろう。

それでも、このソルカ・ハースンはヘラヘラと笑っている。いや、絶対、笑っている。

そう考えると、このような人物を部下に持った十梧が悲惨に思えてきた。

「よし スタート」

ソルカがモニターの画面に映し出された起動と赤く点滅する文字を押すと、シュミレーターが作動し、辺りの風景が光に包まれ、西部劇でよく見る荒野となって現れる。

「ほお……こんなになるのか」

叶恵が感歎の声を上げ、ぐるりと一周を見渡し終えると、目の前に六角形の水晶が飛んできた。

「おおっとー!」

顔にぶつかる寸前に右手で掴むと、聞き覚えのある機械音が水晶から発せられる。

《ヒヤッフウウーッ!!!3日ぶりだな、相棒!!》

「ラグホース!?!」

最近、手に入れた自身の相棒であり、異端と呼ばれているヒャーリジデバイスのラグホースが手の中で騒がしく喋る。

「最終調整をしました。これで名実ともにラグホースはあなただけのデバイスです」

説明し終えたソルカは、胸ポケットから携帯用灰皿を取り出し、短くなったタバコを押しやった。

《やんだろ?喧嘩あ。なら、早くやるおぜ!!》

「ふぬ……………」

データ採集を名目にした模擬戦に興奮気味のラグホース。

叶恵はチラリと刹那を視線を向け、しばらくして何かを思い付いたのか、ニヤリと笑んだ。

「条件が1つある」

「なんだ?」

「私が勝つたら、剣帝の座を譲ってもらおう！」

刹那は叶恵の要求にキョトンとなるが、次第に叶恵同様に笑みを浮かべる。

「いいだろ。勝つたらな」

「楽勝、楽勝！あとで泣き叫んでも訂正しないからな！」

叶恵は右手に持ったラグホースを前にかざして、すうーと肩から息を吸い、口を開いた。

「暴れ馬のごとく大地を駆け！立ちほだかる全てを砕く、万物粉碎の拳！ラグホース、セットアップ！」

叶恵が叫ぶと平行に、中心の*（アスタリスク）に似た紋様が描かれた藍色の魔法陣が展開され、ラグホースから発せられる光が彼女の体を包み、バリアジャケットとガンドレッドが身にまとわれる。

「起動呪文か？」

「さつき考えた！カツコイいだろう！」

えっへん！と腰に手を当てて胸を張る叶恵。

刹那は「元気すぎるな」と呟き、懐からヴァルネラビリティーを取り出し、銃剣であるスタンダードリボルバーを装着する。

「……おい、バリアジャケットは？ケガをするぞ」

「いらん。ケガなどしないしな」

刹那の挑発的な発言に、叶恵は反応するように片眉をピクッと上げる。

お前程度の攻撃で怪我を負うわけがない。

そう解釈した叶恵は、ひきつらせた笑顔を刹那に向けた後、体中に白い雷を発生。

地面を力強く蹴り出す。

「泣かすっ!!!」

目をつり上げ怒鳴り散らし、空気を突き破って進み、振り絞った拳を解き放つ。

刹那はそれを上体を反らして避け、叶恵の腕を掴んで後ろに投げる。

「っ!!!」

投げられた叶恵は空中で体勢をなおし、地面に着いたと同時に駆け出した。

「ラグホース！蒼の衝撃！」
フルインパクト

《ヒヤッハアーツ！！震えろ！俺の魂！》

ガンドレットに裝飾された蒼の玉から蒼い衝撃が吹き出る。

その勢いで加速していく速さは、まさに撃ち出された弾丸。

姿を消したかと思えば、刹那の目の前に現れていた。

「でいやっ!!!」

《Impact!》

ガンドレッドから放たれる衝撃が、叶恵の体を竜巻がごとく回転させ、勢いのついた拳が刹那に迫る。

「ふっ！」

ガキインッ！

左手を突き出し、プロテクションを展開した刹那に、叶恵の拳が激突。

双方の衝突が生み出した強風が、荒野の砂や石を吹き飛ばす。

「どうした？泣かすんじゃないのか？」

「チィッ！！」火花を散らしてぶつかり合うが、一向に壊れはしないプロテクションを蹴り、叶恵は空を舞う。

一旦、距離を空けるための跳躍だったが、しくじったと直後に気付く。

「絶好の的だ」

刹那はヴァルネラビリティーの銃口を叶恵に向ける。

飛行魔法を使えない叶恵にとって、空は回避行動をとりにくい。

「シュート！！」

ヴァルネラビリティーから放たれる魔力弾は、叶恵に向かって直進していく。

「ラグホース!!」
《Impact!》

ガンドレットから撃ち出された衝撃の反動により、身動きがとれない叶恵は自身の体を吹き飛ばした。そうすることによって魔力弾を避ける事に成功する。

冷や汗を流しながらも、安堵したその一瞬。腹部に3発の魔力弾が撃ち込まれていた。

「かつは!?!」

怯んでいる間にも、刹那は容赦なく魔力弾を叶恵に撃ち続ける。その一撃、一撃は人に拳を振るわれたような痛みを味わう。

「くそおツ!!」

蒼の衝撃を撒き散らし、迫り来る魔力弾を壊した叶恵は、ガンドレットから最大出力の衝撃を撃ち出す。

風の抵抗に髪を逆立て、猛烈な勢いで刹那に近付いていく叶恵。

対して刹那は、ヴァルネラビリティーから1発のカートリッジを排出し、スタンダードリボルバーから、日本刀型のデュアルリボルバーに切り替え、叶恵を見据える。

「蒼天……っ!!」

叶恵の拳に蒼の衝撃が集中する。彼女が繰り出そうとしているのは、ガイアの轟腕によって巨大化したヴァントを仕留めた大技。

「衝波あつ!!」

「剛破……斬影撃!!」

突き出された拳に、刹那はヴァルネラビリティーを抜刀し、5メートルの斬撃を放つ。

ドオオオンッ

巨大な衝突音が鳴り響き、2つの力が拮抗。辺りに余波が飛来し、地面を削っていく。

「まだ……まだあつ!!」

徐々に押されてきた叶恵は、もう片方の手にも蒼の衝撃を収縮し始める。
が

シュウウン……

「なぬ!?!」

収縮していた蒼の衝撃がいきなり消え失せたばかりか、剛破斬影撃と相対していた蒼天衝波も無くなった。つまり

バアアンッ

「ぎゃああああつ!!」

叶恵の負けとなった。刹那との模擬戦を敗北で終えた叶恵は、また腹が減ったので鷺祐と唯華と共に食堂に戻っていた。

「だあああつ！負けたあああつ！ちつくしよおおつ！！こんちくしよおおおつ！！」

「静かにしてください。と言うか、ご飯を飛ばさないでください」

「なんだと、やるか？」

「ちようどいいです。あなたとの決着もつけてませんね」

「ストップ！ストップ！」

視線で火花を散らす叶恵とアインハルトの間に入って、唯華は2人の口喧嘩を鎮めようとす。

その隣で鷺祐は苦笑いをしながら、向かいの席に座るソルカに質問責めされていた。

「では、蒼仁とは幼なじみと言う関係ってことか……ですね？」
「はい。小学3年生の時に会ってから毎日のように遊んでました」

懐かしむ鷺祐の話を、ソルカは「なるほど」と頷き、「続いて……」
と紡いで、次の質問を問う。

「……あの1ついいですか？」

「なんだ……でしょうか？」

「この質問に何の意味があるのでしょうか？」

鷺祐はソルカから問われる質問の重要性について尋ねる。

何故なら、先程からソルカが聞いてくる事と言えば、蒼仁に関連する事ばかりだからだ。

「意味、ですか。意味と言うより理由だ……です」

「理由……？」

「雨井蒼仁。資料から見ても、なんの変哲の無い少年が何故にこの事件に巻き込まれたのか……。仕事ではありませんが、一個人としても興味深いものなので……」

そう述べたソルカは、カップに入ったコーヒーを啜り……ヴェツと吐いた。

「ブラックか……ですか。鷺祐、砂糖をとってください」

「はい」

ビンに入った砂糖を渡すと、ソルカは「ありがとうございます」と言って、ビンのフタを開けて砂糖をコーヒー目掛けて投入させる。

それは雪崩のような勢いで落下し、ビンの中の砂糖が空っぽになった。

「うーん……。タシア、砂糖持ってますか？」

後ろのテーブルに座っている淡い金髪の女性。

ラークインの同僚であるアナスタシア・フォニクス。通称タシアに砂糖を求める。

「ソルカさん。この前の定期検診で糖分を控えてくださいって言われたばかりでしょう」

「そんな事を言われてもな……ですね。私、糖分がなきゃ何にもできないんですよ。てか、砂糖さえあれば天寿を全うするまで生きていきます」

「バカ言わないでください。そのような生活していたら糖尿病の前にメタボリックで死んでしまいます」

「うつせえーな。融通きかねえーから恋人の1人もできねえん……ぶぼらあっ!!」

ソルカが吹き飛ばす。

その場に残るは、レイピア型デバイスであるエスパダを握り、瞳に光を宿さないタシアと呆然とする鷲祐。

「なにか言いましたか？」

「少しは……手加減を……してほしい……ものです」最後にそう言い残し、ソルカはガクリと力尽きた。

「……どうしましたか皆様？ポーっとしまして」

「「「「何でもありません!!女王様!!」」」」

タシアは称号

【女王様】を手に入れた。

「……………調子こきすぎたか」

機動六課の隊舎。

医務室へと続く廊下を、肩を回しながら歩く刹那がいた。

朝の訓練後に行った叶恵との模擬戦にて、剛破斬影撃と蒼天衝波がぶつかり合った際。

バリアジャケットを装着していなかった刹那は、余波の衝撃を肩に受けていた。

軽傷ではあると思うが、次の出勤の時に何かあっては困るので、念の為、とシャマルに診てもらおうと思っていた。

「……………闇、か」

刹那は歩きながら、前のアカナシムの襲撃時にアークと名乗る全身をマントに覆い隠した人物の言葉を思い出していた。

貴様ノ心ノ闇ガ……………アマリニモ黒イモノデナ

心の闇。

思い当たることは幾つでもある。

15年前。雪の降るあの場所で
なのはが墜ちた。

目の前で雪原を赤く染めて、血を流す彼女を見ることしか出来な
った。

病院に搬送されたなのは。

手術室の赤く照らすランプを前にして、膝をつき、無力な自分に絶
望した。

絶望して

絶望して

絶望して

絶望の果てに切に思った。

“力が欲しい”

なのは達に黙って危険な仕事をしていた。

気付けば、自分の手は誰かの血に濡れていた。

それでも構わなかった。

力が手に入るなら……

力を………力をっ！！

そうやって、がむしゃらに力を求めていたら、何も見えなくなっていた。
大切な人までも……

「っ!!」

過去を思い出して、無意識に握っていた拳から血がしたり落ちていた。

「今は違う……」

言い聞かせるように、小さく、誰にも聞こえないように呟く。

しばらく歩くと、視界に医務室が入ると同時に、騒がしい声が聞こえる。

『なああに、勝手に切つとるんじゃあああっ!!!!』

「じーさんがうるっせええからだろがあああっ!!!!」

片方は老人。

もう片方は十梧であろうか。

2人の爆発音にほぼ等しい声が、廊下に響き渡っている。窓は爆音から発生される振動で罅が入り、今にも割れそうだ。

「あ……あ……」 医務室から耳をふさいだシャマル、砂彦、ヴェーネ、ヴィータが出てきた。

「どう言った状況だ？」

「え？」

2人のバカでかい声のせい、刹那の声は打ち消されてしまい、シヤマルの耳には届かない。仕方がない、と、刹那はシャマルへ念話を繋げる。

《どう言った状況だ？》

《十梧と風雅って言うお爺さんが口喧嘩してるの》

口喧嘩で隊舎を損傷させるつもりか？

さすが、ソルカの上司でもあると若干あきれる刹那は、騒音を止めるため、戦場である医務室へと歩き始める。

「まったく……」

騒がしい……

医務室の前に立った刹那は肩から息をすーっと吸った。

刹那は称号

【闇を抱えし銃剣士】を手に入れた。

十梧は称号。

【デストロイボイス】を手に入れた。

第34話：狂喜の芽 前編

朝の日差しが降り注ぐ、午前8時33分。
食堂の一角のテーブルに座る空牙刹那がいた。

朝から騒がしく、色々であった彼は、食堂に取り付けられたテレビから流れるニュースを見ながら皆とは遅い朝食をとっていた。

そんな刹那の様子を羨ましく睨む、寝癖がぴよぴよとはねている人物。特化戦闘部隊ラークイン部隊長。

空蔵十梧が食堂の外にいた。

「刹那」

「早く、終わらせろ」

現在、十梧は元上司である櫛灘風雅によって全壊となった窓の修理を、朝食を食べずに勤しんでいた。理由は、部隊長室から朝食を食べにきた機動六課部隊長八神はやてに命じられたからである。食堂の悲惨な状態を見たはやては、直感的に事態の中心に十梧がいると察し、声が響き聞こえる医務室へと走り、犯人を発見。あるうことか、医務室前の窓さえも破壊しようとする十梧に、床にめり込む勢いでハリセンを頭に叩きつけ、食堂に引きずり込むと、まずは口喧嘩を始める。はやてが「バカ」を言えば、十梧も同じタイミングで「バカ」と言う。まさに阿吽の呼吸のごとくのシンクロ率で10分ほど言い争った後、十梧に窓の修理を部隊長として命令し、監視役に刹那を置いた。

そして、今に至る。

「……………ふう」

カップのコーヒーを飲み終え、仕事と訓練からくる疲れに一息つく。一時の安らぎを得たいと思ったが、頭の中ではアークから言い放たれた言葉があまり思い出したくない過去を引き吊り出してくる。未だに振り切れぬ、自身の闇を……………。

「はぁ……………」

ため息をつき、チラリと窓側に視線を向けると、十梧が隊舎の倉庫から予備の窓を窓枠にはめていた。それにしても、本業のような手際の良さだ。何故に武装隊の部隊長をやっているのか不思議なくらい、十梧の作業に無駄はなかった。仕事以外で十梧に感心できる所を見つけ、まるで草原を歩いていたら偶然にクローバーを見つけたような感動が心を打つ。

「おい、刹那ぁ！てめえ失礼なこと考えてんだろ！！」

窓の修理を終えた十梧は、つけていた軍手を脱ぎ捨てながら刹那の座るテーブルに歩み寄る。新しく取り付けられた窓から、太陽の光が濁りなく食堂へと差し込まれる。

「つたく、あのタヌキは……………」

椅子に腰をかけ、はやてを愚痴りながら刹那のトーストをかじる。塗られていたバターが舌に染み渡り、空腹であった十梧に更なる食欲を与える。まるで犬のようにがつつく十梧を苦笑し、次には何か思い詰めた顔をした。

「なぁ、相談事があるのだが」

「ん？」

口いっぱい頬張ってトーストをゴクリと飲み込み、十梧は右隣にいる刹那に視線を向ける。

「闇はどうやってたら消えるんだ？」

「闇？」

「ああ、闇だ。何度やっても振り切れないしつこい闇……お前だったらどうする？」

刹那のいきなりの問いに、十梧は小難しそうな表情をしながら頭を掻き、考え込むような素振りを見せる。

「ん……知らん」

何とも無責任な答えだろうか……
聞く相手を間違えた、と思ったその時、十梧が更に口を開いた。

「まあ、お前が“ファントム（亡霊）”にいたんなら何やかしらあったか」

「……」

十梧の口から出たファントムと言う単語に反応し、刹那は目を見開く。その単語こそ、刹那の闇とも言えるものだから

「……どこで知った」

まるで敵を威嚇するよう鋭く光る刹那の瞳。
十梧も普段の雰囲気から、仕事場である戦場に立つ1人の兵士となる。無言で互いを睨み合いながら、立ち上がる2人。
静寂の中で一触即発の重苦しい空気が流れる。

……………グギユル

「……………」

場に似合わない腹の虫が響くと共に、2人の緊張が解かれる。十梧は顔を背け、先ほどまで合わせていた視線を必死に逸らす。さつきまでのシリアスな展開から、一気に間の抜けた微妙な雰囲気塗り替えてしまった気恥ずかしさから。

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙が続き、十梧が刹那を見て、何かを伝えるように頷く。
刹那は伝わったかのように頷き返す。

「座ろ……………」

【最高評議会直属執行部隊ファントム】

最高評議会が結成させた暗躍部隊。

仕事の全てが暗殺か証拠隠滅などの、表立ってできないものばかりで、まさに時空管理局の闇とも言える。

まともではない部隊に普通の人間がいるわけなく。隊員のほとんどが、殺人快楽者や精神異常者で構成されていた。相手が罪を犯した罪人であろうが、罪を犯していない一般市民であろうが、彼らは与えられた仕事（娯楽）を喜んでやる。そんな奴らの集まりだった。

しかし、現在の管理局にファントムは何処にも存在していない。6年前に起きたJS事件にて、当時の地上本部の主導者であった故レジラス・ゲイズ中將が、裏で事件の首謀者ジェイル・スカリエツティと関わりがあったのをきっかけに、管理局内で一斉摘発が行われた。

ファントムはその時、履歴や資料などの、自身の存在証明になるすべての物を抹消し、誰に気づかれることなく忽然と消えた。

何処にいるのか、最高評議会亡き、今もその活動を続けているのか。誰一人として知る者はいない。

トーストを食い終え、刹那が淹れたコーヒーを受け取る十梧。湯気が螺旋など描くのを少し観察し、コーヒーを口にする。職場ではインスタントしか飲まないの、味の違いなどは分からない十梧だが、かなりウマいと感じた。

「それで、どこまで知っている？」

「ファントムでのお前のコードネームがベーオウルフだったことぐらいだな」

問いに答える十梧は、ズボンのポケットにしまっていた待機状態のジャッジーグルを取り出し、モニターが浮かび出る。画面には世界地図が映し出され、殆どが砂色に染まっている。砂漠だ。その大地を三分の二を砂漠で占めている世界。

地図の片隅に【第6管理世界ウォルト】と表示されている。砂漠だらけの世界だが、古代文明の遺跡が多数発見されており。現在でも調査団を派遣させて、未確認の遺物の発掘を行っている。

「ラークインでの仕事でな。その際に部下が砂漠に空いた穴を見つけて、探索した結果がこれだ」

ジャッジーグルのコンソールを操作する十梧。モニターのウィンドウが変わり、施設内の写真が現れた。何年も人の手を加えられていないせいか、天井の所々に穴が空き、地上からの光が差し込んでいる。

「見た事があるか？」

十梧が指さしたのは、砂と埃だらけになった数機の生体ポットが並べられている部屋の写真。

見覚えのない刹那は首を横に振り、十梧は「そうか」とモニターに目をやる。

この機材があると言うことは、ファントムが生体実験に手を伸ばし

ていたことを指し示す。
最高評議会が生存していた頃からか、JS事件の事後からの事かはわからないが、時空管理局としてあるまじき事態だ。

「いいのか……」

ぼそりと、刹那が呟く。

短い期間とはいえ、暗殺が日常茶飯事の正気沙汰でない部隊に所属していたのだ。

少なからずとも情報。最悪、未だに関係を持っている可能性がある。疑いの目で見られても可笑しくない。

が

「別にいいさ」

刹那がすべてを言い切る前に、十梧はそう答え、カップに残るコーヒーを飲み干した。

そんなんでいいのか…。

適當すぎる返答。

刹那は心底呆れる。

呆れすぎて笑える。

「……バカだな」

「よく言われる」

互いに笑みをこぼす。

その光景は、まるで昔から当たり前のような……そんな雰囲気だっ

た。

十梧と刹那。

少しだけかもしれないが。2人には確実に絆が結ばれた。信用しえる絆が

「あと、1ついいか……」

「ん？」

「この事はなのは達に……」

「言わない。その代わりに聞かせる」

十梧が人差し指を突き立て、真っ直ぐと刹那を見据える。

「……なんで今日は三つ編みなんだ？」

朝、刹那を見てから気になっていた十梧。

刹那は普段、白いリボンで後ろ髪を束ねているのだが、今日は丁寧に結われた三つ編みである。

「ああ、これか？」

刹那は一束を手に触れ、何やら嬉しそうな顔をする。その表情で、十梧は大体のことを理解したような気がした。

「実は昨日、なのはの見舞いに行った時な。なのはが暇だあ〜、とか言って勝手に結ったんだよ。」

折角、結ってくれたことだし、解くのもなんか引けると思ってな……

…つて十梧？」

「…もういい、ゴチソウサマ」

刹那が話すのに夢中になっていると、十梧はテーブルに突っ伏していた。

予想はしていたが、実際に話されると、これほどまでにキツイとは……

展開されたシュガーワールドに、十梧は尋ねたことを後悔した。

その時、十梧のポケットの中にあるジャッジーグルに通信を受信した。

「ん？……はやてか」

ジャッジーグルを取り出し、モニターを展開すると切羽詰まった顔をしているはやてが映る。

「どうした？ちなみに窓は直しおえたから…」

『フェイトちゃんとティアナを乗せた艦が、ダークメシアの艦、五隻に襲撃されてるんやー!!』

ダークメシアと言う言葉に十梧に緊張が走る。

ダークメシアは、第13管理外世界へヴィバッドを拠点とする危険度Sの犯罪グループだ。

しかし、管理局と交わした条約によって管理世界に入ることは禁じ

られている。

「次元世界不干渉条約はどうした!？」

『相手の、レベッカ・シックザールの一方的な破棄や……』

最悪な事態だ

そう思った瞬間

十梧の背後で山吹色の光が煌めいた。振り返ると、銃剣型デバイスヴァルネラビリティーを右手に、バリアジャケットを身に纏った刹那。

「おい!せ……」

呼び止めようとするが、刹那は聞く耳を持たずに飛行魔法を使用。窓を突き破って空へと翔ていった。

「あいつ!」

『十梧、ちょい待ちや!』

刹那の後を追おうと、ジャッジーグルをセットアップしようとする十梧をはやてが止める。

「何だ!」

『出るのは、私の方がええ!ここで十梧は指揮を執って欲しいんや!それにせつちゃんに関してはちゃんと“保険”もある』

はやての案に、十梧は少しだけ考える。

自分の戦闘スタイルはジャッジーグルの射撃を主体にする対人用である。

だが、ダークメシアは質量兵器を積み込んだ艦が五隻。容易に近づけば一瞬で蜂の巣だ。

ならば、広域魔法など遠距離からの攻撃が可能なはやてが行った方がいい。

保険が何なのかは分らんが、コイツが言うからには信用しても良いのだろう。

「わかった……。だから、早く行け!!」

『わ、わかつとるわ!』

了承してすぐに怒鳴った十梧に驚きながら、はやてはジャッジーグルとの通信を切った。

それを確認した十梧は、すぐさま駆け出す。

無事に終われよ……

説にそう願った。

第35話・狂喜の芽 後編（前書き）

誤字修正完了 }

第35話：狂喜の芽 後編

クラナガン上空

身を覆う黒のコートををはためかせ、高速で飛行する刹那の姿があった。

羽ばたく鳥すら追い抜いて向かう先は、ミッドチルダの南部に位置する第5臨海空港。

仕事を終えたフェイトとティアナを乗せた艦が、着陸する予定だった場所である。

「ヴァル。はやてに繋いでくれ」

《all right、boss》

ヴァルネラビリティーが回線を繋げると、刹那の目の前にははやてが映ったモニターが現れる。

『せつちゃんか!?!』

「フェイトとティアナが乗った艦は今、どこだ？」

『やったら、シュベルトクロイツから地図を送るで』

はやてがそう言って、2秒ほどたつと、ヴァルネラビリティーにミッドチルダ南部を拡大した地図が送信されてきた。

地図には、第5臨海空港から南東10キロ程の海上に赤い点が記されている。

現在地点から艦が襲撃にあっている所まで、この速度では遅すぎる。

『先に行かんでな！私もすぐ……………』

はやてとの通信を一方的に切り、刹那は飛行速度を上げ、流星のごとく、空を駆け抜ける。

「やらせない……………。誰一人として!!!」

更に加速した刹那は、その場に残像を残して飛んでゆく。
守るべきものを守る為に

一方その頃

八神はやては機動六課隊舎から飛び立っていた。

「人の話は最後まで聞いて欲しいもんやな」

《まったくです》

ユニゾンで、白っぽくなった茶髪を揺らしながら、愚痴をこぼすはやてにリイン賛同する。

ドンドンと上昇してゆき、クラナガンで道行く人がアリほどに見える高さで、水平飛行へと移る。

魔導師が飛んでいる!!何か事件が起きた。

と言う方程式で市民の恐怖を煽らせないためだ。
先行している刹那に追い付きたいが、フェイトみたいな高速を出せるわけではない。

こんな事なら、昔にもっと飛行魔法の練習をすべきだった。
そんな後悔をしていると、目前にモニターが展開される。

少し透けている画面には、ラークインの部隊長服を着た十梧が仕事でしたか見れない真剣な表情で映っていた。いつもこんな顔だったらええのに……

心の中でボヤキを呟いたが、邪念として振り払い、モニターを見る。

「何かあつたんか？」

『ミッドチルダ北部、正確には聖王教会の南西5キロ地点に人造人間ホームクが確認された』

「なあっ!?!？」

思いもしなかった報告に、上空を飛行していたはやては止まってしまふ。

次元世界不干涉条約で、一切の関わりを断っていた管理外世界を根城にする組織、ダークメシアが仲間の乗る艦を襲っていると思えば、管理局に入ってから今までお世話になってきた知り合いが働いている聖王教会に、最近、世間を騒がしている謎の敵が押し寄せている。

「本局から、何か連絡は？」 『待機。機動六課は人造人間ホームクルスの侵略に備える、だ』

機動六課の設立理由は、ロストロギアを狙う謎のテロ集団、アカナシムの拿捕と時空管理局本部の護衛。

聖王教会を個人的な理由で行くわけにはいかない。

『大丈夫だ。ちゃんと他の部隊が向かってくれてんだ。お前は前
のやるべきことをやれ!』

「分かつとるわ!」

募る不安を心の奥底にしまい込み、今は刹那に追い付くことだけを
先決しよう。

「……その前に保険やな」

『そついやー、保険ってなん……』

強制的に回線を切る。

おそらく、画面の向こうでは「あれ?」と十梧が惚けた顔をしてい
るだろう。

そんな光景を思い浮かべて、小笑い。

少しだけ緊張がほぐれたところで、頭を切り替え、保険たるべき人
物に通信を繋げる。

次元航行艦アトワイルト

第13管理外世界へヴィバッドから帰航しているこの艦は、周りを
取り囲む5隻の武装艦に攻撃を受けていた。

黒一色の染められた武装艦からは絶え間なく、砲弾やミサイルなど
の質量兵器が撃ち続けられている。

アトワイルトが張っているシールドで直撃は避けているものの、確
実に艦の装甲にダメージが行き渡る。

燃料が尽きれば一巻の終わり。
魔導師が出向いたところで、凄まじい弾幕の前では死しか待っていない。

それを知ってか、知らずか。

金髪をたなびかせ、空を駆ける1人の女性。

フェイト・T・ハラオウン

愛機、バルディッシュを構え、シールドの中から飛び出る。

途端に迫るミサイルを体を捻らせて避け、ソニックムーブで最寄りの黒艦に接近。

近づけば近づくほど、激しさを増す銃乱撃を紙一重で回避しながら、バルディッシュから一発の薬莖を排出する。

「はあああつ!!」

雄叫びと共に金色に輝く魔力刃を振り下ろし、縦に3つ並んだ砲身を真っ正面から切り裂く。

続いて、甲板へと上昇。

「来やがったぞ!!」

「殺れえ!!」

甲板には血気が盛んそうな乗組員が、怒号を交わしあいながら手元にある機関銃を乱射している。

「くっ!!」

あまりもの猛襲に後退。

銃が届かない距離まで下がったフェイトは、左手を突き出して魔法陣を展開し魔力収縮。

金色の砲撃を間髪入れずに乗組員達へと撃ち放った。

砲撃は乗組員を蹴散らし、そのまま手を横にスライドさせ、その他の兵器を破壊していく。

なるべく人を傷つけずに

相手が犯罪者であろうが、フェイトの考えは変わらない。今までもそうしてきたように、これからも彼女はそうしていくだろう。

だが、優しい思想は時に自らを滅ぼす。

「死ねやあ！！」

「っ！！」

気絶していたかと思っていた乗組員が発砲。

フェイトの肩を掠め、裂けたバリアジャケットから血が流れる白い肌が露出する。

A M B！？

容易く裂けたバリアジャケットの肩口を一瞥し、フェイトは苦々しい表情をする。

アンチ・マギリング・バレット

A M B

魔法を分解、空気に返す結果をコーティングした銃弾。

昨年、これを次元犯罪グループが使用し、何十人もの管理局の魔導師が殺された。

「撃て!!撃て!!」

倒れていた乗組員が立ち上がり、次々とAMBが装填されている機関銃をフェイト目掛け、乱射する。

「くうっ!!」

急上昇するが、思うように速さが出ず、何発かは足を掠っていた。痛みに怯んだ、その隙を突くように、4発の小型ミサイルがフェイトの目前に迫る。

バァーンッ!

1つが着弾したことによって、残りの3つも誘爆。轟々と爆発音が響き、空気を震わせる。

死んだのかな?

それにしても、あんまり痛くない。むしろ温かな何かに包まれているような……そんな感じだ。

フェイトはゆっくりと目を開ける。

視界には黒い煙が纏わりつくように舞っている。
そんな中、自分を抱きかかえる存在がいた。

黒と赤の髪。燃えているような紅い瞳。漆黒のバリアジャケット。
ピンチの時に現れるヒーローみたいな存在。

「大丈夫か？」

「……………うん」

優しい問いに、疲れ果てている喉を使って答える。

一筋の涙を流す目に映すのは、昔も今も変わらない。
自分のヒーロー。

「刹那……………」

間に合った……………。

やつれた顔だが、弱々しく微笑むフェイトに安堵を覚え、高速移動
術である瞬駆を使用。

アトワイルトの甲板に移動した刹那は、フェイトをゆっくりと自らの
手から降ろした。

「刹那さん！」

体の至る所に包帯を巻いたティアナが、担架を持った局員を連れて甲板に現れた。

フェイトを床に寝かせ、ダークメシアの艦を睨む刹那の背中を見たティアナは悪寒を感じる。

何か、嫌な事が起きそうな……そんな予感。

「この空域から逃げろ」

そう言い残し、刹那は甲板から姿を消す。

ティアナは一抹の不安を胸にしまい込み、担架で運ばれていくフェイトについて行く。

「……………」アトワイルトの甲板から、再び激戦の空へと戻ってきた刹那は、自身を標的とするダークメシアの艦を見据える。艦からは、休むことなくAMBやミサイルの質量兵器が撃ち続けられている。迫り来る猛襲に、刹那はそれらに動じず、最小最低限の移動で避け、またはヴァルネラビリティーで切り裂き、撃ち落とす。ていく。

「ヴァル、フルドライブ……」

《all right Boss! Full Drive》

ヴァルネラビリティーが光に包まれ、姿を変えてゆく。肥大し、光が止んで刹那の手に携えるは、フルドライブ、モード3アシユブレイザー。大剣に似た突撃槍を振りかざし、刹那は動き出す。迫る弾幕をかいくぐり、フェイトを落とした艦に接近。甲板では、聞くに耐えない下劣な言葉を叫びながら機関銃の引き金を引く乗組員達。射出した銃弾は、刹那に掠る事もなく、彼方へと飛んでゆく。

「乱牙……斬影撃……！」

振り払われる一太刀から放たれるは、100を超す魔力斬撃。フルドライブで使用されたその技の一撃、一撃が剛破斬影撃とほぼ等しい威力。高威力の斬撃の群れは、ダークメシアが撃つ質量兵器をもともせず、艦の装甲を易々と切り裂いてゆく。

「あああああつ……！」

「くそがあああつ……！」

響く断末魔と罵倒の言葉。煙を上げながら落ちてゆく艦に背を向け、刹那は、次なる目標へと視線を変える。

視界には、ダークメシアの全艦から撃ち出された夥しい数のAI搭載追尾型ミサイル。1発でも当たれば、その爆発で残りのミサイルも誘爆。フェイト達が乗っているアトワイルトまで被爆する。

なら、どうする？

簡単だ。

アトワイルトが被害を受けない高度で、ミサイル全てを破壊すればいい。
僅かな隙間を通り、刹那はミサイルの軍団を駆け抜ける。
目標が背後に回ったと感知したAI達は、群をなす小魚のように衝突もせず方向転換する。

後を付けてくるミサイルを引き連れ、刹那は高度3、000メートルの空を更に上昇してゆく。

周りの空気は冷え込み、口から吐く息は白く染まる。吸い込む酸素は高度が高くなる度に薄くなり、息苦しさを覚える。

「そろそろか……………」

高度5、000メートルで上昇を止め、遅れて飛来してくる大量のミサイルを見据える。

ヴァルネラビリティーを振りかぶり、魔力を込める。刀身からは山吹色の魔力が滲む。

ミサイルの間合い、約300メートル。刹那はヴァルネラビリティーを振るい、剛破斬影撃を撃ちはなった。

ババアアーンッ！！

音速を超えた魔力斬撃は一秒と経たずに、先頭のミサイルと接触。瞬間に起こった無数の爆発。

1つの爆発はミサイルに誘爆し、新たな爆発を生む。

「……………」

全てのミサイルが爆破されたのを確認した刹那は、再びヴァルネラブリティーを構える。その目にはダークメシアの艦4隻。

何故だか心が躍る。

まるでこの時を待ち受けていたような、そんな感じが体中に溢れていく。湧き上がる感情。

ただ、それに身を任せると脳が指令を出す。

「……………殺す」

殺せ。殲滅せよ。根絶やしにしる。

本能が騒ぎ、理性が溶け始め、狂喜に笑みが零れる。

《……………ボス？》

マスターの異変に気付いたヴァルネラブリティーだが……………遅すぎた。

刹那の足元に魔法陣が展開される。

「進む紅蓮の業火！」

ダークメシアの艦全てを囲むほどの巨大な二重結界が現れる。

乗組員はいきなりの出来事に騒ぎ出し。

「万物を燃やし尽くすその身を晒し、我が敵を塵芥と為せ!!」

刹那が左手を掲げると、結界が紅く染まり、中の気温は一気に30度以上も上がった。

さあ……………殺れ!!

「エクスプロージョン！！」

二重結界内で大爆発が起きる。結界は3秒は持ったが、爆発の威力に耐えられずに弾き飛んだ。紅蓮が辺りを支配する。

「フフフ……フハハハハハハッ！！！」

笑う。狂ったように、大きく笑う。その顔は悦楽に溺れた快楽者のようだった。

まだ、足りない……

爆笑を終えた刹那は、心が満ち足りていないことに気付く。もっと、もっと、もっと！もっと！もっと！もっと！もっと！も………なにを考えているんだ？

正気が戻ってきた刹那は、今さっきまでの自分の思考に悪寒を感じる。

「何をやってるんだ……俺は……」

炎上しながら墜落してゆくダークメシアの艦。

機関室を破壊し、航行不能にするだけで済む事を、わざと人が死ぬように攻撃した。

剣帝と謳われている刹那からは、考えられない行為である。

どうした？もっと殺るんだろ？

心の奥底で、何か語りかけてくる。刹那ではない、得体の知れない何か。

意思とは無関係に顔がある方向を向き、その目に飛行する次元艦アトワイルトを捉える。止める……

声が出ず、口は不気味に笑みを浮かべ始める。

あれにはフェイト達が乗ってるんだ……

《何をしてるんですか、ボス！？》

マスターの暴走に叫ぶヴァルネラビリティーに大量の魔力を流し込む。

止まれ！！俺の体だろうが！！頼む……止めてくれ！！

「フハハハハハッ！！」

再び笑いを上げ、ヴァルネラビリティーを振り下ろそうとした刹那の瞳に、限り無く広がる空の彼方に光る桃色の閃光が映り、次の瞬間には自らを呑み込んでいた。

これ……は……

ぼやける視界に、2人の女性が見えた。
それを最後に刹那の意識を失った。

第36話：オディハウンド（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

最近の悩みが就活。

これのせいであまり執筆が進みません（泣）

第36話：オデイハウンド

「ん……………」

意識が覚醒した刹那は、重い瞼をゆっくりと開ける。見える景色は、機動六課、いや、時空管理局で随一タバコ臭いと定評のある第二研究室だった。

話の通り、喫煙所の10倍以上の強烈な臭いが刹那の顔を歪ませる。

「お。起きやが……………ましたか」

相変わらずの中途半端な敬語を発し、ソファーに横たわる刹那に歩み寄ってきたのは、この部屋の主にて、ヘヴィスモーカーの科学者、ソルカ・ハースン。

手には火のついたタバコが、紫煙をまき散らしている。

「俺は……………」

「寝てましたよ。昨日からずっとね」

「そうか……………」

痛みに軋む体をゆっくりと起き上がろうとすると、途中でガチャッと金属音が聞こえ、自分の手足が鎖に繋がれている事に気付く。

「これは何だ？」

焦ることなく、ソルカを敵視しながら問い掛ける刹那。

「いやあゝ。起きて、すぐに暴れられたら困つから……るからですよ。杞憂でしたけれど」

タバコをくわえ、空いた右手で指を鳴らすと、それを合図に刹那を縛っていた鎖が2つに裂けた。

体が自由になった刹那は、ソファーから立ち上がり、ソルカと向き合う。その瞳は未だに鋭い。

「そう睨むんじゃ……まないてくださいよ。テメエに“投与されている薬”が取り除かれるまではな」

「薬だと？」

ピクリと刹那の眉が動く。ソルカの乱暴な口調から、その薬が危険であることが分かる。しかし、そんな薬をこの身体に服用した覚えがない。

「分かんねーのも仕方はねえ。ファントムがテメエの了承関係なくぶち込んだからな」

ファントム……

現在、消息不明の最高評議会直属執行部隊。かつて刹那が入隊していた部隊でもある。

管理局の闇のような存在である彼らが作り出した薬だ。まともな代物ではないと、考えずとも分かる。

「……どんな薬だ？」

「ファントムが開発したナノマシンでしてね、名を【オディハウ

ド】」

すぐ横にあつた机に設置されている端末を起動させながら、ソルカは短くなったタバコを灰皿に押し付ける。ジュツと音を立てタバコの火が消えると共に、端末のモニターに一本の注射器が映し出される。中身の液体は青く、ピーナツツ程の黒い鉄のような物が浮かんでいる。

「このナノマシンは、投与者に特殊なアドレナリンを放出します。それによって理性や精神の崩壊を招き、殺人衝動に駆られて……」

ソルカは言葉を打ち止め、刹那に目を向ける。その視線は、後はおわかりでしょう？と言っている。

思い当たる節は、有りすぎて素直に肯定するには抵抗がある。

突然の発狂、そしてダークメシアどころか、仲間の艦をも墜落させようとしたあの時の自分は、あまりにも異常だった。

だが、気にかかる点が一つある。

「何故、今までに殺人衝動が起きなかつたんだ？」

刹那がファントムに所属していた時期は11歳の頃。脱退した後にも、幾多の死地を歩み生きてきたにも関わらず、体の中のオディハウンドは殺人衝動を駆り立てる事は一度も無かった。

「おそらく、ある一定の脳波をスイッチにナノマシンが反応しや…… たんでしよう。例えば、仲間の敵や因縁の相手…… 記憶の奥底で眠っていた邪心が表に出た…… などですかね」

「……レベツカ……シツクザール……」

ポツリと呟いた単語。

ファントムとしての仕事で暗殺すべきだったダークメシアのリーダー。
まさに死神を思わせるような殺気と驚異的な戦闘力。戦っている最中に、何度も死を覚悟をした。それでも死ねない、死ぬわけにはいかない、と強く想いながら戦った。帰るべき場所で待つてくれている愛しい人の為に。

本当にそれだったか？

心の中で響く声。

まるで自分の中にいるもう一人の自分が語りかけてくるように、はつきりと聞こえた。

楽しかったんじゃないか？生と死をかけた闘いの中で、本当の自分を見つげ出したんじゃないか？

違う……

何が違うんだ？思い出せよ。ダークメシアの雑魚共の血溜まりに映った自分の顔をよ……。笑ってたろ？笑ってたよなあ？笑ってたんだよ、お前は。

さあ、まだ足りねーだろ？足りねーんだよ。血が、血がさあ。見ろよ。目の前にいんだろおが…緑髪の奴が…なあ？

血が騒ぎ、視界に映る人間が獲物と捉えてしまう……。

耳障りな程に心臓の高鳴りが響く。気持ちが高揚してゆく。

1、2歩、ヨロヨロと後退し、頭を押さえる。その顔は狂気に歪み始める。

「思考を停止しろ！考えれば考えるほどに、殺人衝動に心を蝕まれる！」

一喝に刹那は、心を強く持つ。ソルカは、机の引出しを荒々しく開け一粒の錠剤を取り出す。

「飲め！ナノマシンからのアドレナリンを抑制する！」

差し出された錠剤を掴んだ刹那は、部屋の右端にある蛇口を撚り、口に錠剤を含んで水を飲み込んだ。

「んぐつ……………はあ……………はあ……………はあ……………」

錠剤を飲み終え、沸き立つ衝動が次第に止んでいくのを、壁により掛かって待つ。

「落ち着きましたか？」

「…ああ……………」

息遣いが荒いが、落ち着きを取り戻す刹那。ソルカは警戒を解いて、刹那に肩を貸し、イスに座らせる。精神の随まで気力を刈り取られた気分、疲れもあつてか、目を閉じた刹那はそのまま眠りについた。

「ふう……………」

ため息を吐きながら第二研究室から出てきたソルカ。機動六課は基本的に禁煙。ヘヴィスモーカーである彼は、すぐに研究室に降りた衝動が頭の中で暴れるが、刹那の様子を知らせないと後が面倒なので、グッと堪えて廊下を歩き出す。

「オデイハウンド……」

久しく聞いた単語を感慨に眩く。最高評議会直属執行部隊ファントムが開発した薬物兵器である。正確には、ファントムに協力していた“ある企業”が極秘裏に造ったものであるが。その企業にソル力は少しばかり関係があり、鎮静剤の作成方法を覚えていたため、刹那に投与されたオデイハウンドが放出するアドレナリンは、一時的に治まっている。もし、今ある鎮静剤が効かなくなり、刹那が暴走すれば、止める手段は1つに限られてしまう。

空牙刹那の抹殺

だが、この手段は困難を極める。まずは剣帝刹那としての知名度と信頼の高さだ。刹那を殺そうとすれば、必ず反発してくる人々が現れる（特に高町なのは）。次に、管理局の戦力。謎のテロ集団アカナシム。第13管理外世界へヴィバッドを根城にするダークメシア。この2つの勢力が管理局を襲い掛かろうとするこの時期に、刹那の喪失は戦力の激減と局員の士気の低下に繋がる。

まあ、実行する前に我らが部隊長が許してはくれないか……。

「はあ………」

しばらく思考に思考を重ねていると、視界の先に茶色サイドポニーの女性。オデイハウンドによって暴走した刹那を、必殺の威力を持つ砲撃で止めた高町なのが映る。彼女を含む機動六課の隊員には、刹那の暴走を敵の幻覚魔法によるもの、と説明している。相手もソル力に気付いたか、進路変更をする。

「こんにちは、ハースンさん」

「ソルカだっつ……でいいですよ」

間合い3メートルで互いに挨拶をする。近づいてきた、見当は付いていたソルカは、笑みを作り口を開く。

「刹那さんは大丈夫です。私の杞憂でした」

「……そうですか」

ソルカのついた嘘に、心底安心したような声を吐き出すなのは。

そこまで安堵の表情をされると、流石に胸がチクリと痛む……。目尻に涙をためながらなのはが見せる笑顔は、ドSであるソルカに罪悪感を感じさせる。胸に渦巻く気まずさに、早くこの場から立ち去りたいと思ったソルカは

「刹那さんは第二研究室で寝ています。それでは、私はこれで」

となのはに言い、再び歩き出す。

「あ！あの……ありがとうございます」

背後から受ける感謝の言葉。ソルカは振り返ることもせず、ただ、真っ直ぐ進んでゆく。

「……あなたに感謝されるような人間じゃねえよ……」

誰にも聞こえない程度に、苛立った口調で呟く。
なのはに苛立ったのではない。自分自身に苛立っている。ソルカは
気晴らしに胸ポケットから、タバコを一本取り出し、火をつけずに
口にくわえる。

「吸いてえ……」

フェイトとティアアナがミッドチルダに帰還する数時間前

第13管理外世界へヴィバッドの首都アタン・テラス。
そこから10キロ離れた何も無い荒谷に、蒼仁達の姿があった。

時刻は9時を過ぎた頃であろう。

静かな夜の時間が始まっているはずだが、蒼仁の目の前は明るい。

それは炎の光

大破したカリナの艦が地獄のような業火の中でゆっくりと朽ちてい
く。
辺りにはバラバラになった艦の乗組員の体が転がり、流れ出た血が
池のように広がっている。死臭が漂う。強烈な吐き気とめまいに襲

われた蒼仁は、手で口を塞ぐ。

「何よ……………これ」

啞然としていたティアナが、ここに着いてから続いていた沈黙を漸く破った。

だが、この言葉に返す者は誰もいなかった。自身も分からないからだ。

「あ、来たか……………」

男の声が聞こえた。

それを脳が確認したと同時に、艦を燃やし尽くそうとしていた火が両断された。出来た道から現れたのは、マントを羽織った1人の男性。

黒髪で隠れる瞳は鮮血

表情は笑みを零し、右手に持つ血が滴る日本刀の剣先を蒼仁に向けた。

アカナシムのミッドチルダ襲撃時に、エリオ、キャロ、ヴェーネを傷付けた、妃山叶恵の兄。妃山真武。

「久しぶりだね。蒼仁」

「……………」

懐かしげに挨拶をする男性に対して、蒼仁は頑なに口を閉ざし、ただ睨む。舞う白銀の粒子が輝きを増していく。

「あなたは……妃山真武ですね……」

仲間を殺され、震えるカリナの前に、無言の蒼仁の隣に並んだフェイトは、妃山真武へと尋ねる。両手に握るバルディッシュに力を込めながら、飛び出す気持ちを抑えながら。

「そつだよ。そして、ここにいた人間を殺したのもね……」

そう言つて笑う真武。その笑みはレベツカの見せたものよりも、背筋をぞわぞわさせる冷たい感覚が走る。

恐怖に一瞬だけ硬直したフェイトの隣を、風のごとく駆ける影。

「あああああつー!!」

憤怒の叫びをあげながら、真武へと突っ込んでいく蒼仁。右手のレディアントに白銀の粒子が集い、眩しいほどの光を発する。臆すことのない真武は笑みを崩さずに、日本刀を振り上げる。刀の軌跡が飛び出すように、数千の斬撃が生み出され、蒼仁を切り刻もうとする。

腕、脚、頬、体中を刻んでいく斬撃だが、ドライブの特徴である超再生の前では無傷同然。

歯を食いしばり痛みに耐える蒼仁は、一気に真武の前へと躍り出る。

「エクサ………ノヴァー!!」

胸ぐらを掴み、レディアント真武の腹に突き立てる。瞬間、眩い白銀の魔法陣が闇夜を照らす。

「ブレイイカアアーツ!!」

白銀の砲撃が真武の腹に零距离で撃ち放たれ、半径2メートルに渡り爆発を起こした。吹き荒れる爆風が砂煙を巻き上げる。

「今の……」

砲撃の数秒前

蒼仁が展開した白銀の魔法陣にフェイトは疑問を思う。それはミッド式でもなければ近、古代ベルカ式でもない。中心に*（アスタリスク）に似た紋様が描かれた魔法陣。

少なくとも自分が見てきた本や資料にも載っていない術式……いや、今はやめよう……

フェイトは思考を止め、目の前の敵（真武）に意識する。

「があっ！！」

苦痛に満ちた叫び声が闇に響いたと同時に、煙の中から大量の血が飛び出した。舞っていた砂煙が突風に吹き飛ばされたように唐突に晴れる。現れたのは刀を振り上げた真武と、肩口から血を吹き上げる蒼仁。

「裂け……ドウジギリヤスツナ童子切安綱」

銘を呼ばれた刀は、呼応し、その刀身を輝かせ、主の敵を威嚇する。髪に隠れた瞳に狂気を宿し、真武は童子切安綱を振り下ろす。音速すら超える太刀は、蒼仁の右肩に食い込み、バリアジャケットを易々と斜めに体ごと切り裂いていく。

「ふっ！」

振り切った刀を三日月を描くように、真武は再び斬撃を蒼仁に刻み

込む。激しい痛みに気を失いかけ、足をふらつかせる蒼仁に真武からの更なる連撃が加えられる。

「やめろおっ!!」

15回目の斬撃を放った真武の頬を、吠えるフェイトのフォトンラッサーが掠め、蒼仁から離れる。

「だいじょ……っ!!」

駆け寄ったティアナは蒼仁の体を見て絶句する。あれだけの斬撃を受けていようが、その体には傷1つも無い。

異常だ

レベッカとの戦いもそうだが、蒼仁の驚異的な再生能力は恐怖すら感じられる。

「邪魔しないでくれるかな……」

殺気の満ちた低い声に、体感温度が下がっていく感覚に囚われ、動きが取れない。ティアナは何とか後ろを振り向くと、刀の切っ先を向けた真武が怒りのこもった瞳で睨んでいた。

「つぶねえ」

迫る刃に蒼仁は恐怖に体をおののいていたティアナの肩を掴み、力の限りに投げ飛ばす。

「ちょ、ちょっと……」

「砲撃を……撃ち込めえ!!」

戸惑うティアナの声を遮り、蒼仁は命令口調で叫び、真武の刺突を真っ正面から受けた。

「あらら」

キョトンとしたように目を見開く真武。その視線の先には、レディアントを放り捨て、自身に刃をわざと突き刺す蒼仁。

「会わないうちにマゾに目覚めたの？」

「早くしろおおっ!!」

「どうなっても知らないわよ!!」

半分あきらめたように叫ぶと、クロスミラージュの銃口に魔力を収縮し始めるティアナ。それに気づいた真武が、蒼仁から童子切安綱を引き抜こうとするが、刀身を強く握る両手によって微動だにしない。

「ウザイよ……」

苛立ちを感じられる声を漏らす真武。同時に蒼仁の胴体に突き刺さっていた童子切安綱に力を込め、真っ直ぐに下ろした。握っていた手の平を合わせて、腹の右側から足の中指を一気に両断される。

「っ!?!」

一瞬の出来事から走る激痛に、蒼仁の意識が遠退く。が、痛みにも構う間もなく、仕返しとばかりに真武に頭突きをお見舞いし、接着したばかりの手を握り締め、頬を殴りつける。

「離れなさい!!」

叫んだのはティアナ。

両手に握りしめるクロスミラージユの銃口に、十二分に肥大した橙色のスフィアが、放たれるのを今か今かと待ち遠しく輝いている。

だが、蒼仁はティアナの言葉を無視して、地面に転がっていたレディアントを手に取り、真武に飛びかかる。

「ああ!!もう!!」

言うことを全く聞かない蒼仁に苛立ちを覚え、ティアナは遠慮せず、クロスミラージユの引き金を引いた。

閃光を放って撃ち出された砲撃は、一秒もせずに鏝迫り合いしていた蒼仁と真武を飲み込み、大地を削り取る。

しゃんっ

虚空に静かに響いた金属音。それが童子切安綱から発せられたと分かったのは、ティアナが自身の魔力を振り絞って撃った砲撃が消え失せ、刀を振り下ろし終えた真武が現れたことによる。

「まったく……」

グシャリ

真武の呆れた声と、身震いするような音が重なる。音の正体。それは、真武の周辺に落ちていく肉片であった。今さっきまで生きていた証に、断面からは血がドクドクと溢れ出る。その光景にフェイトとティアナは驚愕し、絶望する。そんな2人に真武は嘲笑を浮かべる。

「なにぼけーっとしてるんですか？僕と彼は敵同士だったんです。これが当たり前の一ー」

淡々と述べていた真武の声が途切れる。いきなり、真武が吹き飛んだことによって。

突然の出来事にそこにいる全員が啞然となる。

足があった。

宙にふよふよと浮かぶ踝より上がない右足があったのだ。次の瞬間には、バラバラになったいた肉片が集ってゆき、1人の人間の形を象っていく。

「……………」

完全に肉体を復元した“黒髪”の蒼仁は、無言で上げていた足を地面に降ろす。

「離れ……………っ！！」

カリナの叫び声が途切れるのを、フェイトは耳にした。

白銀の魔法陣。

天、地、空の至る所に展開されていく。気付けば、ここら一帯が白銀の輝きに照らされている。キーンと高い音を鳴らしながら、光の純度を高めていく魔法陣。辺りが眩い白銀に目を開けられないほどになったその時

「
」

蒼仁が力なくレディアントを掲げて、何かを口ずさんだ。

輝きが炸裂した。

振動が大地を砕き、衝撃波空気を切り裂き、極光が空間を歪ませる。天変地異または世界の破滅を思わせるような破壊が起こった。

次々に破碎していく光景の中、フェイトは目にした。

上空から蒼仁に降り注ぐ、無数の閃光を

視線を上に向けると、一隻の艦が蒼仁の真上を飛行している。そこでフェイトの意識は途絶えた。

第36話：オデイハウンド（後書き）

次はもっと早く投稿できればと思います

ではまた次回まで

第37話：対人恐怖症（前書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

なんやかんやで、この作品も1周年！！

これも見てくださる皆様方のおかげです

これからも頑張っていきますので

よろしく願います！！

第37話：対人恐怖症

「そうか……蒼仁が」

機動六課部隊長室。

ソファーに座る十梧が、亡くなった親友の息子である少年の名を呟く。

テーブルを挟んだ向かいには第13管理外世界へヴィバッドで起きた全てを話したフェイトがいた。昨日の戦闘で傷を負った腕や頭には、ガツチリと包帯が巻かれている。

ジェイル・スカリエッティの脱獄。

雨井蒼仁の発見。

ダークメシアのリーダー、レベッカ・シックザールの接触と戦闘。

妃山真武の出現と蒼仁の暴走……

「ごめんなさい。私の力が足りないばかりに……」

「謝らないでくれよ。蒼仁が見つかっただけでも収穫なんだ」

「そうですよー」

謝罪するフェイトに十梧とリインは優しく接する。そして、隣で思考に耽るはやてに視線を向ける。

「どう思うっ？」

「……そうやな。蒼仁君も気になるんだけど、やっぱスカリエッティとレベツカやな」

はやての意見に十梧は賛同して頷く。

レベツカは管理局との間で結んでいた次元世界不干渉条約を破った。つまり宣戦布告を意味している。

彼女が率いる武装集団ダークメシアは、ヘヴィバッドにある戦力だけで管理局の三分の二に値する。

更にレベツカが呼び掛ければ、他の次元世界から彼女の配下にある犯罪グループも出向き。最悪、同等もしくは上回る勢力を所持されることになる。

それに加え、脱獄したジェイル・スカリエッティと手を組んだ場合、管理局の勝率は絶望的に低下する。

「そう言えば、刹那は大丈夫なの？」

フエイトの問いに十梧はほんの少し、ピクリと、片眉を引きつかせる。

刹那は昨日のダークメシアとの戦闘で、体内に投与されていたオデイハウンドが反応。殺人衝動を駆り立てられて、暴走した。

だが、この事は伏せており、代わりに刹那は敵の幻覚魔法によって錯乱状態に陥ったと、はやてを含めた前戦メンバーに説明している。

「大丈夫、ソルカは幻覚魔法の解除が得意なんだ」

にこやかに答えるが、もちろん嘘だ。ソルカにそんな能力はない。むしろ、幻覚作用のあるスプレーを開発して隊に撒き散らした前科

がある。

あの時は大変だった……

スプリーのせいで錯乱状態になった隊員は、隊舎の機材は壊すわあ、外で裸になるわあ、オフィスで模擬戦を始めるわあ、などなど……
事が収まった後、本部に呼ばれて減給をくらったっけ……あれ？
涙が出てきた。

「なに、泣いてんねん」

「悪い。昔の嫌な事を思い出した」

制服の裾で目から出た水滴を拭き取る。フェイトは苦笑い、はやては呆れ顔と反応を見せる。

「とにかく、刹那はソルカで何とかしてくれる。俺達はこれからの事を考えるぞ」

「そうだね」

脱線しかけていた話が戻す中、はやては十梧を凝視していた。

……何を隠しとんのや、このアホンダラ……。

十梧はとても分かりやすい人間だ。

特に嘘をつく直前には動作がある。

フェイトが刹那の容体を尋ねて答えた時、僅かだが彼の右人差し指が揺れた。これを見逃さなかったはやては、顔に出さない程度に不機嫌になっていた。

理由は2つ。

刹那が自分達に隠し事をしていること。
その隠し事を十梧が知っていることだ。

昔から刹那は、自分の厄介事に人を巻き込むのを良しとしないところがあるが、自分達はもう十数年も付き合ってきた幼なじみだ。相談ぐらいはしてほしい。

なのに、知り合ってから期間が短い十梧に打ち明けている。
これに苛立ちを覚えるはやて。

あとで吐かせたる……

そう胸に決意したはやては、今後について話し合っている十梧とフエイトの会話に入ってゆく。

「刹那パパ、大丈夫かな……」

機動六課隊舎。

1階の廊下を歩行中の高町ヴィヴィオが心配な声を上げる。

彼女が赴く先は、父と慕う男性。昨日の戦闘によって負傷した空牙刹那のいる第二研究室。

その両手に果物の入ったバスケットを抱え、お見舞いしに歩く。
ちなみに、本日の訓練は中止。各自、休養をとるように言われている。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

「そうそう、何せ剣帝だしね」

ヴィヴィオの左右。

お見舞いに付き添うコロナとリオが励ましの言葉をかける。それにヴィヴィオは「うん！」と笑顔で答えた。

弾む会話をする3人の後を、赤みがある茶色の髪をツインテールにしている踏崎唯華と、長い背丈と白髪が目立つ南條砂彦が物静かに付いていた。

「……………」

「……………」

2人はある程度の距離を置き、会話をせずに前方を歩くヴィヴィオ達を眺めている。

話す話題がないのもあるが、真の原因は唯華にあった。

「……………なあ」

微妙な空気にしびれを切らした砂彦が唯華に話しかける。が、唯華は聞こえなかったかのように振る舞い、砂彦を見ようともしない。まるで、見えない壁で外との接触を拒んでいるようだ。

ああ……………っ！！クソツタレ……………っ！！

砂彦は心の内で悪態つく。先ほどから何回か声をかけてみたが、すべて無視されている。

段々と苛立ちが募ってくる。

「どうしたの？砂彦君」

チラチラと悟られない盗み見していたコロナが、眉間にしわを寄せ

ている砂彦に気付いた。

「何でもねえよ……」

砂彦のぶっきらぼうな返答に、コロナは不機嫌そうに頬を膨らます。それを見た砂彦も若干ながらコロナを睨む。

「ほらほら。そんな顔をしちゃ駄目だよ」

睨み合う砂彦とコロナの前に両の人差し指を頬に当てて笑う女性が、又ツと割り込んできた。

「「うわっ!?!」」

「あ、そんな反応されると傷つくな」

後ずさりする砂彦とコロナの間に。聖王教会騎士兼シスターであるヴェーネ・フリージアが腰に手を当てて立っていた。

いつの間にか「いやがった……っ!?!」

砂彦は三提督直属特務機動員の一人であり、その実力は管理局でも上位クラス。

魔法もさることながら、身体能力や五感にも自信がある彼だが、今の今までヴェーネの気配を感じることが出来なかった。

「「……いつから後ろに」

「ん」。ヴィヴィオちゃんが、刹那パバくって言った辺りからかな。そ・れ・よ・り・も」

砂彦から隣にいる唯華を見るヴェーネ。視線を向けられた唯華は目を合わさないように顔を背ける。「ムッ」とヴェーネは唸ると唯華の顔を両手でガッチリと掴み、自分の方に向けさせた。

「あつ……………」

「一応、私達は一つ屋根の下で生活してるんだよ。“叶恵ちゃんと鷺祐くん”がいなくても仲良くしないと」

ヴェーネの言葉に砂彦達は疑問符をあげるが、唯華だけは怯える瞳を揺らしていた。

「やっぱり、TKSだったんだね…」

TKSは対人恐怖症（*taijin kyofusho symptom*）の呼称で、恐怖症の一種。

中傷や誹謗によって人間関係に恐れを抱き、社会的接触をも拒み始める精神の病気。

TKSになった人間は、引き籠もりになるケースが多いって聞いたことがあるが、唯華は現にここにいるし、昨日も普通にヴィヴィオ達と話して……………そうか

砂彦はヴェーネの言葉の意味に気付く。

唯華が誰かと話すとき、いや外を歩くときは必ず鷺祐か叶恵が側にいた。

「初めから気になってたんだ。鷺祐君と叶恵ちゃんもなるべく傍に
いることに気を使ってるように見えたし」

「……………うん。2人が……………いると心に余裕ができ、るから……………」

今日、初めて聞いた唯華の声は、今までの強気で流暢な喋り方では
なく。小さく、所々で囁んでしまう弱々しいものだった。

「それにし、ても……………よく、分かったわね……………」

「それは、聖王教会のシスターですから。貴女みたいな人も教会に
来るのよ」

ヴェーネの柔和な笑みに、唯華は少しだけ警戒を解いて微笑した。

「まだ知り合ったばかりだし、私達は信用できないかもしれない。
けど、少しずつでいいの。私達を信じてね」

優しく語りかけてくるヴェーネに、唯華は少しだけ戸惑った後、小
さく頷いた。

その様子にヴィヴィオは唯華の傍まで歩き、その手を取った。

「私、唯華さんに信じてもらえるように頑張ります！…」

嘘のない真っ直ぐな瞳に、握られていた手を軽く握り返し、「……………
うん」っと小さく言った。

「おおおいつ！！唯華あああつ！！…」

静かで和んだ空気をぶち壊す嵐のような大声が、廊下の向こうから響いてきた。皆が声の発する方を見ると、凄まじい形相で走ってくる叶恵と、その後を呆れながらついて行くアインハルトがいた。

「……ヴィヴィオ」

「はい？」

声をかけられ、視線を唯華に戻すヴィヴィオ。

目を合わせた唯華の表情は弱々しさを感ぜさせない、優しい笑みを浮かべていた。

「ありがとう、ね」

「……はい！」

「唯華あああああつ！！！！」

「ああ、もう！！うるさいわね！！」

自分に飛び込んでくる叶恵の頭を片手で掴み、床に叩き付ける。

さっきの脆弱なイメージから一転し、普段通りの唯華に戻っていた。

「痛い……」

「あんたが突っ込んでくるからでしょ」

「いや、寂しがってるのかと思って抱き付こうとしただけだぞ」

「抱き付こうとするな!」

「いたあつ」

床に打ち付けられあかくなつた叶恵の額に、チョップを入れる唯華。再度の痛みに、叶恵は頭を押さえて呻く。

変わりすぎだろ……

砂彦は唯華を横目に見て思う。先程まで子犬のようにビクビクしていた唯華と、今の唯華のギャップに驚嘆している。

TKS（対人恐怖症）。

昔に何があつたかは知らないが、人間を信じる事が出来なくなる程の出来事。

自分がそんな目にあつたら、唯華同様にTKSになつてしまうのか……。

そんな思考を巡らせていると、隣にいたコロナに手の甲を抓られた。

「つう……あんだよ」

「さっきから唯華さんの方ばかり見てる」

「だから、どうしたってえんだ」

「……知らない」

ふいと顔を背けて離れていくコロナ。意味が分からずに抓られた手の甲を撫でる砂彦を、リオはニヤニヤと笑っていた。

「なに笑ってんだよ…」

「だって、ねえ」

「ん？………ねえ」

リオに振られたヴェーネは、少し間を置き、笑顔で砂彦に振った。

「あなた、絶対意味分かってねえだろ」

「分かってるよ 3%ぐらい」

「それを分かってねえって言うんだよ!!」

この人は一体なんなんだ。真剣な一面を見たと思ったら、今は変にボケるし………

砂彦は心底呆れていると、廊下の先に刹那がいる第二研究室のドアが見え始めた。

「そう言えば鷺祐は？」

「驚祐は自主トレすると言ってどっか行ったぞ。刹那さんに、お大事に、と伝えてたぞうだ」

「そう……」

唯華の表情がシユンと寂しげになる。

それを見かねた叶恵は、すぐに行動に移る。

「なんだ、唯華。寂しいのか？よし、待ってる！すぐに連れてきてやる！」

「え、ちよつと叶恵……」

唯華が呼び止める前に、叶恵は全力疾走で遙か後方まで走り去ってしまった。

「行ったり戻ったり、忙しい人ですね」

「……そうね」

アインハルトの言葉に肯定し、苦笑を浮かべる唯華。そして、目的地である第二研究室に辿り着く。ヴィヴィオが近寄ると、ドアは自動に横へとスライド。

「刹那君……」

「なのは……」

ソファの上で、唇が重なるギリギリまで顔と顔の間を狭め、甘い世界を作り出している刹那となのはを目撃。

唯華は急いでヴィヴィオを抱き抱え、自動ドアのセンサーが反応しない位置まで下がらせる。

「……………」

「よく見えなかったけど。刹那パパとなのはママ、何してたの？」

ああ……………この純粹を永久に……………

赤面になりながら、心の中で切に願った唯華だった。

頬を撫でるように優しく吹く風。岩の上で立ち尽くす少年が見上げる空は、暗闇に小さく輝く光が点々と広がっており、壮大な芸術品となっている。

「蒼仁殿」

名を呼ばれた蒼仁が、夜空から視線を変えた先には、腹を重点的に包帯を巻いた上半身裸の秋雨。

その後ろでは、大きく抉れた大地と、白煙を上げる小型の次元航行艦。

周りでは、先ほど知り合った白衣の男性が修理に勤しんでいる。

「起きて大丈夫なのか」

「この状況でいつまでも寝てはいられんさ」

「そっか」

会話が途切れると、蒼仁は再び夜空を眺め始める。秋雨もつられて顔を上に向ける。

「そのバカ2人。何もしてないなら手伝え」

紅色の長髪が夜に映える少女。カリナが工具を片手に近付いてきた。蒼仁は「はいはい」と適当に返事をし、岩から飛び降りる。そして最後に1回だけ遠くで輝く星を一瞥し、カリナの後について行く。

遙か彼方。

自分の故郷（地球）にいる大事な人達を思いながら……

第37話：対人恐怖症（後書き）

どうだったでしょうか？

唯華の対人恐怖症は

ツンデレだけじゃあ要素が足りないな、と思いつけ足した設定です
なんでなったかは、後々に書きます

対人恐怖症の知識はまったく皆無だったんで、あれ？変じゃん、と
気づいてくれた方はお知らせ願いたいです。

さて、次回は久し振りの蒼仁パート

では、また次回まで

第38話：迷

空間転移術。

現在地から目的地に一瞬にして移動できるとても便利な魔法だが、演算が非常に複雑で使いこなせる人間は管理局で確認できる範囲では、手で数えきれる程度しかない。

蒼仁がレベツカの前から逃げることが出来たのは、この空間転移術を秋雨が発動させたからだ。

移動先はカリナの艦が停泊してある荒野。

ここならば、傷付いた秋雨を治療できると践んだのだろう。

だが、現実は違った。

あつたのは絶望。

艦は炎に朽ちて、仲間は凶刃に刻まれた。

アドンも凶刃によって無残な姿になっていた。

カリナは全てを喪った。

蒼仁は凶刃の主。

死んだはずの叶恵の兄である妃山真武との死闘を始めた。

実力は真武の方が格上だったが、（オメガ）ドライブの超再生という恩恵により死ぬことない体。加えて、フェイトとティアナの両名の参戦でギリギリ互角に渡り合うことができた。

ここまで

蒼仁の記憶はここから刃物で切断されたかのように途切れていた。次に目覚めた時は、ヘヴィバッドから遠く離れた次元の海で、ダークメシアの追っ手との応戦をする、見知らぬ次元航行艦の中だった。

顔にベツタリとした濡れた感触と、鼻に漂ってくる獣臭さに蒼仁の意識が覚醒した。

瞼をゆっくり開けると、牛を毛むくじやらにしたような動物が、ハッハッと舌を出しながら蒼仁の体の上を跨っていた。

「うおおおおっ?!?!?」

驚きに大声を上げ、牛らしき動物から起き上がった状態で離れる。相手は興味が削がれたのか、蒼仁に尻を向けて歩き出した。

「……………はあ」

ホッと胸をなで下ろした蒼仁。

辺りは見渡す限りの草原で、建物や道路などの人工物が一切ない大自然。

不時着した次元航行艦だけが現代感を醸し出す。

あの後、ダークメシアの追っ手を撃墜したが、艦のダメージも大きく、航行不能。近くの次元世界に吸い寄せられるように墜ちていった。
よく死ななかつたなあ、とつくづく思う。

「洗わねーと……」

顔に付着している粘液の強烈な臭いに眉をひそめ、蒼仁は立ち上がり近くに流れていた穏やかな小川まで歩く。川は透明なほどに澄んでいて、水底の小石がよく見える。

手で掬った水は眠気を覚ますのもってこいの水温で、顔を洗っていると、蒼仁の頭に居座っていた睡魔がどこかへ消えた。

「ふう……………」

一息ついて、水面に映る自分の顔を見る。

相変わらずの平凡と評される顔立ちだ。

良くも悪くもなく、誰に聞いても普通と答えるだろう。その代わりに髪が、下敷きを擦って発生させた静電気を当てたように逆立っていた。

すんげえー寝癖

派手に爆発した髪を見て、一々、手で水を掬うのは面倒と考えた蒼仁は、すうーっと息を吸い込み、顔を小川に突っ込んだ。そして、水中で藻類のように揺れている髪を両手で荒々しく掻き回す。肺が酸素を欲しがるのをめどに、蒼仁は小川から顔を上げる。ポタポタと落ちる水滴が川に波紋を生む。

こんなもんか……

頭をブンブンと犬のように振り、水を切った蒼仁は、再び水面を覗き込んだ。

何じゃこりゃ……

周りの髪はしっとり濡れて真っ直ぐに下を向くストレートであるにも関わらず、頭の頂上に生える1本は重力に逆らってピヨンと跳ねていた。

アホ毛のような寝癖は、人差し指で突つつくと左右にゆさゆさ揺れる。

直すのが面倒になり、向かいで小川の水を飲んでいた鳥が羽ばたいていくのを目で追いかける。

鳥が翔る空には故郷、地球に似た清々しい青さがあった。

違うと言えば、燦々と日光を降り注ぐ太陽が紅と蒼の2つあることだけだ。

「……叶恵」

不意に口から出た幼なじみの名。

それに連なって頭に真武の顔が浮かぶ。

7年前

叶恵の両親が勤め、蒼仁の弟が入院していた病院で火事が起こった。蒼仁と叶恵を除く、病院で働く医師や看護婦、入院患者とその見舞いに来た人、全員が焼け死んでしまった。

どんなに調査しても、出火原因が分からず

一時、毎日のようにニュースに流れていた。

が、時代の流れはそんな事件を飲み込んで進み。1週間ぐらいには人々の記憶から忘れ去られていた。

人は自分に関係のない事は忘れてゆく動物だ。覚えていたとしても、霞のように朧気である。

「……………くそ」

悪態つく蒼仁は、落ちている小石を手にとって小川に投げつけた。

小石はバチャンツと音を立て、川の底に沈んでゆく。

聞けばよかった。

闘わないで、問い詰めるべきだった。

7年前のすべてを。

“この自分の原点を”

心を悶々とさせ、蒼仁は立ち上がり踵を返す。

その足元には淡く光る黒銀の粒子が漂い消えた。

傷だらけの装甲の次元航行艦の医療室。

白の羽毛のベッドで眠りにつく少女の隣。

イスに座って腕を組む秋雨の姿があった。

睨むように細くする目の先。

紫色のボサボサとした髪と白衣の科学者らしい見て呉れ。顔には薄

い笑みを浮かべ、眠る少女のカルテを見る男性がいた。

秋雨は男性の名を知っていた。

6年前、自らが造りだした12人の戦闘機人と自立型戦闘兵器ガジ

エット・ドローンを駆使し、管理局本部を襲撃。

その際に誘拐した聖王オリヴィエのクローンとレリックを利用し、巨大飛行戦艦である聖王のゆりかごを永い眠りから目覚めさせ、ミッドチルダを火の海にしようとした張本人。

JS事件 首謀者

ジェイル・スカリエッティ

消失した世界、アルハザードの技術で最高評議会の手で生み出された人造生命体。

コードネームを無限の欲望

アンジュミッド・デザイア

次元犯罪である生体改造と人造生命体の研究に着手しており、プロジェクトFの基礎理論の設立者。生みの親と言ってもいい。

JS事件後は、4人の戦闘機人と別々の軌道拘留所に収監された。

これは秋雨が次元世界を股に掛けて旅する前に、祖父である櫛灘風雅のIDを使用して管理局本部のメインコンピューターから得られた情報。

興味があつて調べたが、こんな形で会うことになるとは……

世はまさに奇想天外。

軌道拘留所に収監されている人物に出会うなんて、どう考えたって予想できない。

更にその脱獄者に助けてもらうなんて、天にいるお釈迦様だって仰天する。

「……大丈夫。その娘には何もしないさ」

秋雨の視線に気付いたスカリエッティは、カルテから目を離さずに

言った。

「信用性がない」

「まあ、確かに。君と私は昨日会ったばかりだからね」

信用性のない人間を信じられるわけがない。ましてや相手は次元犯罪者。

少しでも隙を見せたならば、なにをされるか分かったものじゃない。

「でも、確信を持って言っておこう。私は冥府の炎王には何もしない……………正確には何もできないんでね」

「何もできないだ……………まて。その前になんと言った!？」

秋雨は椅子からガタツと急に立ち上がり、耳を疑うように訊いた。
スカリエツティはその様子を楽しむように口を開いた。

「冥府の炎王、と言ったのだが、問題があるかな？」

スカリエツティはハッキリと“冥府の炎王”と発し、聞き違いではなかったことに、秋雨はまた椅子に腰を下ろす。

「大有りだ。冥府の炎王は古代ベルカ・ガレアの王だぞ。何百年前の人物だと……………」

「いえ、その娘は本物の冥府の炎王イクスヴェリアよ」

秋雨の言葉を遮ったのは、医療室の壊れたドアの横にいる紅蓮のよ
うな長髪の少女カリナ。

その手には秋雨がカジノ地下の研究室から持ってきたレポートが握られていた。

「あんたが持つてきたレポート。役に立ったわ」

「カリナ殿……」

普段と至って変わらぬカリナの様子に、秋雨は懸念する。

精神的にまだ不安定な十代の少女が一夜にして仲間全員を殺され、平然として入れるわけがない。心がズタズタで泣きたいはずなのに

彼女は顔色一つ変えない。

寧ろ、目的を達成しなければならぬ、責任感が感じられる。

秋雨はその目的が何かとは聞かない。

まだ聞いてはならない

そんな気がしたからだ。

「ジエイル・スカリエツィ。あなたの助けには感謝するわ」

「いやいや、人間としてやるべき……」

「嘯いてんじゃないわよ。目的は蒼仁なんですよ」

感謝の意を示す態度から一転、無作法な口調になるカリナ。

「クククッ……」

冷やかな視線を送ってくるカリナにスカリエッツィは、正解と言いたげに両端の口角を釣り上げ、のどを鳴らして笑う。

アタン・テラスで、ダークメシアの頭領であるレベッカ・シッケザールと戦闘。

艦で上空から眺めていたスカリエッツィは、どんなに深く傷つこうがすぐに再生する蒼仁に興味を引かれていた。

そして6年間、軌道留置所で鎮まっていた研究者の性に火をつけたのだ。

「似た事象は何度も見たことはあるが、あの再生能力を越すものはなかった。……早く調査（解剖）したいものだよ」

「あら、残念ね。

あんたはここで死ぬから」

カリナはそう告げ、白衣を翻して腰のホルダーから銃を抜き出し、スカリエッツィの眉間に突き付けた。

「……へえ」

銃口を向けられたスカリエッツィは、恐れた様子もなく、笑みを崩さずにカリナを真っ直ぐ目で捉える。

「撃てるのかい？」

「馬鹿にしないで」

「なら、震えるこの手はなんだい？」

スカリエッツィは銃口の先がズレない程度に、カリナの手を握った。

その手は小刻みに震えている。

「カリナ殿、止めておいたほうがいいぞ。その男を殺せば、彼女等が許さないらしい」

秋雨の言葉にカリナは頭だけ後ろを向いた。

視界に入ったのは、肘から出ているエネルギー刃をカリナの首に添える紫色短髪の女性。

その背後には、巨大なブーメランを両手に投擲姿勢をとり、なにも読みとれない瞳でカリナの動きを窺う桃色長髪の女性。

スカリエッティが造った戦闘機人、そして娘であるNo.3トールとNo.7セツテである。

「ドクターに手を出してみろ。一瞬で首が飛ぶぞ」

怒気を孕ませ忠告するトールは、カリナの首筋に添えていたインパルスブレードを少しずらし、薄皮一枚を切った。

カリナはしばらくトールを睨み合った後、諦めたように銃をホルダーにしまった。

それを確認したトールとセツテも、各々の武器をおろす。

「賢明な判断だよ」

「いつか鉛玉をぶち込んでやるわよ」

そう交わすと、スカリエッティは椅子から立ち上がり、戦闘機人2人を連れて医療室から出て行く。

3人の足音が聞こえなくなったと同時に、秋雨は大きくため息を吐いた。

「カリナ殿。無茶をなさるな」

「無茶してないわよ。それよりあのバカは？外にいなかったんだけど」

「蒼仁殿？こつちに来ておらんが……説明を頼もうか」

秋雨が顎指したのは、冥府の炎王イクスヴェリアと呼ばれる少女。すると、カリナは手に持っていたボロボロになっていたレポート復元したものを秋雨に放り投げた。受け取ったレポートを読もうとする秋雨の眼前に、カリナが止めるように人差し指を立てる。

「それを見たら、最後まで付き合ってもらっけど……じゃなきゃ」

カリナは白衣を揺らし、腰のホルダーに納めている銃をちらつかせる。

秋雨は首を縦に振り、復元されたレポートに目をやる。

『聖王の素体』

レポートNo.57

これまで生み出された素体の中で最高峰と呼ぶに相応しい被験体

『code026デイル』

彼女はデータをプログラムに書き写す事によって、そのデータの人間の能力、魔力、技術を習得することができる。

皆、デームに確かな自信を持っていた。
デームも言うことを従順に従ってくれたので、実験は成功すると思えた。

だが、最終段階である聖王シユリアの魂の欠片の接触到デームの体は耐えきれず、スラッグリストになった。

このレポートを書いている時には、既に私以外の研究員が全員が殺されている。

私も恐らくこの後、デームに殺されるであろう。

デームをこのような結果にしたのは、彼女の好意を利用した私のせいであるからだ。

もし、この場所を見つけた者に私の推測を残す。

デームと同じ能力を持った素体を生み出す事ができたのならば

古代ベルカの王

冥王イクスヴェリア

聖王オリヴィエ

霸王イングヴァルト

この3人のデータを加える事によって、シユリアの魂に耐えうる体になる可能性がある。

そうなれば、聖王シユリアは復活し

この腐った世界を変えてくれるだろう。

そう信じて、私はこの場で命を散らす

これが私の貫いてきた信念だから

著者

アルバス・デイルミス

「……分からぬ単語ばかりだが、分かったこともあるな」

レポートを読み終えた秋雨は、少女の橙色の髪を眺めて言った。
もし、レポートに書いていることが本当ならば

この少女は真正正銘の

冥府の炎王イクスヴェリアである。

「すぐに信じるとは言わないわ。どうせイヤでもわかるから」

「大丈夫だ。カリナ殿はスカリエッティよりは信用できる」

「あんなのと比べてんじやないわよ……」

心の底から嫌悪するような顔をするカリナ。

秋雨も同感して、うんうんと頷いた。

誰でも狂科学者と比べられたくはない。
マッドサイエンティスト

だが、2人は知らない。

対抗できそうなドSツンツン髪科学者が、管理局機動六課の食堂で砂糖山盛りのコーヒーを飲んでいることを

その頃、蒼仁は

「……………」

道に迷っていた

第38話：迷（後書き）

1ヶ月ぶりの我暇人です

皆さんはテイルズオブエクシリアのPVを見ましたか？

え、見てない？

そんな奴はあ、今すぐにパソコンに電源つけて、テイルズチャンネルかようつべで見やがれえ（若本風）

とりあえず、見てください

マジボツきもんですからっ！！

アルヴィンさんがハンパなく格好良すぎる！！

私、興奮しまくって
友達に

「お前、気持ち悪い」

なんて言われましたから！！

蔑むような眼差しでっ！！

だが、それでも構わない！！

私はテイルズが好きだ！！

もちろん、なのはも好きですけど

最後に

忘れかけてた称号付け

雨井蒼仁

【迷える少年】

・心で迷い

そして、道でも迷う。

超方向音痴な少年

カリナ

【感情を抑える少女】

・仲間の死への悲しみの感情を殺し、前へと進んでゆく……

なんか、あまりいいのが思い付かない……

では、また次回まで

第39話：迷、迷

「どこだよ……」

困った表情をしながら蒼仁は森の中をさまよっていた。

小川で顔を洗った後

艦に戻ろうとしたのだが、どういうことが全く逆の方向に進み、いつの間にか森へと入っていた。

蒼仁は超がつくほどの方向音痴だ。

ここしばらくは、レディアントと言うガイドマシンがあったので方向音痴の自覚が薄れてしまっていたのだが、ヘヴィバッドを使用した（オメガ）ドライブの影響なのか、現在は一言も喋りはしない。

よって

レアスキル稀少技能？超方向音痴が発動してしまったのである。

早く帰らねーと、カリナの奴がうるせーんだよなあ……

紅髪少女に誹謗を吐かれるのは非常に不愉快なので、さっさと森から出たい。そうは思うが、どこへ進めばいいのかサッパリ見当がつかない。

そんな道標のない状況下を蒼仁はひたすら歩くが、いつこうに出口が見つからず。逆にドンドンと奥に進んでゆく。

森の奥は所々に聳える巨木の枝葉によって、太陽の光が遮断されており、薄気味悪い暗さを作り出していた。

生い茂る草も膝小僧から腰の高さまで伸び、歩くのが困難になってきた。

「はぁ……………」

蒼仁は草村からひょっこりと出ている大きな岩の上に登り、草だらけになった足を幌うとその場に座り込んだ。

日光の差し込まない天を見上げると、巨木の枝が隙間なくびっしりと張り巡らされている。

まさに自然の天井と言える。

しばらく見つめてみると、蒼仁はあることを思い付く。

登って上から出口を探せばいいんじゃないかね？

そんな案が蒼仁の頭の中に浮かび上がり、早速、岩から近くにあった枝に飛び移った。

枝はかなりの太さと強度で、15歳の平均より少ない蒼仁程度の体重ならそう簡単に折れることはない。

蒼仁は次々に枝から枝へと上に登っていき、天井との距離が1メートルまで縮まったところで、乗っていた枝で軽くジャンプする。

そして枝に体重をかけて着地し、湾曲にしならせる。

あとは、限界までしなった枝が戻る反動に合わせて跳ぶだけだった。

あと一息の蒼仁の耳にヒュンツと空を切る鋭い音が入った。

なんだ？、と蒼仁が下を見た瞬間に、ガシツと鞭のような太い縄が足に絡んでいた。

「な……………あつー!」

強い力に引つ張られ、蒼仁は5メートルの位置にある枝から地面に叩き落とされた。叩き落とされた。叩きつけられた衝撃で背骨がミシミシ、と軋む。再び足を確認すると、絡んでいたのが緑色の蔓ということが分かった。

どうゆうことだ!?

事態が飲み込めない蒼仁はとりあえず立ち上がるつもりだが、蔓にグイッと足を引つ張られ体勢を崩す。

このまま引きずられてしまふ、と判断した蒼仁は最寄りの木にしがみつく。

「ぐうっ!!」

抵抗する蒼仁に対抗するかのように、蔓の力が増してゆく。

蒼仁は鋭利な何か落ちてないか探す。すると、左前に手を伸ばせば届くような角張った石があった。

やべえ……

だが、腕は限界が近づいており、どちらか片方を木から放せば、すぐに引きずられてしまう。

猶予は片手を放してから蔓が引つ張るまでの一瞬……

早く、スムーズに……

脳内シュミレーションにて練習した蒼仁は呼吸を整え、素早くに左手を石へと伸ばした。
右手にかかる負担が2倍……いや4倍もかかり、拮抗することなく木から引っ剥がされた。

「つう……………!!」

遊園地にある絶叫系アトラクションのごとく速度で蔓に引かれていく蒼仁。その左手には脳内シュミレーションで描いたように、角張った石が握られていた。

あと、は……

蒼仁は腹筋に力を入れて体を起こし、蔓が絡まれている足目掛けて握っている石で叩く。

蔓は案外もろく、繊維は斬れやすい。

ブチッ

蔓が完全に千切れ、余った勢いで蒼仁が転がってゆき、巨木にぶつかって止まった。

「つう……………」

蒼仁は痛みに呻きながら、打撲気味の体を立ち上がらせる。

千切られた蔓は、しばらく様子を見るように場に留まった後、森の奥へと姿を消していった。

「まったく、何だったんだよ……」

体中についた土と草を取りながら、愚痴をこぼす。

《この世界の原生植物でしょうか》

「肉食植物つか、そんな映画みたいな奴いるわけねーよ」《いやいや、魔法が存在しているんですから、可能性はありますよ》

「あ、そっかぁ……っておい」

蒼仁は、あまりにも自然に会話をしてきた銀色の珠、レディアントをポケットから取り出した。

《good morning My master》

「何がgood morningだポケ腐れデバイス。いつから起きてやがったんだよ」

《マスターが蔓に捕まえられたあたりですかね》

「マスターが危機にあっつてんなら助けろや!!」

《いやぁ、なにぶん低血压なんで。朝がしんどいです》

「デバイスに血压なんてもんがあるものかぁ!!」

《ほらほら、そんな叫ぶと近所に迷惑ですよ》

「森に近所もクソもねえし、第一に叫ばせてんのはテメエだろうが
あああつー!」

連続に繰り返されるボケにつつこんだ蒼仁は、ハアハア、と肩から
息を吸う。

《はい、深呼吸、深呼吸》

「…………お前、性格変わってねえか？」

《そうですねか？まあ、マスターが（オメガ）ドライブを使ったお
かげで、記憶メモリーのバグが修復されたせいかもしれません》

記憶メモリーのバグ？

蒼仁はレディアントから初めて耳にする話に頭を傾げる。

「そんな話は1度も聞いたことないぞ」

《そうでしたね。それすら忘れてたんでしょうか……………それより》

レディアントが言葉を紡ぐ前に、蒼仁の背後でガサツと草木が揺れ
た音が聞こえた。

シューツ…………シューツ…

鼓膜を揺らす獣の声。

微かにだが、足音も聞こえる。まるで、獲物を後ろから回り込んで

襲おうとするようだ。

蒼仁の額から冷や汗が流れ、頬を伝い顎から落ちていく。

汗の水滴は重力に従って、真っ直ぐに大地に落ちて染み込んでいく。

来る………っ！！

直感的に背後にいる獣の動きを感じ取った蒼仁は、咄嗟に体を屈ませる。

頭上でゴウツと空振りの音を聞き、折り曲げていた膝のバネを利用して前方に姿勢を低くしたまま大きく跳んだ。距離を十分にとり、蒼仁は振り返って背後にいた獣を目にする。獣は一見、熊にも見える姿だが、その背中からは複数の蔓が触手のようにウニョウニョと動いている。

よく見ると、1本だけ先端がない触手があると、なれば……

「さっきの蔓はコイツの仕業か……」

《肉食植物ではなかったのですか。……残念です》

「どっちにしても肉食だけだな……アント」

《了解です》

レディアントから発生した光が蒼仁を包み、バリアジャケットを着。

右手には銀色の珠が装飾された杖型デバイス。

「さて、コイツは食えるかな」

《私はステーキがいいです。もちろんミディアムで》

「……キャラ、変わりすぎだろ」

嘆息を一つ零し、蒼仁は腕を振り上げる触手熊に向かって駆け出した。

場所は墜ちた次元航行艦の食堂

秋雨は調理場にてヘヴィバッドで購入したインスタントラーメンを作ろうとしていた。

コンロは魔力を注いで使う【魔力式コンロ】が設置されており、水も近くに流れている小川から汲み取ってきたものがある。

ないと言え、ラーメンに盛り付けるトッピングする具だ。

脱獄したスカリエツティ達が奪ってきた整備途中の艦なのだから、食糧はろくに積んでおらず。

あるのは、味があまりしない携帯食料だけだった。

「ふむふむ」

鍋の水が沸騰するまでの間に、秋雨はパッケージの裏側の説明書きを呼んでおく。

中身はスープの素となる粉末が付いてある麺のみで、沸騰したお湯の中に投入して解すだけの簡単な作り方だ。

本当はちゃんとした店のラーメンを食べたいとこだが、自然に囲まれた未開の次元世界に墜ちてしまったので贅沢は言っていられない。

しばらくすると、コンロの火で熱されていた水がぐつぐつと沸騰してきた。

秋雨はインスタントラーメンの袋を開け、中身をお湯の中に投下した。

ポロポロポロポロ……

「……………(orz)」

出てきたのは粉碎したインスタントラーメンの麺。どうやら、ヘヴィバッドのカジノでの戦闘時に砕けてしまったらしい。

「一生の不覚……腹を切るしかあるまい」

《ラーメンごときで自害しようとしないうでください》

羽織を脱ぎ、どこからか取り出した小太刀の切っ先を腹に向ける秋雨を、首にかけられている勾玉、サクラフブキが止める。

「ラーメンごときではない！！この世にラーメンが存在していなければ、世界の99.99999999%の人々の生きる活力が失われてしまうぞ！！そもそも、ラーメンと言うものは水戸黄門で有名な常陸国水戸藩第2代藩主徳川光圀が食べたことによって日本に広がり……………」

小太刀を振り回し、ラーメンの歴史について熱く語り始めた秋雨。こうなったら小一時間は延々とラーメンに関する話を続ける。

（1時間後）

「……近畿地方の一部や中国・四国地方では白濁した豚骨スープに醤油のタレを加えた出汁を使う豚骨醤油ラーメンと言うものがある。九州地方の豚骨ラーメンでも隠し味程度に使うが、豚骨醤油ラーメンは通常の白っぽいスープとは違って茶褐色と一目瞭然だ。さらに……」

ラーメンの歴史について簡単に説明した秋雨は、続いて日本各地にあるラーメンについて語り始めた。

北は北海道から南は九州まで、様々なラーメンの具、出汁、タレ、麺などを詳しく説明してくる。

「北海道には牛乳カレー納豆ラーメンと言った一風変わったラーメンも……」

「……ここに……いたのね……」

秋雨のラーメン熱弁を遮ったのは、少し息切れしているカリナであった。

秋雨は焦っているカリナの様子にラーメンから頭を離した。

「どっしたのだ？」

「あのマッドサイエンティスト……転送ボットの部品を幾つか持って消えやがったのよ……」

逃げたのか？

いや、だったらもっと早くにそうしているはずだ。何か目的があるのか……

秋雨はスカリエツティの今までの経緯や発言を思い返すと、ある答えに行き着く。

「……蒼仁殿か！」

気付いた秋雨は調理場を飛び出て、廊下を疾風のごとく駆け出す。スカリエツティが自分達を助けたのは蒼仁の能力が目当てだったからだ。

誘拐するなど、至極当然のこと。

しかも蒼仁はレディアントが起動しないと断っていた。

つまり、抵抗する術がない。

油断した……っ！

自身の注意力不足に悔やみながらも、秋雨は甲板へと着く。薄暗い艦内から太陽の眩しい外に出たので、反射的に目を細めてしまう。

《アキ、上です！！》

「っ！」

サクラフブキの声と頭上から感じられる気配に、右へと跳ぶ秋雨の頬を木製の槍が掠った。

そして空を見上げれば、最初の1本に続くように、次々と槍が秋雨に降りかかるうとしている。

秋雨は首にかけていたサクラフブキを、勾玉の待機状態から艶やかな桜色の刀身を持つ日本刀にし、横に体を捻らせて大きく振りかぶる。

「破空風刃撃！」

体の回転も加えて風払われた刀からは、風圧の刃が打ち放たれ降下してくる槍達を切り裂き、一掃する。

「さて、と」

細切れになった木屑の雨の中、秋雨は跳躍し、甲板から地上へと降り立った。

地上にはこの世界の住民らしき男達が艦の周りを囲んでいた。

色鮮やかな民芸衣装を着用し、各々に剣やら斧を持ち構え、秋雨に殺気を込めた視線を送っている。

おそらく、ここ一帯の地域は男達のテリトリー。

そのテリトリーに、勝手に入ってきた秋雨達を追い出そうとしているのだらう。

秋雨は無用な戦いは避けたいので、サクラフブキを地面に突き立て、戦闘の意思は無いことを男達に伝える。

すると、1人の白い髭を生やした初老の男が1歩に前に出た。

「異界からの来訪者よ。汝は何故にこの地に降り立った」

「不慮の事故でな。ぬしらの領地に不法法に踏み入れた事には詫びる。

だが、私はぬしらに危害は加えるつもりは毛頭もないのだ」

いち早くスカリエツティに追い付きたい気持ちを抑えながら、謝罪の言葉を述べた秋雨。

初老の男は黙ったまま、右手を上げた。

それが何かの号令なのか、数名の男が懐から木の枝らしきものを取り出し、地面に投げつけた。

「来訪者よ……弁解はもう遅い」

初老のその言葉と同時に地面が盛り上がり、先ほど降り注いでできた木製の槍が、マシンガンのように空高く掃射されていく。

それを皮切りに、近接系の武器を持った男達が秋雨に向かって走り出した。

「ちいっ」

舌打ちをうち、秋雨は突き立てていたサクラフブキを再び手に取り、目の前に現れた男を斬り伏せた。

もちろん非殺傷設定で、男は死ぬことなく気絶しているだけだ。

しかし、男達が扱う剣や斧は敵を殺すために作られた武器。

バリアジャケットを装着していない秋雨は、致命傷をくらえば即、死につながる。

「「「うおおつ!!」「」」」

雄叫びを上げ、四方から刺突の構えで走ってくる4人の男。秋雨は罅ぜりあっていた男の顔面を蹴り飛ばし、サクラフブキを一旦、鞘に納める。

「真空………烈陣!!」

振り抜いたサクラフブキから乱れ飛ぶ真空波が、秋雨の周りにいた男達を切り刻んでいく。

相手の攻撃を受ける前に全滅させる。

単純かつ明快。

いち早くスカリエッティに追い付かねばならない秋雨は、一騎当千の勢いで男達を薙ぎ倒していく。

気付けば、この場に立っているのは秋雨と目を見開いて驚く初老の男だけとなった。

「若くして、この力……」

ブルブルと体を震わす初老の男の隣を、サクラフブキを待機状態に戻した秋雨が駆け抜けた。

「喰われる………喰われてしまうぞ………」

初老の男がそう呟いたのを秋雨は耳にした。

喰われる………?

何のことは分からないが、スカリエツティを追い掛けなければなら
ないので、あまり気にしていられないことだ。

秋雨はそう思い、走る足を早めた

第39話：迷、迷（後書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

どうでしたでしょうか？

蒼仁はまた迷っちゃってます。

それが、宿命なのだから……………（笑）

そう言えば、皆さんはテイルズオブエクシリアのPV第3弾、見ましたか？

前回に続き、めっちゃ興奮しました

特にジュードと刀を持った男（ア・ジュール？）との戦闘シーンなんか、もう……………早く9月なんねーかなあっ！

この押さえきれない衝動に、ファンタジアの3周目をやっております（笑）

692

最後に称号コーナー

榊灘 秋雨

【ラーメンマスター】

ラーメンに対する情熱と知識に右に出る者はいない……………

……………微妙っすネ

では、また次回まで

第40話：迷、迷、迷。（前書き）

こんにちは！我暇人です

1ヶ月ぶりの投稿

遅れて、スンマセン（泣）

第40話：迷、迷、迷。

巨木によって光が差し込まない深淵の森の中

縦横無尽に振るわれる爪と触手によって、近くに生えている巨木は軽々と切り裂かれ、次々と倒れていく。

猛攻の矛先にいる蒼仁は、触手熊（仮）の圧倒的な手数に回避と防御に集中していた。

速いし、重い！

触手熊（仮）の一撃、一撃が巨大なハンマーで叩かれるような力だ。それを実証するかのように、レディアントで弾かれた触手が巨大を貫通し、空洞を作り出す。

もし、生身でアレをくらったら……

Hit! Death……

そう考えると絶対当たるわけにはいかなくなる。

蒼仁は更に集中力を高め、触手熊（仮）の攻撃を避けていく。

だが、脚のバネを使って跳んだり、体を捻ったりする度に、蒼仁の体力は確実に奪われていく。

魔法は炎熱系で一步間違えれば森全体を火事にしてしまう、BDSだって発動するまでのタイムラグで殺られる。

ならば、勝負を仕掛けるのは体力にまだ余裕がある今。

迫る2本の触手を横払いの蹴りで弾き、振り下ろされている腕を右へとステップし回避。

そのまま地面に爪が突き刺さった腕の上を駆け上り、触手熊（仮）の頭に、レディアントからなす全身全霊の力を込めた打撃をお見舞いする。

「ギャウツッ！」

打撃をモロに受けた触手熊（仮）は怯み、1歩後退する。もちろん、生みだしたチャンスが無駄にするわけがない。

「BDS！（ベーター）ドライブ！」

《了解》

触手熊（仮）が怯んだ事で、隙のない猛襲も止む。

蒼仁はBDSで肉体強化に特化された（ベーター）ドライブを使用。

強化された脚で大地を蹴り出し、白銀に染まった髪を揺らしながら触手熊（仮）の顔を殴り飛ばす。

殴られた触手熊（仮）は木を薙ぎ倒しながら、奥へと吹き飛んでいった。

「ふう……………」

BDSの駆動が終了し、髪が黒に戻った蒼仁は、額にかいた汗を拭いて一息つく。

レディアントも杖から待機状態の銀色の珠になって、蒼仁の手に収まる。

「……………殺しちゃったか」

蒼仁が見据える先には、倒れている木々の向こうに、ピクリとも動かなくなつた触手熊（仮）。

頭からは血が流れ、地面に赤い水溜まりを作る。

《ああゝあ。動物愛護団体に訴えられても知りませんよ》

「その時は誠意を込めて土下座してやるさ」

レディアントの軽口にそう答えた蒼仁は、枝葉の天井を見上げる。その表情には怒りが見える。強く握りしめている手からは血が零れる。

爪をわざと立て、皮膚を裂いたのだ。

まるで、自らに戒めを与えるかのよう……

「……………行くか」

《何処にですか？まさか、また適当に歩いていれば出口に着くなどと、方向音痴丸出しの考え方をしてるわけじゃないですよね？》

「んぐつ！？」

痛いところを突かれ、蒼仁は言葉を詰まらせる。

確かに何の目印もなく突き進むのは危険極まりない。もしかしたら、また触手熊（仮）のような原生生物に襲われてしまつかもしれない。そうなると蒼仁の体力が保たない。

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

《そうですね……森に入った時に、何かめばしい物を見ませんでしたか？》

「めばしい物？んう」

蒼仁を腕を組み、森に入る直前の光景を思い出していた。すると、視界の端に朝に顔を洗った小川の上流と思われる大きめの川が映っていた。

「川……森の中に続く川があった」

《では、川を探しましょう。マスター、もう一度（ベーター）ドライブを使いますよ》

「え、なんで？」

《いいから、いいから》

レディアントは蒼仁の了承関係なしに（ベーター）ドライブを再び起動する。

「んで？何すればいいんだよ」

《目をつむり、意識を聴覚に集中してください》

蒼仁はレディアントに言われるがままに、目を閉じ、周囲の音に耳を傾ける。

そよぐ風に揺れる草

遠くからは動物の鳴き声
葉が地面に落ちていく音

次第に蒼仁の耳は、どんなに小さな音も拾い上げていく。

アリの足音

生物の心音

植物の呼吸

普通では聞こえる筈のない音が、スランブル交差点のド真ん中にいるような雑音として耳に入り込む。

それも、どの方角、どれほどの距離から発せられているかも分かった。

んだ……………これ？

奇妙な感覚に戸惑いながらも、蒼仁は聴覚への集中を途切れさせない。

……………ポチャン……………

混雑した音の中

蒼仁は確かに水が弾ける音を聞き分けた。

場所は……………

ここから後ろ斜め右

距離は約1キロ

蒼仁はゆっくりと目を開き、川があると思われる方向を見る。

「……………これって」

《（ベーター）ドライブの特性です。このドライブはBDSの中で最も肉体と五感の強化に優れているのです。カリナからは聞いてないんですか？》

「いやあ……………聞こうとは思ってたんだけどさ……………ちょっと、聞き辛いつうか……………」

蒼仁は頭を掻きながら、そう答える。

この世界に墜ちてから、聞こうとは思っていたのだが、仲間を一夜で殺されたカリナになんて話しかければ良いのか分からなかった。

「アドンは父親みたいな人だったから、そんな大事な人を亡くした喪失感は大きい……………だから」

《悲しみが分からない俺だと、余計に傷つけてしまいかもしれない……………ですか？》

口にする前に言い当てられ、蒼仁は苦笑を浮かべる。ヘヴィバッドで子供の墓の前で不意に呟いた言葉。

信じてもらえる訳ないか、と思っていたが

「あの言葉、信じてたのかよ」

マスター
《主を信じられなければ、デバイスなんてやってられませんからね。まあ、頼りなかったら直ぐに切り捨てますがね》

機械にしては人間らしい発言だと思った時に、蒼仁は秋雨に聞いた話を思い出す。デバイスのAIは人間と同じ様に学習し、成長していくらしい。

駆動時間が長いものになると、人間に似た思考を持つデバイスもあるらしい。

秋雨のデバイス、サクラフブキも祖父から受け継いでおり、歳は人間に例えると70ぐらいらしい。

余談だが、つい「じゃあ、フブキは婆さんだな」と言ってしまい、蒼仁はサクラフブキに1時間ぐらいこっぴどく説教された。

話を戻そう。

そうなるとレディアントは長い年月を過ごしてきた事になる。

川で拾った当時は、決められた台詞しか喋れないロボットのようだったのを蒼仁は覚えている。

やはり、森で言っていた記憶メモリーが関係しているのか。

まあ、今、考えるようなことじゃないな

《感情の欠落……昔に精神的なダメージを負ったことは？》

「たぶん7年前」

《あやふやですね》

「まあ、そりゃあ……」

口を開いたまま静止する蒼仁。目を上にやって、今朝に突如として現れたアホ毛を見詰める。

喉から出掛かっている言葉を出そうか、出さないかで悩んでいる。

そして、決心がついたのか言葉を紡いだ。

「俺、7年前に記憶喪失になったから」

襲いかかってきた謎の民族を倒した秋雨は、探索魔法でスカリエツ
ティが狙っている蒼仁の魔力反応を追っていた。
艦の近くにあった小川を越え、そこから延々と続く草原を駆け抜ける。

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

走る

はし……

「どこまで行っておるのだあぁ!!」

あれこれ10キロは全力で走り続けている秋雨だが、一向に蒼仁の姿が見えない。

流石に疲れ、秋雨は徐々に速度を落として止まる。

「ゼハア……ゼハア……蒼仁殿はこっちに何の用があったのだから……」

いえ、用があったんじゃないありません。ただ単に迷っただけです。

そんな事なぞ微塵も知らない秋雨は呼吸を整え、蒼仁の魔力が感じられる方へまた走り出した。

（20分後）

「……………ここか」

汗を拭う秋雨の目の前には、横幅3メートルはある巨木が無数に生え並ぶ大森林だった。

樹齡はざっと見て100歳ぐらいである。

奥は生い茂る雑木で暗くなっており、森の中の様子はあまり覗けない。

「ふむ、蒼仁殿は植物観察が好きなのだろうか？」

ただの超方向音痴なだけです。

《ただの方向音痴じゃ……………いや、40キロも離れた場所まで迷う人がいるわけじゃないですか》

いいえ、マジで迷ったんです。40キロも……………

雨井蒼仁と言う少年をある意味侮っている秋雨とサクララブキ。

「それにしても、喉が乾いたな」

40キロも走った秋雨は多少ながらも汗をかき、体は水を失っていた。

人間の体は半分以上が水分で出来ている。

少し、失っただけでも運動に支障がでることもある。

ましてや、ここは異境の世界。
いつどんな事が起こるか分からないのだ。
もしもの事態には万全な状態で望みたい。

キョロキョロと辺りを見渡してみると、森に続いている川が見えた。

近付いて水面を覗く。

水は透き通っており、見た目からは体に有害となるものとは思えない。

そう判断した秋雨は、水に手を浸けた。

「おお………」

ひんやりとした感触が、火照った体に心地よい。

ヒュー………

冷たい風が頬をなでる。

まるで極寒の地に吹くような風が………

ドゴオンッ

大きな地響きと共に、森の奥で山のような氷柱が天に向かって伸びるように現れた。

それだけではない。

1秒も経たぬ間に、紅蓮の火柱が氷柱を包み、蒸気へと昇華させる。

《先ほどの火柱……蒼仁の魔力反応と一致します》

「そのようだな……フツ、だが」

秋雨は笑みを浮かべる。

その目に映っているのは、川と一緒に凍り付いた自身の手。

氷柱の影響なのか、川の水の温度が急激に下がって、凍ってしまったのだ。

《何やってんですか！！こんな大事な時に！！》

「不可抗力だ！！誰が予測できるか、こんな事態！！」

言い争いながら、腕に力を入れてみるが、まったく氷の川から抜ける気がしない。

「無駄な消費は避けたいが……致し方ない」

秋雨はそう言って、魔力を手に集中。

手の自由を縛る氷に、魔力を打ち放つ。
爆発するように弾け飛ぶ砕けた氷の塊。

「ふうー、今度は寒くなってきたな……」

冷えた両手を擦り合わせる秋雨。

気付けば、辺り一面が凍り出していた。
草も、巨木も、大地も、全てが氷付けになっている。

《蒼仁の他に確認できる魔力反応が上がり続けています》

「推測魔力値は？」

《……Sランクオーバー》

「急ぐか。サクラフブキ」

《了解》

サクラフブキから光が満ち、秋雨に、武士の風貌のバリアジャケットと日本刀が装着される。

そして、走り出した。

第40話：迷、迷、迷。（後書き）

【報告】

公務員試験が近付き

そちらの方に力を注ぎたいため

しばらく執筆を止めます。

と言っわけなので

また長い期間、投稿できません（泣）

本当にスンマセン！！

第41話：仮面の裏

7年前

目覚めたら、焼け付くような熱気を肌に感じた。

うつすらと瞼を開け、瞳が捉えたのは燃え盛る炎。前は亀裂の入った床に、大きな穴が空いていた。

「うつ！」

左腕に痛みが走った。

見てみれば、腕から手首にかけて木炭のように黒い。火傷だ。しかも重度の

危機的な状況下

何をすればいいのかが、まったく分からない。なにも思い出せない。

とりあえず立ち上がると、亀裂の向こう側に黒い前髪で目が隠れている青年を見つける。

怪我をしているのか、右腕を押さえていた。

「やっと……起きたか」

青年は苦しげに、そして親しげに話しかけてきた。

「…………誰？」

見覚えのない青年に声をかけられ、少し怖がってしまった。
その様子を見て、青年は苦笑した。
とても悲しげな瞳で

「僕は真武。君は蒼仁」

「そう…………じん」

真武と名乗る青年に、蒼仁と呼ばれた。
何も分からないが、その名前に違和感がない。

「蒼仁。君はこれから色んなものを背負う。それが君に与えられた
罪に対する罰なんだ」

「なにを言ってるの？」

「…………時が来れば分かるさ。それより叶恵のことを頼むよ…………」

青年が指差す方には、床で寝ている黒髪の少女がいた。
蒼仁は叶恵と言う少女に近付くと同時に、真武が片膝をつき、痛み
に耐えているような呻き声をあげる。

「ぐうつ、かああつ……………」

うずくまり体を震わせる真武を蒼仁は、ただ見ていた。

すると、地響きのような振動が建物を揺らした。

揺れはすぐに収まるが、崩れかけていた床を壊すには十分だった。

「あつ……………」

一瞬の出来事だった

真武周辺の床が抜け、底の見えぬ暗闇へと落ちていく。

真武も、そのまま瓦礫と共に落下していく。

蒼仁は黙って見ていた。

頬に何かつうー、と温かい液体が流れる。

涙。

目から流れ続けている。

だが、その涙が

痛みからなのか、悲しみから流れるのか

蒼仁には分からない

「……………その後、叶恵を背負って病院を出た。それからも色々とあつて……………最終的に俺と叶恵は空蔵家の養子になった」

長々と話していた蒼仁は、そこで一息。

光が射さぬ薄暗い森の中を、レディアントを片手に歩き続ける。

「記憶喪失の事は十梧さんも知らない。よくは分からないけど、言ったらダメみたいな気がしたから」

《それでよくバレませんでしたね》

「何か俺って友達が少なかったんだ。十梧さんは4歳の時に会ったきりだったらしいし」

《叶恵さんにはどうしたのですか》

レディアントの質問に蒼仁は表情を曇らせるが、淡々と答える。

「嘘をついた」

《嘘？》

「ああ、嘘だよ。病院の火事で家族を全員失った叶恵は精神が不安定になったんだ。そのおかげで、病院での出来事もあやふや。食わない、寝ない、話さない……………」

唯一の幼なじみの俺はまったくの別人だしな」

目を離せば、更地になった病院跡に行っていた。

日に日に身体も心も弱っていく彼女に、蒼仁はこう言った。

「『俺は変わったんだ。生きていくために強く。だからお前も強くなるんだ』ってさ……。何が変わっただよ。ただ忘れただけじゃねーか」

自らを嘲る調子で蒼仁は言った。それと裏腹に、左の拳は血が流れ出るほどに強く握られていた。

「真武兄さん……………死んだと思ってたあの人なら、何か知ってるはず……………だったのにな……………」

長年の再会は最悪なものだった。

燃える艦。転がる死体。血を零す刀。狂った笑み。

妃山真武はアドンを、カリナの仲間たちを殺した。

心の奥底。

沸々と湧き上がる怒りと殺意が支配し、体を動かした。

死闘を繰り広げた末、蒼仁は意識を失った。

その後、とてつもない事をしたと秋雨に言われたが、蒼仁自身は覚えていない。

「……分からねえ。あの人は何の為にあんな事をしてんだよ!!! 叶恵を置いてけぼりにして!!!」

誰に言うわけでもなく、蒼仁は叫んだ。

《それはあなたも同じなのでは?》

アリス・バニングスの別荘パーティー以来、蒼仁は叶恵と会っていない。

レディアントの意見に、蒼仁は「分かってる!!!」と怒鳴り、うなだれる。

「……………わりい。いきなりキレて」

《いいですよ。それほどマスターの思い悩んでいると言いつつですよ》

蒼仁の謝罪をレディアントは素直に受け止める。

小鳥のさえずりがよく聞こえる沈黙が続く。

そして、歩みを止めない足。
蒼仁の目が光を捉えた。

今までであった雑多する植物もなく。

開けた大地の中央に、森の中に続く川の水源である泉がポツリと。

次元航行艦を浮かばせていた。

「どゆこと」

《さあ》

泉に近付き、航行艦の甲板に飛び乗る。

見た感じでは、ここに来てから1年も経っていない雰囲気だ。

《型を検索してみましたが、どうやら管理局の航行艦ですね》

「管理局の？ここは未確認の次元世界じゃなかったっけ」

《経緯などは知りません。艦のパイソナルに侵入すれば、ある程度は分かるかもしれませんが》

そう言われて、甲板を見渡すと、艦内に入るための扉を見つけて歩いていく。

まずは今の状況から終わらせていかねーと

さっきまでの考えを振り切り、扉の横にあるコンソールに触れた。それで分かったのだが、この艦、ジェイル・スカリエッティが盗んできたものと類似している。

蒼仁は自分の乗ってきた艦と同じ様にコンソールを操作すると、ピーンと電子音が鳴って扉が自動で開く。

途端に蒼仁は眉をひそめる。

最近、よく嗅ぐようになった。

吐き気を催す嫌な臭いが漂ったからだ。

また、かよ……

気の乗らないまま、艦内の廊下を歩いていると、蒼仁の予想していた“モノ”が散乱していた。

死体

それも1人だけじゃない。

直線の廊下に10人以上の死体が、腕や脚、頭と体の部位を千切り取られた状態で転がっている。

踏まないように進む蒼仁は、1人1人の死体を短い黙祷をする。すると、死体には共通点があることに気付き、ぼそりと呟く。

「胸……心臓を抉られてる？」

死体の胸にポツカリと空いた穴。それは右寄りにあるものが多く、人間に存在しなければならぬ心臓が消えている。

《傷の状態から察するに、心臓は抜き取られたのでしよう》

「抜き取るって……何のために？」

《分かりません。ちょうど進んだ先の突き当たりを右に行つたところに管制室があります。そこで情報を得ましょう》

蒼仁はこの状況になつた過程を知りたいのと、死臭が漂うこの場から離れたい、2つの思いを胸に小走りで管制室まで行く。

自動ドアを抜けた先の管制室は、画面から発する光だけが灯りの薄暗い部屋だつた。

蒼仁は目を細め、この部屋のコンソールを探しだし近寄る。

《あとは任せてください》

レディアントは杖から待機モードの銀色の珠に戻ると、ふよふよ浮いて管制室のパーソナルにアクセスする。

部屋の壁に立て掛けられている巨大なモニターで、幾つものウィンドウが現れては消えたりする。

それを見ているもチンプンカンプンな蒼仁は、その場に座り、歩き疲れた足を休める。

カチカチと目映い光を放つ液晶画面はやがて、ミッド文字や数字が

羅列する黒いページに辿り着いた。

《日本語に翻訳します》

黒いページに映える白いミッド文字が日本語へと変換されていく。
蒼仁は立ち上がり、モニターを間近から見上げる。

《最高評議会直属執行部隊ファントム。これがさっきの局員の所属してた部隊名ですね》

「執行部隊……ね」

執行と言う響きがどうも“悪”とイメージがして、あまり快く思わない。

画面に映るズラーツと並ぶ文章を読んでみるが、あながち間違いではないらしい。

文章の内容は活動内容。

暗殺、証拠隠滅、投薬実験、動物実験、人体実験、見るからに裏の仕事で使われる単語ばかり。

「管理局って警察みたいなもんじゃねえの？」

《この部隊は極秘裏に結成されたものらしいですね。まあ、大きな組織ほどこのようなものが在るものですよ》

レディアントの説明に、ふーんと答える蒼仁はそれを踏まえて黒いページを読んでいく。

コッソ

暗闇で足音。

しかし、それは蒼仁から発せられた者ではない。

コッソ

2度目の足音。

蒼仁は、画面の薄明かりが届かない部屋の入り口付近を見据える。

そこには確かに人の気配がする。

生き残りか？

この艦の乗組員の数は分からないが、廊下に転がっている死体を数える限り、生き残りは期待していなかったが……

コッソ

また1歩。

近付いてくる見えぬ人物に警戒しながら、蒼仁は後ろのコンソールでパーソナルにアクセスするレディアントに話し掛ける。

「やれるか？」

《データはコピーしました。いつ　　》

レディアントの声が途切れ、蒼仁が気付いた時には体の右半分がコンソールごと凍りついていた。

この氷って……っ！！

驚愕する蒼仁に、暗闇から現れた狼の仮面を被る少年が言い放つ。

「……消える」

途端に、蒼仁の視界は氷に埋め尽くされた。

蒼仁を捕らえた氷は更に肥大化し、艦を突き抜けて全長20メートルほどの冰山となる。

狼の仮面を被った少年。アカナシムのメンバーであるリユーは、一瞬にして艦の外へと移動し、自身が作り出した冰山を見上げる。

その手には氷柱のような形をした槍。

フェアリーウェイポン

セルシウスの氷槍。

触れる者は魔法であれど凍らせるロストログアだ。その影響か、森の木や草、動物たちが凍り付けにされている。

そんな槍で生み出された氷は、並みの魔法では砕くことも溶かすことなどできない。

だが、リユーはセルシウスの氷槍を両手に握りなおして、戦闘態勢に入る。

雨井蒼仁。いや、純粹ピュアルの聖王の種子はこの程度では抑えれない、と知っているからだ。

直後

ゴオオオオツ！！

火柱が音を轟かせながら冰山を砕き、溶かした。

「おおおっ！！！」

氷が溶かされて出来た水がリユーに降り注ぐ中、火柱から杖になったレディアントを振りかぶる蒼仁が急降下してくる。

リユーはセルシウスの氷槍を薙ぎ払い、落ちる水滴を１メートルの氷柱へ変える。

「……………行け」

合計30本の氷柱を蒼仁に向けて一斉掃射。

その後ろをリユーが突きの構えで跳ぶ。

「アント！！BDS、ドライブ！！！」

《BoostDriveSystem、Drive！！》

ドライブで肉体強化、白銀の髪になった蒼仁は、肉薄した1本の氷柱をレディアントで砕く。

散る氷の破片に目をやらず、次々と突っ込んでくる氷柱の上を駆けていく蒼仁。

その双眸が捉えるのは、氷槍を持つリユーのみ。

「……………死ぬ」

「お断りだ!!」

リユーの突貫を真つ正面から対抗する蒼仁だが、セルシウスの氷槍に触れているレディアントが凍り付いていく。

忘れてた!!

蒼仁は一旦レディアントを放し、仮面を被るリユーの顔面を殴りつける。

ドライブで強化されている拳を受けたリユーは吹っ飛び、氷の地面に叩き付けられた。

地面に着地した蒼仁は、落ちてきたレディアントをキャッチし、リユーの様子を見る。

「……………」

二色の太陽光の反射で輝く氷粒が舞い、幻想的な光景を作り出す銀世界をバックに、リユーは無言で立ち上がる。

カコン……

蒼仁は木製の何かが落ちた音を聞いた。
それはリユーの顔を隠していた仮面。リユーは仮面を拾わず、そのままの状態で蒼仁を睨んだ。

「……………え？」

蒼仁は少年の顔を見て、絶句した。

それと同時に

「ああ、いたいた」

緊迫した状況に似合わぬ、軽い調子の声。

蒼仁が後ろを振り返ると、凍り付いた森からジェイル・スカリエツ
ティとウーノ、セツテ、クアットロの順に4人が現れた。

「なに、あんた等……………」

「あなたこそ誰かしら」

向けられたセルシウスの氷槍に怯える様子もなく、おどける口調の
クアットロ。

セツテは両手に持つブーメランプレードを交差するように構え、スカリエッティの前に出る。

「珍しいデバイス……いや、ロストロギアかな。どちらにしても興味が沸くね」

セツテの後ろでスカリエッティは、リユーが持つセルシウスの氷槍を興味ありげに観察する。

「では、雨井蒼仁は……」

「もちろん捕獲するよ、ウーノ。クアットロ、セツテ、頼めるかい？」

「はい」

「了解」

訳が分からぬ話がドンドン進み、クアットロとセツテは戸惑っている蒼仁に近づく。

「ごめんね。ドクターが体をバラバラにして調べたいんだそよ。ソコのあなたの持つてる槍もだつて。観念してね」

「……………」

クアットロに指差されたリユーは、ただ俯く。セルシウスの氷槍だけが、白い靄を発している。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！いきなり人の体をバラバラにするって！！」

「さあ？ドクターに目を付けられたのが運の尽きじゃ

」

クアット口のいちいち苛つく言動。

それが不意に途切れる。

彼女の腹部に深々と刺さった氷の刃によって。

「かぶ……っ!?!」

「クアット口!?!」

吐血し、後ろに倒れ込むクアット口をウーノは駆け寄り支える。

氷刃は内蔵まで届き、傷口からは止め処なく血が溢れる。

セツテはクアット口を一瞥し、攻撃開始、と呟いてリユーにブーメランブレードを投擲する。

IS、スローターアームズで、逸れることなくリユーへと飛ぶブーメランブレード。

「……………」

リユーがセルシウスの氷槍を地面に突き立てると、さっきクアット口を襲った氷柱が目の前に3本生え、ブーメランブレードを弾く。

それどころか、氷柱に触れた個所から凍り付いていき、最後には微塵に砕けた。

「……………そろそろ、死ぬ」

右手に持つセルシウスの氷槍を掲げ、瞳を閉じるリユー。

唇だけが微動し、ブツブツと何かを唱えている。

《大きいのがきます!!》

レディアントの警告に蒼仁は攻撃を仕掛けようと思うが、リユートの顔をまた見て、思考が止まる。

なんで？

リユートに似た顔を蒼仁は見たことがある。
それは家の仏壇に飾られている1枚の写真。

記憶を失う以前の自分と、もうこの世にはいない2人の男女。
その腕に抱えられ、満面の笑みを浮かべていた。

なんで!?

そして7年前。

妃山真武と同じく亡くなっていたと思っていた、
“雨井家の次男”

「なんでだよ!?!れ」

「裂氷尖牙」

蒼仁の困惑の叫びを遮るように、リユートはセルシウスの氷槍を躊躇
わず振るうと、白い霧が収束。

全長10メートルはある円錐形の氷柱が現れ、回転する。

そして、蒼仁がまた口を開く暇もなく、氷柱は音速を超えた速さで
放たれた。

パリッ

氷の世界と化した森に響く音。

それは、凍った地面を蹴って走る秋雨の足元の氷が割れる音だ。その音を追いかけるように、紫の光が高速で秋雨に近づく。

「待て!!」

背後から迫る紫の光が加速し、秋雨の横を通り過ぎる。

芯まで凍った巨木の隣を駆け、秋雨は手に持つサクラフブキを横に振るう。

ギイイインツ

刀とエネルギー刃が瞬時の拮抗。

すぐに距離をとる為に、互いに後方へと跳ぶ。

「戦闘機人か」

「ナンバーズ3、トーレだ」

トーレは四肢から迸るエネルギー刃、もといインパルスブレードを構えて言った。

差し詰め足止めだろう、と判断した秋雨はサクラフブキを正眼に構える。

「退いてもらえぬか……と言っても、聞いてはもらえないのだろう？」

「当たり前だ。ドクターの命令だからな」

会話が終わり、突き刺さるような冷風が2人の肌を撫でる。

冷風が止むと秋雨は氷の地面を碎き蹴り、トーレの間合いへと入り込み、サクラフブキを上段に振り上げる。

即刻に蒼仁の元へ向かいたい秋雨は、初撃から遠慮することなく必殺の勢いで攻撃を放つ。

その斬り上げをトーレは、身を翻して避けると、そのまま身体を回転させて右の腕と脚のインパルスブレードを振るう。

「^{ヤッフサ}八房！！」

2方向から迫るエネルギー刃2本に対し、秋雨は一太刀からなる8連撃の斬撃を見舞わせる。8つの斬撃の内、4つはインパルスブレードを弾き、残りの4つはトーレの胴体に炸裂する。

「ちい！」

舌打ちをうったトーレは後ずさり、ISライドインパルスを発動。閃光を撒き散らし、秋雨の頭上を飛んでいく。

10代前半の少年と認識していたが、その実力は管理局トップクラス。

トーレは気持ちを切り替え、“足止め”をすることから“倒す”ことを前提にした。

秋雨もトーレの雰囲気が変わるのに気付き、膝を折り曲げ、力を込める。

「はあっ!!」

「ふっ!!」

降下するトーレと跳躍する秋雨は、空中で己の刃を交わす。

ここからは空戦。

秋雨は飛行魔法を使用。空中に静止してトーレを待ち構える。

トーレはライドインパルスを継続させ、秋雨の周りを旋回するよう
に飛ぶ。

「たああっ!!」

あらゆる角度、位置から高速移動で放たれるトーレの攻撃。

だが、秋雨は自身に迫るエネルギー刃をサクラフブキで的確に捌き、
弾き返す。

制空圏。

半径5メートル内に気を配り、相手の気配及び攻撃を感じ取り捌き
きる技。

これにより、どれだけ高速で、どんな死角から襲ってこようが、す
ぐに反応、処理する事ができる。

無駄か……

何回か試行し、直線的な攻撃が通らないと判断したトーレは、ライ
ドインパルスを解除して、ある一定の間合いをとる。

その距離は、秋雨が逃げようとしても、ライドインパルスを発動すれば瞬間に追い付ける。

ドオンッ

遙か後方から聞こえる衝撃音が、秋雨の焦りを促す。

この世界の先住民か、はたまたジェイル・スカリエツティと戦闘機人か、どちらにせよ森一つを凍り付かせるような敵だ。

蒼仁の力は絶大だが、それを自由自在に使えるわけではない。制御できない力は、自身の破滅を招く。

だから、この場で立ち止まっているわけにはいかない。

秋雨はサクラフブキの刀身に魔力を注ぎ、姿勢を低く構える。

最速最高の一撃。

これにより、この場の闘いを終わらせる。だが

体勢を整え、タイミングを見切ろうとする秋雨の耳に

どおおおおおおおおおおおっ！！！！

遠くから走ってくるような轟音が聞こえた。

それは、次の瞬間には秋雨の背後まで迫っている。

「っ！！！」

秋雨は凍り付いた巨木の枝葉を砕き、空へと上昇して回避する。トーレも目の前に迫る轟音を発するものに、ライドインパルスで大きく右に移動。

轟音を撒き散らしていたもの。

それは絶対零度の冷気を宿した氷塊だった。

「……こんなものか？」

氷塊が押し通ってきた道から少年の声が聞こえる。

セルシウスの氷槍を肩に担ぎ、仮面で隠していた顔と黒髪を露わにしたアカナシムのメンバー

リユー

その顔を見た秋雨は、誰かに似ている、と思った。

「ドクター！！ウーノ姉様！！クアットロ！！セツテ！！」

金切り声を上げるトーレが向かった先。

氷塊の前方に、グッタリとするクアットロを抱えるジェイル・スカリエツティとウーノ。

そして、その3人を守るように前に出るセツテと蒼仁。

5人の体は氷塊の冷気によって、所々が凍っている。

「蒼じ……………っ？」

秋雨は蒼仁を視認すると、リユーと交互に見返す。

……………似ている？

蒼仁とリユー。両者の顔は類似している部分が多く見られる。

「……どうした」

静かに響いた。

リユーの怒気を孕んだ声。

その声に、秋雨の毛が総立ちする。

かつて、祖父から殺気を受けても怯むことがないよう、修行をしたことのある秋雨。

だが、リユーから発せられるものは、生まれて初めて感じるような感覚だった。

混じりっ気のない

純粹な殺意。

危険すぎる

秋雨はそう感じ、急いで蒼仁の隣へと飛ぶ。

蒼仁は先までの戦いでなのか、頭から血を流しており、呼吸もだいぶ荒い。

「大丈夫か、蒼仁殿」

「……まあまあ死にかけ」

ハハハ、と乾いた笑いをする蒼仁だが、その顔色はよくない。

パリッと氷が割れた音の方を向くと、リユーがゆっくりと蒼仁に近付いている。

「……この程度なのか」

リユーがさつきと同じ口調で問う。

問われた本人である蒼仁は、ただ、リユーを睨み、レディアントを構える。

そして言う。

彼の本当の名前を

「何でなんだよ

“蓮斗^{レディアント}”

」。

第41話：仮面の裏（後書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

今週の土日にいよいよ公務員試験。

どんなに勉強しても不安が取り除けなくて、若干の現実逃避。
その結果、41話が出来上がってしまいました（笑）

試験勉強のせいで、まったくプレイ出来ないエクシリア（泣）

そうしている間にも、テイルズオブシリーズ新作

テイルズオブイノセンスRが発表されましたねえ！

今から楽しみです

734

今回の称号コーナー

・リユール

【雨井 蓮斗】

雨井家の次男であり、蒼仁の弟

【絶対零度の槍の使い手】

絶対零度の槍を振るいて仇なす者を凍てつかせる

では、試験が終わったら暫くは暇なので

それまで、ちよひなら

第42話：雨井蓮斗

turn 蒼仁

「……蓮斗なんだろう？」

すべてが凍てつく銀世界で、蒼仁はリユーに問う。
死んだはずの自分の弟がどうか、を。
リユーはセルシウスの氷槍を蒼仁に向け、口を開く。

「……易々とその名前で呼ぶな……」

明らかな殺意を向けられ、蒼仁は奥歯を噛み締める。しかし、その反応からリユーが蓮斗であることを確信する。

7年前に死んだ弟。

その人物が目の前にいるというのに、蒼仁の心は感動に打たれることはない。
むしろ警戒心を持っていた。

記憶を失っていることもあるが、最もな理由は、蓮斗がアカナシムのメンバーであることにあった。世界を滅ぼす力を持つ聖王シユリアの復活を目的に、聖王の種子である蒼仁を狙い、その為だけに叶恵達を傷付けた組織。
未だに分からない事もあるが、少なくとも正義を振りかざしているような奴らではない。

「蒼仁殿の……知り合い、か」

蒼仁の隣。

櫛灘秋雨が尋ねてきたので、蒼仁は蓮斗から目を離さずに頷く。

「ああ、俺のおと」

“弟”

その単語を発しようとした蒼仁の隣を、氷柱が高速で駆け抜けていった。

「……ざけんな」

腹の底から絞り出すような怒気を含んだ声。

蓮斗は蒼仁を睨み付け、セルシウスの氷槍を振るい叫ぶ。

「……お前みたいなくソに……弟なんて呼ばれたくないんだよ……!!」

氷槍から発生する白い霧が無数の氷の刃と化し、蒼仁に向かって一斉掃射される。

蒼仁は右、秋雨は左とステップし氷刃を回避する。

「なんで……だよ!!」

「……なんで？そんなもん決まってるだろうが!!」

怒声を上げながらセルシウスの氷槍を振り上げ、地面を滑るように移動する蓮斗。

怒りの矛先、蒼仁はレディアントを両手で握り、縦に垂直に構える。

「お前が……“父さん”、“母さん”、……“叶恵姉ちゃんの家族”を“殺した”からだろお！！！！！！」

………は？

蓮斗の口から紡がれた言葉に耳を疑う。

頭の中で何度もリピートさせて確認する。だが、繰り返される蓮斗の叫び声は変わらず、心を抉ってくる。

俺が父さんと母さんを………叶恵の家族を殺した？

叶恵の家族構成は、両親、兄、祖父母の6人。
家事のあったあの日。

全員が病院にいたらしい。

叶恵の父母はどちらもその病院に勤めている医師で、他の4人は蒼仁の両親と共に、入院している蓮斗のお見舞いに来ていた。

そして、死んだ。

“死因は焼死”

検死官にそう言われ、ずっとそう思ってきた。

だが、目の前にいる少年はそれを否定するような言葉を言い放った。

何がどうなってる!?

蒼仁の頭は混乱し始める。

妃山真武と雨井蓮斗の生存。計6人の殺人。聖王シユリア。聖王の種子。フェアリーウェイポン。レディアント。

カリナと出会ってからの短い間。

その間にあった出来事が単語になって、頭を駆け巡る。

心臓が苦しい。

極度の緊張状態に息がつつ返そうになる。

「蒼仁殿!!」

秋雨の大声に、蒼仁は俯いていた顔を正面に見ると、セルシウスの氷槍の矛先を自分に向けた蓮斗が跳躍していた。

その表情は怒りに満ち溢れ、蒼仁を確実に殺そうとしている。

回避しようとするが、体が思うように動かない。

蒼仁は走るであろう痛みに耐えるため、歯を食いしばる。

と、腹に衝撃が走り、視界の景色が高速に動き出した。

いや、違う。

高速に動いているのは蒼仁だった。

「無事か？」

元になっていた場所から10メートル以上離れたところで、女性に声をかけられる。

No.3、トーレ。

彼女のESライドインパルスによって、蒼仁は氷槍から逃れることができたのだ。

「なんで助けて……」

「ドクターはお前に興味があるからな。それに……」

トーレはここで言葉を区切り、地面に突き刺さったセルシウスの氷槍を引き抜く蓮斗を睨む。

「アイツは私の妹を傷付けた」

声から滲む怒り。

それは蓮斗の殺意とは、まったく違う恐さを感じさせる。

《気をしっかりしてください、マスター》

「分かってる……」

蒼仁はそう言い、レディアントに命じる。

「BDS、（ガンマ）ドライブ」

《了解》

蒼仁の足元に魔法陣が展開され、肉体強化のドライブから魔力強化のドライブに切り替わる。

白銀の瞳を煌めかせ、蒼仁はレディアントを肩に担ぎ、蓮斗を見据える。

その目は、7年ぶりの弟との再会に困惑や歓喜するような目ではない。

視界に映る敵をどう倒すか模索する、冷たい闘者の目。

もともと記憶を失っている蒼仁にとって、雨井蓮斗は“他人”にほぼ等しい。

遠慮する理由がない。

「トーレさんだっけ？」

「さん付けは止める。あと、敬語もいらない」

「なら、トーレ。あの槍に触れないように、相手の攪乱を頼む。あれは触ったモノを凍らせるから」

「了解した」

トーレはそう言って、ライドインパルスによる高速移動を始める。紫の閃光を横目に、蒼仁は自信の周りに魔力弾を形成する。

アイツは……敵だ。

自分にそう言い聞かせ、蒼仁は蓮斗との戦闘へと入る。

turn 秋雨

縦に払われるセルシウスの氷槍を左に踏み込んで避け、がら空きになった蓮斗の胴体へサクラフブキを振り抜く。

直撃と思われたが、地面から生えた氷柱によって、秋雨の一閃は通らなかった。

「八房！」

振り切ったサクラフブキの切っ先を返し、一太刀による8つの剣閃を放つが、蓮斗は既に後退しており、氷柱を砕くだけに終わる。

なかなかやる……

秋雨は心中で蓮斗を評価し、次の一手を思考する。

直線の攻撃は一通り試したが、その度にセルシウスの氷槍で防がれ、サクラフブキの刀身が凍ってしまう。

先ほどのように隙を作ってもみたが、自由自在に顕現する氷に邪魔される。一定の間合いで、秋雨は蓮斗の様子を伺いながら策を考える。

「……邪魔を、すんなあぁ!!」

感情を爆発させたような叫び声と共に、蓮斗の右横に巨大な氷の槍が造られる。

それも1本だけじゃない。

数十本の氷槍が秋雨に狙いを定め、高速回転を始める。

「っ!!！」

一旦、思考を止め、秋雨はサクラフブキを横に構える。

「乱・裂氷尖牙!!！」

「八房双閃、十六夜!!！」

掃射される氷槍の群に対して、秋雨はサクラフブキを2回振るい、計16の斬撃を乱れ放つ。

氷槍と斬撃はぶつかり合い相殺するものもあれば、標的を大きく逸れるものもあり、結果2人は無傷である。

残りの魔力は6割を切ったところか……

散り散りになった氷粒が降る中、秋雨はそう思いながら一息をつく。と、視界に紫の光が高速で蓮斗に接近していた。

蓮斗もそれに気付き、セルシウスの氷槍を尻払うが、光、もといトーレは急に上昇して回避する。

「ブンブン、ブンブン!!うぜえんだよおっ!!！」

自分の周りを飛ぶトーレに苛ついた蓮斗が、セルシウスの氷槍を振り上げたその時。

朱色の魔力弾が蓮斗の足元に着弾し、爆発を起こした。

「っ!?!？」

いきなりのことに体勢を崩す蓮斗だが、魔力弾を撃った人物を知りや否や、鋭い眼光を向ける。

その先にいる蒼仁は怯むことなく、魔力弾を放つ。

「小賢しいんだよっ!!」

怒り叫ぶ蓮斗は、向かってくる魔力弾を回避し、蒼仁へと爆走する。避けられた魔力弾が、蓮斗の周りを囲む。

そこへ、蒼仁は

「バーン」

と、呟く。

同時に、蓮斗の背後で複数の爆発が発生した。

蒼仁が放ったのは、プロミネンスシュート・ブロスアップ。爆発する魔力弾だ。

その爆発手段は2つあり、1つは着弾した時。

もう1つは蒼仁の目視できる距離での、任意爆発だ。

これは蒼仁が見える範囲なら、好きなタイミングに命じるだけで爆発できるものだ。

6発同時に爆発させた威力が、氷に閉ざされていた地面が顔を出し、砂塵を巻き上げていた。

キィ

ィィ

「ん？」

不意に耳にした音に、秋雨は空を見上げる。

それに気づいた蒼仁も釣られて上を見ると、巨大な岩の槍が急降下していた。

「いいっ!？」

蒼仁が頓狂な声を上げると共に、岩槍が地面に衝突。

地響きを起こし、氷と大地の破片を吹き飛ばすと、先よりも倍近い砂塵を舞い上がらせる。

「ちい、次から次と」

「まっただくだな」

各々の獲物を地面に突き刺し、衝撃の余波にたえたトーレと秋雨は、愚痴るように言う。

「つう……っ」

《なに一人だけ吹っ飛んでるんですか？マスター》

3人の内1人だけ、余波に対応できなかった蒼仁は、後ろの巨木に飛ばされていた。呻きながら、レディアントを支えに立つ蒼仁を一瞥し、秋雨は砂煙の中でゆらりと動く人影を睨む。人影は砂煙からゆっくりとその姿を現す。

男だ。

歳は顔から判断して20代後半。

身長は2メートル近くあり、身に着けているマントから覗けるその腕は、長らく厳しい修行で鍛え抜かれたような筋肉である。

「ゲホッ、ゲホッ！」

男の後から、咳き込む蓮斗が出てくる。

バリア・ジャケットと思われる半袖のコートは、蒼仁の爆発魔力弾により、所々、焦げている。

「何者だ。貴様は」

サクラフブキの切っ先を向け、男に問い掛ける。

「ふん、それは後ろにいる雨井蒼仁に聞くんがいい」

そう言われ、秋雨は後ろから歩いてきた蒼仁に視線をやる。

名指しされた蒼仁は首を傾げ、目を細めて男をよく見る。

そして、ハツとしたように目を見開いて口を開く。

「ヴァント……!?!」

名前を呼ばれ、男、ヴァントは「ふん」と鼻を鳴らす。

ヴァントはアカナシムのメンバーであり、蒼仁がミッドチルダにあるカリナの基地にいた時、闘った相手である。

「お前の幼なじみ。“妃山叶恵”には世話になった。おかげで、こんな早期にこの“体に移る”ことになってしまったからな」

ヴァントの言っていることがよく分からない秋雨とトーレ。

唯一、蒼仁は妃山叶恵の名前に顔色を変える。

「叶恵になにしゃがった！！！！」

激怒の感情を露わに、蒼仁は叫ぶ。

「何もしていない。逆にされたのだ。まったく、真武といい、リュ
ーといい……貴様に縁のある人間は面倒ばかり起こす」

ヴァントはギロリと横にいる蓮斗を睨み、その首に手刀を叩き込む。

「ぐ、があ……っ！」

白目を剥いて意識を失い前倒れする蓮斗を腕で軽々と肩に担ぎ、ヴァントは蒼仁達に背を向ける。

「さらばだ、雨井蒼仁。いや、聖王の種子……」

ヴァントがそう言い、歩き始める。

彼が歩く先には黒いモヤが発生し、その巨体を包み込もうとする。

「待ちやがれ！！」

ヴァントを追いかけるように、蒼仁は秋雨の隣から駆け出す。と、ヴァントが顔を横に向け、微かに蒼仁を見て

「気をつける。“スラッグリスト”は強大な力に反応する」

スラッグリスト…？。

秋雨は聞き覚えのある単語だと思った途端に、走っていた蒼仁が地面から生えた“何か”に打ち上げられた。

「蒼仁殿！」

次回に続く

第42話：雨井蓮斗（後書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

まず……

変なところで終わらせてすみません（――；）

一応、続きは書いてあるんですけど

何かもう、いつも以上にグダグダになってしまったので……（苦笑）

次回が終われば

機動六課サイドで話を進めていきます。

では、また次回まで

第43話：スラッグリスト 前編

t u r n 蒼仁・秋雨

蒼仁が空を舞う。

地面から突出してきた“何か”によって

「蒼仁殿！」

秋雨が動こうとした時には、トーレがライドインパルスで蒼仁のもとに向かい、助けていた。

それを見て安堵するが、そう長々と余韻に浸っている暇はない。

蒼仁を打ち上げた“何か”は、地面を隆起させ、その本体を外へ晒し出す。

「「「あ……あ、あ、」「」「」

四足歩行の“何か”は、何重もの低い声を体中にある口から発する。そして、体中にあるその目で秋雨を捉え、にいつと体中にある口を笑みで歪ませる。

人間、と言つべきか。

シルエットだけだったならそう呼べるだろうが、その外観は人から程遠い。

それから数秒後

ドオオオオンッ

遙か後方で爆発音が轟き、爆風がバリアジャケットを揺らした。

《ほらね？》

レディアントは軽い調子で言う。

その軽さとは裏腹に爆発の規模は大きく、まるで巨大なドームのようだ。

「……うっ、お、あ……」「」「」

あの爆発ビーム（蒼仁命名）の発射口である人外は、口から粘液でべっとりとしたものを吐き出す。

内臓の一部なのか、トクン、トクン、と微弱に鼓動を打っている。

内臓は見る見る黒ずみ、萎びていく。

「おそらく、あの攻撃を撃つ度に内臓一つを消費するのだろう」

人外の一連の動作から推理する秋雨。

ようは爆発ビームを撃つには、内臓を消費しなければならぬらしい。

なら、爆発ビームをドンドン発射させて自滅するのを待つ、と考えた蒼仁。

それを秋雨に提案すると、前にいたトーレから一秒足らずで却下された。

「ドクターがクアットロの治療をしているんだ。あんな攻撃をこれ

以上、撃たせるわけにはいかない」

トーレはそう言って爆発ビームの爆撃地を顎で指す。そこは森であった形跡など無く、クレーターのある更地と化している。

確かに地形を変えるほどの威力を持った攻撃を見境なく撃たれては、隠れているスカリエッティに当たる可能性がある。

「ならば、一気に片を付ける！」

秋雨はそう言い残し、サクラフブキを水平に薙ぐ。そこから疾風の刃が飛び、人外の左肩を刻んだ。

秋雨の言う通り。

撃たせたくなければ、撃たせる前に始末する。蒼仁とトーレもそう考え、人外へと強襲を仕掛ける。

「「「あゝあゝあゝあゝつ！！！！」「」「」

左の肩口から血を噴き出させながら人外は怒り、右腕をゴムのよう
に伸ばし、左手を軸に体を回転させる。

しなつて近づく人外の右腕を、秋雨はサクラフブキで斬り上げ、両
断した。

蒼仁のブロスアップのおかげか、人外の防御力が下がっている。

「はあっ！！！」

ライドインパルスで空を翔るトーレは、右腕を斬られて怯む人外の
頭上に両肘のインパルスブレードを振るう。

X字に斬撃を受けた人外の真横、ドライブに切り替え、強化された脚で走る蒼仁は腹部で大口を開けている中年男性の顔を振りかぶっていたレディアントで打つ。

《そろそろマトモな使い方しましょうよ……》

「今、そうしてやるよ！」

打ち上がった人外にレディアントの矛先を向け、ドライブから魔力強化のドライブへと切り戻す。白銀の瞳で狙いを定め、蒼仁は魔力収縮をする。

「エクサノヴァブレイカー！！」

鮮烈な光が煌めき、白銀の砲撃が人外を呑み込んだ。人外を巻き込み、砲撃は空に真っ直ぐ突き進み、やがては細くなつて消えた。

「ふう……」

BDSを解き、元の黒髪に戻った蒼仁は、邪魔だった巨木の枝葉が無くなり、視界良好となった大空を見上げて一息つく。

「油断をするな蒼仁殿。まだ生きているやも……」

《いえ、消滅しました》

秋雨の忠告を遮り、レディアントは素っ気なく言った。

「その判断の決め手は？」

確実性に欠けるレディアントに秋雨は問い掛ける。

《マスターが“ノティオン”の魔法を使ったからです》

.....は？

聞き慣れない単語に秋雨は首を傾げ、そのノティオンの魔法を使った蒼仁に視線を送る。

しかし、蒼仁も何のことやら、と首を横に振る。

「ノティオンとはなんだ？」

率直の疑問をトーレが聞く。

《ノティオンとはマスターが所有する独特の魔力のようなものです。あの人外、正式名称“スラッグリスト”はノティオンの耐性が極めて低く、並みの魔法では傷つきませんが、ノティオンによる魔法ならば、どれだけ弱くとも一撃必殺の威力と化します》

「詰まるところ。ポケ？ンで言う水属性に雷属性の攻撃で効果抜群的な感じなのか？」

《まあ、そんな感じでとってなくても構いません。所詮、この情報はファントムの艦で入手したもので》

レディアントの説明に少しながらも納得するトーレ。

つてか、あんたポケ？ン知ってんだ……

「そうか、思い出した……」

秋雨が呟く。

「なにが？」

「あの人外、スラッグリストと言ったか……。私がヘヴィバッドから持ち去ったレポートに記されていたのだ」

レポート。

蒼仁はヘヴィバッドから脱出した時に、秋雨の着物の中から出てきた数枚の紙を思い出す。

「聖王シユリアの魂の欠片の接触到にディムの体は耐えきれず、スラッグリストになった……アルバス・ディルミスのレポートにそう書いてあった」

「聖王シユリア……！」

秋雨の口から出てきたその言葉に蒼仁は驚く。

あんな化物も聖王シユリア関係なのかよ

行く先々に関わってくる聖王シユリアに、蒼仁は嫌悪感を覚える。

偶然なのか

はたまた必然なのか

「もう1ついいか？」

《はい、私が答えられる範囲で》

「スラッグリストとはなんだ？」

スラッグリストが消えていった空を仰ぎ、トーレが聞くと、近くでボゴツという音がした。

3人が振り返ると、土の中から手が生えていた。

《スラッグリストとは……………説明はまた後ですかね》

ボゴツボゴツボゴツ

地面が隆起しては、その体を這いずり出させる。

そして、全体を露わにしたそれは、複数ある双眸で蒼仁達を捉える。

「「「あゝあゝ…「「「「

t u r n 蓮斗

「普段は一言も話そうとしない貴様が、兄の前では流暢に口が動くものだな」

「……………」

何も無い闇の中、蓮斗とヴァントは隣り合わせに歩いていく。

蓮斗はここにいる人間が嫌いである。

だから、普段は誰とも口を利かないし、馴れ合おうとしない。ある目的を達成させるために、ただ利用しているだけ。

「無言か……。なにを考えて行動をしているのか分からないが、これだけは言つぞ」

ヴァントは横目で蓮斗を睨み、怒気を孕んだ声で言葉を紡ぐ。

「絶対法則の予知記録^{アブール・レコード}」は雨井蒼仁を選んだ。これ以上、小癩なマネをするな……」

そう言い、ヴァントは唐突に消えた。

蓮斗は驚くことなく、うるさい奴が消えて清々した、と一息をつく。

絶対法則の予知記録^{アブール・レコード}。

古代の王が著書した魔導書型ロストログリア。

予知能力を持っていた王が記し、それに載っている事柄は必ず起きる。

例え

因果律をねじ曲げられようが

魔導書を消し炭にされようが

変わることはない未来

「忠告されなくたって分かってんだよ……」

絶対の法則。

その言葉が蓮斗の頭の中で、憎々しげに浮かぶ。

turnスカリエッティ

「終わったよ」

手を血だらけにしたジェル・スカリエッティが、隣のウーノに呟いた。

蓮斗の氷刃が腹部に突き刺さり、出血多量になったクアットロ。無くなった血を補うため、スカリエッティは自身とウーノ、セッテの血を彼女に分け与えた。

応急処置を終えた今は横たわり、弱いながらも呼吸をしている。

「トーレは大丈夫でしょうか？」

ウーノはクアットロの手を握り、自分の心配事を告げる。

「分からない、けど、彼等もいるから何とかなると思っよ」

スカリエッティは白衣で手についた血を拭い、いつもと変わらぬ笑みを浮かべながら答える。

ザッ

ウーノの後ろにいたセッテが急に立ち上がり、トーレ達がいる方をじっと見る。

「どうしたんだい、セッテ」

「前方から熱源反応。こちらに向かってきます」

セツテが抑揚のない声を出した直後。

膨大な熱量を持った閃光が、スカリエツティ達の隣を通り過ぎていった。

間をおき、爆風と共に轟音が響く。

半円に広がる爆発をバックに、スカリエツティは何事もなかったように平然としてクアットロとウーノに歩み寄る。

「クアットロの傷に障る。移動するよ」

「はい。セツテ」

「了解しました、ウーノ姉様」

クアットロを抱えるスカリエツティの後ろをウーノと、片方だけのブーメランプレードを持つセツテがつく。

「ドクター!!!」

安全な場所に移動しようとするスカリエツティ達を呼び止める女性の声。

振り返り見ると、森の奥から紫色の光が木の合間を縫ってスカリエツティへと近付いていた。

「トーレ!」

ウーノに名を呼ばれ、トーレはライドインパルスを解く。

「ドクター、お怪我はありませんか？」

「全然ないよ」

スカリエッティがそう答えると、トーレは眠っているクアットロに不安げな視線を向ける。

「クアットロの容態は……？」

「ああ、大丈夫。君達が頑張ってくれたおかげでね」

それを聞いて、トーレは「そうですか……」と安堵したような声を零すが、次の瞬間にはいつもの仏頂面に戻る。

「敵の様子はどうか？」

「はい、槍持ちは仲間と思しき男に連れ去られました。今はスラッグリストと呼ばれる化物と交戦しております」

「スラッグリスト？」

聞いたことのない単語に、スカリエッティが聞く。

「顔が複数ついた人間の形をとっており、四肢の収縮が自在。内臓を1つ犠牲する事で爆発性のあるビームを撃ってきます」

トーレの説明にさつき起きた爆発で出来た更地を一瞥する。

「現在は、雨井蒼仁と櫛灘秋雨が注意を惹きつけております。何や

ら雨井蒼仁のノティオンと呼ばれる力に反応するようです……ドクタ―？」

俯き、肩を震わせるスカリエッツィの様子に、トーレは怪訝な顔をする。

すると、スカリエッツィは顔を急に上げて大笑いをし始める。

「あははははっ！！面白い！！この世には私の知らないことがこんなにもある！！」

トーレが話した内容に

スカリエッツィの6年間の平穏で物足りない月日を経て、飢えきっていた欲望が爆発する。

知りたい！

調べたい！

手に入れたい！

万物を知り尽くしたいその貪欲な渴望が、スカリエッツィの心を支配する。

目を輝かせるスカリエッツィを見て、ウーノを溜め息をつき。

そして再認識する。

彼の名はジェイル・スカリエッツィ

無限の欲望と呼ばれた次元犯罪者

第43話：スラッグリスト 前編（後書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

第43話を投稿しましたが、やはりグダグダしている感じありますね（- - ;）
文才が無いからしょうがないですけれど……

と、暗い話はここまで

実はなんとわたくし我暇人。

公務員試験一次を無事に合格しましたゞ（^ ^）ノ
やったね！

執筆を禁じたかいはありましたよ（^ - ^）
まあ、二次試験があるんですけれどモネ（泣）

最後に

42話のタイトルを変えました。

驚かれた方には深くお詫びをいたしますm（| |）m

第44話：スラッグリスト 後編

t u r n 蒼仁

「「「あゝあゝあゝあゝあゝあゝつ!!!!!!!!!!!!」」」

爆発ビームを放ったスラッグリストは、体中にある口達から叫び声を上げて不協和音を盛大に奏でる。

咆哮によつて振動する空気が、時間の経過に融け始めていた氷を砕き、ピリピリとした感触を肌を駆け抜けさせる。

「さっきの奴よりデカくないか？」

叫びの残響の中、秋雨は気付いたことを口にする。

そう、目の前にいるスラッグリストは、先ほど倒したものよりも遙かに大きいのだ。

全長は5メートルはあり、顔の数も倍近くある。盛り上がった筋肉が黒い皮膚を破り、血管や神経が生々しく露出しており、気持ち悪さも倍増していた。

血走った目をギョロギョロと拳動不審げにあちこち配らせ、巨大な異形は手短にあつた木を軽々と引っこ抜く。

抜いた巨木を頭上でブンブンと振り回し、その目が捉えたのは、レディアントを右手にする蒼仁1人。

「やば」

蒼仁が言い終える暇もなく、スラッグリストは巨木をこちらに振り下ろしてきた。

直後、秋雨が跳ぶ。

桜色の刀身を煌めかせ、サクラフブキを横に薙ぎ払う。

シャンツ

短い金属音。

数秒遅れて、巨木は真ん中を綺麗に切断され、持ち手の部分だけが地面をゴオンツと打った。

ヒヤリとした場面を乗り越え、安堵する蒼仁だが、スラッグリストの力は生半可なものではなかった。

巨木がめり込むところから亀裂が走り、蒼仁の足元の大地に隆起と陥没を起こさせる。

不規則に揺れる足場に足を取られる蒼仁に、スラッグリストが半分になった巨木を、槍投げよろしく投擲する。

「くっそおー！」

蒼仁は四つん這いの状態から手を突きだし、魔力障壁を眼前に展開。高速で投げられた巨木が防ぐ。

巨木のピッチングを終えたスラッグリストは、ちょうど宙から地面に着地した秋雨へと腕を伸ばす。

弾丸のような拳を秋雨は臆することなく、サクラフブキを左斜めに振り上げる。

拳は瞬く間に放たれた一閃で弾かれ、後方の巨木へと打ち込まれる。

「弾くので精一杯か。私もまだまだ、だな」

秋雨は嘆息を零しながら、背後から迫ってくるスラッグリストの拳を身を翻して避ける。

更に眼前となったその腕へ剣撃を加える。

上からのし掛かるに圧力に腕を地面に叩き付けられ、スラッグリストは体のバランスを崩した。

そこへ、立ち上がった蒼仁の紅蓮の魔力弾が駆け抜け、スラッグリストの右肩に炸裂。

怯んだところを蒼仁が飛び込み、レディアントで顔が3つある頭へ、ゴウンっつと鈍い音を鳴らし垂直に叩き込んだ。

一撃を与えた蒼仁は異形の頭上を蹴り、秋雨の隣へと降り立った。

「やはりノティオンが効くようだな」

秋雨はスラッグリストの右肩から上がる煙を見て言った。

そうすると、蒼仁が口をへの字に顔をしかめさせる。

「そうなんだけど、どうやって使うのが…よく分かんないんだよ」

ノティオンとは蒼仁が持つ特有魔力であり、スラッグリストには効果抜群である、とまではレディアントから説明された。だが、使い方などを聞くと《さあ？》と無責任な答えが返ってくる。

どうやら記憶メモリーが復旧したばかりで、そこら辺のデータが戻っていないらしい。

と、なると。

この手の話に詳しくそうなのは、カリナぐらいだ。

だが、あの赤髪少女。

何故か人との距離を取っているような気がしてならない。

特に蒼仁とは、会話だけなら親しげ（おそらく）なのだが、話している本人からすればどこか余所余所しい。

思い返してみれば、聖王の種子に関連した話になると、適当にはぐらかされてしまう。

まるで、“お前が知る必要がない”と言った感じだ。

アイツ、まだ何か隠してやがるな……

思考している内にイライラが募ってきた。

そんな蒼仁へ、不意に話し掛ける機会音声。

《“ノティオン伝導率” 10%以下。割合は白4：黒6》

「……アント？」

いきなり意味不明な言葉を並べるレディアント。
蒼仁は先端の宝石部分を顔を近づかせ、首を傾げる。

《あ~~~~、戻ってきましたよ。ノティオンについてのデータが》

「本当か!？」

《はい。その前に前方に注意》

レディアントの指摘に前を向くと、スラッグリストがいきなり二足で立ち、その大きな腕を天にかざしていた。

それを目視した次の場面。全体重をかけた腕が思いつ切り地面に振り下ろされ、衝撃波が発生する。

波として四方八方に走る衝撃波に、秋雨は蒼仁の手を掴み、空へと飛翔する。

それを見兼ねたスラッグリストは腕と頭上の口を赤く輝かせる。

「げっ!！」

蒼仁がそんな声を上げると、スラッグリストから3発の爆発ビームが発射される。

上昇していた秋雨は旋回し、赤い光線を回避する。

ノティオンは射撃をやめることなく、3つの発射口から次々と爆発ビームを放出する。

1発撃つ度に、足や腹部の口から、べちゃっと空薬莖である内

臓を吐き出していく。

「これはおぞましいな」

回避飛行を続けながら、地にいる爆発ビームを乱射する生体機関銃に冷や汗を流す。

「アント！データが戻ったってことは、ノティオンの使い方が分かったんだよな！」

《あ、はい。因みに1回の受講りよ……》

「いいから早く!!」

《仕方ありません。》

ノティオンとは、強く一貫とした想念をマスターのリンカーコアを介して生成した魔力のことです《

爆発ビームが蒼仁の真後ろを通り過ぎるのを気にせず、レディアントは続ける。》

《さっき私が言ったノティオン伝導率とは、使った魔法に含まれるノティオンをパーセントで表したものです。これはマスターの想念が真っ直ぐなほどパーセントが》

いきなりの急降下が始まり、レディアントの声が空に置き去りにされた。

スラッグリストが秋雨と蒼仁を狙い、爆発ビームを上から下へと縦に放ってきたのだ。

1発の爆発ビームが巨木に当たり、爆発が球体を描いて周りの

木を燃やし尽くす。

蒼仁は秋雨の手を放し、爆風吹き荒れる地面へと降りる。
そこにレディアントが言葉を投げる。

《 簡単な話。BDSを解いてください》

「なんか、色々と話が飛んでるし…っとお!？」

レディアントの発言に半目になって呆れていた蒼仁の真っ正面へ、スラッグリストの拳が飛んできた。

蒼仁はレディアントを前に突き出し、魔力障壁を張ろうとしたが、間に合わず、殴り飛ばされる。

スラッグリストが追撃をかけようと、もう片方の手を握った。
そこへ秋雨が疾風のごとく剣閃を刻み込み、怪物の気を自分に向けさせる。

「私の相手をしてもらうぞ、タガシメン多顔面」

「……あゝあゝっ!!」「」「」

挑発に乗ったかのように、スラッグリストは吠え、秋雨へと爆発ビームを連射していく。秋雨は再び飛行魔法で空を飛び、近代ベルカ式の魔法陣を展開。

瑠璃色の魔力が鱗粉のように漂い、次第に小刀の形を象った。

「スティングーレイ」

30本もの魔力刀がスラッグリストへと向かい、空を裂く。

「つう……ワケは？」

地面に這いつくばった蒼仁は、立ち上がりながらレディアントに問う。

何故、危険を犯してまでもBDSを解く必要があるのか。

BDSは使用者を強化するシステムだ。

コレがなければ、魔力ランクBの蒼仁は今までの戦いを生き残る事が出来なかった。

レディアントもそれをよく知っているはずだ。

《BDSとはマスターのノティオンを通常の魔力に変換し、リンクーコアに送り込むシステムなんです》

「変換？」

《はい。ノティオンはマスターの特有魔力ではありますが、それ単体では攻撃性能はありません》

なんとも不便利な魔力だろうかと、思いながら蒼仁はレディアントの説明を聞き続ける。

《まあ、マスターがノティオンを使いこなしていないだけです》

何処か楽しげな調子のレディアントの言葉に、蒼仁はがっくりと

肩を落とす。

「んで、使うにはどうすんだよ」

《だから、まずはBDSを解いてくださいって》

蒼仁は渋々ながらレディアントの言う通りにBDSを解除し、白銀から黒へと髪の色を戻す。

《そして、たった1つの想念に集中してください》

赤と瑠璃の線が飛び交い、爆発音と金属音が鳴り止まない目前に、蒼仁は瞳を閉じる。

たった1つの想念。

簡単に言えるが、実際にやってみるとなれば難しいものだ。

集中しろ、集中しろ

自分にそう言い聞かせていくと、徐々に意識の中から余計なものが失せた。

《ノティオン伝導率40%。行けます》

目を開き、蒼仁はレディアントをスラッグリストに向ける。

その矛先には既に白銀のスフィアが形成されている。

秋雨が標的から離れたその瞬間。

「つけえええっ!!」

白銀の砲撃が一直線にスラッグリストの頭を貫く。

大量の血飛沫を空に放ちながら、頭を失った巨軀はズシンツと地面へ倒れた。

turn秋雨

ポコポコつと沸騰したお湯のような音を出し、頭身を無くしたスラッグリストは蒸発した。

秋雨は地上に降りると、サクラフブキを待機モードの勾玉に戻す。

「ハア……ハア……」

慣れないことをしたせいか、蒼仁は肩から大きく呼吸をしている。

「お見事、蒼仁殿」

その声をかけると、「ああ」と短く応えながら、蒼仁は地面に座り込む。

その表情からは相当な疲労が見える。

「とりあえず、ここから出なければならぬな」

スラッグリストがまだいるとして、闘うことになれば生き残る可

能性は極めて薄い。

例え“奥の手”を使用しても、その後の対応ができない。

秋雨は座る蒼仁に肩を貸し、爆発ビームで更地になった森を歩む。

木々がない森の道をしばらく進んだところで、白衣を着た紫髪の男と戦闘機人達と鉢合わせした。

「スカリエツティ……」

「やあ、無事に終わったらしいね」

秋雨に睨まれながらもスカリエツティは笑みを崩さず、クアット口抱き抱えたままグツタリとしている蒼仁を見る。

「雨井蒼仁。君には実に興味がそそられる」

「男に興味は持たれたくないんですけど……」

スカリエツティに力なくそう言った蒼仁は、直後に意識を失い、秋雨の肩に全体重がかかる。

秋雨は蒼仁を支えながら、ゆっくりと地面の上に横たわらせる。

「どれ見てあげようか？」

「お断りしよう」

一蹴されたスカリエツティは落ち込むことなく、ただ笑みを浮かべ「そうかい」と言った。

「それはそうと、これからどうするつもりかな？」

「カリナ殿のいる船艦へ戻る。蒼仁殿に関しても詳しそうだからな」

「ん？だから、と言うことは、君は彼等と出会って日が浅いのかい？」

「一週間ほど前に会った仲だ。なぜそれを聞く」

「フフフ…。何となく、さ」

スカリエッティはそう言うと、クアットロを優しく地面に下ろした。

その丁寧さは、今まで思い描いていたスカリエッティの人物像と違っていた。

残虐非道で、自分の欲望をを叶えるためなら、どんな犠牲も厭わない性格の持ち主。

だが、今のスカリエッティは、まるで家族を気遣う父親。そんな雰囲気だ。

「どうかしたかい？」

「……………いや、特に」

視線に気付いたスカリエッティが尋ねるが、秋雨はそっぽを向く。

見極める必要があるか…

ジェイル・スカリエツィという人物を。
旅を始めた理由である、1つの答えを探し出すために

ふと、秋雨は空を仰ぐ。

旅立ちの日に似た眩しく、晴れ渡った空を

turnソルカ

機動六課。

紫煙の匂いが強烈な第2研究室にて、特化戦闘部隊ラークイン技術部のソルカが火のついていないタバコをくわえ、目の前にある端末機のモニターと睨めっこしていた。

端末機からはプラグ伸びており、その先端は白いテーブルに置いてある小型の鉄球。

南條砂彦のデバイス、アーシアに繋がれていた。

「……………分かん…りませんね」

ソルカはお手上げ、と全身の力を抜いて、椅子の背もたれに全体重を預ける。

その原因はアーシアの構造にあった。

鉄と思っていたものは、地上本部のデータベースに記されていない鉱石。

その成分を調べようとするが、何度、やっても「解析不能」の文字。

分解しようにも、繋ぎ目が一つもない鉄球。

内部をスキャンしてみるも、すべてが未確認の鉱石で構成されており、機械類がまったくない。

ロストロギアの可能性も捨てがたいが。アーシアからはそれらしき反応が感知されない。

「砂彦を呼ばねえ……なければ……」

そう言っつて、タバコに火をつけて一息。

吐き出された煙が換気扇に吸い込まれていくのを眺め、ソルカは椅子から立ち上がる。

それと同時に、彼の同僚であるアナスタシア・フォニクス。愛称、タシアが嫌な顔をしながら第2研究室に入ってきた。

「また吸ってたのですか？早死にしますよ」

「うるせえ、吸って死ぬなら本望だ」

ニコチン中毒のソルカは素の口調で言い切り、タシアは呆れ、溜め息を零す。

「それより、何の用だよ」

「はい、先ほど“彼等”の連絡で、例の少年は聖王の種子。しかも純正種ピュアルだったそうです」

つけたばかりのタバコを携帯灰皿に押し潰し、ソルカは「やっぱ
りか」、と面倒そうに呟いた。

「それと、聖王教会の一部でも動きがありました」

タシアは持っていたクリップボードから、一枚の紙をソルカに手
渡す。

紙を受け取ったソルカは、その上に書かれている単語を読み上
げる。

「真・聖王説」……」

以下には、聖王教会で崇られている聖王オリヴィエは戦場で亡き
者となった力無き王であり、我らが真に崇拝すべきは森羅万象の力
を持つ聖王シユリアである、と言った内容があった。

「これに騎士カリムは？」

「緊急の集会を開き、事態の収拾に務めているようです。……やは
り、奴らの仕業でしょうか」

「聖王シユリアが出て来た時点で、十中八九そうだろ」

ソルカは紙をタシアに返し、乱雑したデスクの上からインスタ
ントコーヒーとお湯の入ったポットを取る。

「アフル・レコード「聖王、祀る教会。二者の主によりその力を分かち」。絶対法則
の予知録通りの展開か……」

ソルカはそう言いながら、マグカップにコーヒーの粉末を入れてお湯を注ぎ、デスクの引き出しにしまっていた壺を取り出す。その中身は大量の砂糖であり、ソルカはスプーンも使わずに、ドブドブとコーヒーに投下する。

近くでその様子を見ていたタシアは、コーヒーから発している、凄まじく甘い匂いに顔をしかめる。

「ソルカ。そろそろ、あなたの生活を見直す必要があると思うんですが」

「ああ？必要ねえよ。ニコチンと砂糖は俺の血なんだよ。んなことより、あの“シスター騎士”はどうなんだ？」

苦さなぞ消え失せたコーヒーを啜り、ソルカはタシアに聞く。

「んなことではない！、と言いたいタシアだったが、経験上、これ以上は言い争い（ソルカの意味不明な持論が延々と続く）になってしまうので、黙って問いに答えることにした。」

「彼女は未だ不明です。聖王の種子として覚醒していないだけなのか、まったく別の力なのか、も」

「現時点では不確定要素ってわけか……」

タシアの報告を聞き、ソルカはマグカップをデスクに置き、プラグに繋げてあったアーシアを片手に持つ。

「それは？」

「南條砂彦のデバイスだ。どーも、ロストロギアくせーんだけど……」

……」

説明しようとするソルカを尻目に、タシアはアーシアを手に取り、そのまま金色の双眸で銀色の表面を見つめる。

「……………目覚めなさい」

タシアはそう呟き、アーシアに魔力を送り始めた。すると、タシアの髪が長い金色の髪が、“白銀”に変わる。それと連動するかのようになり、アーシアに白銀の光が宿る。

「シンフォティア……………か」

億劫な調子でソルカは言った。

シンフォティアとは、聖王シュリアに関連した力を持つ“人”、“武器”が互いに反応、共鳴して白銀の光を放つ現象である。

つまり、アーシアは聖王シュリア関連のロストロギアと確定した。

「南條砂彦……………彼の調査も必要になりましたね」

タシアはそう言い、アーシアを白いテーブルの上に戻した。

これらのロストロギアはヒアールリジデバイスと同じで、マスターが一定以上の条件を越えている必要がある。

つまり砂彦は、普通の人には何らかの特殊な力があることになる。履歴書に記されない、本人も気付いていない力が。

「まったく、ここの部隊長は面倒な人材をこつも集めてくるよなあ」

ソルカは溜め息を吐き、コーヒーを啜る。

だが、その目は何処か楽しげであった。

第44話：スラッグリスト 後編（後書き）

おはよう、こんにちは、こんばんは、我暇人です

最近、久しぶりにテイルズオブデスティニーPS2版やってるんですけど

やっぱ、海底洞窟でのリオンのシーンは神だと思う（泣）

PS版だと、あの後もう1回死人として現れてくるんですけどね……

ははは、面接試験が近いつてのに、何をやってるんでしょうかね、私は。

あと、分かっている人もいると思いますが、ノティオンってタイトルにある【想念に比例する魔法】なんですよね〜
これ、ネタバレかな？

次回からは機動六課サイドに移りたいと思っています。
では、また次回まで

PVが20万を越しました。

見てくださった皆様のおかげです
これからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553/>

魔法少女リリカルなのはViVid～もう1人の聖王と想いに比例する魔法

2011年10月19日09時14分発行